

魔法つかいプリキュア！ ～奇跡と魔法と幸福の翼～

シロX

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年は悪魔と天使の契約、少女達は不思議な宝石・リンクルストーン手にしてプリキュアに変身を果たし、闇に属する者達に身を投じる事となる

それは過酷で、慈悲の無い、命を懸けた闘い

# 目次

## 第一章 魔法学校編

第1話 地獄の始まり | 1

第2話 闇と戦う者の門田 | 15

第3話 集まる戦力 | 22

第4話 リコの姉 | 29

第5話 黒い眼 | 44

第6話 人魚の里 | 54

第7話 癒しの森 | 68

第8話 新たな旅立ち | 77

## 第二章 ナシマホウ界編

第9話 迷子のリコ | 84

第10話 Fun school life | 94

第11話 マンマ・ミーア | 105

第12話 三ヶ月の命 | 121

第13話 優等生の悩み | 130

第14話 偶然の集結 | 143

第15話 黄色い眼の悪魔 | 155

第16話 幸せの四つ葉 | 165

第17話 花まる | 177

第18話 ウサギの足 | 188

第19話 七変化 | 200

第20話 一通の手紙 | 208

第21話 大切な友達 | 221

第22話 思い出の記憶 | 232

第23話 プリキュアVS闇VS悪魔VS魔術 239

第24話 勇気、それは逃げない 246

第25話 開かずの扉 262

第26話 リンクルストーン・エメラルド 277

第27話 光と闇 289

### 第三章 エメラルド編

第28話 #キュアフェリーチェ 297

第29話 花海 ことは 307

第30話 はーちゃんのお部屋 320

第31話 夏のひととき 328

第32話 思いやりのぬくもり 343

第33話 異次元からの迷い人 355

### 第四章 悪魔編

第34話 僅かな命 370

第35話 ゲームオーバー 380

第36話 翼の復讐 392

第37話 反撃の狼煙 398

第38話 希望に潜む絶望 405

# 第一章 魔法学校編

## 第1話 地獄の始まり

此処は魔法界

普通の世界とは違う別の世界

誰しも魔法が当たり前に使える世界

そんな世界で住む彼女——「ナギ・カイン」は部屋に籠って魔法の研究をしていた

いや少し違う。魔術について研究していた

「え〜っと、この文字がこうなるからこうして、こんな風になるからこう組み合わせで……」

かなりの厚さのある本に、ナギは何やら魔法文字を組み合わせては書き込んでいた。部屋は散乱としており、壁や天井にはビツシリと紙が貼り付けられており、仕舞いには部屋の空間にも吊るされていた

「出来た！私だけにしか使えない本！『グリモワール』が!!」

何か出来たと本を手に掲げて大喜びしていた。どうやら作るのに、かなりの時間と労力を費やしたのだろう

「リコに自慢しよ〜っと!」

そう言っただけは、家から飛び出して魔法界の中心地の魔法学校へ走って行った

／／／／／／／／／

「ドーン！リコおっは〜!」

「うわっ!?!」

とある教室の扉を勢いよく開くと、「リコ」と呼ばれた少女はビツクリする。補足するとリコ以外にも生徒がおり、含めて全員が突然の乱入したナギに驚く

今、魔法学校では春休み期間中。なのに教室に居る。疑問を持ち、質問してみる

「リコ、補習してたの？」

「ええそうよ、そうですか何か!？」

という事は、この場に居る者全員が補習の為集まっているということ。ナギは補習を受ける事となっていているリコが、どうしてそんなにカリカリしているのか分からなかった

「どうしたのそんなに怒って？仕方ないね、元気になる薬をあげようではないかー！」

「要らないわよ!!」

「キヤー！リコに振られちゃった！えんえん！」

調子に乗り、泣き真似をした事でリコの頬が引き攣り始める。爆発寸断のところで、ナギに向けて他の補修生が声を掛ける

「ねえリコちゃん、その人誰？」

リコの怒りを梅雨知らず、同じ年程の女の子がひよつこりと顔を出す。声を掛けて人物をナギは知らない。別の教室の子か、はたまた補習関係なく授業を受けに来ただけか

分かるとしたら、リコとその子は知り合いだということだけ

「あくこの子は——」

「私、ナギ・カインって言うの！リコの友達！宜しくね!!」

「ええ!?リコちゃんって友達居たんだ!？」

「グハッ！」

何の悪気も無い純真な言葉がリコの胸に突き刺さった。泣きたい気持ちをグツと抑え込んで、強く心を保つ。しかし、次そんな事言われた日にはもう二度と立ち直れない

初めて見る子は、リコと違い元気いっぱいに挨拶をした

「わたしは『朝日奈みらい』！それでこの子は『モフルン』！」

「モフー！」

みらいと紹介された少女に目が行って気付かなかったが、その子が抱きしめるぬいぐるみも紹介されて喋って反応した

そして、みらいの名前を聞いてピンとくるものがあった

「みらいって、もしかして噂に聞くナシマハウ界からやって来たって人？」

ナシマホウ界とは、此処魔法界とは別の魔法が存在しない異世界。逆にみらいからすれば、魔法界は夢と希望とわくわくが詰まった異世界

「そんなにわたし有名人なんだ！なんか照れますね〜！」

「照れて下さいよ〜！」

「嗚呼、なんて面倒な人が……ってところで貴女はどうして此処に？補習はない筈よ」

リコの言うように、ナギに補習を受ける様に言い渡されてはいない。かと言って、理由も無く此処へ足を運んだ訳でもない。

話に夢中になって遅れたが、ナギは此処に来た目的を話す

「フツフツ、やっと私だけの本——グリモワールが出来ま——」

「ナギさんそこまでです」

手を叩いて遮って注目させたのは、教卓の前で一連の会話を聞いていた「アイザック先生」だった

「ナギさんは補習はない筈ですが？」

「そんなの私の知った事ないわ。私が来たい時に来ただけ。何を学ぶにしても、初歩ばかりしか教えてくれない学校に興味なんて無いの。あ、先生達には敬意を払ってますよ」

「それってアタイ達の事を馬鹿にしてのんか？」

ナギの言葉に反応したのはアイザックではなく、その場に居た補習生徒の一人である「ジュン」だった

補習を受けるのはみらいとリコを含めて5人。

残りの2人である「エミリー」と「ケイ」だ

2人も少し不服そうな表情をしているが、ナギは相変わらず興味無いといった感じ。それだけで終われば良かったのだが、ナギの性格は少々捻くれていた

「出席日数が足りない、忘れ物が多く遅刻常習犯、高い所が苦手で箒で飛べない。魔法を学ぶ前に、自分達の欠点をまず克服すれば？」

「言わせておけば……」

止まるどころか、火に油を注ぐ様な挑発言葉をペラペラと口に出す

「その点リコは優秀よ。魔法が少し下手だけど、そこは私が何とかするの。だってそれが私の専売だから！」

ナギとジユンが火花を散らす中、リコとアイザックはやれやれとといった感じて困っていた。

ナギという少女は少しばかり問題がある子。今の会話の流れから分かるように、リコや先生以外の人、つまり魔法学校の生徒に対しては冷たい対応をしている

その為、魔法学校の生徒全員とは敬遠の仲である

「あ、そうだ！アイザック先生、私もその補習授業について行って良いですか？」

話す事は話した。しかしこれで回れ右して帰るのもつまらないと思つたナギは、アイザックをお願いしてリコとの同行をお願いする

「ん？うくん……許可します」

補習を受けない子が来ても特に意味は無いが、それでも付いてくるのであれば無碍に断る事も出来ず了承する

「やった！これでリコの合格は約束されたね！」

「んっ！取り敢えずは場所を移動しましょう」

アイザックに言われて場所を移動した

魔法の絨毯に乗って移動した場所とは

／／／／／／／／

「寒っ！」

ひやつこい島

可愛い名前をしているが、辺り一面雪と氷で覆い尽くされた極寒の地。

防寒対策をしないと危険な場所なのだが、勝手について来たナギにはそんな物は用意されてなかった

「こっ、こっこんな所でいい一体何の補習をすす、するののの??」

寒さで会話すら困難になっている。そんな様子をリコは呆れて見ている



「魔法のやかんでお茶を淹れるのが今回の補習。この島で魔法を使うには、高い集中力が必要です。寒さを忘れる程のね」

そう言ってアイザックは魔法のやかんを真剣に見つめる。この極寒の空間で集中力を高めている

そしていざ

「キュアアップ・あひゃあひゃ…」

魔法の言葉を唱えおうとしたが、アイザックの入れ歯を落としてしまい上手く魔法が使えず終わってしまった

「とと、取り敢えずやってみようか!」

お手本は見れなかったが、急いでこの地から帰る為に実戦あるのみと行動に移す

「そうだね!リコちゃん頑張つて!」

「頑張るモフ!」

「キュアアップ・ラパパ!やかんよ、お湯を沸かしなさい!」

魔法の杖を振るも、手が悴んで投げてしまった。

それはリコだけでは無く、エミリーは舌が回らず、ケイは足元が滑り、ジyunは寒くて上手く出来ず皆んな悪戦苦闘していた

その中で、みらいはナギの様子が気になっていた。自分達と同じ魔法つかいだというのに、魔法の杖を持っていない。多分、同行しているだけだから補習には参加しないという事で手にしてないだけで、言えば魔法を見せてくれるに違いない

「ナギちゃん、お手本って出来る?」

興味本位で聞いてみたものの、内心はわくわくしている。ナギがどんな風に魔法を扱うのか

しかしその期待は一瞬で、しかも思わぬ理由で裏切られる

「それは無理よ。この子、魔法の杖をバラしたせいで持ってないのよ」  
「ば、バラした!?!」

「いや、どうやって言葉と杖で魔法が使えるか気になって、つい杖の方をね」

研究したいという好奇心には勝てず、大切な魔法の杖を自ら手放したのだ。当時、それをリコのいる目の前でその様な奇行に走って、た

んまり怒られたのは別の話

とはいえ、こども寒くては集中どころの話ではない。それが課題でもあるが、それでもみらいは何とかしようと考えて一つだけ閃いた「…寒くなければ魔法が使えるんだよね?」

「え? まあそうね」

「良い事思い付いちやった!」

「おしくらまんじゅう! 押されて泣くな!」

みらい、モフルン、エミリー、ケイが体を温める為おしくらまんじゅうをする。

これがみらいが言っていた良いこと

「何なのこれ?」

「おしくらまんじゅう! 体が温まるんだよ! お婆ちゃんに教わったの!」

「な、なるほど」

「三人も一緒にやろうよ」

「今回はパスするわ」

「何でアタイが…」

「結構よ」

虚しくもナギ、リコ、ジュンはそれを断った。三人の心の中で、このやり方には少々恥ずかしさがあると思っていた

「温かくなるんだけどなあ〜」

「声を合わせるモフ!」

嫌と言うなら仕方なく、みらい達はそのまま続けるのであった

みらい達はそのまま続け、反対にリコは呆れて魔法を続ける

「リコごめん! まさか、ひやつこい島に来るなんて思わなかったから温まる道具は何も持って来てないの! 今回は力になれそうにないわ!!」

「…最初から当てにしていし」

ナギは、リコの力になれず嘆いており、ジュンはというと

「アタイもやっぱ入れてくれよ!」

みらい達と混ぜておしくらまんじゅうを始めたのだ  
(集中しないと。わたしは、立派な魔法つかいになるの)

みらい達の声が聞こえない程集中力を高め、杖を振り下ろす。補習  
と言えど、魔法だけは真剣にやらなくてはならない

「キュアアップ・ラパパ！やかんよ、お湯を——」

「リコちゃん！」

突然みらいに呼び止められて中断してしまう

みらいへ振り返ると、僅かに頬が赤く染まっていた。

おしくらまんじゅうで体温を上げ終わったのだろう

「見てて！やってみるから！」

「ちよ、ちよつと！」

「——キュアアップ・ラパパ！やかんよ、お湯を沸かしなさい！」

やかに魔法が掛かると、軽く煙りが立ち沸かす事に成功した

「やった！今の見た？わたしやつと魔法が使えたんだよ!!」

それに続いて、他三人も魔法を成功させていく

「「やつた〜！」」

「只単に体が温まったから成功したわけではありません。皆んなで集まる事によって、心まで温まり集中出来たのでしよう」

こうして無事全員合格

アイザックは、それぞれに合格の証であるハンコを押していくのだが

「待って下さい！合格なんてやっぱりおかしいです！」

リコだけは納得していなかった

「え？ちゃんと出来たでしよう？」

「わたしは何もしてないわ！」

それもその筈、何も出来てないリコにも合格のハンコが押されたのだ。リコからしたら屈辱的なもの

「君達は二人で一組。どちらか成功すれば良い。そういう決まりです。君達は合格」

そんな事を言われてもリコには無理だった。ムスツとした表情でリコは一人何処か歩き出した

「リコちゃん待って！」

それを追い掛けるみらいとモフルン。

友達であるナギはリコを追い掛けなかった

「リコ拗ねちゃった。まあ時期に戻って来るかも、ね」

しかしいつまで経っても三人が帰って来る事は無かった。いつの間にか雲行きも怪しくなり、それを決定づける生き物が空を飛んでいた

「あ、アイザック先生見てください」

「あれはアイストドラゴンですね」

「高く飛んでいます。嵐が来ます」

ナギは本を片手に持つて歩き出した。嵐がもし吹けば、何の対策もしていないみらい達が危険。最悪の事態も考えてナギは行動を起こす

「捜しに行きますね」

「おいおい嵐が来るんだぞ！分かってて何で行く？リコが居るんだから大丈夫だ！」

ジュンの言う様に、ナシマハウ界出身のみらいよりも、リコがいれば嵐が来る事は予測出来る

「…リコとみらい、モフルンが心配だからよ。嵐なんて私の魔法…魔法で吹き飛ばす。それに——」

ナギは振り返り、ジュン達に冷徹な目で向けて言い放つ

「私に命令しないで」

危険が今にも迫っているのに待ってるだけ、何もしないのは少し腹が立つ

ナギの思ってた通り嵐が発生した。豪雪がナギの体を掠める

「さて、この辺でいいかな」

人がいない事を確認して、ナギはグリモワールを開き魔力を込め

る。これからする事は、あまり他人には見られたくない

「すう…はあ…」

アイザックが言う通り、集中すれば寒さなど忘れる

ナギはグリモワールに集中して寒さをシャットアウトしていた

そしてナギの周りは魔力の高まりによって温度が上昇し、足元の雪が溶けていく。

そして空は嵐に加え、雷雲がたちこむ

「白魔法——」

グリモワールは白い輝きを放ち、ひとりでページが捲られる。そして右手を空に掲げて魔術を行使する

「ゼクス・ビギニング！」

激しい雷と共に、ナギの背後から巨大な白い龍とおもしき右腕が現れた。島の外からでもその大きさは充分人伝わるほど

「これでどう!!」

大きく右腕を振り翳すと、龍の腕も連動して空を切り裂いた。

それにより、嵐だった天气が雲ひとつない晴れ渡れた空に早変わりした

「よし次は—」

グリモワールのページが勝手に開き、次のページへも開いていく。魔術は先程の一つだけではない。魔術の数は、その見た目からでも分かる様にページ分用意されている。

如何にして、その時に応じて魔術を行使するか

「白魔法——ベスト・ビギニング！」

ナギは、魔力によって作られた二体のケンタロウス型の守護騎士を召喚した

「三人を捜しなさい」

ケンタロウスは何も言わず頷き、みらい達の搜索に空へ飛んで行った

「私も」

ナギも魔力だけで浮き上がり、みらい達を捜しに飛び去った

／／／／／／／／

捜し始めて10分程経過しようとした時、二体の内一体のケンタロウスが戻って来た

『――』

「見つけたのね良かった……え？」

ケンタロウスは黙ってナギを見てるだけだが、一応喋っているらしく見た事を全て報告する

「変な怪物がリコ達を襲ってる？急いで案内して！」

「居た……けど何あれ？」

ナギはブレーキを掛けて、その光景に首を傾げる

佇むは赤い衣装に身を包み、ツインテールをした金髪の少女と紫の少女二人。あの様な派手な格好をした人を見るのは初めて。

更には、知らされていた怪物と戦闘を繰り返して圧倒していた

これだけ目立っていれば、絶対に魔法界で有名になっているはず。

しかし、そんな噂を耳にした覚えはない

空から観察していると、少女二人がナギの存在に気付いて声を掛けた

「あ！ナギちゃ〜って、ほうきも無いのに飛んでる!？」

「本当ね、飛んでるわね……」

二人の元へ舞い降りるも、ナギには誰だか分からなかった。こんな知り合いがいるものなら、忘れる筈もない

「ごめんえつと……誰？」

「わたしだよわたし！みらいだよ！」

「え……私と対してあまり身長が変わらなかつたみらい、なの？するとこっちは……」

「籠ってた貴女は知らない様ね。わたし達、あの伝説の魔法つかい『プリキュア』になったのよ」

プリキュアという存在は一応認知はしていたが、それは本の中で

の話かと思っていた。

みらいは「キュアミラクル」、リコは「キュアマジカル」に変身している

「へえ、あの伝説の魔法つかいプリキュア、か」

「意外と反応薄いわね…」

すると雪に埋もれていた怪物——ヨクバールが起き上がった

「ねえ、怪物は分かるけどあっちのコウモリは何？」

「リンクルストーンを狙う闇の魔法つかいよ」

「はいストップ！これ以上は頭がパンクしそうなので、続きは帰ってからで良いかな？」

「その方が助かるわ」

リンクルストーンと言う単語まで出て来た。これ以上積もる話は一度落ち着いてから聞きたく思う

まだナギ達が話してる最中、ヨクバールは容赦無く襲い掛かって来た

「ナギちゃんは下がってて！」

「ここはわたし達が——」

「白魔法——キングダム・ビギニング」

マジカルが言い終わる前にナギが魔術を使い、城壁とも言える盾を展開した

突然現れた城壁にヨクバールは勢い余りぶつかった

「ヨクツ!？」

「へ？」

二人が素っ頓狂な声を出す、お構い無くナギは次の魔術を使う。ナギとしては、100点満点のリアクションを見れて大変満足していた

「白魔法——ロジック・ビギニング」

ヨクバールの周りに四つの魔法陣が現れ、その陣の中心から魔法文字で出来た鎖が飛び出し、ヨクバールを拘束した

「ええええええ!？」

「私のヨクバールが!？」

「白魔法——クロス・ビギニング」

手を前に翳すと、魔力の塊で出来たX状のビームを放った

「ヨクボール!？」

拘束されて身動き出来ないヨクボールは、直撃するしかなかった。見た目に反して、意外とあっさりに対抗出来てしまったので期待外れもいいところ

「拍子抜けね。二人共」

「ま、任せて!」

「行くわよ!」

「リンクルステツキ!」

「ルビー!」

「紅の情熱よ!わたし達の手に!」

「フル・フル・リンクル!」

「プリキュア !ルビー・パツシヨナーレ!」

「こんな筈では……彼女の使うアレは魔法の本。だけど少し違う魔法……魔術ですか。ますます面倒が増えましたね。オボエテロー!」

／／／／／／／／

「氷のリンクルストーン『アクアマリン』」

「ダイヤやルビーと少し違うね」

「エメラルドを支えるリンクルストーン……」

「り、リンクル……何?」

話の先が見えないナギは首を傾げる。置いてけぼり感はあるナギに、更に追い討ちを掛けるカルチャーショックが続く

『は——!』

「何今の声?」

リコは懐から一冊の本を取り出す。ページが開かれると、画面らし



き場所から手の平サイズの赤ん坊が出て来て、光り輝くと少し成長した姿へと変わった

「大きくなったモフ！」

「はー！はー！」

「何かしら？」

「ひよっとしたら…モフルン貸して」

モフルンがアクアマリンをみらいに渡した

アクアマリンを本にはめ込むと、本に備えられてあった魔法のタツチペンが勝手に動き、ページにある画面に絵を描き出した

その絵はそのまま実体化して現れた

「空色のスープモフ」

「やっぱりね！」

みらいはスプーンでスープをすくいあげ、その小さな子に食べさせる

「そういえばこの子の名前って？」

「はー！はー！」

「はーちゃん…」

「はーちゃん！」

どうやらその小さな子はたった今名前が決まったらしい

名を「はーちゃん」と

「あ、名前って言えばリコちゃん、さっきわたしの名前呼んでくれたよね？」

「呼んだモフ」

「リコちゃんなんて呼ぶの貴女だけよ。リコでいいわ」

「分かったリコちゃん…じゃなくて、リコ」

「それで良いわみらい」

「あのく、そろそろ良いかな？」

ナギの居ない場所で、何やら友情を深めていた事は良い。

それでも何か言いたげに、そろりと手を挙げるナギ

「私の理解の範疇を越える様々な事が起きてるのだけど…：…そろそろ説明をしてくれますかね!？」

「それはこっちの台詞よ。何なのよその本」

「教室でグリモワールって言ってた様な…」

「私としては、先に貴女達の事を色々聞きたい。そっちの方が情報量多過ぎる」

「じゃあ、魔法学校に帰ったら校長先生と一緒に話しましょうか」

これが新しいプリキュアの物語の始まりだった

そして魔法界とは別の世界——ナシマホウ界

ナギ達が、ひやつこい島から魔法界まで帰る間の時間に、既にそこでも闇の魔法つかいが現れて、新しい出会いと物語が始まっていた

いや、今までののはプロローグに過ぎず、これからこそが本当の物語の始まり

『ゲゲゲツ、どうするよお！人間ンンツ!!?』

「…良いだろう。取り引き応じる」

## 第2話 闇と戦う者の門田

此処は津成木町

なんて事はない、ごく普通のありふれた普通の町

そんな普通の街に、土地面積が多い和風の二戸建てが塀に囲まれてポツンと建っていた

そして、和風門から一人の少年が竹箒を持って出て来た

「チツ、毎回思うが掃除が一々面倒だな…」

「もう、そんな事言っていないでテキパキ掃きなさい！」

「お袋」

「お願いね」

少年の母親がそういうと、家へと戻って家事の続きをする

少年も黙々と掃除をし終わると、掃除用具を仕舞い朝の散歩へと出掛けた



「桜も咲いて風もいい。もうすぐ新学期だし、帰ったら準備でもするか」

そんな独り言を喋っていると、ふと足元に碧色の石ころを見つけた

「ふうくん、綺麗な石だ。まるでエメラルドみたいだな」

「今、エメラルドと仰いましたか？」

何処からともなく声が聴こえてきた

少年は辺り見渡しても何処にも居ない。ふと木の上を見上げると、コウモリのように逆さままで男が木の枝に引っ付いていた

「言ったが、それがどうかしたか？」

少年は手に持った石ころを懐に入れて、コウモリ男を睨み付ける

「それを私に譲っては？」

「石ころ程度、そこら辺で拾ってろ」

「それは無理な話です。仕方ありません」

「なら力づくでか？」

「そうせざる終えません！」

コウモリ男が手に持つ石ころを目掛けて襲って来るが、横へ大きく飛び退く

「お前……！」

少年は急いでその場から逃げ出した

「逃しませんよ」

「ヨクボール!!」

そしていつの間にか、異形の怪物——ヨクボールまで現れていた

「ふぎけんなよマジで!!」

少年は来た道を戻り、最終的に自分の家の庭へと戻って来た

「しつこいな!!」

少年は蔵へと滑り込みで入り込み、急いで内側から施錠する

「マジで一体何だよ……」

少年は苛つきながらも、蔵の地下へと足を踏み入れる

そこでは、色んな物が無造作に置かれてある

「何か武器になるもんはッ!？」

暗い地下室の中、武器になりそうな物を物色していたが、足裏に何か踏んでしまい滑り転けてしまった

「あくダメだ。イラついてしょうがない……」

一人勝手に怒りを露わにしていると、無造作に置かれてある棚から何か音が聴こえた

「何だ?」

ふと気になって調べ様とした所、急に棚が開いて中から日本刀が飛び出した

「ッ!？」

少年の目の前に浮かぶ日本刀から、何やら不穏とも言える黒いオーラの様なモノを醸し出していた

少年がその刀に触れようとした時

『ゲゲゲッ、久々に外に出れたと思ったら人間が目の前にいるのかよ

…』

一瞬幻聴だと思いたかったが、それは紛れも無い目の前の刀から声が聴こえたのだ

そして刀から黒いモヤが出て、それが上半身の一部となり姿を現した

『ゲゲツ、それにしても陣から出したのはお前だよな？感謝するぜえくゲゲゲエツ!!』

「陣？」

『ゲゲ、お前何も知らずに解いたのかよ？ゲゲ、足元をよく見てみる』  
少年は足元をよく見ると、確かに印の様な物が描かれていた

『ゲゲ、そいつはソロモンの輪ってヤツだ。そいつの輪に入ると、悪魔であるオレの力が封じられるんだよ』

「なるほどな。外も中も化け物だらけって事かよ。なら…」

少年はさつき消してしまった陣へと腰を落とす

『ゲゲ、何してやがる？』

「描き直しだ」

その瞬間、少年の喉元に刀が突き付けられる。

勿論鞘から抜かれており、漆黒の刀身がハッキリと喉に押し当てていた

『ゲゲゲ、悪いが悪魔封じはもう懲り懲りだ。それに、お前は外に出れるチャンスを自ら手放そうとしてるんだぜ』

「お約束の台詞言ってる。それはどういう意味だ？」

『ゲゲゲ、なくに簡単な話だ。オレを使えば外にいるヤツを退けるって話をしてんだ。まあ代わりに、オレは外に出る事になるがな』  
「悪魔との取り引きって訳か」

『ゲゲ、察しが良くて助かるぜ。悪魔の取り引きにしちやあ儲けもんだと思うがな？普通ならお前の人生頂いて、余命が後何十年ってところだ』

少年は顎に手を当てて少し考えた

「俺がそんな取り引きに応じるとでも？」

『ゲゲ、応じるしかないんだよ。どんなに楽観的な奴でも、オレと取り

引きしない限り此処から出られないんだぜ？ゲゲツ、さあ寄越しなその身体！』

刀に取り憑いてる悪魔の言う様に、何もしなければ此処から出られないというのは本当だ

だが、取り引きに応じればラジコンの如く身体を好き勝手使い回すのが目に見えて分かる

『ゲゲゲツ、どうするよお！人間ンンツ!!?』

「…良いだろう。取り引き応じる」

『ゲゲゲツ!』

「但し俺にも条件がある」

少年は悪魔に2本指を立てる

「一つは、悪魔だろうが人間だろうが関係無い。俺とお前は対等であると誓え」

『ゲゲツ!?!んな勝手な事が——』

「二つ、俺の相棒となれ」

『ゲ?』

「俺とお前は対等であり相棒。一体いつから封印されてたか知らないが、どんな理由であれお前の封印を解いたのは俺だ」

悪魔より悪知恵だけは働くこの少年。

封印を解いたという借りがこちらにあるのだ

「はい取り引きします」の一言返事で、自分の身に面倒事が降り掛かって最も悪としか言いようがない

だからこそ、この条件を持ち掛ける事が出来たのだ

「お前が本当に此処を出たいなら、この条件呑むよな？お前の言いようだと、お前だけの力だけでは此処から出られないんだろ？」

『ゲゲ…人間お前、碌な死に方しねえぞ』

「黙れ悪魔。お前と出会った時点で碌な死に方しない」

主導権は完全にこちらが握っている

少年が協力しないと出られないんじゃない。悪魔が協力しないと出られない

『ゲツゲツゲツ!!良いだろう。お前に乗っかってやる!』

「取り引き成立だな」

『ゲゲ、後はお前が俺を手に取れば全ての取り引きが終わる』

少年は刀の柄を持つと、ドス黒いオーラが右肘まで侵食していく

『ゲゲ、侵食率100%ってところだな。ゲゲ、ところで人間、お前は何て言う奴だ?』

「『翼』。お前は?」

『ゲ、名前なんてあると思うか?』

「なら勝手に決める。お前は『ゲゲ』だ」

『ゲゲ、安直だな』

コウモリ男は外で待機していた

翼がいつ蔵から出て来ても言い様に見張っているのだ

そして蔵の扉正面にはヨクボールが待ち構えていた

待っていると、蔵の扉がゆっくりと開いた

「ヨクバ——」

次の瞬間、ヨクボールの顔面に黒い斬撃が直撃した

『ゲゲッ、ソイツ闇の魔法で生み出された怪物じゃねえか?それにあのコウモリ男、アイツがコイツを呼び出した闇の魔法つかい。ゲッ  
ゲッゲッ!!』

「ゲゲうるさい」

翼に注意されたゲゲは大人しく刀へと戻っていく

「行くぞー!」

蔵から出て、地面に足を踏み込んで一気に突っ込んだ

一瞬でヨクボールを切り捨て、そして連続で四方八方動きながら切り刻んでゆく

『ゲゲゲ、侵食率12、14、17%!!ゲゲゲッ!堪んなくなってきたアア!!』

侵食率が上がると同時に、刀を持つ右腕が黒く染まってゆく

「クッ:早くリンクルストーン・エメラルドを!!」

「リンクルストーン?」

『ゲ？おいツバサ、きつきの石ころ見せてみる』

翼はヨクバールの攻撃を避けた後、ヨクバールを抑え込みながら拾った石ころを見せる

『ゲゲ：ゲッゲッゲッ!!何をどう見ればリンクルストーンに見えるんだ？コレは只の石ころだ！バアゝカ!!』

「何!？」

翼はそのコウモリ男に石ころを投げ渡す

「：確かにコレは只の石。リンクルストーンではありません。騙しましたね」

「お前らきつきから何の話してる？リンクルストーンって何だよ？」

『ゲゲ、それは後で説明してやるよ。それよりも』

「もう此処には用はありません。やはり魔法界に行くべきでしたね。ヨクバール！」

コウモリ男は、ヨクバールを連れてその場から撤退しようとしていた

「あいつ逃げる気か!？」

『ゲゲ、だろうな』

「っけんなよ！人ん家滅茶苦茶してといて、タダで帰れると思うなよ!!」

だがそう言うも、コウモリ男とヨクバールは空へ空へと飛んで行く

「ゲゲ、何とか出来ないのか？」

『ゲゲ、侵食率25%以上なら飛んで行けるぜ？ゲゲ、だがよ今のお前ではキツイと思うぞ？』

「なら好き放題されて見過ごすのかよ？」

『ゲゲ、なら我慢するんだな』

翼は刀を突き立ててゲゲに集中する

『ゲゲゲ、侵食率がドンドン高まって行くぜえ。19、20』  
侵食率が上がるのに連れて、腕の黒いアザが右腕を呑み込む

『24……ゲゲッ、おめでとう到達したぜ!』

そして肩まで侵食は完了した

『ゲゲ、煉魔之刀剣——侵食率25%!!』



翼は背中に力を入れると、右半身から今にも折れそうなポロポロの悪魔の翼が生えた

「俺達の魔法思い知れ!!」

跳躍する様に翼は空へと飛び立った

「は、速い！だが間に合いませんよ！イードウ！」

「よし掴んだ！」

何か呪文の様な単語を発すると同時に、翼はヨクバールにギリギリ触れた

そして呪文が発言した時、何処かと消えた

残ったのは春の木漏れ日だけだった

### 第3話 集まる戦力

「うくん！補習からの解放感はずいぶんいいわね！」

「リコおじさんみたい！」

「急に辛辣になったわね…」

ひやつこい島から帰って来た4人。うんと羽を伸ばしている途中だった

「ねえナギちゃん、これから何するの？」

「私？私は…帰ってまた研究かな？」

「ねね、ナギちゃんの家に行ってもいいかな？」

みらいは興味津々と手を挙げるに対し、リコは何か面倒な表情をしていた

「あの、みらい。ナギの家に行くのはちよつとオススメはしないわ…」

「何で？」

「それは…：：：言えないわ」

「気になるモフ」

「気になる気になる！」

「嫌々！思い出したくも無い!!」

リコはその場に座り込んで震えていた

「うくん、リコがこんなだからまた今度で」

「ガックシ」

みらいが落ち込んで肩を落としてる時、モフルンは何か感じ取っていた

「モフルン？」

「甘い匂いがするモフ」

「もしかしてリンクルストーンが近くに!?!」

みらい達は辺りを見渡す。しかし、それらしい輝きは見受けられない

「モフ？」

「何か分かった？」

「匂いがあっち行ったり、こっち行ったりしてるモフ！」

「「?」」

首傾げる一同。

その時、爆発音に近い大きな音が上空で何度も鳴り響く

「「上?」」

上空、三つの影が入り混じり合う

一つ、コウモリ男のバツティ。一つは、ヨクボール

最後の影は、右翼を生やし、刀を持った少年が飛び回っていた

「誰々!リコ知ってる?」

「箒を使わず空を飛び人なんて知らないわよ…」

「リコリコ、私が居るじゃん」

「って、それよりも早くヨクボールを何とかするわよ!みらい、モフル

ンお願い!」

「キュアアップ・ラパパ!」

「ダイヤ!」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!」

「ナギちゃん、モフルンをお願い!」

「気を付けてね!」

ミラクルとマジカルは、ヨクボールに立ち向かう少年へと急ぐのであった

「オラア!!」

ヨクボールに気合いの籠った一閃を与える

「ヨクボール!!」

しかし浅かったか効いていなかった

「これだけダメージを与えてるのに元気だと面倒だな」

『ゲゲ、違う、お前の攻撃が全部浅いんだよ。慣れない力に振り回されてんだよ』

飛行能力を手に入れたが、その分攻撃に荒々しさが目立ち思う様にコントロールが出来ていない

『ゲゲ、侵食率を一度15%まで下げるぞ』

「そんなもの力技でやってやる！」

『ゲゲ、その力技で無理だったからこんな状態になってるんだろ。それに25%まで上げたのは、追い掛けるだけの為だ』

「だったら奴に一撃与えた後だ」

翼を大きく広げ、ヨクボールへと猛スピードで接近する

「ゲゲ！」

『ゲゲ、なら一丁派手に決めてやるぜ!!』

刀身から漆黒のオーラが纏われ、一気に振り抜く

「悪魔法——因果——」

『ゲッゲ!?馬鹿速すぎる!!』

翼は渾身の一撃を、ヨクボールの目の前で刀を振った。

勿論当たる訳も無く、虚しくも空を切った

「あ…」

「ヨクボール!!」

「がはっ!!」

ヨクボールに吹き飛ばされた翼は、建物の屋根に叩き付けられる

「クソツタレが…」

『ゲゲ、ツバサ加減を間違えたな…』

荒ぶる力を制御しようとか減してしまっただのが仇となった。

そのせいでタイミングがズレてしまったのだ

『ゲゲ、ツバサ前を見ろ!』

「ッ!」

顔を上げればヨクボールが目の前まで迫っていた

「正面から斬ってやる!!」

『ゲ、いや間に合わない!!』

「やあああ!!」

翼が体勢を整えようとした時、下からヨクバールを蹴り上げる二人組の少女が現れた

「は、え? 何だテメエらは?」

「大丈夫ですか?」

少女二人組、キュアミラクルとキュアマジカル

「あの程度一人でもどうにでもなった。だがありがとうな」

ミラクルの手を取り翼は起き上がる

「助けてあげたのに、何で上から目線なのよ?」

「テメエこそ偉そうだな」

「今の会話で何処が偉そうなのよ…」

マジカルは眉をヒクヒクとさせではいるが、何とか怒りを抑えようとしている

「あ、わたしはキュアミラクル! 宜しくね!」

「俺は翼だ。んで、この堅物女は?」

「キュアマジカルよ!! この脳筋め!」

「んだとお!」

『ゲゲゲッ、お前ら何で自己紹介で喧嘩するんだよ!?!』

「わあ! 刀が喋ってる!」

ミラクルはカタカタと動いて喋る煉魔之刀剣に目を光らせる

『ゲゲ、俺はゲゲって言う悪魔だ』

「今、悪魔って言いました!?!」

『ゲゲゲ：コイツら本当に面倒だな。ゲ、それよりもヨクバールの相手はしなくていいんか?』

「「え?」」

ゲゲの言う様に前を向くと、ヨクバールがこちらをジッと見ていた

「呑気にお喋りとは随分と余裕がありますね。ヨクバール!」

「ギョイ!」

ヨクボールが突進して来たが、それを翼は右手だけで受け止めた  
「安心しろよ。お前の事は忘れてないからよ！」

「ハアツ！」

翼が掴んで逃げれない様にしてるところに、ミラクルとマジカルの  
同時攻撃がヒツトする

「よ、ヨクボール!!」

エネルギーを瞬時に溜め、そして一気に放出した

「ゲゲ、今度こそ仕切り直してやってやるぞ」

『ゲゲツ、いい心掛けだ！今度はしくじんなよ！』

翼は煉魔之刀剣を鞘に収め、居合いの構えで力を溜め込む

「悪魔法——因果<sup>カルマ</sup>切り！」

漆黒の刀身が、ヨクボールの放ったエネルギーを一瞬で消し飛ばし  
た

『ゲゲゲ、俺の悪魔法は、因果。原因と結果のみしか斬れないが  
威力は御覧の通りだ』

そして打ち合わせでもしてたかの様に、ミラクルとマジカルが飛び  
出した

「リンクルステツキ！」

「ダイヤ！」

「永遠の輝きよ！私たちの手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ダイヤモンド・エターナル！」

「悪魔を使役する少年…次から次へと面倒が増えますね。オボエテー  
ロ！」

バツティは呪文を唱えて撤退して行った

しかし翼だけは納得してなかった

「あ、テメエ待ちやがれ！」

『ゲ、もうダメだ。行っちゃまったよ』

「貴方さつきから怒ってばかりね。意外と沸点低いのね」

「テメエ喧嘩売ってんのか？売ってるよな？上等だ買ってやるよ!!」

「面白いじゃない!!」

「ちよつと待つてよ2人共!」

翼とマジカルが火花を散らしながら、勃発する寸前でミラクルが仲裁に入った

「仲良くね?」

「:しやーないな」

「何でミラクルには素直なのよ:」

「ハツ、テメエみたいな堅物学級委員長は好かん!」

「それはこっちの台詞よ!!」

「2人共!!」

「:」

そろそろミラクルの怒りが頂点に達する前に、2人は喧嘩はやめて押し黙った

「それよりも此処から離れよう。じゃないと目立って元に戻れないから」



人気の無い場所。そこでミラクルとマジカルは変身を解いて、元の姿へと戻った

『ゲゲ、プリキュアって面白れえなく』

「それじゃあ改めて、わたしは朝日奈みらい!」

「:…:リコよ」

「はあくん」

「な、何よ?」

翼はリコの事をジロジロと見た後、溜め息を吐く  
「ペチャパイだな」

小馬鹿にする様に笑いながら失礼な事を言う

「カッチーン！」

『ゲゲ、全く：誰か来たな』

ゲゲがそう教えると、モフルンを連れたナギは現れた

「こんな所に居たんだ：って誰？」

「みらい〜！リコ〜！」

「モフルン！」

みらいはモフルンを抱きしめて頬擦りする

「いや誰!？」

「それはこっちの台詞だ。テメエこそ誰だ？」

「私はナギ・カイン」

「俺は翼」

「あ、この子はモフルン！」

「だから何で他の人と態度違うのよ!？」

騒がしい喧騒をしながらも、この世界——魔法界について説明されながら魔法学校へ案内される翼だった



## 第4話 リコの姉

「と言う訳じゃ。理解は出来たかい？」

校長室で、校長の話を聞いた翼とナギの二人

ゲゲはというと、はーちゃんの遊び相手をしていた

「よく分かりました（分からん）」

二人同時に答えるが、その答えは正反対だった

「今の説明で分からないなんて、まだまだだね」

「黙れ阿婆擦れ女が」

「ツ!!」

「リコストップだよ！ステイステイ」

魔法の杖を振りかざそうとするのを、ナギは何とかして取り押さえた

「リンクルスマホンは伝説の書物、それから出て来たのがはーちゃん！」

「へえ〜」

「それでわたしとリコが伝説の魔法つかいプリキュア になって、リンクルストーンを集めてるのー！」

「……これくらいの話で何とかなんねえのか？」

みらいの簡潔な説明で大雑把に理解した

校長が一時間以上説明したのだが、それが一瞬で意味を成さなくなっただよ

「別に全部理解してない程馬鹿じゃない。話が長い上につまらないんだよ」

「説明に面白さを求めてどうするのよ……」

そうすると、リンクルスマホンを持ってゲゲがやって来た

『ゲゲ、はー坊はやつと寝たぜ。ゲゲ、赤ん坊の世話は大変なものだな』

「ふむ、お主は悪魔じゃったな。本当に居るとは」

『ゲ、悪魔以外にも世の中色んな奴がいる。天使も居れば怪物だって、魔王だってな』

「今魔王って言いまして!?!」

「此方の事情は全て話した。今危機的な状況、手を貸してくれぬか?」  
手を貸すと言う事は、プリキュアであるみらいやリコと一緒に戦う  
と言う意味

「手を貸すわよね?」

「え、嫌ただけど…」

「はあく!?!」

「翼君お願い!」

「みらいの頼みなら仕方ないな」

リコに対しては即座に断るが、みらいに対しては紳士にその頼みを  
聞き受ける

「わたし何かした!?!」

「何もしてない」

「キュアアップ・ラパパ!!!」

魔法の言葉を発する前にまでも、みらいとナギが取り押さえる

「コホン! 取り敢えず、君もみらい君と共に魔法学校で授業を受けて  
みないかい?」

「わたしは嫌です!!」

「…まあいいか」

「ちよつと! そこは嫌と言いなさいよ!!」

「お前の嫌がる事を俺はする」

「早く魔法商店街に行くよ」

いつまでも足踏みする訳にもいかず、ナギが強制的に皆んなを移動  
させたのだった

／／／／／／／／／／

「此処が魔法商店街か」

「魔法の道具はいっぱいあるだよ!」

確かに、売られてる物は全て魔法道具。そこを除けば、人間界、つ  
まりナシマホウ界と一緒にだ

「制服はこつち。フランソワさんのお店よ」

リコに導かれるままお店へ入る

「あらいらっしやい！二人とも久し振りね！それにナギちゃんに……  
リコちゃんのボーイフレンド？」

「こんな人を友達と思いたくありません」

「フフ、それでまた制服だね？校長先生からまた話は聞いてるわ」  
「よ、宜しくお願いします…」

珍しくも翼が丁寧に言葉を使う事に、ゲゲは体内から喋り掛ける  
『ゲゲゲ、素直じゃねえか』

「あんな人種に会うのは初めてなんだよ。てか、すっこんでろ」  
「何か言ったかしら？」

「ああ、気にしないで下さい。翼はこういう訳の分からない人なんで」  
「んだと!？」

リコに突っかかるうとしたが、フランソワの前でやる訳にもいかず  
縮こまる

「早速始めるわよ。キュアップ・ラッパー！採寸なさい！」

魔法を唱えるとメジャーが浮いては、勝手に体を採寸し始める

「キュアップ・ラッパー！チョコキチョコ縫い縫いよ！」

魔法の力で、瞬く間に制服が完成した

「出来たわよ。試着室はあつちだから着替えてらっしやい」

背中を押されるがまま試着室へ放り込まれた

それから数分でカーテンが開かれる

女子生徒とは違い、青く彩られた制服はよく似合っていた  
というより本人は

(馬子にも衣装って感じだな…)

静かに感想を内に秘めた

「翼君、はいこれ！」

みらいから渡されたのは、TVでもよく見る魔法つかいの帽子だ  
試しに被ってみたもの

「な、なんか、馬子にも衣装って感じだね…フフ」

「笑うな。知ってる」

被せたみらいが笑いを堪えていた

「後は親御さんに連絡しないとだから、また学校に戻らないとね」

「ナギ、何故それを早く言わない。二度手間じゃないか」

「リコと翼が夫婦喧嘩してるから忘れちゃって」

「夫婦違うー!」

「ハモったモフ!」

「じゃあ痴話喧嘩?」

「だから違うー!」

そんな事を言いつつ全ての用事を済ませ、今日が終わる

／／／／／／／／

「おはよう」

「おはよう…ナギは?」

「ナギなら今日は部屋に籠るって言ってたモフ」

モフルンの返事を聞きながら席に座ると、チャイムが鳴り、教卓の前に教頭が現れた

「えー、アイザック先生は腰痛の為お休みです」

「じゃあ誰が面倒を見るんだよ?」

「代わりの先生に来てもらっています。ではどうぞ」

「はい」

「ッ!」

教頭の返事に代わりの先生が相槌を打つ。それが、リコにとって聞き覚えのある声なのに反応した

歩いて来る先生はとても綺麗な女性だった。そして何処となく、リコと似ている部分が見受けられる

それもその筈。何せ彼女は

「皆さんおはようございます。教育実習生の『リズ』です」

「お、お姉ちゃん?」

「え!?今、お姉ちゃんって言いました!?!」

『ゲゲゲ、面白くなって来たな!』

リコの家族の姉なのだ

「姉貴が居たんだな」

「ええ…」

「皆さん、リズ先生は魔法学校でも一、二を争う魔法の杖の使い手です」

「今日は、魔法の杖の実技をしっかりと身につけて貰います。皆さん、どうぞ宜しくお願いしますね」

「二は〜い!」

みらい、ジユン、エミリーは元気に挨拶をする

「あ、魔法の杖忘れた〜!取りに行つて来ま〜す!」

いつもの事から、ケイは杖を忘れて取りに戻つて行つてしまう

「魔法の杖の実技…」

そしてリコは、何か複雑な心境で杖を握りしめるのであった



流石に教室内でやる訳にもいかず、実技は噴水広場がある外でする事となった

噴水広場に溜まつてある池の水を使って、リズは魔法を唱える

「キュアアップ・ラパパ!水よ、象の形になりなさい!」

池の水が事細かで、大きな水の象が完成した

「魔法つてこんな事も出来るんだね!」

「皆さん知つての通り、私達は普段魔法を使う時杖を使います」

リズによる魔法講義を聞く途中で翼は疑問を持った

(おかしいな。俺杖なんて持つてないのに何で魔法が使えたんだ?)

『ゲゲゲ、それはオレが悪魔だからだ。悪魔つて生き物は人間とは違つて強力な存在だからな』

「魔法の杖は、産まれた時に杖の樹から授かるもので、人によって形は様々ですよね」

「へえ〜、リコのもちよつと変わった形だ!」

「べ、別に良いでしょ！」

「二人共、まだ説明中だつて事忘れてるだろ？」

講義はまだまだ続き、魔法を使うにもイメージが大切だと言う

「キュアアップ・ラパパ！水よ、象の玉乗りをしなさい！」

リズは、水の象から更に水の玉を作り玉乗りをさせる

「皆さんも、水で好きなものを作って10秒間形を保つて下さい。それが今日の課題です」

リズは砂時計をテーブルの上に置き、誰が最初に挑戦するか見守る  
「では、最初にやってみる人は？」

「はいはい！わたしから！」

全員、出来るか不安で中々挑戦する者がいない中で、みらいだけが手を挙げる

「キュアアップ・ラパパ！水よ、モフルンになくれ！」

水はモフルンの形になろうとするが、外の途中で崩れてしまい弾けた

「すぐ崩れちゃったモフ」

「貴女が朝日奈みらいさんね」

「はい。この子が友達のモフルンです！」

「モフルンモフ！」

「可愛いお友達ね。宜しく」

まだ初心者なみらいに、リズは少し手解きする

「いいですか、魔法の杖をしっかりと持って、大きさや形を具体的にイメージして魔法の言葉を唱える」

「分かりました！」

みらいは改めてもう一度、モフルンをイメージする。モフルンがどんな形で、どんな感触か

「キュアアップ・ラパパ！水よ、モフルンになくれ！」

歪だった水は徐々に形を整え、そしてモフルンの形となった

「出来ました……あ」

しかし気を許してしまい、形は一気に崩れてしまった

「みらいさん、途中で気を抜いてはダメですよ」

みらいに続き、ジユン達三人も挑戦する

しかしながら形は出来たものの、それを10秒間維持し続けるのは至難だった

この10秒が、意外にも困難を極める

「アイツらも順調そうだな。それで…」

翼はリコの方へと視線を移す。未だに固まって動かないリコに声を掛ける

「おいリコ、早くしねえと全員合格するぞ？」

「い、今からやろうと思つてたところだし！」

リコは一瞬リズへ視線を移してから、授業に取り掛かる

「キュアアップ・ラパパ！水の象よ、玉乗りしなさい！」

リコがやろうとしていたのはリズと同じこと。みらい達が簡単な物でやるとは別に、リコだけかなり難易度が高い事をやろうとしていた

「くう……」

しかし、水は宙に浮くだけで形までいかず大きく弾けた

「ブツ!」

弾けた水は全部翼へと降り注ぎ、全身を濡らした

「おい……」

「次は絶対成功してみせるわ……!」

その後も皆、魔法の実技に恐れる事無く挑戦し続けるも、一筋縄ではいかなかった

みらいやジユン達は形は出来てはいるものの、維持する集中力が足りず力尽きてしまう

一方でリコは、何度も難易度の高い形で挑戦する。しかし結果は目に見えて分かっていた

維持以前に形が作れず失敗しては、翼が水を被る羽目になっていた

「キュアアップ・ラパパ！水の象よ、玉乗りしなさい！」

かれこれ十回以上はしてるが、それでも成功する兆しは全くなかつ

た

「はあ…はあ…」

「リコ、少し休んだ方がいいよ」

「平気よ!!」

「リコさん、無理せずイメージをハッキリ持つて——」

「無理なんてしてません!」

リズに憧れ、真似してはこれまで頑張っていたリコ。

しかしどうしても魔法だけが上手く扱えない。何やっても失敗ばかり

その焦りからもあり、余計リコの集中力を欠いていた

「出来るわ。貴女の杖は——」

「杖が何だつて言うの!わたしには出来ないの!!」

「リコ!」

「お姉ちゃんにわたしの気持ちなんて分からないわ!!」

リコは授業を放り出してそのまま何処かへ走って行った

「リコ待つてよ!」

みらいはリコを追い掛けて行ったが、翼は追い掛けようとしなかった

『ゲゲ、お前は探さないのか?』

「失敗する度に水を浴びてるんだぞ。探しに行く訳ないだろ」

『ゲゲゲ、冷たいねえ。リコ坊は至って真面目にしてるんだぜ?』

「それは分かってるが…:チツ」

翼は軽く地面を蹴って歩き出した

「翼もリコを探しに行くの?」

「俺がリコを?ありえねえよ」



リコは屋外の廊下で座っていた。そこで泣き出したのはーちゃんの世話をして、落ち着いたところだった

「ふう…」



「こんな所で何やってんだ？」

「…翼」

早速翼がリコを見つけ出した

「とつと戻れ。リズ先生が首を長くして待ってる」

『ゲ、リコ坊諦めんなって』

「無理よ…」

「ああそう。それじゃあな」

「ええ!？」

すぐさま立ち去ろうとする事にリコは驚く。そしてゲゲは、翼の腕を引っ張り止めようとする

『ゲゲゲ、いくら何でもそれは無いぞ。ゲ、こういう時こそリコ坊を慰めてやるのが——』

「本人が無理って言ってるんだ。なら無理だろ」

『ゲゲ、ツバサ、リコを連れ戻す為に探してたんじゃないのか?』

「勘違いしてるみたいだから言う。リコがどうなろうと俺の知った事ではない。所詮は他人なんだ」

段々と翼とゲゲとの間に不穏な空気が流れる

「まさか俺が漫画とかの主人公みたく、励まして同情すると思ったか? ハッ、ありきたり過ぎてつまらないな」

『ゲゲ、リコ坊の気持ち少しは考えたらどうなんだ? ああ!』

「ゲゲやめて! 翼の言う通りよ。どうせわたしには…」

「さっき見ていたが杖を投げ捨てようとしていたな?」

翼はリコの元へ歩き、杖を奪い取る

「え、ちよー!」

「捨てるなら手伝うが?」

そう言っって翼はリコの杖を投げ捨てようと振りかぶる  
「待って!!」

リコはその腕を掴んで止めた

「何だよ?」

「……………」

リコの目には涙が溜まっていた。流石の翼もバツが悪くなり、腕を

下ろした

「…俺はお前の事が嫌いだ。だからといって、何でもかんでも意地悪する訳じゃない」

翼はリコに杖を返してあげた

「捨てねえよ、お前は愚直にやっている。それについては心からスゲエって思える。やると決めた以上はやり切れ。お前らしく」

「リコ…」

そこへ丁度みらいとモフルンもやって来た

「悲観的になるのはいいが一人で勝手にやってる。周りを巻き込むな。お前自身何考えてるか知らないが、みらいだけはずっと側に居る。プリキュア にしたって、今此処に居るのはリコがリコらしく考えて行動した結果からだ」

『ゲ、ツバサもやっぱりリコ坊が心配だったんだな』

「黙れ」

落ち着いたところで、実技をしていた池の側で大きな爆発と土煙が舞上がっていた

「あそこリズ先生が居る場所！」

「一体何が起きたって言うの!?!」

『…ゲゲ、あれはヨクバルだな』

砂時計がヨクバルとなつてリズ達を襲っていたのだ

「みらい、翼！乗って！」

翼とみらいはリコのほうきに跨り、すぐさまリズ達の元へ急ぐ

「お姉ちゃん!!」

ジユン達を避難させて、残ったリズだけが対処しようとしたが返り討ちに合い気絶させていた

「本物のお出ましだね。覚悟しな！アタシの力で叩きのめしてやる！  
その弱っちい奴と同じ様に」

「みらい達の話通りだと、アイツもエメラルドを狙う敵…」

『ゲゲ、「スパルダ」って名前だったな』

蜘蛛の様な姿をした初めて見る敵。スパルダも闇の魔法つかいの一人

「みらい、翼お願い！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「ダイヤ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリー！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀劍——侵食率20%！」

「行きなヨクボール！」

「ギョー！」

ヨクボールの鼻から水を連射して攻撃するが、翼達三人は巧みに避け、逆に攻撃を仕掛ける

「ハアアア！」

「ダアアア！」

「そこだ！ゼアツ！」

三人の猛攻撃にヨクボールは耐え切れず倒れる

「お姉ちゃんを傷付けるなんて許せない！」

「弱いくせに出しゃ張るからだよ。魔法学校の先生なんて大したことないね！」

「なんて事言うの！リス先生は生徒思いで、みんなが尊敬する立派な魔法つかいなんだから！」

『ゲゲ、悪魔のオレよりも酷えな…』

「立派な魔法つかい？くだらない！」

ヨクボールは翼へと走って行く。とはいえ無防備な事には変わり

なく、翼は煉魔之刀剣を振り上げると

「ヤアアア!!」

「ヨクボール!？」

マジカルが翼の前に出て、蹴りの一撃でヨクボールを吹っ飛ばした  
「わたしの大好きなお姉ちゃんを馬鹿にしないで!!」

「今、大好きって言いました!？」

「おっかねえ…」

「わたしはお姉ちゃんを、大好きなお姉ちゃんをいつか超えて、もっともつと立派な魔法つかいになってみせるんだから!」

その時、マジカルが持つリンクルストーンのアクアマリンが光り輝いた

「マジカルの想いにアクアマリンが応えたモフ!」

「マジカル!」

マジカルはリンクルステッキを持ち、アクアマリンをセットする

「リンクル・アクアマリン!」

リンクルステッキから放たれる冷気が、ヨクボールの鼻を凍らせて攻撃手段を封じた

「今だ!」

「ダイヤ!」

「永遠の輝きよ! 私たちの手に!」

「フルフルリンクル!」

「プリキュア! ダイヤモンド・エターナル!」

ヨクボールを浄化し終え、リズが目覚めるまでマジカルは様子を見ていた

「ん…うう…」

「目が覚めた。二人はさっさとどっか行って帰って来い」

「は…い。行くマジカル」

「ええ」

／／／／／／／／／／  
「10秒突破です！」

騒ぎが収まった後授業は続き、みらい達は何とか合格した

そして残るは

「リズ先生、勝手に抜け出してすみませんでした。わたしも、もう一度  
お願いします！」

「ええ」

リコは池を真剣な眼差しで見つめていた

「大丈夫。出来るわ、貴女なら」

最後にリズから背中を押して貰い、リコの緊張は和らぎ少し微笑ん  
だ

そして集中しイメージする

「キュアアップ・ラパパ！水よ、ペンダントになりなさい！」

今度はちゃんと唱えれており、形になってはいるものの今にも崩れ  
そうだった

「お願い！壊れないで！」

リコは更に集中力を上げると、それに応えるかの様に、魔法の杖と  
リンクルストーンのダイヤが輝く

すると崩れそうだった水のペンダントは、形を整え凍りついた

「キラキラモフ！」

「氷になっちゃった！」

それはリコ自身にも驚くことだった

「あの…コレ」

「氷の魔法は上級者でも難しい。良くやりましたね！合格よりコ！」

これで晴れて全員合格し、その証であるハンコを押してもらった

「ありがとうお姉ちゃん」

「やった〜リコ!!」

「ちよ、離れなさいってみらい！」



授業を終えて部屋に戻ろうとした時、リコは翼に呼び止められた  
「何か用事があった？」

「……」

翼は腕を組んで難しい顔をしていた

「どうしたのよ？」

「あのなりリコ……悪かったな」

「何が？」

「お前に言った事や、そのつもりは無かったが杖を投げ捨てようとした事……悪かった」

リコはキョトンとする。

会って間も無いが、口喧嘩が絶えない事が多い事もあったから

「本当にどうしたのよ？変な物でも食べたの？」

「……もういい知らん」

「もう冗談よ。わたしの方こそありがとう」

「フン、せいぜい頑張るんだな。泣き虫魔法つかいさんよ」

「な!?泣いてなんかないし！」

「嘘つけ。あの時泣いてただろ！」

「あんなの嘘泣きよ嘘泣き！」

そんな始まった二人をみらい達三人は見守っていた

『ゲゲ、また始まった』

「止めるモフ？」

「ううん大丈夫だよ。ほら見てあの二人」

口喧嘩してるが、その表情はとても笑顔でいた

「仲良しだと思わない？」

『ゲゲ、喧嘩するほど仲が良いって事か？』

「それなら安心モフ！」

頬を引つ張り合う二人に、思わず笑みが溢れるみらいだった

## 第5話 黒い眼

魔法商店街を歩いてると雨が降り、翼達は適当な店の前で雨宿りをしていた

「濡れちゃった。モフルン大丈夫？」

「大丈夫モフ。みらいのお陰モフ！」

「早く帰らないと風邪を引いちゃうわ」

「それなら一度私の家に来る？そこなら雨風を防げる魔道具置いてあるけど？」

「嫌!!」

折角防げる物があると言うのに、リコはナギの家に行く事を拒否して取り止めになった

『ゲゲ、リコ坊もさつきと帰らないと風邪を…ゲゲ?』

「ゲゲ?」

『ゲゲ、ツバサ見てみる』

ゲゲの視線先には、雨具の使用もせず只茫然と立ち尽くす男性が居た

『ゲゲ、何やってんだ?』

「声掛けた方がいいかな?」

「それなら俺に任せろ」

みらいの代わりに、翼が雨の中を走って行く

「おいアンタ、そんなところで立っていると風邪引くぞ」

「……」

しかし男性は口を開こうとしない。無反応だ

「……」

「おい、いい加減に——」

痺れを切らした翼が男性の肩を掴んだ瞬間

「翼も帰って来ないモフ」

「仕方ないわ。わたしも一緒に——」



リコが一步前に足を踏み出した時、翼が勢いよく目の前まで転がって来た

「翼（君）!?!」

「ぐう…う…っ!」

「一体どうしたの!?!」

ナギが肩を貸して立たせる

「分からん。肩を掴んで顔を覗こうとしたら、何もされてないのに突然吹っ飛ばされた!」

『ゲゲ…もしかしてアイツ』

「誰か分かるモフ?」

『ゲ、目を見れば、な』

話してる間にも男性は悠然と歩いて来て近付いて来る

「来るわよ!」

翼は煉魔之刀劍れんまのとうけんを抜き、ナギがグリモワールのページを開けた時起こった

男性の姿が瞬きしてる間に音も無く消えたのだ

「何処に——」

翼とナギの間、そこに男性がいつの間にか潜り込んでいた

「!?!」

そして男性が両手を払う様に手を振ると、二人は呆気なく吹き飛ばされる

「翼君!」

「ナギ!」

みらいとリコが左右に散った二人を助けに行こうとした

しかしそれよりも早く男性の手が伸びる

「あっ!」

「モフ!?!」

「みらい!?!」

捕まったのはみらい。男性はみらいの首を締め上げ持ち上げる

「あが…っ!」

「みらいを離すモフ!」

モフルンはみらいの腕からするりとすり抜け、男性の脚にポカポカと叩く

「可愛いぬいぐるみ。でも」

「モフ〜!」

モフルンも何かの力により簡単に吹き飛ばされた

「お前達の事はよく知ってる。プリキュア だろ?」

「な……で、し……て」

『何で知ってるか』って? 悪魔の情報網を舐めては困るな」

「あく……ま……あ……!」

「この人間に取り憑いている。まあそんな事はどうでも良い。悪戯に少し付き合っつて貰おう」

男性、もとい悪魔は更に力を込めてみらいの首を絞める

けれど、その間に割り込む様に煉魔之刀剣が投げられる

悪魔はその手を引き、みらいから距離を置く

「みらい大丈夫か!」

「けほっ……う、うん」

「…あの野郎!」

煉魔之刀剣を持ち、ゲゲとの侵食率を20%まで上げる

「気を付けて、あの人悪魔って言ってた!」

『ゲゲ、やはり悪魔か…』

「お前は裏切り者の悪魔じゃないか」

取り憑かれてる男性の目が黒くなった

「黒い目…」

『ゲゲ、取り憑かれた連中は皆んな目が黒くなる』

「取り敢えず、みらいはリコとモフルンの所へ行つて変身しろ」

「おっと戦うのか。そんなお前達に良い事を教えてやろう。その小僧が持つ刀なら悪魔を殺せる。しかし器となつてる人間も死ぬけどな」

「そんな…」

『ゲゲ、とにかく変身するんだな。どちらにしろ、戦わないと死ぬだけだ』

翼が駆け出した。刀を峰の方に持ち替えて振り下ろす

「おっと！」

けれど悪魔は簡単にその攻撃を避ける

「ッ！」

「よっ！ほっ！」

当たるところか掠りもしない

「その動き、さては実戦経験が無いと見た。この程度で悪魔を殺すなんて夢のまた夢だ」

余裕のつもりか避けながら喋り出す。実際、幾らゲゲの力を得てはいるといえど、最終的に経験がものを言う

ガムシヤラに振り続ける翼を、悪魔は弄んでいる

「けれど今がチャンスよ。リコ、モフルン、みらいの所へ」

「分かっているわよ！」

リコはモフルンを抱えてみらいの所まで駆け付ける

「やるわよみらい！」

「で、でも……」

「気持ちに分かるけど、わたし達も戦わないと」

「う、うん……」

少々乗り気では無いが、みらいは仕方なく変身する事を決めた

「キュアアップ・ラパパ！」

「ダイヤ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「やああ!!」

悪魔の戦いにミラクルとマジカルも加わり、人数的に有利となった  
「中々面倒だな。だが」

「ツ!?!」

ミラクルとマジカルの拳を、悪魔は片手で受け止めた  
「所詮人間」

(ビクともしない!)

(何て力なの!)

「コイツ!!」

「お父さんお返ししますよ!」

突っ込む翼だったが、投げ捨てられるミラクルとマジカルに巻き込まれて地面に倒れてしまう

「クロス・ビギニング!」

横からX状の光のビームが放たれる。悪魔はそれを普通にジャンプしただけで回避した

「チツ、外した!」

「魔術にしては良い威力。だが一直線の攻撃は当たらない」

「因果斬り!!」

今度は黒い斬撃が放たれる。しかし悪魔は避けなかった……といふより避ける必要性が無かったのだ

斬撃は悪魔の横を通り過ぎて行った

悪魔は地面に着地して首を傾げる

「わざと外したな」

「な訳ねえだろこのタコ!」

今のは当ててるつもりで放った一撃。しかし外したのは大勢に問題があった

今翼は、ミラクルとマジカルの下敷きになっている。その状態での攻撃なのだ

「外れちゃったね」

「何処狙っているのよ!」

「はいはいすまないな、いいから退きやがれ!!」

『…ゲ、オレに一つだけ考えがある。しかしこれは…ゲゲ、賭けになるがな』

「何だよ?」

『ゲゲ、悪魔も闇に属する者。プリキュアの力ならヨクバールみた  
く浄化出来るかもって話だ。効かなかったら終わりだがな』

三人は少し考えたが、反対する気はなかった

「それしか無いならやるしかないわ」

「きつと大丈夫だよ！皆んながいるんだから！」

「ナギには……戦いながら伝えるか」

三人は立ち上がり構えを取る

『ゲゲ、ツバサ、侵食率を40まで上げるぞ』

「慎重なお前がグイグイ来るな」

『ゲゲゲ、奴の強さは少しおかしい。悪魔にしては強すぎる』

「まあ、どうでもいいが」

『ゲゲ、煉魔之刀剣——侵食率40%!!』

更に黒いアザが翼を染めてゆく。右半身は完全に侵食され、首元ま  
で広がった

「うぐ……っ!!」

『ゲゲ、やっぱ短期戦だな。ゲ、ミラクル、マジカル、勝負は一度きり  
だ。張り切れよ』

「二分かった！」

「…行くぜっ！」

翼を大きく広げて悪魔へと高速で近付く

「ほらよッ！」

「ッ!？」

突然の身体能力の上昇に悪魔は不意を突かれ、頬を掠めた。

焦げた跡の様な切り傷がそこにあった

「オラー！オラー!!」

「クツ…調子に乗るなよ人間——」

翼に集中していると、突然何者かが背後を取った

「なっ!？」

「隙あり!!」

背後からナギが超高速で接近し回し蹴りを食らわす

「ぐう……！」

「白魔法——ゾーン・ビギニング。魔力で脳を刺激し、強制的にゾーン状態へ至らせる。ごめんね、私って天才なの」

「自分の事天才って言うのかよ……」

「無駄口叩く暇があるなら動く動く。狙いは分かったから」

「自分に刺さってんぞ！」

翼は低空飛行で、ナギはその足で駆け抜ける。攻撃はするが、とにかく傷付けず対応する

「ッ！」

「ク……人間がここまで力を付けてるとは予想外。ならここは退かせて——」

「行かせないわ!!」

翼が後退し、入れ違いでナギが前に出る

手を伸ばし服の袖だけでも捕まえようとするも、悪魔は後ろへと下がりがあと一歩のところまで届かなかった

「残念」

「お前がな」

悪魔が一步後ろへ下ったその足元から、魔法文字の鎖が飛び出した「ッ!?!」

完全に不意を突かれ反応が遅れた。鎖が足首を捕らえると更に鎖が伸び、悪魔の身体中に巻き付ける

「良い作戦。けれど、この程度で悪魔を封じてるつもりなら——」

『ゲゲゲ、とっておきは最後まで取っておくからとっておきなんだぜ』  
翼とナギの二人は、自分達の後方へと目を向ける

そこでは変身を解いたみらいとリコが居た

そしてもう一度モフルンの手を二人で繋ぐ

「モフルンお願い！」

「モフー！」

「「キュアアップ・ラパパ！」」



「フフ、白魔法は主に守る為の力よ」

『ゲゲ、それなら相手を”倒す”魔法…と言うより魔術も存在するんだな。ゲツゲツゲ』

そう言われてナギはゲゲへと視線を移す

「…取り敢えずこの人は私に任せて。皆んなは校長先生にでも報告するのね」

ゲゲの質問にナギははぐらかした。ゲゲも適当に質問だけだったのでそれ以上追求はしなかった

「つと、その前にミラクル」

ナギはみらいの首へ光を当てる

「痕が付いてたから治癒しといたよ」

「ありがとう！」

「ありがとうナギ。ほら翼、わたしのほうきに乗りなさい」

「悪いなミラクル。乗らしてもらおう」

マジカルを無視してミラクルのほうきに跨る

「わたし！わたしが言ってるのに何で!?!」

「自殺願望には早過ぎる。俺はまだ死にたくない」

「何で落ちる前提で話して…:…もしかしてミラクル?」

「わ、わたし何も知らなくい！」

「うう〜もういいわ! そんなにわたしのほうきに乘るのが嫌なら、今後何があっても一切乗らせないから!」

そう言ってマジカルは魔法学校へと一人飛ばして行く

「あ、待ってマジカル〜!」

ミラクルはモフルンも乗せた後、全速力でマジカルの後を追い掛けるのであった

ナギはそれを笑顔で手を振って見送り、改めて男性へと視線を移す「さて、この人をどうするか…」

取り敢えずナギは、近くで治療が出来る場所へ移そうかと考えるその時だった

『』



「？」

何かの声みたいなのがナギの耳に聴こえた

「だ…れ…:…?」

グリモワールが熱く熱を持ち始めた

グリモワールから黒とは生温い程のドス黒いオーラが滲み出る

そして表紙には、骨の様な刻印が刻み込まれた

「何、この刻印？」

すると黒い煙りが刻印から溢れだして、ナギの体を包み込む

「え——」

そして男性を残して、ナギの姿はその場から消えてしまった

そしてこの日が、ナギにとって最後の安らぎの時間だった

## 第6話 人魚の里

「悪魔が現れたじゃと?!」

「はい。でも何とか倒せました」

「プリキュア なら傷付けず倒せる事も分かりました!」

『ゲゲ、それと同時に悪魔も動き出したって事になるが』

悪魔に対抗する手段を見つけ出すも、悪魔が動き出した時点で深刻な事態

闇の魔法つかいに加え悪魔。今後の戦いはもつと激化するの予想つく

「校長、リンクルストーンを探すついでに悪魔が出現する予兆を調べてくれ」

「分かった」

「ですが校長、悪魔なんてどうやってお調べなさるつもりですか?」

「…水晶が喋ってる」

「翼は初めてだったわね。魔法の水晶の『キャシー』」

魔法水晶が光る。感じ良く宜しくと言う感じだ

「ゲゲなら何か知ってる筈。同じ悪魔だし」

『ゲゲ、悪魔の予兆はな……』

全員唾を飲み込んでゲゲに注目する

『ゲゲ、オレが知ってると思うか?』

「勿体ぶってそれなの!」

「お前一応悪魔だよな?」

『ゲゲ、うるせえ。人間の世界ならともかく此処は魔法界だぞ?ゲゲ、常識が通用するかな?』

「…リンクルストーン含め、悪魔についても調べよう」

「よし撤収!帰るぞ」

翼はゲゲを引き連れて校長室から出て行った

「全く翼は……校長先生すみません」

「いやいや、男の子ならあれくらい普通さ。君達も引き続き補習頑張るのじゃぞ」

「はいー!」



「発声は魔法にとつて、とても重要なものです。今日は、ロレッタ先生に教わってキツチリマスターして貰いますよ」

次の補習は人魚の里での授業。海中へ出向き、そこで人魚の「ロレッタ」に特別講師として受けてもらう

「さあ、こんな風に……あくあく!」

ロレッタが声を出すと、周りがあるワカメが揺れ動いた

「絵にも書けない美しい声」

「つて、声が絵に書ける訳ないだろ」

ジュンが愚痴を溢すも、既に授業は始まっている

取り敢えず、各々が思うやり方で声に出してみる

しかし、雑音の様な声の混じりで上手くはいかなかった

翼もついて来てはいるが、正直授業には参加する気は無い。

適当に周りを見て時間潰しをしていると、ズボンの裾をモフルンが

引っ張っていた

「翼こっちモフ!」

モフルンに連れられて岩陰にやって来た。そこでリンクルスマホ

ンを開いて、はーちゃんを外に出してあげた

「はーちゃん一緒に遊ぶモフ」

「はー!」

「ゲゲもはーちゃんと遊ぶんだな」

『ゲゲゲ、はー坊こっち来い』

それから暫くして、みらい達にはマール貝という物を持たされる。

ロレッタ曰く、気持ちを乗せた言葉なら貝の口は開くと言う

休憩の為、開けた場所で話をしながらどうするか考えていた

「はーちゃんねんねモフ」

「モグモグ：これ美味しい！モフルンも食べる？」

「みらいは呑気だな。このマール貝の口を開けさせないとダメなんだろう？」

「ロレッタ先生が言うには、心のこもった言葉なら開くと行ってけど、まあ翼にそんな事出来る筈が——」

「マール！」

「おい開いたぞ」

「嘘おおお!？」

翼の手には口の開いたマール貝が確かにあった

「わあく凄い！」

「あ、有り得ないわ…」

「おやおやく？リコさんはまだマール貝の口を開けてないのですかあ？俺はこんな簡単にも開けれましたよお？ウエーイ!!」

「い、いつも以上に腹が立つわ…」

「何やりコ、こんな簡単な事も出来ひんのか？お？お??」

「……ひつぐ…」

「悪いそんなつもりは…」

流石に言い過ぎたと思ひ、今回ばかりは素直に謝った

『ゲゲゲ、リコ坊気にすんなって。これでも食って元気だせや』

ゲゲはそこらの木に実つてあつた果実をリコに渡した

「ぐず…皮が硬いし食べれない。どうやって食べるのかしら？」

「こういう時こそ、魔法を使ってみたらどうだ？」

「そうね。キュアップ・ラパパ！ジュースになりなさい！」

果実に魔法を使うが、それは失敗して打ち上げ花火となつて空に花を咲かせた

「「わあくー!」」

花火が打ち上がり声が聞こえた。誰かと思ひ周りを見渡すと、みらいが見つけた

「あ、人魚さんこんにちは！」

「「ッ!?!」」

人魚が三人、しかしみらいの呼び声にも関わらず、岩陰に隠れてしまった

「あれ、人魚さん?」

「:今の、花火って言うやつでしょ?」

「あの、さっきのは:」

「花火は花火だが失敗だ。何の参考にも何ないぞ」

「翼は黙ってなさい」

いつも通り喧嘩は始まるが、人魚達は話を続けた

「凄く、綺麗だった」

少し心を開いてくれたと思い、みらいは自己紹介をする

「わたし朝日奈みらい!」

「わたしはリコ!それでこっちの口の聞き方になってないのが翼!」

「おい」

「モフルンモフ!」

『ゲゲ、ゲゲだ』

「わたし『シシー』!」

『ナンシー』!」

『ドロシー』よ!」

三人の彼女達も返してくれた。そこで一つ気になった事もある

「ねえ、人魚さんってロレッタ先生と貴女達だけなの?」

「ううん、もっと沢山居る」

「その割には誰も会ってないが?」

「わたし達隠れていたの」

「何でそんなこと?」

「だって、海の外には何があるか分からないし、外の人達だってどれくらい意地悪かだって分からないんだもん」

それを聞いて翼ひリコに肘打ちする

「おいリコ、言われてるぞ」

「何言ってるのかしら?翼の事を言ってるのよ」

「ねえ、もっと魔法を見てみない?」

「ねえ、もっと魔法を見てみない?」

怖がる三人にみらいはそう提案した

「キュアアップ・ラパパ！」

それからみらいとリコで、魔法を使つての遊びが暫く続いたのであつた

あれから時間が経ち、それなりに打ち解けた全員で自身の事を話していた

「みらいちゃんと翼君つてナシマホウ界から来たの!？」

「こつちの世界に来るの怖くなかつたの？」

「怖くなんかない！もうワクワクもんだつたよ！」

「俺は勢いで来たただだからな。そういう細かいところまでは考えてなかつた」

「リコだつて、一人でナシマホウ界に来たんだよ」

「まあ、色々あつたけど思い切つて行つてみて良かったかも」

翼達の話聞いてはみたものの、まだシシー達には身構えることだつた

『ゲゲ、要は自分達がどう捉えるかが重要つて事だ』

「見た事の無い世界に怖がるのは誰しもが通る道。けれど、その恐怖と同じく素晴らしい景色が待っている。そう思えば気が楽だと思つたか？」

「翼が優しい!？」

「何言つてんだ。俺は元から優しい」

「：ねえ、良かったら三人に良い物見せてあげる！」

三人に連れられてやつて来たのはとある場所  
そこには人魚の里の宝があると言われている

「見てー！」

『ゲゲ、貝、だよな?..』

「宝物だつて!？」

突然三人に割り込んで来たのはジュンだった

「それにしても大きな貝だね！」

「この貝はね、ずっと昔から人魚の里で大切に守られて来たの。その昔貝が口を開いていて、その頃人魚は海の中だけじゃなく、空も泳いでたんだって！」

「人魚が空を!?!」

「そうして人魚は外に出て、他の色んな種族と交流してたって」

「でも、人魚が空を泳ぐのを辞めた頃から貝は眠った様に口を閉ざしてるの」

話を聞いて、リコは貝が置いてある台座に彫られてる文字を読み始める

「人魚の心に光戻りし時、再び輝きの人魚現れん。我らを広き世界へと導く」

「リコ、その字読めるんだな」

「当たり前よ。今更わたしの凄さを知っても遅いのよ」

「何言ってる。お前の凄さは前々から知ってる」

「ツ!?!と、突然褒めないでよ!!」

翼とリコの一悶着が始まりそうな時、シシーが何かを感じ取った

「大変！何か怖いものが来たみたい…」

「怖いもの?」

そして地響きが鳴り響く。どうやら何者かが人魚の里に入り込んだらしい

「みらい、リコ」

翼が二人に目を向ける。二人もその意図を察した

「ジュン、この子達をお願い」

「わたし達で様子を見て来るから隠れてて」

「え、でも…」

「大丈夫」

みらいとリコは三人に笑顔を向けて安心させた。

引き止めていたシシーも、何とか行かせてくれた



地響きの音が段々と大きくなる。近付いている証拠だ

『ゲゲ、上だ』

三人は上を見上げると、亀の様な人物が居た

「やはりお前達も居たか」

「何で此処に!？」

「…誰だ？」

「またかよ。よく人が変わるが毎週続くのか？」

「あのガメツツで最後よ」

襲撃される度に人が変わっていくのに呆れて、少し本音が出てしまった

「なるほど、お前が噂に聞く悪魔を仕えてる人間か」

『ゲゲ!? 誰が仕えてるだ! ツバサとは対等な関係だ!』

「そんなものはどうでも良い。プリキュア ! 今こそ勝負だ!」

「魔法入りました! 出でよヨクボール!」

貝とワカメを合わせたヨクボールが生み出された

「ヨクボール!」

「リコ!」

「うん!」

「キュアアップ・ラパ:あれ? モフルンは!？」

「あ:」

みらいとリコが変身しようとするが、モフルンが何故か不在の為変身が出来なかった

「ヨクボール!」

「お、おい来るぞ!」

三人は背中を向けて取り敢えず逃げる事を選んだ

「追って来るよ!」

「みらいこつち!で、リコは!」



「キャッ！」

「あふっ!？」

突進して来るヨクボールにみらいを抱き寄せて、リコを蹴り飛ばして回避した

「みらい大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう」

「ちよつと！わたしの扱いが雑過ぎるのだけど!？」

「助けたんだ。少しは感謝して欲しいな」

「あ……くう……！」

助け方に問題はあったが、確かにそのお陰で大事にはならなかった。怒って良いのか、感謝していいのか。リコの中で複雑な感情が混ざりゆく

「お前らは隠れてろ！俺が時間を稼ぐ」

ゲゲは、自分の影から煉魔之刀剣れんまのとうけんを取り出して翼に手渡す

「煉魔之刀剣——侵食率25%！」

「ほう……それが悪魔の力か。一度手合わせ願いたいが、今はリンクルストーンが最優先！ヨクボール！」

「ギョイ！」

ヨクボールは恐れもせず突っ込んでくる

「ツー！」

翼も同じく悪魔の翼を広げて突っ込んで行く

そしてお互いがぶつかろうとした時、煉魔之刀剣をヨクボールに突き刺して、その勢いを利用して後ろ側へと跳んだ

棒幅跳びと同じ要領だ

「ガラ空きだ！」

跳んだ直後、空中で体勢を立て直しヨクボールの背後から攻撃する。これで決まっと思ひ、煉魔之刀剣を振り下ろす

しかし、ヨクボール本体は貝で出来たもの。煉魔之刀剣の刃が通らなかつた

「ッ：硬い！」

『ゲゲ、煉魔之刀剣が通用しない!?』

「痛って：手が痺れた」

「ヨクボール!!」

「しまった！」

ワカメの腕が翼の体に巻き付き、そのまま回転してみらい達の所まで投げ飛ばされた

「翼君！」

「大丈夫!？」

「グッ：油断した。てか、出てくんな！引っ込んでろ！」

「ヨクボールルル!!」

ヨクボールは口を開け、無数の光弾を乱射する

「因果斬り！」

翼が斬撃を放つも、全て打ち消せなかった。こぼれ球が周りに降り注ぎ、みらいとリコが被害に遭う

「みらい！リコ！」

それでも容赦無く攻撃の雨は止まない。今度はリコへと狙う

「あ……！」

「ッ！」

すぐさまリコの正面へと立ち迎撃の準備をする

「侵食率30%!因果斬り！」

更に侵食率を上げ、広範囲に向けてもう一度斬撃を放った

それでも全てを撃ち落とすまでには至らなかった

「ここから出て行きなさい！」

「叫ぶだけで我を倒せると思ったのか？」

ヨクボールは大きく風を起こしてリコを吹き飛ばそうとするが、翼がリコを支える

「リコー！」

みらいが危険をかえりみず、リコの所へ走って来た

「リコ大丈夫？」

「ええ勿論よ。ありがとうみらい。翼も」

みらいに差し出された手を貰い一人で立つ

「二人なら」

「うん、二人なら」

「二人なら怖くない！」

二人の気持ちの一つになり、その気持ち応えたマール貝達が一斉に口を開けた

辺り一面の青き輝きが海中を照らし出した

「甘い匂いモフ！」

そして目の前にリンクルストーン「リンクルストーン・サファイア」が現れた

「サファイア！穏やかな気持ちのリンクルストーンモフ！」

「モフルン！」

不在だったモフルンも駆け付け、目の前に現れたサファイアで変身をする

「キュアアップ・ラパパ！」

「サファイア！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

変身すると同時に海面へと出て、岩場の上にミラクルとマジカルが立つ

「これがサファイアか」

「海の色プリキュアモフ！」

「エメラルドではなかったが、新たな力を得たプリキュア！」

「ヨクボール！」

腕を伸ばして攻撃して来たが、ミラクルとマジカルが飛び上がり避

けた

「飛んだだと!？」

「空飛ぶプリキュア モフ!」

「クツ、行けヨクボール!」

指示を受けたヨクボールは先程よりも速い攻撃をするも、それを上回るスピードで二人は華麗に避ける

「飛ぶだけじゃない。スピードもかなり上がってる!」

「こつちよ!」

「こつちこつち!」

ミラクルとマジカルが二手に分かれて、ヨクボールを翻弄させる

その隙を突いて、ミラクルがヨクボールの腕を掴み、一瞬動揺した隙にマジカルももう片方の腕を掴む

「せくのっ!」

そして縄跳びの様に、ヨクボールを大きく振り回して空高く投げ捨てた

「よし、このまま40%まで侵食率を上げて――」

『ゲゲ、それはダメだ。代わりに』

ゲゲは影から鞘を取り出した

『ゲゲゲ、少しレクチャーしてやる。低い侵食率でも強い相手を出来るって事をな』

ゲゲは煉魔之刀剣を鞘に戻して、悪魔魔法を纏わせる

『ゲゲゲ、オレの魔法で刀の摩擦係数を全て無くす。後は分かるな?』

「そういうことか」

煉魔之刀剣を腰に添えて居合い斬りの構えを取る

重力によって落ちるヨクボールに合わせて、抜刀し高速の太刀筋で斬り伏せる

「オラァ!」

すると、ヨクボールの本体である貝全体にヒビが駆け巡る

悪魔魔法の因果で摩擦を消す事によって、抜刀スピードを限り無く速くさせた。

その勢いで切れ味は何倍も跳ね上がり、強固だったヨクボールの体

に傷を付けたのだ

「お膳立てはもういいだろ！」

「うん！行くよマジカル！」

「ええー！」

「リンクルステッキ！」

「サファイア！」

「青き知性よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！サファイア・スマーティッシュュ！」

／／／／／／／／

「これをわたし達に？」

「このサファイアは、貴女達が持つ運命なのよ」

「ありがとうございます！」

ロレッタからサファイアを譲り受けた。これでサファイアはみらい達の物となり、今後にも役に立つ事だろう

「みらいちゃん、リコちゃん！」

「二人が手を繋ぐとすっごく強くなるんだね！」

『ゲ、この感じは…』

どうやら二人がプリキュア になる場面を見てしまった様だ

「わたし達にも、外の世界にも！」

「新しい友達が出来るかな？」

「いつか空を泳いで、その友達に会いに行けるかな？」

「勿論！」

「それにもうわたし達友達でしょ？」

「うん！」

その後、人魚の里での補習は全員合格となった。

それに加えてリンクルストーンも手に入り、新しい友達も出来た

残る補習授業は二つとなった



人魚の里から帰って来て早々、校長から魔法樹まで来る様に伝えられた

「校長先生、魔法樹の前まで来て何を話すのですか？」

「悪魔の件も含め、これからは激しい戦いになると思っている物を託したい」

「「ある物？」」

「そうじゃ。特に翼君にじゃ」

言ってる意味が分からないまま、魔法樹の前まで着いた

そこで校長は何やら語り出した

「実は、魔法界が生まれたその時から見守ってる者が居るのじゃ」

「え!? そんなに生きてる人が居るのですか!？」

「仙人さんですか!？」

「フフ、仙人なんて可愛いものじゃよ」

校長は魔法樹の裏に回り、その裏で何かを取っていた

「その者があるとあらゆる万物の創造主である”神”。その神の軍団の一人です」

『ゲゲ、それってまさか…!』

「悪魔とは対をなす光の存在」

校長が手に持って来たのは刀。

しかし煉魔之刀剣とは全く逆で、純白に輝いていた

その刀から、ゲゲと同じ様に白く丸い球体の存在が這い出る

「——天使じゃ」

## 第7話 癒しの森

「今、天使って言いました!？」

「みらい、それ毎回言わないと気がすまないのか？」

「あ、ごめん！」

「それにしても…」

全員目の前に居る、白くて丸い天使に目を向ける

「天使ってこんななんなのか？フワフワの翼に光の輪。こんなサッカーボールじゃなくて」

『フフ、残念ながら天使なの』

少し大人びた女性の声が出た。声の主は天使

『フフ、校長から全て話は聞いている。闇の魔法つかいに悪魔。それに貴女達プリキュアの事もね。緊急事態だから悪魔に関しては目を瞑るわ』

「なら、わたし達に協力してくれるの？」

『フフ、それもいいけど、ワタシを扱える肝心な人間が居ない』

「その事じゃが、翼君に——」

『フフ、悪魔の力も碌に出し切れない人間に天使が扱えるとても？』

校長の話とは全く違う。天使はこちらに協力する気は今の所無いらしい

『フフ、天使の力は悪魔と違い強力無比。ワタシを扱えば悪魔なんてすぐ殺せる。でも色々と面倒が付いて来るけど、その悪魔が重々知ってる筈よ』

「そうなの？」

『ゲゲ、確かに下級の悪魔なら基本敵わない。悪魔は肉体を存外に扱わない限り器にダメージは無いが、天使の場合は強力な者程負担が大きい。ゲゲ、だからそれに見合うだけの力を持つか、相性を見極めないと天使が出て行ったら最後、只の抜け殻になっちゃう』

「うーん話が難しいよ」

少しごちゃついた内容に、みらいは頭を悩ませていた

「じゃあ協力はしないって事か？」



『フフ、そういう意味じゃないの。協力はするけど今じゃない。フフ、それまでは様子見。貴方の中でそれを拝見させて貰うわ』

天使は校長から刀を取り、自分の白い影に仕舞い込んだ。

そしてそのまま翼の中へと入って行った

「おい、俺は家かよ?」

『フフ、天使だって雨風を凌げる所くらいは欲しいわ。フフ、それに、プリキュア である二人の所に入っても意味無いじゃない』

「悪魔と来て今度は天使が居候かよ…」

「あ、そういえば天使さんのお名前って何ですか?」

『フフ?名前なんて無いわよ。色々事情があって一部記憶が無いの』

「名前が無い!?それじゃあ考えよう!」

みらいはまたも頭を悩ませる

『フフ、変わった子ね。そんなに悩まなくても』

「天使で、悪魔がゲゲだから……」

「それなら『フフ』で良いんじゃない?ゲゲと同じ感覚で」

『ゲゲゲ、リコ坊ってネーミングセンスがツバサと同じだな』

「なっ!?やっぱ無し!今のは無しで——」

『「フフ」ね。フフ、気に入ったわ。これからは天使フフとして名乗るわ』

こうして、これからの道のりにフフが同行する事となった

／／／／／／／／／／

「さあ、俺達は何故こんな森の下に落ちたのか?モフルン答えてくれるか?」

「みらいがペガサスを追ってる途中はーちゃんが落ちそうになって、みらいが助けようとしたけどみらいがほうきで上手く飛ばず落ちたモフ」

「ほうほう」

「リコが助けたけど、結局そのまま落ちてしまったモフ」

「そのリコを助けようと俺も頑張った結果全員落ちた。うんうん……」

全部リコが悪いな」

「何ですよ?」

翼達は今とある森の深い場所に落ちていた

補習で、ペガサスと一緒に記念撮影が出来れば合格という今回の内容

ほうきを上手く乗る事がこの補習の鍵。なのだが、現状この有り様

「翼がちゃんと踏ん張ってくれないから落ちたのよ!」

「お前が重いんだよ!体重何キロだ?ダイエツトしろ」

「お、女の子にそんな事聞くなんて信じられない!!」

「お前……女だったのか!」

喚き散らす二人にみらいは今日も呆れていた

『フフ、この二人はいつもこうなのかしら?』

「うん……もう何言つても聞かないんだ……」

みらいの目は、何処となく遠い目をしており、もう半端諦めていた

そんな時、何処からか声がした

「あ、ペガサスだ!小っちゃい〜!」

「まだ子供みたいね」

「記念撮影のチャンス!」

「待て二人共」

「わっ!」

首根っこを掴まれてその場に尻餅をついてしまう

「様子が少しおかしい。弱ってるかもしれない」

「本当だ。病気なのかな?」

「薬草でも有れば良いのだけど……」

「こういう時こそ天使の出番って訳だ。おいフフ……フフ?」

フフを探すが何処にも居ない

「モフルンも居ない!」

「ゲゲも居ないわ」

フフだけではなく、ゲゲやモフルンまでも一緒になって消えていた

「探しに行こう。リコはペガサスを見てろ」

「リコ、ペガサスの事宜しく!」

そう言つて翼とみらいは三人を探すべく草むらの中に入つて行つた

「モフルン！ゲゲ！フフ！何処に行つたの？」

草木を分けながら森の中を進むと、ある大きな花畑に辿り着いた

「わあ！すつ！すつ！」

「綺麗な花畑だ。それに甘い匂いが漂つてるな」

「あま〜い匂いモフ！」

探し人であるモフルンが花畑から顔を出した

『フフフ、気持ちが悪くわね〜』

『ゲ、二人共待て！』

「三人共…あれは！」

三人が行く先を見ると巨大な一輪の花が咲いていた

それを見たみらいは、皆んなとはぐれる前にケイが言っていた事を

思い出す

「これって…食べられちゃうよ！」

「食べられるってそんな…まさか」

翼もあまり気にはしないが、世の中には生き物を食べる植物が存在する

それが頭に通り、みらいと顔を見合わせる

「モフルンダメ！」

「ゲゲ、フフ帰って来い！」

急いでモフルン達を捕まえた

「全然怖くないモフ！」

「え？本当だ、やな感じが全然しないね」

『フフ、それも逆。どういう訳か癒しの力もあるみたいよ』

翼とみらいは自分の体をよく見ると、先程落ちて出来た傷が治癒され行くのが分かった

「そうだこれなら！」

みらいはこの花の力を使って、先程のペガサスを癒そうと考えた  
リコとペガサスをこの花畑へ連れて、ひと束花を摘んでペガサスへ  
近付けた

するとペガサスはたちまち元気になった

更にそこへ、もうひと回り大きいペガサスが現れた

「ぎつとお母さんだー！」

みらいの言う様に、その馴れ合い姿を見て親子だと確信した

母親のペガサスが嬉し涙を零し、それが花束に落ちるとピンク色の  
波紋が波だった

その波紋は巨大な花へ、そして花の中心にリンクルストーンが生み  
出された

『ピンクトルマリリン！花のリンクルストーンモフ！』

母親ペガサスがリンクルストーンを取りに行つて、リコはそれを受  
け取った

「ピンクトルマリリン。花の癒しから生まれた、アクアマリンと同じ支  
えのリンクルストーン」

「みんなの優しい気持ちに、ピンクトルマリリンが応えたモフ！」

丁度その時、はーちゃんのお腹の虫か鳴る

『ゲゲ、はー坊のご飯はまだだったな』

「そうだー！」

リコは早速手に入れたピンクトルマリリンで、はーちゃんのお腹を膨  
らまそうとした

「よしー！」

「みんなで食べるモフ！」

「み、みんななああ…」

翼達の周りには、何十という数の動物達で囲まれている。

これからその数分、リンクルスマホンを使うと思うと少し気が引け  
た

「あゝ忘れてたー！」

食事中、みらいが大声を出して立ち上がった

「記念撮影、すみません写真一枚お願いします」

ペガサスもお安い御用と思いい立ち上がった時、何かの気配を察知した

すると花畑の花が刈り取られ、動物達は一斉に逃げ出した

ペガサスが威嚇する方向へ目を向けると、空中で佇むスパルダが居た

「チツ、強い魔法の力を感じてエメラルドかと思ったら……はあく残念。また違ったか」

怒ったペガサスはスパルダに突進するが、ヒラリとかわされた

「トオツ！」

スパルダは糸を繰り出し、ペガサスを拘束した

「良い目をしてじゃないか。そんなに花を切られた事が許せなかったのかい？そうかいなら、もっと花を切りまくってやるよ!!」

そしてスパルダは、ペガサスとツタの葉を使ってヨクバールを生み出した

「ヨクバール！」

「何て事を！」

「元に戻して！」

「戻せと言われて戻す馬鹿がいるかい？」

そしてヨクバールは辺り一面を荒らしていく

「やるしかないな」

「うん！」

『フフ、プリキュア と悪魔の力。どれほどのものかお手並み拝見つてところね』

「「キュアアップ・ラパパ！」」

「「ダイヤ！」」

「「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀劍——侵食率15%！」

「変身してどうする？」

「ヨクボール!!」

体に巻き付いてるツタを、鞭の様に操り攻撃をして来る

「ツ！」

翼はツタを斬ってミラクルとマジカルの道を開く

二人は高くジャンプし上から攻撃しようとするが、途中その動きを止めてしまう

「ツ……！」

ヨクボールになっても、ペガサスの事が通り集中を欠いてるのだ  
「キヤアア!!」

そんな無防備な状態で攻撃をまともに食らう羽目となってしまう  
た

「ミラクル！マジカル！」

翼も攻撃に参加しようとし、側面から切り倒そうと煉魔之刀劍を振り上げる

「顔を見なきや多少の罪悪感もないだろ！」

「いいのかい？ペガサスまで傷付けてしまうかもよ？」

「ツ!？」

スパルダの言葉で、翼も攻撃するのに躊躇ってしまった  
「うぐあー！」

その一瞬が仇となり、ツタの鞭の攻撃を食らってしまう

「翼君！」

ミラクルが駆け寄り肩を貸す

「これは、いつも以上にやり難いな」

「どうやって止めれば……」

それでも容赦無くヨクボールは襲い掛かって来る

鋭い爪を携え向かって来る

どうすればいいか迷っていると、子供ペガサスがヨクボールへ飛んで行った

「危ないモフー！」

振り下ろす爪は子供ペガサスに捉えたかと思いきや、わざと外したかの様に攻撃が逸れた

「どういう事?」

『フフフ、どうやらお母さんペガサスの心がヨクボールに抗っている様ね』

そしてミラクルが持っていた、ピンクトルマリリンが輝いていた

「癒しの花から生まれたリンクルストーン。この力で、お母さんの心を取り戻せるかも！」

「何をやる気なの?」

「わたしを信じて」

「…分かった。信じてるから」

マジカルが翼へ目配せすると同時に走り出した

「そういう事か!」

翼もマジカルの意図が伝わり煉魔之刀剣を振り翳す

「ハアッ!」

放った斬撃はヨクボールの足元付近の地面に直撃した。それにより土煙りが舞い上がる

「リンクル・アクアマリン!」

マジカルはアクアマリンの力でヨクボールの足を凍らせた

これで視覚と動きを同時に封じ込めた

アイコンタクト一つでここまでの連携。

いつも喧嘩をしてる二人からは想像もつかない息の合った連携だ

「ミラクル!」

「お母さんの心に届いて!——リンクル・ピンクトルマリリン!」

リンクルステッキから放たれる癒しの力が、母親ペガサスとヨクボールを分裂させた

「やった!」

「ミラクル！」

「うん！」

「ダイヤー！」

「永遠の輝きよ！私たちの手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ダイヤモンド・エターナル！」

『フフ、まだまだってところね』



その後、ペガサス親子との記念撮影は成功し合格も貰った

「これで残る補習は一つ…」

「うん…」

「ま、いつも通りまた合格すれば良いけどな」

そして残る補習は一つ



## 第8話 新たな旅立ち

もうすぐ最後の補習授業が始まろうとする

しかし、教室の中はどんよりとした空気が漂っていた

翼とみらいはもうすぐナシマホウ界へ帰る事となる。

例え帰ってしまっても、カタツムリニアが有ればすぐ会えると言う  
が

一方でリコは重たい表情をしていた

「ブツサイクな顔。どうしたんだ？」

「…悪いけどそんな気分じゃないの」

「みらいがナシマホウ界に帰る事に不満があるのか？」

「ッ!？」

リコは思わず顔を上げてしまった。これでは言っているのと大差  
変わらない

「最初から分かってた事だろ？何寂しくなってるんだよ。馬鹿みたい」

「翼はせいせいしてる様ね。当然よね、わたしとは喧嘩ばかりだし今  
だって…」

「人の気持ちを勝手に決めつけるな」

「え、じゃあ翼も——」

リコの話の途中、それを遮ってアイザックが教卓の前に現れた  
「では、これより授業の説明をします」



最後の補習内容はリズと補習組全員との魔法対決。

帽子に着けてある「びつくり花」を先に咲かせた方の勝ち。その花  
は魔法を感じるとすぐ花開くといった変わった花

補習組が誰か一人でも花を咲かせれば全員合格。

しかし、全員花を咲かせられたらその時点で終了となり落第となる  
ほうきを乗る事も許されてる為、広く開けた所へ移動して最後の授  
業が始まる

この補習授業にはアイザックの他、校長や教頭も見守っていた  
それに

「あれ、翼は参加しないの？一応補習授業は受けてきたんだよね？」

ナギもその場に居た

「杖は無い、ほうきも乗れない。俺に一体どうしろと？」

「ちよつとリコより残念過ぎない？」

「それ絶対リコに言うなよ」

「はいはい。それよりも」

改めてみらい達へ向き直る

「それでは位置について、よーい……試合開始！」

アイザックの合図でみらいが単身飛び出した

「おく始まつて早々みらいが飛び出したね」

「そうだな」

二人はみらい達の勇姿を見届けながら会話を弾ませる

「そういえば、悪魔が襲って来た日から見なかったが何処に居たんだ？リコが訪ねても留守だったらしいが」

「多分入れ違いね。外に出る事が最近多くなったから。それよりも……」

ナギの目付きが鋭くなった

「天使を連れてるそうね。一体何処で？」

「校長の紹介でな」

「ふーん」

「何だよ？」

「別に、入手経路を知りたかっただけ。あ、劣等生共が脱落したわ。いい気味。これが見たくてわざわざ出向いたのよ。これだけで冷凍みかん10個はいけるわ」

「お前酷いな」

「それは翼もでしょ？リコに対して」

二人が話してる間にも試合は進んで、残るはみらいとリコだけとなった

「いよいよ大詰めね。リズさんは本当に手強いから大丈夫かな？」

「何言ってる？みらいとリコだぜ？それだけで何も心配する事ないだろ」

「ええ、そうね」

「キュアアップ・ラパパ！」

「花よ！」

「咲きなさい！」

上空、三人は交差しながら魔法を直接当てに行き

「あっ！」

それが功を奏して、リズのびっくり花が咲いた

ルールに基づき、これで補習組は全員合格を勝ち取った

「お遊戯は終わりましたか？」

合格の余韻に浸る中、それを水を差す様にバツティが現れた

「魔法入りました！出ですよヨクバー！」

みらい達の合格証と咲いたびっくり花を使い、蛾にも似たヨクバーを生み出した

先生達は急いで魔法の絨毯を使って皆んなを逃す

それでもしつこく追い掛けて来る

「取り戻さなくちゃ！」

「わたし達の合格証！」

翼も立ち上がりみらい達と戦おうとすると、後ろからナギと校長に肩を掴まれて座らされた

「おい！」

「皆が居る」

「目立ったら面倒だから引っ込んでなさい。代わりに私が出る！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「ルビー！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

ミラクルとマジカルは絨毯から飛び出して、ダブル攻撃でヨクバールを地面に落とした

だがヨクバールも羽を広げて体を起こした。そして腹で二人を叩き潰す

「ツ！！」

自分達よりも大きい体を、二人で支えて耐え忍ぶ

「プリキュア、所詮戦う力があつたところでヨクバールを倒せるのはたつた二人。どんなに足掻こうと何の意味も無いのですよ！もういい加減諦めてしまいなさい」

「前のわたしだったらそうしてたかも知れない。でも！」

「この春休み、わたし達二人で色んな事を乗り越えて来た！」

「一緒だったから挫けずに頑張れた。だから、これからもどんな事だつて」

「二人一緒なら、諦めたりしない！！」

二人の想いが重なり、今まで以上の力を発揮してヨクバールを地面へ叩き付けた

「ならばヨクバール！空に飛ぶのです！」

距離を取れば空を飛べない今のルビースタイルに勝てるかと踏み、ヨクバールは大きく羽を広げて飛ぼうとする

「白魔法——ブジン・ビギニング！」

それを読んでか、ナギは空から魔法術を行使する。

背後から魔法陣が幾つも現れ、中から大量の武器が召喚、そして射出される

羽は勿論、体を切り裂かれるヨクバールは蹲って動けなくなった

それをチャンスと見た、ミラクルとマジカルの反撃が始まる

「リンクルステッキ！」

「ルビー！」

「紅の情熱よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ルビー・パッションナーレ！」

「ミラクル、マジカル…」

モフルンが二人に近付こうとするが、翼がモフルンを抱き上げて止める

「モフ？」

「今だけは、二人一緒にしといてやれ」

／／／／／／／／

そして別れの時間は刻一刻と近付こうとしていた

翼とみらいとモフルンは、ナシマホウ界行きのカタツムリニアに乗って見送られていた

「本当に、もう行っちゃうのね…」

「アタイさ、ナシマホウ界に憧れてるんだ。何度も抜け出そうとして失敗してさ」

「それで、出世日数が足りなくなったの？」

「うん。絶対遊びに行くからな」

そして教頭から、翼とみらい二人にある物を渡される

「魔法学校の生徒手帳です。お二人共、如何なる時、如何なる場所でも我が校の生徒として恥ずかしくない振る舞いをする様に」

「ありがとうございますー！」

「有り難く貰つときます」

「実はわたし達からも渡したい物があつて！」

ケイ達から、モフルンにお手製の帽子とケープを貰った

「皆んなとお揃いモフ！ありがとうモフ！」

「そういえば、リコさんとナギさんは？」

「ナギは見送りには行けないって言っていた。けど、またすぐ会えるとか言ってるな」

そしてリコだが、彼女中でもう別れは済ませており此処へは来なかった

とうとうカタツムリニアが動き出す時間となった

「食べる？冷凍みかん。平気だよ、また遊びに来ればいいし！」

「そうか。でもな、我慢を平気だなんて言うな」

いつの間にか、みらいは大粒の涙を溢していた

会えない訳では無い。けれどそう簡単に会える訳でもない

そんな思いを噛み締めてると、窓の外に人影が

「リコ！」

「はーちゃん！」

「どうして？」

「わたしも行くわ！ナシマホウ界に、貴女達の世界に！」

リコも必死にほうきで飛んでるが、カタツムリニアの速度に追いつけずにいる

みらいは急いで最後尾車両へ向けて走り出した

翼もそれを追い掛け、車両扉を開けるとリコが乗り込んで二人仲良く抱きしめていた

「約束だよ！ずっと、ずっとずっと一緒だよ！！」

「だから、そう言ってるでしょ！」

そんな微笑ましい光景に、翼も口が綻んでいた

暗い部屋の中

そこでナギはグリモワールを正面に何か喋っていた。

そして表紙の刻印が紫に光っていた

「本当にしなければならぬの?」

』

「…本当はしたくない、けど運命を受け入れろと言うのね」

』

「いいわ。それが望みなら私は迷わず実行する。ナシマホウ界に行くわ」

ナギはグリモワールとMAHCCAを持ち出した

「みらいやリコには悪いけど、私もそのバトルロワイヤルに参加するわ。今度は敵としてだけどね」

## 第二章 ナシマホウ界編

### 第9話 迷子のリコ

リコが何故カタツムリニアに乗車したかは、ナシマホウ界でリンクルストーンが現れる兆しを校長が知らせたから

「でも、折角二年生になれたのに…」

「ナシマホウ界でも、魔法に必要な事は学べるって校長先生が言ってたし、絶対に立派な魔法つかいになるから！」

「その為にまた留年するのか？ご苦労なこつた」

「心配してくれてありがとうね」

「は、はあ!?誰が堅物理学級委員長のお前なんかを心配するか！」

「必死ね」

いつもは翼が振り回すが、今回はかりはリコにペースを握られた

「そうだ、みんなに渡す物があつたの。ヤドネムリンの殻よ」

「この中だとよく眠れるの。このカタツムリニアは急行じゃないから着くのは朝。ゆつくり体を休めるのよ」



朝となり、カタツムリニアから降りてMAHOC Aを改札に通すと津成木駅へ変化する

「さてと、ここから各自解散って事になるな」

「うん…あー！」

みらいは駅の床に落ちてる物に目が行く

「あれってリンクルストーン！」

「いきなり見つけちゃった！それにあれって、最後の守りのリンクルストーンじゃない？」

「という事は、新しいプリキュア になれるって事？」

「早いとこ回収するぞ」

三人がリンクルストーンを取ろうとした時、横からカラスが啞えて



飛んで行った

「「あ」」

「はー!」

思わぬ出来事に固まってしまいが、はーちゃんが飛び出してカラスを追い掛けて行った

「はーちゃん待って! キュアアップ・ラパパー! ほうきよ、飛びなさい!」

『ゲゲ、リコ坊も待て!』

更にリコがほうきに乗って追い掛け、ゲゲもリコに引っ付いて飛んで行ってしまふ

「おいおいおい! 此処は魔法界じゃないんだぞ!」

「とにかくわたし達も追い掛けよう! ほうきほうき…あれ? ほうきが無い」

「トランクの中モフ」

「あ、そうだトランク…って開かないよ〜!」

「ちよつと貸してみろ」

翼が代わってトランクの鍵を開けようとするが

「本当だ、開かない!」

力技でも開かずと化した

「ええ〜どうしよう〜!」

「取り敢えず足で見つけるしかないな。飛んで行った方向に向かうぞ」

一方でリコはというと、カラスには逃げられ、リンクルストーンは行方不明、そしてお腹を空いて落ちてしまう羽目になる

『ゲゲゲ、はー坊はナシマホウ界の環境にビツクリしてリンクルスマホンに隠れた。ゲ、リコ坊は怪我は無かったか?』

「ええ無事よ。ねえゲゲ、貴方一応ナシマホウ界から翼と来たのよね? 此処が何処だか分かるかしら?」

『ゲゲゲ、悪いが蔵から全く出なかったからな。当てにならないぜ』  
「どうしよう…」

ゲゲを抱いて撫でながら迷った事に困惑する

「危ない！」

突然リコの手を引いて道の端に寄せる人物が現れた

先程リコが立っていた場所に、自転車走って行ったのだ

「ありがとうございます」

「掃除は感心だけど気を付けなさいと」

「掃除…あ、いえこれは」

ほうきを持っていた事で少し勘違いをされてしまった

「あ…」

更に恥ずかしい事に腹の虫まで鳴ってしまふ

「おいですよ。お腹空いてるんでしょ？家すぐそこだから」

親切なその人が先行する後ろで、いつの間にか人形の振りをして事なきを得ていたゲゲに話し掛ける

「ついて行った方がいいのかな？」

『ゲゲ、動かないよりは良いんじゃないのか？』

ところ変わって翼達は、リコとリンクルストーンを探していた

「リコ、何処に居るのかな？」

「さあな？でも、津成木町は親切な人が多いから何とかしてるだろ」

「向こうから甘い匂いが近づくモフ！きつとリコのダイヤモフ！」

適当に歩いてるとモフルンが反応した

「よしー！」

みらいが気合いを入れて踏み出そうとした時、丁度目の前に探していたリンクルストーンが転がって来た

「何だリコじゃないや」

「リンクルストーンだな」

「ごめんモフ。間違えたモフ」

『フフ、次の場所に向かおうね』

翼達は無視して来た方向へと帰り出す

そしてそこで気付いた

「リンクルストーン!?」

急いで取りに振り返ると、今度は猫がリンクルストーンを啜えて逃走した

その頃リコは、助けてくれた人物のお店に招かれてお腹を膨らませていた

それに話をして打ち解けていた

「その黒いぬいぐるみ。大事そうに持つてるけど大切な物なの?」

「え?あ…」

黒いぬいぐるみというのがゲゲだ

「ごめんなさい。変な意味じゃないのだけど、私の娘も大事にぬいぐるみを持つているからつい」

「このぬいぐるみはわたしのではありません。その…仲の良い友人の物で、訳あって今預かってるんです」

「そうなの。ところで貴女のご両親は?」

「父は考古学者、母は料理研究家で。二人共あっちこっち飛び回って暫く会ってませんけど」

「貴女の事心配でしょうね。子供の事を思わない親なんていないから。ウチの子は、何か興味を持つとすぐに周りが見えなくなつて勝手に突っ走って行っちゃうんだよね」

それを聞いてふと、リコはみらいの事を思い出す。

話してくれたその娘が、みらいと何処となく似ていたからだ

「似てるかも。こっちに一緒に来た子が居て、考えるよりも先に行動しちゃうし、自分の事よりも人の為にとって子で、なんて言うかお節介なんです」

膝の上で座るゲゲがリコのスカート軽く引つ張る。

思ってたより長居をしてしまった様だ

「その、探さないと。友達を」

「そうね。お腹いっぱいになった事だし、一緒に探しに行こうか?」

「え、お店は?」

「探しものは一人より二人でしょ？」

「ッ！」

なんて事のないその言葉を聞いてリコは思い出した

「わたし行ってきます！色々ありがとうございます！ございました！」

リコは見送られてながら店を出て行った

『ゲゲ、何か思い当たる場所でも？』

「ええ、みらいと初めて出会った場所。そこなら！」

「猫いないし、リコもないし…」

「匂いもないモフ」

「お手上げだな」

『フフ、何か思い当たる場所はないの？フフ、ほら、初めて出会った場所とか？』

「…あく！！」

フフの言葉でみらいは思い出した

／／／／／／／／／／

走り出したみらいが向かう先には、イチゴメロンパンが販売してる  
移動販売車

そしてその向こう側からリコが見えた

「みらい！翼！」

「リコ！」

「何とか落ち合えたな」

ようやく合流出来て、みらいの家に向おうと移動し始めた時だった

「「あ」」

ふと木の上を見ると、リンクルストーンを啜えた猫が居た

猫が走り出すと、三人は急いでその後を追う

「待て〜！」

しかしその途中で不可思議な事が起きる。走っていた猫が宙に浮

かんで飛んだのだ

「猫さん飛んだモフ！」

「ておいストップだ！」

猫が飛んで行った先にはスパルダが待ち構えていた。

どうやら猫が飛んだ仕掛けは、スパルダの糸によってなのだろう

「リンクルストーン頂くよ…ってエメラルドじゃないのかい」

無理に掴まれて猫が暴れ、その拍子で猫の毛がスパルダの鼻に入っ  
た

「ハックション！」

くしゃみで猫を落とし、リンクルストーンも翼達の方へ転がって  
いく

『ゲゲ、頂き——』

「おっと、させないよ。これ以上新しい力をつけさせるものか！」

「魔法入りました！出でよヨクボール！」

猫毛とバイクが合わさりヨクボールが誕生した。

その姿は、猫がバイクに跨ってそのまんまだ

「変身するモフ！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「サファイア！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀剣——侵食率30%！」

「ヨクボール！」

「来るぞー！」

翼達は三手に分かれて攻撃する

サファリア特有の飛行能力とその速さを活かして、攪乱しつつするのが全て受け止められてしまった

「速いー！」

一度大空へ距離を取って体勢を立て直しを図る

しかし、ヨクボールはアクセルを吹かせ空へ大ジャンプした

「ヨクボール！」

「下がれ!!」

ヨクボールは猫の鋭い爪で襲い掛かるのを、翼はミラクルとマジカルと後ろに退かして、煉魔之刀剣で防御する

「二翼（君）!!」

防御はしたものの力で押されつつあり、ミラクルとマジカルが支えようとするも耐え切れず吹き飛ばされる

吹き飛ばされた場所は公共の道路

周りには一般市民が沢山居た

「スピードには自信があるみたいだけど、アタシの方が上だよ！」

この状況を見て、人々は怯えて逃げ出した

「この世界の連中と来たら情けないね。魔法も使えないと惨めなものだね」

「貴女には分からないでしょうね。優しくて温かいの。魔法界もこの世界の人達も！」

「それがどうしたって言うの？どっちの連中も、いずれ皆んな仲良く消えるのさー！」

「そんな事させない！此処にはお父さんやお母さん、お婆ちゃん、友達のみんな。わたしの大切な人がいっぱいいるの！マジカルの言う通りだよ。魔法界もわたし達の世界も、皆んなあったかくて大切なんだから！」

「フン、ヨクボール！」

ヨクボールが動き始めた。だがこのまま此処で戦えば近隣にも被

害を受ける

「ミラクル、マジカル。場所を変えるぞ」

翼達が飛び立つと、ヨクバールは後を追いつける

街中でも、あまり被害を最小限に出来る場所を飛びながら探す

「へえ、ついて来るんだな」

「呑気な事言っていないで！」

「とにかく早く見つけなさいと！」

トップスピードで飛ぶのに対し、ヨクバールもそれについて来てる

鬼ごっこするにしても、このままだといずれ追い付かれてしまう

「あのビルに誘い込む！」

翼達の正面

ビルが立つそこ目掛けて飛び、最上階まで目指す

ヨクバールも、ビルの側面を走ってまで追い掛けて来る

『ゲゲゲ、まんまと掛かったな！』

翼はヨクバールに向き直り構え直す

「俺達は、俺達の為に戦う!!」

煉魔之刀剣に悪魔の魔法が更に宿る

「悪魔魔法——因果斬り！」カルマギリ

放った技は、ヨクバールのバイクに直撃したが擦り傷一つ付かなかった

「アツハツハ！全然効かないね！」

「悪魔魔法、因果の力はここからだ」

突然、ヨクバールの乗るバイクがバラバラに分解された

「わっ！」

「え、どういう事なの!？」

「バイクが組み上がったと言う結果を切ってバラバラにした。今までは、この手が通用しないヨクバールばかりだから使えなかったが」

バイクを失ったヨクバールはビルに引っ付いて踏ん張るが

「ハアアア!!」

「ヨクバ!？」

ミラクルとマジカルのダブル攻撃に地面へ叩き落とされた

「今だ！」

「リンクルステッキ！」

「サファイア！」

「青き知性よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！サファイア・スマーティッシュユ！」

／／／／／／／／

ヨクバールの浄化を終えて、急いでリンクルストーンを回収しようとしたが消えていた

「リンクルストーンどっか行っちゃったね」

「甘い匂いも消えちゃったモフ…」

「大丈夫！きつと見つかるよ！皆んなで一緒に探せばね！」

「ええ！」

「それじゃあ、今度こそ解散だな」

翼はゲゲとフフを連れて帰ろうとするが、途中何かを思い出して足を止める

「忘れてた。俺の家の電話番号だ。連絡は大事だろ？」

「わぁ〜ありがとう！あ、これわたしの家の電話番号！」

お互いに家の連絡先を交換して今日は解散となった

今日から始まるナシマハウ界でのリンクルストーン探索



しかしその最中で、あんな事になるとは思いも寄らなかつた

## 第10話 Fun school life

ナシマハウ界に帰った来たその日の夜

みらいから早速連絡があった

「はいもしもし翼だが?」

『あ、翼君!あのねちよつと頼みたい事あるんだけど良いかな?』

「遠慮無く言え。みらいの頼みなら何でも聞いてやる」

『えつとね、明日わたし達学校が始まるよね。その時、モフルンとはーちゃんの様子をゲゲとフフに任せたいんだけど…』

「分かった。二人に明日の朝、みらいの家に行く様言っておく」

『ありがとうー!じゃあ明日登校中会うことがあれば!』

みらいとの電話はそれだけで終わった

受話器を置いて振り返ると、ゲゲとフフが浮いていた

「ゲゲ、フフ。明日モフルン達の世話をしてもらおう。分かったか?」

二人は顔を見合わせて溜め息を吐く

『ゲゲ、みら坊にはとことん甘いなお前』

『フフ、その優しさをもう少しリコ子に与えられないのかしら?』

次の日の早朝

何とかみらいの家を見つけたゲゲとフフは、みらいの部屋の窓からお邪魔させてもらった

「二人共お願いね」

「モフルン達の事宜しく!」

『ゲゲ、それは分かったが時間は良いのか?』

「え?」

『フフ、ツバサはワタシ達が出ると同時に家を出たけど?』

「あー!!」

慌てて部屋から出て行く二人を見送って、ゲゲは一息吐く

『ゲゲゲ、さあて、次はモフ坊達を探さないとな』

『フ、ゲゲ気付いて無いのね。さっきみら子の鞆からチラツと見えた

のだけど、モフ子みたいな姿が一瞬目に入ったけど」

『ゲゲ!?!』

ゲゲとフフは、また急いでみらい達を追い掛けるのであった

それから、みらい達は何とかして学校へ登校し、遅刻は免れた

掲示板を見て自分のクラスを確認する。そこで、一年生からの付き合いです。「長瀬まゆみ」「大野壮太」の二人共クラスは同じだった「皆んなとクラス一緒だなんてワクワクもんだ!」

教室入って自分の席を確認する。入って一番右奥の窓側。そこが席

しかし、自分席から右斜め前の席に目が行く

その席では、机に足を掛ける態度の悪い生徒が居た

「アイツと同じクラスかよ…」

「壮太知ってるの?」

「え、みらい知らないの?あの人、かなり態度が悪いので有名なんだよ」

「へえ。でも、そういう風には思わないけど」

みらいはその態度の悪い生徒に近付いて挨拶する

「ちよみらい!」

「やめとけて!」

「おはよう!翼君!」

「え?」

名前を呼ばれた生徒——翼はみらいの挨拶に反応して体勢を整える

「みらい、お前この学校の生徒だったのか?」

「翼君こそ!こつちでも宜しくね!」

「待て待てみらい!知り合いなの!」

「知り合いって言うか、春休みの時によく一緒に居たと言いますか」

「友達か?」

「うん!まゆみと壮太!」

翼は立ち上がり挨拶する

「翼だ」

「え、壮太」

「まゆみ…」

「何か怯えてないか？」

「あんな座り方してたら誰でも怖がるよ。あと、行儀が悪いよ」  
「…次から気を付ける」

素直に注意を受けた翼にまゆみと壮太が驚く

「み、みらいお前！何か弱みでも握ってるのか!？」

「みらい、恐ろしい子!!」

「え、普通に友達になっただけだけどなく」

そんな団欒をしていると、教室に先生の「高木」が入って来た

「はいはい着席！ほら、入って」

高木の後に、転校生が入室した。

その転校生には、翼とみらいのよく知る人物だった

「リコ、同じクラスなんだ!」

「二年生からこの学校に来た留学生の…苗字なんだったつけ？」

「苗字ですか？『十六夜』です！十六夜リコです。宜しく願いします」

「はあああ!?!」

その挨拶に翼が大きく反応し、席から立ち上がった

「何お前!」

「何よ?」

「おい問題児の…ああ、そういうえはお前も同じだったな」

「え?同じ?」

みらいとリコは頭にクエスチョンマークが浮かび上がる

「実はあの問題児も『十六夜』って苗字なんだ。十六夜翼だ」

「えええええ!!!」

「つ、翼君そうなの!?!」

「あ、ああ…」

みらいは驚きながらもキラキラとした目で見られ、リコは開いた口

が塞がらないの表情をしていた

その時遅れて教室の扉が開かれた。

どうやら遅刻して来た女の子だ

「はあ…はあ…」

「遅いぞ」

「すみません。ほうきが飛んでて！」

「ほうき？」

「ウチの生徒が空を飛んでたんです！」

その女の子の発言に、みらいとリコはギクリとして冷や汗をかき  
けれど不幸中の幸い、誰かまでは判断出来ず正体はバレなかった  
ようやくその話も落ち着いたかと思いきや

「あー!!熊のぬいぐるみが走った!妖精が飛んだ!」

「ッ!?!」

翼とみらいが振り返ると僅かだが、教室の外に出て行くモフルンと  
はーちゃんの背中が見えた

「熊のぬいぐるみに」

「妖精って…」

二人は教卓の前に居たりコに視線を向けると、リコはその通りと言  
わんばかりに頷いていた

／／／／／／／／

学校のグラウンドの端っこ。そこでモフルンとはーちゃんが走って  
いた

「やっと学校に来られたモフ！」

「はー！」

「みらいが言ってた通りモフ!学校には沢山の友達が居て、ワクワク  
で楽しいモフ！」

その時、モフルンの鼻が匂いを拾った

「甘い匂いがするモフ！」

その匂いを辿って行くと、中庭の方へ出た

その中庭の中心に、昨日探していた物が落ちていた

「リンクルストーンモフ！」

『ゲゲ、見つけた！』

『フフ、モフ子！はー子！』

空からゲゲとフフが降り立った

「ゲゲとフフモフ！二人も学校に来たかったモフ？」

『ゲゲ、オレ達はお前達二人のお守りを頼まれたんだ』

『フフ、早く帰るわよ』

「はー！はー！」

『フフ？』

フフが連れて帰ろうとするが、はーちゃんは二人にリンクルストーンが目の前にある事を教える

『フフ、リンクルストーン？』

「はー！」

ゲゲとフフを引っ張って、リンクルストーンを取りに行こうとする『ゲゲゲ、分かった分かった！ゲ、オレとフフが取ってくるから待ってろ』

けれどその時、モフルン達とは離れた別の場所で大きな地響きがあった

そこには、ガメッツが降り立っていた。ガメッツもリンクルストーンの存在に気付いていた

『ゲゲ、急いでツバサかみら坊達に知らせねえと！』

「ダメモフ！みらいの所には行けないモフ」

『フ、何でなの？』

「この世界で魔法を使ってる所を見られたらダメモフ」

ナシマホウ界で人前で魔法の使用が禁止となると、今呼びに行く訳もいかなかった

「モフルンには無理モフ……はーちゃんにはもつと無理モフ。でも……」

急いで決断しないと、ガメッツにリンクルストーン取られてしまう『ゲゲ、オレが行く』

「え？」

『ゲゲ、フフお前はモフ坊達の側に居てやれ』

「待ってモフ！」

モフルンの言葉も聞かず、ゲゲはリンクルストーンを取りに行った  
そしてなんとか、滑り込みでリンクルストーンを横から奪い取る事  
に成功した

『ゲゲ、取れた！』

「小癪な。我に寄越さぬか」

『ゲ、モフ坊受け取れ！』

ゲゲはリンクルストーンをモフルンに投げ渡した

「モフ！」

モフルンは上手くキャッチして、はーちゃんと共に逃げ出した

『フフ、モフ子！はー子！』

「モフ！」

「はー!？」

フフがモフルンの背中に引っ付いて空を飛ぶ翼となり、はーちゃん  
も一緒に抱えて学校の外へ逃げ出した

『ゲゲ！』

ゲゲもそれを見て後を追いつけた

「ほう…：我に挑もうというのか？誰であろうと手加減はせぬぞ！」

「魔法入りました！出でよヨクボール！」

掲示板と桜の木で生み出されたヨクボールは、飛行機に似た姿をし  
て、空を飛んで逃げるモフルン達を追い掛ける

「ヨクボール！」

ヨクボールの風で、モフルン達は吹き飛ばされて地面へ落ちてし  
まった

そして落ちた先にはガメツツが立ちはだかった

「モフー!!」

「フン、他愛もない」

とうとうモフルンがガメッツに捕まってしまった

『フフ、モフ子!』

「邪魔だ!」

『フツ!』

薙ぎ払われた腕がフフに直撃し、木の方へ叩き付けられた

『ゲ、はー坊は逃げてこの事を伝えるんだ!』

「はー…」

「はーちゃん行くモフ!」

モフルンの一声が一押しとなり、はーちゃんは泣きながらも逃げて行った

「モフー…」

『ゲゲ、モフ坊!』

ゲゲは自分の体から煉魔之刀剣れんまのとうけんを取り出して、ガメッツに立ち向かう

『ゲゲ!食らえ!』

「フン!」

しかし、煉魔之刀剣を最も容易く受け止めた

(ゲゲ、やっぱりツバサが居ないとまともな力が出せねえ!)

「今は悪魔に構ってる暇など無い!」

『ゲバツ!』

煉魔之刀剣から手を離し、硬い拳がゲゲに一撃を与えた

「ゲゲ!モフツ…!」

「モフルン!!」

ガメッツが力付くでリンクルストーンを奪う時、みらいの声があった

はーちゃんが翼達を此処へ呼んだのだ

「モフルンを離して!」

「ヨクバール!」

「伏せろ!」

翼が二人の頭を掴んで下げさせる。モフルンの所へ行きたくても、

ヨクバールが邪魔してこれ以上先へ進めない

「さあ、とつととリンクルストーンを——」



「ダメモフ！学校は、ワクワクで楽しい所モフ。三人の邪魔しちや——ダメモフー!!」

モフルンの気持ちに応え、持っていたリンクルストーンが黄色に光り輝いた

ガメッツも思わず手を離してしまう

「トパーズ』、ワクワクのリンクルストーンモフ！」

『ゲゲ、ツバサ！』

「みらい！リコ！」

モフルンはリンクルストーン力でみらい達の元へ、ゲゲはボロボロの体を引きずって翼の元へ戻る

「キュアアップ・ラパパ！」

「トパーズ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀剣——侵食率25%！」

「トパーズのプリキュア モフ！」

他のカラフルスタイルと違い、トパーズスタイルとなった二人の周りには、二つずつ光の球が浮遊していた

「ヨクバール！」

ミラクルとマジカルは高くジャンプし、翼も高く飛翔してヨクバールの突進を避けた

しかし、サファイアスタイルと違って自由に空を動き回れない。

ガメッツもそれを知っており、ヨクバールに指示を飛ばして追撃する

「ヨクボール！」

「ッ！」

ヨクボールから放たれたビームを二人は腕をクロスして防御する時、光の玉が変化して盾となり攻撃を防いだ

「あれがトパーズの力モフ！」

「随分とトリツキーだな」

しかし空も飛べない二人は落下していく。だが、またも光の玉が合わさって変化し、トランポリンの様に丸くなって二人の落下を受け止める

そしてそのまま大きく跳ばせる

「ッ！」

マジカルは光の玉をブーメランと変えて投げ飛ばす

「ハアッ！」

「ヨクボール！」

けれどもヨクボールは、体を逸らして簡単に避ける

あらゆる方向へ飛んで行くがブーメランの形状上、投げては戻ってミラクルの元へ来る

「フッ！」

そのブーメランを掴みハンマーに形状変化させた。更に自分が持つ光の玉を合わせて、大きさを倍にする

「これで、どうだ!!」

振り下げるハンマーがヨクボールを捉え、地面へ押し潰した

「怯むな行けヨクボール！」

「ヨクボールルル！」

少々ヤケになったか、ビームを乱射して来る

「最近こんなばっかだ!!」

翼はミラクルとマジカルの前に立ち、降り注ぐビームを打ち消す

「モフ!？」

しかし流れ弾がモフルンとはーちゃんへ

「モフルン!？」

「はーちゃん!？」

直撃したと思った

土煙りが晴れると、はーちゃんが謎のシールドを張ってモフルンを守っていた

「モフルンとはーちゃんをイジメないで!!」

「リンクルステッキ!」

「トパーズ!」

「金色の希望よ! 私たちの手に!」

「フルフルリンクル!」

「プリキュア・トパーズ・エスペランサ!」



「どうして学校に来てたの?」

「勝手に来てごめんモフ…」

「はー! はー! はー!」

はーちゃんが何か訴えようとする途中、体が大きく光輝いて変化をもたらした

「え〜!」

「また大きくなった!」

「こんなにも早く成長するものか!」

成長したのは見た目だけではなかった

「みらい:リコ:翼:、モフルンは、一人で頑張ったの。三人の学校、邪魔しないように:でも、やっぱりモフルンもはーちゃんも、ゲゲもフフも三人と一緒にいいの!」

『ゲ、ゲ?』

(フフ、ワタシ達まで巻き込まれてる…)

「学校も、一緒にいいの!」

そんな可愛く言うはーちゃんに、ゲゲもフフもこれ以上は何も思わなかった。

悪魔や天使である自分達にも、同じ様に接してくれてるだけでもありがたいのだ

「モフルン、わたし達の為にありがとう」

「はーちゃんもありがとう」

「明日からはちゃんと隠れててね見つかったら大変」

「はーちゃんもね」

「勿論！」

みらいとリコは、ゲゲとフフに向き直る

「ゲゲもフフもね」

「翼、ちゃんと面倒見なさいよ」

「はあ…」

「皆んなで学校に通えるなんてワクワクもんだよ！」

「さて、動こうかな」

学校から遠く離れた場所

そこでナギは翼達を観察していた

## 第1話 マンマ・ミーア

トパーズを手に入れてからまだ間もない時間

翼達は始業式を終えてからは放課後となっていた

「じゃあ翼君、わたし達こっちだから!」

「ああ、気を付けて帰れよ。それとリコ!」

「何よ。まだ苗字について何か言うつもり?」

「…また明日な」

そう言つて翼は立ち去った

「じゃあ帰ろっかリコ……リコ?」

別に当たり障りのない別れの挨拶をただけ。なのにリコは、それを言われてからずっと翼の方を見ていた

「リコ?」

「え、何?」

「ずっと翼君を見てるよ。もしかして、いつもより優しくされて嬉しかったとか?」

「そ、そんな訳!」

翼は基本リコには挨拶はしない。したとしても、暴言などを混ぜて言う為リコも対して相手にはしなかった。

しかし今回は何故か初めてしてくれた

「明日雪でも降るんじゃないかしら……?」

「わたしとしては、早くお互い素直になつたらいいな~と思うよ」

「これが素直です~! 早く帰るわよ!」

「あ、翼君に一つ言い忘れてたんだ! ちよつと行つてくるね~!」

「ちよつとみらい!」

『ゲゲ、珍しいなツバサがリコ坊に挨拶するんなんて』

「偶にしてるだろ?」

『フフ、暴言を混ぜる挨拶は聞いた事ないけどね』

『ゲゲ、それに——』

ゲゲとフフは翼の体の中へ入り、かと思つたらまたすぐに出て来た。

二人は何やらニヤけていた

『ゲゲゲ、素直じゃねえなあ』

『フフフ、嫌よ嫌よも好きの内なんて』

「はあ？何言つてんだよ？」

翼が首を傾げると突然後ろから、誰かが抱きついて来た

「翼君！」

「ビックリした〜！何だよみらい。リコと一緒に帰つたんじゃないのか？」

「翼君に言いたい事があつて〜！」

みらいは、今度は正面から抱きしめて口を耳元まで近付ける

「翼君にお願いがあるの。大事な」

喋る毎に耳に息が吹き掛かり、むず痒い気持ちが大きくなる

翼は普段、女の子と接する機会が殆ど無い為この距離感に少しばかり緊張もする

リコ以外

特にみらいとならば話は別だ。まだ幼なげな姿が時折り翼の心をときめかす

リコと違つて

そんな気持ちが顔に出ない様、細心の注意を払って平常心を心掛ける

「あのね、翼君にね——

——死んで欲しいの」

その時、翼の腹に激痛と焼かれた様な感覚に襲われる  
「え——」

突然の事で理解が追い付かない  
崩れ落ちる中でその目で見ると

自分の腹から何かに深く刺された痕がある

みらいの手には血塗られた包丁が握られてある。

その血は翼の腹を刺したものと断言出来る

「大変翼君!!」

口に手を添えてわざとらしく驚いた表情をする。

口角が上がっている

手を添えて隠してるが、頬の形からも見てきつとみらいは翼を見て  
笑ってる

「ねえ翼君大丈夫? ねえねえ!!」

襟を掴んで逃げられない様にし、何度も何度も翼の腹部に包丁を突き刺す

刺す度に血が噴き出して、みらいの制服に返り血で染める

いつの間にか、翼が座り込む地面には血溜まりが出来ていた

普通なら大量出血で意識を失っている量なのだが、何とか意識の糸を繋ぎ止めてる

「み、ら…い……」

「え、くまだ死んでないんだ。結構しぶといね翼君」

「おま、え、…あく…ま………か?」

「酷いな翼君。わたしは悪魔なんかじゃないよ。わたしは…ほら覚えてない?」

みらいの姿が歪み始める。それは次第に消え去り、その下に隠された真の姿が露わになる

津成木第一中学校の制服から魔法学校の制服へ。髪色も灰色へと変化していく

「ナギ……!」

「白魔法——チェンジ・ビギニング。ご覧の通り他の人に変身出来るの」

本当の正体はナギだった

「何で…」

「私にもやらないといけない事が出来たの。それをする上で、翼やリコ達が邪魔になるの。特に翼が」

「己の計画の為、ナギは何の躊躇いも無く翼を殺そうとしているのだ  
「取り敢えず早くトドメを——」

「翼君!!」

そこへ駆け付けたのが本物のみらいだった

「何よこれ…ナギ貴女!」

遅れて来たリコもこの惨劇に一瞬身を引いた

「今更来てももう遅いよ。それで、この有り様を見て二人はどうする?  
?」

「わ、分かんないわよそんなの…」

「なら待つてあげる。だけど本当に早くした方がいいよ。翼が保たないから」

目の前の状況を整理する時間も無い。急いで何かしら行動しないと、目の前で人が死ぬ

友達が

「リコ!!」

「ッ!!」

「キュアアップ・ラパパ!」

「サファイア!」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!」

変身を終えてミラクルとマジカルは、その拳をナギにぶつける



真正面からの攻撃などナギには通じない。素手ではなく、グリモワールを使つて防御する。

すぐさまミラクルの足が出るが、ナギはそれを空に飛んで避ける。攻撃は避けられたが翼から引き離す事が出来た

「マジカル、ここはわたしに任せて翼君を！」

「気を付けるのよ」

マジカルが急いで翼の腹部を両手で抑えて、出血を止めようとする  
「マジカル…っ、俺の事はいい、から！ミラクルと…一緒に…」

「ダメよ！そんなのダメ！今手を離れたら本当に何も救えない！貴方は黙って助けられなさいよ!!」

「うるせえ!!」

マジカルを退かせ、煉魔之刀剣れんまのとうけんを取り出した

「い、いいかよく聞け…っ、俺達は、追い込まれてる…ぜ、全員が一丸となつてやらねえと…くっ…ダメだ…」

「でもその傷じゃ…」

「このままじゃミラクルも危ない！それでもお前はいいのか!？」

翼は今、自分の事よりミラクルとマジカルの事で頭がいっぱいだ

この場面をどう切り抜けるか。それは、全員が一丸となつてやるしか方法がないからだ。

その上、ナギは本気で殺しに掛かつて来てる

下手をすればミラクルも、そして友達であるマジカル…リコすら手にかける

翼はそれを恐れてる

「リコ!!」

「…無茶はしないで。貴方がわたし達を思う様に、わたし達だって翼の事が心配なの。お願い」

翼は蒼白な表情で立ち上がり、煉魔之刀剣持ち、刀身に手を添える

「煉魔之刀剣——侵食率50%」

これまで40%までだったが、遂に最大限まで侵食率を高める。

黒いアザはとうとう顔まで到達し、瞳は紅く、悪魔の象徴たる角まで生える

右半身は黒いアザに染まり完全に悪魔と化した

「俺の事が心配なら、守ってくれ」

「ええ！守ってあげるわよ!!」

二人は、上空で火花散らすミラクルとナギの元へ飛翔する

「はあ…はあ…つ、強い！」

翼がマジカルを説得してる時間はそこまで長くはなかった。寧ろ短い

なのだが、ミラクルは既に満身創痍であった

「ミラクルもう降参したら？」

「降参なんかしない！」

「だと思った。なら——死んでしまっても文句は言わないでね」

それは一瞬の事だった。ナギが目の前から消え、ミラクルの目の前に現れて首を締め上げる

「が…あ…は、…っ！」

息が出来ない

肺に酸素が送られず苦しい時間が始まる

力が入らず、意識が朦朧とする

(もう…だ、めえ……)

その時だった

ミラクルとナギの間に黒い斬撃が割り込んだ

ナギは腕が切り落とされる前にミラクルから手を離す

「ミラクル！」

マジカルが介護して倒れる体を支える

「マジカルありがとう…翼君！」

血塗れで動けない筈の翼が隣に居ることにミラクルは驚く。

無理もない。常人ならとつくに死んでもおかしくない出血をしているのだ

動けてる事自体奇跡に近い

「は、早く病院に行きたい：だから全力で行くぞ！ゲゲ、サポート頼むぞ!!」

『ゲゲ、死ぬなよ!!』

血を撒き散らしながら翼はナギへと突っ込んで行く

「白魔法——クロス・ビギニング！」

「悪魔法——因果斬り！」カルマギリ

黒い斬撃とX状のビームが衝突する。けれど、ビームがかき消され斬撃が貫通する

「ッ！」

ナギは間一髪に避け、頬を斬撃が掠める

「ハアアアアア!!」

更に斬撃に続いてミラクルとマジカルが向かって来る

「ゾーン・ビギニング！」

突き出す拳をナギは両手で受け止める

「貴女達では絶対に勝てない！そう私は断言する!!」

「そんなの！」

「やってみなくちゃ分からないわ!!」

受け止められていた手が押し戻される。

ミラクル達の気合いが力になり、ナギを押し返した

「ルビーの方が力が強かったよね？へえ〜」

グリモワールのページが開き、いつも以上に白く輝く

「この魔力……！」

「ま、マジカル……」

今までとは桁違いの魔力がナギとグリモワールから放出される。

ヨクバールや悪魔とは段違い

ミラクルも身を引いてしまい、マジカルを横目に見る

「引いたらダメよ！」

マジカルはリンクルステッキを構える

「リンクル・アクアマリン!!」

ステッキから放出される吹雪がナギの体を凍りつかせる

「これで…ッ!？」

しかし、体から溢れ出る魔力だけでナギを凍らせた氷が砕け散った  
「白魔法——カムイ・ビギニング!!」

魔力がナギの体を包み込み、甲冑としてその身に纏う。  
手には白い剣が握られていた

「もう手加減は出来ないわよ!!」

一瞬で目の前に接近した。振り翳す剣に反応は出来ない  
だがそれよりも早く翼が剣を受け止めた

「グッ!!」

受け止めたのはいいが、傷口から血が流れ出る

「悪魔の力を最大限引き出してその程度!?!アハハハ!それでよくこれまで戦えたわね!!」

翼が引き受けてる間に、ミラクルとマジカルが左右から挟み込む

「ハッ!」

「フッ!」

二人の攻撃が直撃した。が、全くビクともしなかった

「クロス・ビギニング!」

翼の目の前で手を向け、至近距離で魔術を使い攻撃した。

X状のビームが翼を呑み込み地面へ叩き落とした

「いつまでそうしてるつもり?」

ナギは体を回転させてミラクル達を振り解き、足を掴んで投げ捨てる

「白魔法——」

ナギの周りに赤、青、緑、黄色の魔法が現れる

「グラント・ビギニング!!」

四つの魔法陣それぞれから、龍を模した火、水、風、土の属性を纏った魔術が放たれる

(避けられない!!)

四体の龍が二人を呑み込み、そのまま翼が落ちた近くまで引き摺り、地面へ叩き付けた

「ミラクル!マジカル!翼!」

モフルンが急いで駆け付ける

土煙りの中、三人がピクリともせず倒れていた。  
しかし、意識だけはハッキリしていた

(この…野郎…！)

視線を上げれば、上空でナギが此方を見て無情な表情をしていた  
何を思っているのか定かではない

(ゲゲ…ゲ、悪魔の力が全く通じない…このままだと確実に負ける…)  
ゲゲも予想外の強さを見せつけられた。魔法界で襲って来たあの  
悪魔よりも上

実力を隠してたに違いない  
ナギがゆっくりと近づいて来る。

悪魔の力が通用しないとなると残る選択肢は一つ

「ミラクル…起きろ！マジカルも目を覚ませ！」

這い蹲りながらもミラクルとマジカルを起こそうとする

「う…ん…う…」

「あ…あ…っ」

呻き声を上げてはいる。意識はあるがもう戦えない

『ゲ、ツバサ、勝ち筋が見つからねえ…』

「分かってる…けれど、だからって——負けていい理由にはなら  
ねえ!!」

その時、夕方の空から突然雷がナギへと落ちた

誰も予想しない天気に一同目を見張る

「何だ…雲はあるがこんな晴れた空に雷なんて…」

『フフ、ワタシの魔法よ』

翼の頭の上にひよっこりと乗るフフの仕業だった

『フフ、ワタシの魔法「天使魔法・超スーパードナチュラル自然」。天使が持つ特別な力「浄  
化」。フフフ、これが、天使が最強たる所以の力』

「やってくれたわね天使！」

フフは純白の刀を取り出して翼に見せつける

『フフ、大天使の力を凝縮した特別な刀。この刀を、ワタシの天使の力  
が欲しいなら受け入れなさい。フフ、天使は同意がなければ器に出来  
ない。少し早いけど緊急事態だから手を貸すわ。フフ、どうする?』

「同意、か…なら答えは決まってる。受け入れる、同意する！答えは『YES』だ!!」

翼は煉魔之刀剣をゲゲに返して悪魔の力と引き換えに、フフの刀を左手で掴む

「グッ…ッ!!」

煉魔之刀剣とは違い、手に取った左手は白いアザに侵食され腕、身体、足、首へと流れ、顔の左側まで侵食した

天使の力を行使した際に変化したのはそれだけではない。

左手は護る為の鎧の籠手、瞳は青く光り、左半身の背中から天使の翼を広げ、頭上には天使と思わせる光の輪が半分だけ形成されていた

「だいてんよくのつるぎ大天翼之剣——侵食率50%!!」

「…それが、天使の力」

「つば、さ…くん…」

「翼……」

「俺は絶対負けねえ！みらいとリコ、皆んなを護る!!」



もう日が暮れる時間帯の夕空で、二つの閃光が激しくぶつかり合っていた

「クロス・ビギニング！」

「させるか!!」

翼が指を上へ動かすと、一部地面が飛び出して盾となって魔術の攻撃を防いだ

「次はこれだ！」

今度は激しい落雷がナギを襲った

「がっ!？」

「ハアッ!!」

大天翼之剣を薙ぎ払うと炎と風が吹き、ナギの周りを囲み炎の渦と

化した

『フフ、ツバサを侮ったわね』

『もう一度地面をぶつけてやるよ!』

『フフ、街中という事を忘れてるわよ』

『なら場所を変える!』

翼が接近し、大天翼之剣とグリモワールで鏢迫り合いが起こる

そのまま力任せに押し続け、町外れの山まで移動する

『フフ、ツバサ、ここなら思う存分力を出せるわ!』

鏢迫り合いから蹴りを入れてナギとの距離を取った

『フフフ!天使の力とくと見せてあげる!!』

大天翼之剣の刀身に火、水、風、土の四元素が集まる

土で刀身を大剣並みの大きさを形成し、刃を鋭い水で切れ味を増し、刀身周りに風のコーティング、そして火で燃え上がらせる

天使特有の力である浄化も加わり、闇に属する者すら消滅させる刀となった

更に高く飛翔し、そこら落下する勢いを乗せて一気に振り翳す

「天使魔法!!」

そこから風の力で加速に加え、火の力で刀身に触れる大気は細かく爆発を起こし破壊力を上げる

「天使魔法——エレメンタルブレイカー!!」

膨大な四元素と浄化の力を纏わた、一撃必殺の刃を振り抜く  
ナギは何もせずそのまま受け入れた

直撃した瞬間、巨大な爆発と共に津成木町全体に爆発音が轟き渡つた

「どうだ!!」

手応えは確実にあった

翼自身少し後悔はあった。しかし、これ以上過ちを犯せない為にはこうするしか方法が無かった

『フフ、ツバサ、ナギという子には残念だけど……ツ!』

「嘘……だろ?」

爆発で起きた煙が晴れると、そこには無傷で此方を見るナギの姿が

あった

「少しヒヤつとしたけど、案外大した事ないね」

土埃を払いながら余裕の表情をしていた

「魔力の力だけで防げるなんてね」

よく見ると、ナギの体は淡く光っていた。その光は魔力によるもの  
ナギは体に魔力の層で包み込ませ、純粋な魔力でエレメンタルブレ  
イカーを受け切ったのだ

普通の魔法つかいでは有り得ない芸当。魔力のみで防御したとな  
ると、膨大な魔力が必要となる

ナギの様子を見る限りでは、汗どころから息すら乱れていない。

到底計り知れぬ量の魔力を保持してる証拠

「グウ…」

翼にも限界が訪れる。エレメンタルブレイカーを放つのに全てを  
込めたのだ。魔力切れを起こしてる

それに傷口にから滴る出血

「終わりよ!!」

ナギが直接攻撃しようとした時、翼を抱いてナギの攻撃を避ける者  
が現れた

「翼大丈夫!?!」

「マジカル、それにミラクルも…!」

「諦めないで!わたし達三人なら大丈夫だから!」

「だがどうする?フフの天使魔法も通じない」

「あら?いつも強気な翼が弱音を吐くなんて」

言い返したい気持ちがあるが、実際マジカルの言う通りだ。此方の  
持つ全ての手段を持ってしても通用しなかった

「わたし達がやってみせる。翼は陽動をお願い」

「なっ?!俺が陽動だ?!ふざけん…でッ!」

文句を言う翼のおでこに、マジカルは指を弾いた

「わたしが守るって言ったでしょ?それにその傷、もう限界に近い筈」

「…失敗したら即逃げるぞ」

「決まりね」



ミラクルとマジカルは左右に散開して、翼は真正面から立ち向かって行った

『フフ、残りの魔力を全て込めるわよ!』

刀身に四元素と浄化の力を纏わせ巨大な刀身を作り上げる

「エレメンタルブレイカー!」

今度は遠距離から刀身を飛ばして放った

「その程度無駄よ!」

魔力を帯びた腕でエレメンタルブレイカーを弾き飛ばした

「今だ!!」

ナギの後方、青い光と魔法陣が展開されていた

「フルフルリンクル!」

「プリキユア ! サファイア・スマーティッシュ!」

水の大激流が発せられた。視覚も不意を突いての魔法。

とてもじゃないが防御する前に攻撃は直撃する

そう確信した

「タイミングもバツチリ。だけど」

グリモワールのページが開き、いつもとは違う輝きを放つ

今更何をすると思うが、直撃する寸前でミラクルとマジカルの魔法が打

ち消された

「え?」

魔力の層で防御した形跡も無い。かと言ってそれ以外の方法で防御した動作も無かった

あるとすればグリモワールが光った程度

ミラクル達に背を向けていたナギが振り返る

「思わず使っちゃったじゃない」

いつものグリモワールなら魔術を使う時白く輝いていた。なのに今は黒く光っていた

「前に言ったよね、白魔法は『守る為の力』って。ゲゲが言った通り守る力があるなら、その逆である『倒す為の力』もある。それがこの黒

魔法」

翼やミラクル達は、背筋が凍る程の威圧感を感じた

「黒魔法——ゼロ・エンド。私の周囲に、魔法を打ち消す目に見えない結界を張ったの。どんな強力な魔法だろうと意味を成さない」

そんなデタラメな事があっていいのかと思いたい気持ちが入み上がる

そして痛感する。此方がどんなに手を尽くしても勝てないと、その場に居る者全員が感じた

「黒魔法——サンズ・エンド」

一瞬で翼の体が切り刻まれた

「あ……」

傷は増え、出血量は尋常じゃない。意識が朦朧としながら、山の中へと消えて行った

「翼!!」

「黒魔法——デリート・エンド」

ミラクルとマジカルの上に巨大な黒い龍の左腕を出現し、巨大な水晶を持っていた

龍の手は水晶から手を離しミラクルとマジカルへと手の平を向けて、巨大な魔法陣を展開した

「黒魔法——ヘル・エンド」

魔法陣から黒炎が放たれミラクルとマジカルを呑み込み、炎が地面へ到達すると爆発が起き周囲を一瞬で焼け野原にした

焼け野原の中心には、変身が解けて無様に倒れるみらいとリコの姿  
戦闘不能と見做したナギは、翼が落ちて行った場所へ移動した

「待ち、なさい……!」

リコは無理にでも体を起こして立ち上がる

「みらい……」

横で倒れるみらいを見てもう立ち上がれないと感じた

「みらい……リコ……!」

避難しただろうモフルンが二人へ駆け付ける

「良かったわ……モフルンが無事で……」

モフルンの無事が確認が出来て安堵する。そしてリコは歩き出した

「何処に行くモフ!？」

「決まってるじゃない…翼の所に、行かなくちゃ…!」

「そんな体じゃ無理モフ!!」

「でも…あんな弱気な翼は見た事ないのよ」

足を引きずりながらも歩みは止めない

自分でも何故ここまでするのか分からない

普段から犬猿の仲の関係なのに、ここまで心配するなんて馬鹿みたいに思う。

けれどそうさせているのは、「守ってくれ」と言われたから

みらいにならともかく、リコには絶対言わない台詞

あの時は勢いよく返事を返したが、今になって思う。

不安や恐怖から出る言葉は、時として頼りたくない者にでもつい溢してしまう本音

(居たー)

草木を掻き分けた先には、木に横たわっている翼と、その様子を見ているゲゲとフフが居た

周囲を確認してもナギの姿は見えない。翼を見失ってまだ来てないのか、それともあのまま帰っていたのか

それとも

「ゲゲ、フフ、翼は?」

『『……』』

「二人共?」

何も答えない二人に首を傾げながらも、翼に近付き安否を確認する  
「翼起きなさいよ。翼」

揺すっても反応が無い。嫌な予感がしながらも何度も呼び掛ける

「翼、冗談はやめてよ。本当は狸寝入りしてるだけなんですよ…?」

『フ、リコ子、あのねツバサは…』

「そんな訳ないわよ…だって、だってさつきまで！」  
『ゲ、人間の最期つてのは呆気ないもんだ。喉を貫かれて即死だもんな』

翼の喉を確認すると、確かに何か鋭い物で貫かれた跡がある。

それがトドメとなったのが原因

「なんで…なんでなのよお……」

亡骸の前でリコは泣くことしない今は出来なかった

## 第12話 三ヶ月の命

みらいとリコは自室に籠っていた

自分達の無力さが招いた結果が、一人の友達を失った

ゲゲ、フフ、モフルン、はーちゃんは集まってどう元気付けるか考えていた

「みらいとリコ、元気が無い…」

『フ、仕方ないわよ。気持ちはワタシ達も同じだから』

「これからどうすれば良いモフ?」

『ゲゲ、元気付けるしかないだろ。取り敢えず、オレとはー坊はリコ坊を。フフとモフ坊はみら坊を頼む』

ゲゲははーちゃんと一緒に部屋に入ったが、リコは部屋の隅っこで重苦しく座っていた

「リコ…」

「守ってあげるって、言ったのに…何も…何も出来なかった…」

『ゲゲ、リコ坊は悪くねえよ』

「……」

ゲゲとはーちゃんが声を掛けても、余計引き籠もってしまう

『ゲゲ、はー坊、少しみら坊の様子を見てくれねえか?』

「うん…」

はーちゃんが出て行った事で、リコとゲゲの二人きりってとなった

『ゲゲ、どれだけ悲しんでも、どれだけ後悔しても意味無い。死んだ人間は死んだままだ!』

「…貴女、仮にも一緒に過ごしたのよ?何とも思っていないの!」

『ゲゲ、どんなに凄かろうと死ぬ時は、死ぬんだ!!』

「…やっぱり悪魔ね」

『ゲゲ、悪魔だ。悪魔だから——一つだけ生き返らせる方法を知ってる』

それを聞いたリコは反応する。

普通死んだ人が生き返るなんて事は無い。魔法を使っても無理なものは無理

しかし悪魔であるゲゲが、たった一つだけ死者を生き返らせる方法があると言ったのだ

「そ、それ本当なの!？」

『ゲゲゲ、本当だ。けどな、オススメはしない』

「何でよ…その方法があるなら教えて!!」

『ゲゲ、まあそう言うなら——』

「そのやり方…」

全ての説明を聞いたリコの表情は戸惑っていた

『ゲゲ、この方法はリコ坊、お前だから教えたんだ』

「わたし、だから?」

『ゲゲ、みら坊に言ったとして考えられる行動は限られる。迷わず実行するだろう。だがリコ坊は違う。お前は頭が良いからこんな状況でも正常な判断をすることを思ったからだ』

その言い方に少し違和感を感じた。まるで、その方法をやって欲しくないみたいなの

『ゲゲゲ、説明はした。後はお前が決めるんだなりリコ坊』

「わたしは…：翼の事が嫌いよ。でも、それでも友達なの」

リコはほうきを持ってゲゲを肩に乗せる

そしてそのまま窓から飛び降りて夜の空へ舞い上がった

／／／／／／／／

ほうきで夜の散歩をする事一時間程経過した。

リコは目的の場所へ辿り着きその場に着地した

その場所とはある十字路の中心

『ゲゲゲ、良い場所を見つけたな。早速取り掛かるぞ』

リコはキュアアップ・ラパパと魔法の言葉を唱え、十字路の中心に穴を掘った

「ねえ、これで本当に大丈夫なの?悪魔は来るの?」

『ゲゲ、条件は全て揃ってる。それに呼び出すだけじゃない。ゲ、十字路は契約を結ぶ場所。呼び出す時には自分の写真を入れて埋める』

リコは言われた通り、魔法で自分の写真を作り、それをケースに入れて地面に埋める

「……出て来ないわね」

「失礼ね居るわよ」

「ッ!？」

リコの背後、いつの間にか大人の女性が立っていた

「貴女は悪魔よね？」

「そう。それに貴女の事も全て知ってるわリコ。伝説の魔法つかいプリキュアだって事も。私を呼び出した理由もね」

女性の目が赤く染まった。黒い目の悪魔とは違い、十字路の悪魔は目が赤いのだ

「なら話が早いわ。翼を生き返らせて」

「悪魔の取り引き、その代償が何なのか理解して言ってるの？ 処女の魔法つかいさん」

「……ええ知ってるわよ」

間に触る言い方に腹は立つが、下手に怒って取り引きが出来なくなってしまうば全てが水の泡

それだけは絶対に避けたい

「わたしが払うのは——」

部屋での会話を思い出す

『——悪魔との契約って以外とあっさりしてるのね』

『——ゲゲ、本番はここから先だ。何事も取り引きには何かを犠牲にしなければ成立しない』

『——じゃあ、悪魔の欲しいものをあげればいいのかよ。やっぱりあっさりしてる』

『——ゲゲ、そこが問題だ。先ず、悪魔の取り引きに「フェア」なんて言葉は無い。どんなに頑張っても得をするのは悪魔達だ。これだけは変えられない』

『……いい加減教えなさいよ。遠回しに言っただけよ』

『——ゲゲ、リコ坊が払わないといけない代償は文字通り——』

”魂”。文字通り自分の命よ」

「随分と勉強したのね。なら交渉に入りましょうか」

リコはゲゲに一度視線を向けて、お互いに頷き交渉を始める

「10年で——」

「それじゃあ赤字よ」

「……」

いきなり出鼻を挫かれた

当初の予定では10年で手を打とうとしたが、一瞬で受け流された  
しかしこれは想定内

『——ゲゲ、内容によるが基本10年で手を打ってくれるが、死者を生き返らせるんだ。かなり削っていかないと思ってくれない。だが、削り過ぎも気を付けろよ』

「なら8年」

「……1930年、ロバート・ジョンソンと言う男と取り引きしたわ。内容はアコースティック・ギター一本で有名になれる様に」

クロスロード伝説。それはオカルトマニアの間や音楽界でも有名とされてる伝説

十字路で悪魔と契約して、その引き換えにテクニクを身につけた。

そう言い伝えられていたが、どうやらそれは本当の様だ

「その時取り引きしたのは確か……8年」

「……ご、5年」

「あく思い出した。魔法界で悪魔を一人殺したみたいね」

「さ、3年……」

(ゲゲ、マズい)

完全に悪魔のペースに乗せられた。徐々に年数が下がっていく。



無意識の恐怖か、リコの唇が震えていた

これ以上の吊り下げは割りに合わない

悪魔は未だにニヤけている。この状況を遊んで楽しんでいるのだ  
「じ、じゃあ…その…えっと…」

リコもこれ以上は危険だと感じてはいる。

いるが、口が止まらない

「一、年は…あ?」

「もう一声」

心臓が高鳴る音が鮮明に聴こえる

呼吸すらままならない。それでもリコは止まらない

『ゲゲーもうやめろー!これ以上は——』

「外野は黙ってなさい。この取り引きは彼女と私の間でしてるのよ」

悪魔はリコへ近付き、喉元から唇へと指をなぞり始めた

「いいの?死んだ人間を生き返らすには悪魔が必要。これを逃したら  
彼は戻って来ないわよ」

「あ…あ、い…や、あ……」

自分の命と翼の命を天秤に掛けてるこの状況。リコ自身も命が欲しいに決まってる

その最後の一声を捻り出させる為に悪魔は耳打ちで提案した

「三ヶ月なら…いいわよ」

「三ヶ月……」

「ええ三ヶ月。夏まではちゃんと待ってあげるわよ」

「それ…なら…」

『ゲゲ、やめ——』

「はい取り引き成立〜!」

悪魔は指を鳴らして契約を成立させた

「これで貴方の大切な人は生き返った訳で、残りの人生を楽しんでね  
〜」

それだけ言うと悪魔は消え去った

『ゲゲ、三ヶ月なんてあつという間だ!!』

「いいの……翼の所へ行きましよう」

／／／／／／／／／／

「ッ!!!」

深く息を吸い込み翼は勢いよく起き上がった

「はあ…はあ…あ、れ？」

自分の体を弄り傷を確認する。血が止まっていれば、傷口も全部綺麗に塞がっている

「何か治療した形跡も無い何で…あ」

そして今度は喉を触る。貫かれた筈の喉までも元に戻っている

疑問だらけの事に困惑していると、林の中から誰か歩いて来た

「翼、目が覚めたのね」

「リコ…」

「ごめんなさい。目が覚めるまで動かすのは難しかったから」

「いやそれよりもだ。何で生きてる？」

『ゲゲ、それはだな…』

「フフよ！フフが治してくれたのよ！」

ゲゲが何か言う前にリコが遮って話した

嘘について

「そうか。まあ一先ず何とかな。さて傷も治ったんなら帰るか」

「待って、帰るならみらいにも知らせないと。あの子も心配してるから」

リコはほうきに跨り後ろに乗る様に促す

「俺はお前のほうきに乗るの嫌なんだが。それに絶対乗らせないんじゃないかったのか？」

「つべこべ言っていないで乗りなさい!!」

何故か怒鳴られて、仕方なく翼はほうきに乗り、朝日奈宅へと飛んで行った

『フフ…』

「みらい…：モフ！みらい窓の外見るモフ！」

部屋で蹲るみらいは、少し窓の外を見ると暗かった表情が段々と明るくなっていく

「翼君!!」

窓を開け、ベランダに降り立った翼を力強く抱きしめた

「良かった！本当に良かったよお〜!!」

『フフ、これは一体どういう…』

「フフありがとな。お前が治したんだってな」

『フ!?フ：それは良かった。体はもう大丈夫の様ね』

フフはチラリとリコとゲゲの方へ目を向ける

それに気付いたのか二人は目を背けた

『フフ、時間も時間だから帰った方がいい。フフ、ワタシはゲゲと皆んなで少し話をしたいからツバサは先に帰ってなさい』

「俺だけかよ!?まあいいか。確かにこんな時間だし、お袋にも迷惑掛けるしな」

みらいに下まで下ろしてもらい、翼が帰って行くのを確認してから

フフは部屋の中へ呼び集める

フフは険しい表情をして怒鳴り散らした

『フフ！やったわねリコ子!!自分が何をしたか分かってるわよね?』

「…何の事?」

『フフ、惚けても無駄よ。貴女が悪魔を呼び出して契約した事は明らか!』

「え、リコそれ本当なの…?」

何も知らなかったみらいはリコに詰め寄り真偽を問いたです

「リコ!!」

みらいの言葉に耐え切れず、リコはどうとうその事について全部話した

「…十字路で取り引きをしたわ。翼を生き返らせる為に」

「そんな…そんな事したって翼君は嬉しくないよ!!」

『フフ、何年なの?何年で手を打ったの?』

「……三ヶ月」

『フ、呆れてものも言えないわ。三ヶ月？フ、随分と値切られたものね！』

「どういう意味モフ？」

フフは少し言い難い表情をしたがいずれ分かること。その意味をそのまま伝えた

『フフ、悪魔との契約には自分の魂が必要。つまり命。それと引き換えに取り引きをする。フフ、三ヶ月というのは、リコ子の残りの人生……寿命なの』

「三ヶ月って……！」

『フフ、死者を生き返らせるくらいなら一年のところを三ヶ月。プリキュアだって事を知られて、色々と弱みにツケ入れられたね。ゲゲが付いていながら』

「リコ、居なくなっちゃうの……？」

「何で相談してくれなかったの？わたし達友達でしょ!？」

「友達だからよ!!」

今まで我慢していたものが込み上げてくる。涙を流しながらもそれを全て曝け出す

「みらいは友達だから巻き込みたくなかった……!翼だって友達よ……もう誰も失いたくないのよ!!」

「……ゲゲ、契約を辞める事って出来ないの？」

『ゲゲ、悪魔の契約は破棄出来ない。一度契約してしまえば……』

「……」

「皆んなお願いがあるの。この事、翼には何も話さないで。言ったら絶対怒るから……」

何もかも諦め、一人の友達の為に懸けた代償は予想以上に大きくなった

リコの寿命——残り三ヶ月

## 第13話 優等生の悩み

今日から本格的に授業もあり学校が始まる。

張り切る気持ちで、わくわくな毎日が始まる登校だが、みらいもリコも何処か上の空だった

「……」

昨日の夜の出来事をまだ引っ張っているのだ

「二人共おは……どうした揃って?」

そこへ背後から翼が挨拶をしたのだが、様子のおかしい事に気付いた

「あ……全然!何も無いよ!」

「リコは?」

「ええ大丈夫よ……」

「それならいいが。何かあったら言えよ」

これ以上の追求は失礼と察し、翼は話を切り上げて二人と一緒に学校へと急ぐのだった

「おっはよ〜!」

みらいは元気良く挨拶して、翼は無言で教室へと入って行く  
そしてリコだが

「皆さん、おはようございます」

クラスメイトに頭を下げて挨拶したのだ。子供と言うより、大人の挨拶に近いものだった

席に着いてひと段落ついたのだが、リコは早速教科書を開けて読み込み始めた

「授業にはまだ早いよ」

「学校は勉強する所でしょ?授業前の予習よ予習」

「みらいおはよう!」

「おはようまゆみ!」

そこへみらいの友達である、まゆみが声を掛けてくれた

「十六夜さんもおはよう」

「ええおはよう」

リコも挨拶を返したが、すぐに教科書へと視線を向き直した  
「思ったが、十六夜さんってどっちの十六夜だ？」

「あ、そっか。翼君も苗字が十六夜だったね」

「まあ、俺は普通に名前と呼んでくれ。まゆみ」

「そう？それじゃあ改めておはよう翼」

「ん」

翼は必要最低限の挨拶を終えると同時に鞆から枕を取り出した

「何で枕…」

「あ、みらい。お前日直じゃなかったか？」

「いつけない忘れてた！」

「わたしも手伝うよ」

日直という仕事を思い出し、落書きされてる黒板を消しに行ってしまった。まゆみもその手伝いをする為、その場に残ったのは翼とリコだけとなった

「ところで何よそれは？」

上手くはぐらかしたと思っただが、やはりツツコまざる終えなかった  
「お前枕も知らないのか？」

「そういう意味じゃないわ。何で学校に枕を持って来てるのかって事よ」

「逆に寝る時以外何に使うんだ？」

「…もういいわ。何も言わない」

リコは呆れてこれ以上言う事はなく、授業が始まるまで予習に励むので合った

「では、この円錐の展開が書ける者？」

「はいー」

「じゃあ十六夜。前に出てやってみろ」

数学の授業が始まり、初めてナシマハウ界で教わる知識に触る

「出来ました!」

「正解だが…ちよつと大き過ぎるなあ〜!」

正解はしてはいるが、数字通りの図形を書き黒板からはみ出していた

「リコお…」

「春の大三角と言われる三つの星が解る人はいますか?」

「はい!」

「では十六夜さん」

次は理解で星に関する事。

これに関してはリコ大得意。星読みでは魔法界ではトップの成績を残している

間違える筈も無い問題にリコは自信満々に答えた

「ピロポラーナス、チャカチャカコナル、ピョンカドラルです!」

しかし周りの反応はイマイチだった

それもその筈、意味としては合っているがリコが言ったのは魔法界での言葉。

ナシマホウ界とではまた別の言葉なのだ

「あれ?」

「あ、あのー!リコの住んでた所での呼び方だと思えます!」

「そ、そう?じゃあ大変だけど、此方での呼び方も覚えてくださる?」

「は、はい…」

なんとかみらいの起点で変な感じにはならなかったが、自信満々だった分失敗した時の落ち込みは酷かった

リコからしたら、ただ恥ずかしい目になっただけだった

「じゃあ他には——」

「は〜い!はーちゃん解るよ!」

「ツ!」

先生の受け応えに、まさかの鞆の中で大人しくしてるはーちゃんが返事をしてしまった



これにはみらいとリコは予想外だった  
教室中、声のしたリコの方向へ注目が集まる。

またみらいがフォローしようと立ち上がるうとした時、それよりも早く一人の生徒が手を挙げた

「お、俺です…」

手を挙げたのは翼

「翼解るの？貴方普通に寝てたわよね？」

リコの言う通り翼は手を挙げるまでずっと寝ていたのだ。

それだけなら良かったが、ノートや教科書はおろか、筆箱すら出していない。

代わりに枕だけが机の上に出されている

まともに授業など聞いていないなら、到底答えられる筈なかったのだが

「アルクトウールス、スピカ、デネボラ。欧米はデネボラの代わりにレグルス」

「正解よ」

着席すると、ひそひそとみらいとリコが話し掛けた

「翼君凄い！寝てたのに！」

「ちゃんと授業は聞いている。ポンコツリコの解答が面白くて、答える時に起きていた」

「ムカつくわね〜！」

「ハッ、おやすみ」

／／／／／／／／

放課後になって、珍しくリコは一人で行動していた。

そして本屋でバレーボールの入門書を購入していた

本屋から場所を移して、河川敷でモフルンと一緒に入門書を読んでいた

「相手チームがサーブしたボールを、レシーブしてトスしてスパイク……まあとにかく、ボールを落とさずに繋いでいけばいいのね」

本屋から出る時貰った風船を使い、基礎から練習を始めた

「行くモフ〜！それ！」

「アタック！」

「ナイスモフ〜！」

” ナイス”？」

「上手くいった時、みらい達が言ってたモフ！」

「そっか！よし、モフルンもっとお願ひ！」

それから二人でスパイクの練習していると、下校中の翼がその様子を見つけた

「リコ、モフルン二人共何してるんだ？」

「バレーボールの練習よ」

「ふ〜ん」

翼も興味深く見学する事にして、階段に座って見守る事にした

「モフルン次お願ひ！」

「モフ！」

「アタツ〜ッ！」

腕を振り下げようとしたが、急に痛みを感じて肩をさする

「力入り過ぎちやっただかな…？」

「はあ…俺の前に座れ。ほぐしてやる」

リコのブレザーを脱がして肩を軽く触る

「…凝ってるな。此处とか」

「痛たた!？」

「痛みを感じるなら相当だな。痛みがあまりない様にほぐすが、少しは我慢しろよ」

「ありが…ひゃん!？」

「今言ったばかりだろ。それに変な声出すな」

「そんな事言われても…」

リコはなんとか声を押し殺しながらマッサージを受け、そして段々と眠気が襲ってくる

(あつ…これ、気持ちいい…。それに眠くなって……)

「こんなもんだろ。やり過ぎも良くないからな…リコ？」

いつの間にか、疲れが溜まっていたリコは小さな寝息をたてながら、翼に体を預ける様にして眠っていた

「リコ、寝ちゃったモフ」

「…モフルン、俺の鞆から枕出してくれないか？」

「はいモフ」

翼はリコの隣に座った後、枕を膝に置いてリコを横にしてより休みやすくした

脱いだブレザーを体に掛け、更に翼の学ランも掛けて風邪を引かない様に温める

「翼優しいモフ」

「優しい、か。何でそう思う？」

リコの髪や頬を優しく撫でながらそう呟いた

翼自身、みらいやモフルンには「ちゃんには優しくしてるが、リコに対しては言われる程までしてはない。

寧ろ嫌がる事をしている

「ヨクボールが襲つて来た時も、今日みたいにマッサージしたり寝かしたり、翼はリコに優しいモフ！」

「…優しくねえよ」

「でも、顔が笑ってるモフ！」

モフルンの言う様に確かに、リコの寝顔を見て少し微笑んでいた

「…笑ってない」

「笑ったモフ！」

「笑って…リコが起きるからこれ以上は何も言わん」

「やっぱり優しいモフ」

「ん…ん…はっ！」

リコは飛び起きて、自分が寝てた事に気づいた

「え、夕方!？」

「やっとな起きたか…」

「翼…ってどうしたのよ!？」

翼は座ったまま脚を抑えて蹲っていた

「いや、何でもない…」

「リコがずつと寝てて、翼が動けなかったから脚が痺れたモフ」

「翼が…ごめん！起こしてくれれば…」

「リコの寝顔があまりにも良かったら、起こすに起こせなかったモフ！」

「えっ／＼／」

「モフルン、そろそろお口にチャックだ」

「もぎゅ!?!」

口を塞がれてジタバタするが、これ以上変な事を言われても仕方ない為、今回ばかりは心を鬼にして離さなかった

「それとリコ」

「何…んふ!?!」

翼は、空いてるもう片方の手でリコの頬を弄り始めた

「な、何するのよー！」

「表情筋も固い。もっと柔らかくなったらどうだ？唇の様に」

「ッ／＼／」

頬を弄られながら、さりげなく唇を指で撫でられ思わずリコは頬を紅く染める

「帰るぞ」

／／／／／／／／／

その夜、みらいに誘われてほうきで夜の星を見る為散歩する事となった

夜もあり、三人共魔法学校の制服に着替えていた

「そういえばリコ、翼君をほうきに乗せる様にしたんだね」

「え、まあ…うん」

「俺は今でも嫌だ。モフルンがみらいのほうきに乗ってるから」

「そんな事言うなら振り落とすわよ?」

「ッ!」

それを聞いて翼は、リコの腰にがっしりとしがみ付いた

ほうきを飛んで、場所は翼とリコとモフルンがバレーボールを練習していた河川敷まで来た

しかし、ここまで来てあるトラブルが発生していた

「星見えないわね」

「そうだね…：さっきの話、お父さんの話ね。あ、翼君は分からないよね。えつとね——」

みらいが話してくれたのは幼い頃のちよつとした話

朝日奈家三人で天体観測した時、山でみらいが迷子になってしまった

暗い山の中をぬいぐるみのモフルンと一緒に歩き回るも、元の場所に帰れず泣いてしまった

でも、モフルンが教えてくれた。空を見上げれば満天の星空が見えてる事に

「星がすつごく綺麗だったの！暗くて怖かったけど、キラキラして温かくて、同じ夜なのにね」

「見方が変わったのね」

「そうそれ！リコも同じだと思うの。真っ直ぐ前を見るだけじゃなくて、グル〜つと周りを見たら、星空みたいにキラキラでワクワクな事がきつといっぱい見つかるよー！」

「キラキラでワクワク？」

「うん！折角一緒に居られるんだもん。魔法界と同じ様に、二人で楽しい事見つけよー！」

「楽しい事…」

「ねえ二人共、行ってみようよ雲の上まで！折角来たんだし星みたいじゃん！」

一人高く飛んで行くのに、翼とリコは呆れていた。

しかし、そういう所がみらいの良いところのひとつ

「みらいだったら…」

「ほらペガサス行け。置いて行かれるぞ」

「誰がペガサスよ」

みらいに続こうとしたが、何故か途中みらいが空中でジタバタもがいていた

「みらい!？」

何かに絡まり、ほうきを制御出来ずそのまま落下してしまった

「リコー！」

「分かっているわよ！みらい!!」

リコも急降下しながら手を伸ばしてみらいの手を掴んだ

「リコ前前!!」

「ダメ！無理！」

急降下するほうきを上昇させようと引き上げるも、距離が足りず三人共河川敷の土手にぶつかり落ちた

「もう二度とリコのほうきには乗らねえ……」

「不可抗力よ……」

「二人共ごめん。大丈夫？」

勢いよく落下はしたが、誰一人怪我をしてはいなかった

「こんな所で会うなんて、やっぱりアンタ達もエメラルド狙いだね」

声のする橋の上にはスパルダが立っていた。

みらいが落ちたのも、スパルダの糸が絡まったせい

「だがね、エメラルドはアタシの獲物。何がなんでも奪ってみせるよ！」

「魔法入りました！出でよヨクボール！」

「ヨクボール!!」

スパルダは雲と看板を使いヨクボールを生み出した

「こんな夜中に騒がないでよ！」

「みんなが起きちゃうじゃない！」

「早いとこ蹴散らすぞ」

「キュアアップ・ラパパ！」

「ルビーー！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「大天翼之劍——だいてんよくのつるぎ侵食率15%！」

「ヨクボール！」

拳を振るってくるもヒラリと避け、ミラクルとマジカルはそこから反撃へと出るが

「えっ!？」

「なっ!？」

雲の特性をもったヨクボールには捉えられず、攻撃が全て空を切った

「全然掴み所がない！」

「折角のルビーのパワーが！」

「ならフフ！」

『フフ、電撃なら通じるかしら?』

大天翼之劍の刀身に雷が纏われ、そしてそのエネルギーを振り翳して電撃の刃を飛ばした

物理的な攻撃がダメなら、自然の力を借りての攻撃なら通じると思ったが、ミラクル達と同じくそのまますり抜けてしまった

「ヨクボール」

『フフ、全然効いてないわね』

「さあ！一気に片付けてお仕舞い！」

「ギョー！」

ヨクボールは大きく息を吸い、空にある雲を体内へと蓄え始める。

雲をより集めた事でヨクボールの大きさは、先程までより倍近くの巨体となった

「ヨクボール！」

「アレ食らったら痛いぞ」

ヨクボールは大きく腕を振り上げて襲い掛かって来るが、その動きにミラクル避けながらも気付いた

「マジカル、翼君！このヨクボール動きが鈍いよ！」

避けた事でヨクボールの腕に着地し、そのまま頭部の方へ駆け上って行く

走るミラクルを捕まえようとするも、大きくなった事で鈍くなったヨクボールは捕まえる事は出来なかった

これがミラクルが気付いたこと。動きの遅さ

「そっか、大きくて怖くても！」

「見方を変えれば！」

マジカルもミラクルと共に駆け登り、そしてジャンプでヨクボールの頭の上を陣取った

翼はというと、ヨクボールの足元へ潜り込んで軽く大天翼之剣を刺し込んでいた

「雲って要は水の粒の集まりだろ？冷やすとどうなるか実験といこうか」

大天翼之剣から冷気を発し、一気にヨクボールの体を凍らせた

「ハアアア!!」

そこからミラクルとマジカルの、ダブルキックが炸裂してヨクボールはバラバラに砕け散った

「さてミラクル問題。雲は物質の三態で言うところの何に当たるか？」

「はい、液体！」

「そう液体。よく気体と答える奴がいるがそれは勘違い。さつきも言ったが、雲は水蒸気が纏まった小さい水の粒の集まりだ」

「二人共授業の続きは帰ってからね。行くわよ！」

「リンクルステッキ！」

「ルビー！」



「紅の情熱よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ルビー・パッションナーレ！」

／／／／／／／／

「気が付かなかった。星がこんなに綺麗だったなんて！」

ヨクバールを浄化した余波なのか、曇り空だった空が晴れて満天の  
星空がしつかりと見えていた

それは、固くなっていったリコの頬が緩む程の夜空

「良かった。いつものリコだね」

「リコ、ずっと『んー！』ってお顔してたよ」

「え、やだ。そんなに固くなって……あ」

『——表情筋も固い。もっと柔らかくなったらどうだ？唇の様に』

ふと、リコはみらいの隣で座る翼に目を向けた。

それに気付いた翼は首を傾げていた

「何だよ？」

「ずっとわたしの事見てたの？」

「何気色悪い事言ってるんだ？頭大丈夫か？」

「…」

一瞬ピシヤリと目元がヒクついていたが、ここは満天の星空に免じて怒  
らなかつた

（まあそれでも…）

それでも、いつの間にか気に掛けていた事を嬉しくも思い感謝の気  
持ちが溢れる

「まゆみ達だね、リコともっとお喋りしたいって」

「明日、なんて話し掛けたら良いかな？」

「一緒に遊ぼうよ！」

「フフ、そうね。わたし見つけたい。この世界でも素敵なワクワクを  
沢山！」

夜空へ目を向けると一つだけ、大きく紫に光る星を発見した

「あの星！」

「すつごい綺麗だね〜！」

「やけに明るいな。何の星だ？」

「なんだか手が届きそう！」

「キラキラ〜！」

リコがその星に両手を広げると、気のせいか段々と近付いて来てる  
様に見える始めた

「モフ？」

それは目の錯覚などではなく、本当に近付いてはリコの両手に収  
まった

「星に手が届いちやった？」

「くんくん、甘い匂いモフ！」

「おいそれって」

手にした星をよく見ると、それはリンクルストーンだった

『『タンザナイト』！宇宙のリンクルストーンモフ！』

「へくち！あゝ少し冷えちやった！」

『ゲゲ、楽しいお喋りはここまでだ。ゲゲゲ、全員明日も学校があるん  
だ。続きはそこでだ』

翌日、肩の力を抜いたリコはまゆみ達とちやんと話す事が出来た  
他、下の名前で呼び合える程まで仲を縮める事が出来たのだった

## 第14話 偶然の集結

みらいの部屋で、翼達は興奮して喋っていた

「聞いて聞いて！翼君！」

「聞くからそれ以上近付くな」

みらいは翼から離れると同時に、あるチラシを見せつけた

「今度はぐくみ市で歌唱大会があるの！」

そのキラキラとした目を見て嫌な予感がよぎる

「リコ…」

「ついて行くしかないわよ…」

「行くだけじゃないよ！三人で参加しよ!!」

「はいいい!?!」

／／／／／／／／／／

「やって来たぐくみ市！久し振りだね！」

「久し振りって少し前に来たばかりだろ？」

ナシマホウ界へ来て間もない時、一度はぐくみ市へ来ていた事がある。

その時、とある少女達とも友達となっていた

「まさかその友達の中に、あの『ツインラブ』の人達が居たなんてビツクリだよ！」

「あく、みらいがTVで観てたわね」

「いつもTVに釘付けだったモフ」

「興奮して話すのはいいが前だけはちゃんと見ろよ」

「大丈夫だよ！」

少し歩くとその会場場所へと着いた。そこでは人が混み合っており、参加者、お客含め大人数だった

「受け付けはあっちね。行くわよ」

リコを先頭に歩いて行く。けれどその途中、女の子が横から現れりごとと並列で歩き出した

「…」

リコは何を思ったか少しペースを速めて追い抜かした

「…ッ！」

並列していて女の子もそれに気付いてペースを速めて、リコを追い抜き返した

「なっ！」

「あっ！」

そこからリコと女の子の早歩きでの競走が始まった

「待ってリコ〜！」

「俺達の名前も書かないといけないから、全員で行かねえと！」

翼とみらいの言葉など耳に届かず人混みの中へと消えて行った

「貴女しつこいわね！」

「それはこっちの台詞よ！何そんなに慌てるのかしら？」

「キツ!!」

二人は睨み合いながら受け付け前に躍り出て、同時に参加を申し立てる

「歌唱大会に参加します!!」

「え、では、この書類に参加者のお名前を…」

受け付けの人もその威圧感に少し身を引いていた

「わたしが先よ！」

「何言ってるのよ。わたしの方が先よ！」

「わたし！」

「わたしよ!!」

今度は受け付け前で睨み合いが始まろうとする時、背後から二人の声が重なった

「迷惑だ!!」

翼がリコの襟首を、女の子連れだろうもう一人の女の子も襟首を持って引き摺り出した

人混みから抜けて説教が始まる

「リコ、お前真面目だけが取り柄なんだら恥ずかしい事するな！」

「ローラ、お前もだぞ！周りに迷惑だ！」

「だって！」

「だってもあるか!!」

リコもローラと呼ばれる女の子の頬を膨らませて縮こまってしまう

そこへ丁度みらいや、ローラの連れと思われる人達が合流した

「リコ、翼君：はあ…」

「ローラ、心配したよ！」

「ウチのリコがご迷惑を」

「いや、こつちこそローラが迷惑をかけた」

お互いに謝罪をし終わると、相手の女の子が声を掛ける

「そういえば自己紹介がまだだったね！わたし『夏海まなつ』！貴女達の名前は？」

「わたしは朝日奈みらい！この子はモフルン！」

「リコよ」

「翼だ」

「『涼村さんご』です」

「『一之瀬みのり』」

「『滝沢あすか』だ」

「『ローラ』よ！」

「『皇 帝』だよ〜！」

まなつ達と翼達の身長はそう大差なかった。恐らく同じ中学生だ  
ろう

自己紹介を終えた途端、帝はみらいの目の前まで迫った

「わわっ!？」

「朝日奈みらい…良い名前だ。なあ今夜、あそこのホテルで熱い夜を  
過ごさないか？」

「おいお前——」

口説く帝を止めようと翼が割り込むも、帝が次に起こすアクション  
には間に合わなかった

「そんな訳でパンツご開帳!!」

「〜ツ／＼／」

帝の手によって広がったスカートは、下着を露にしてみました

「おおく白だほびい!？」

翼に膝で顎をかち上げられて地面へ倒れた

「おいお前殺されてえのか?」

「た、只の挨拶なんだが…」

「挨拶って貴方ねえ…」

「見るならリコにしろ!俺が許す」

「何だよ!？」

「マジで!」

「ちよ、来ないで…キヤアア!!」

「まなつちゃん達も皆んなで出るの?」

「うん!ローラを中心にね」

「フフン!このわたしがいるのよ?トロピカる部の優勝は間違いなしだわ!わくっはっはっはっ!」

そんなお調子者を翼とリコは苦笑いをしていた

「お前らはいつもあんな奴と一緒に疲れないのか?」

「疲れる…」

「でも、ローラの良いところでもあるし」

「それくらいしか良いところがない」

「ちよつとみのり、それどう言う意味よ」

「あはは…と、取り敢えず書こうか!」

みらいが参加用紙に書こうとした時、肩を叩く者が居た

誰かと振り返ると見知った人物だった

「やつほくみらいちゃん!」

「はなちゃん!？」

「みらいちゃん達も参加するの?」

「うん!あ、早く書かなくちゃ」

「凄い！凄いよ帝！超有名人達がこぞって集まってる！」

まなつの言う有名人とははな達のこと。キュアスタや女優、スケート選手にアイドルとして名を轟かせつつある少女達

「野乃はな」「薬師寺さあや」「輝木ほまれ」「愛崎えみる」「ルールー・アムール」

「有名人だなんて照れますなく！」

「はな先輩、鼻の下が伸びてます」

「久し振りだね！」

「久し振りって少し前会ったばかりだと思っけど…」

更にそこへ、赤ん坊を連れ二人の男性がやって来た。

その人達もはな達の知り合い

「なんやぎようさんおるな…」

「友達でも出来たの？」

『「ハリー」！』『拓人』さん！遅いですよ！』

気付けば10人以上の集団が出来てしまった。中でも翼とリコは同じ事を考えていた

(凄く個性が強い人達が集まった…)

「ま、まあどんなに凄い人でもわたし達が完璧に優勝するに決まってるし！」

「何言ってるの？グランオーシャンでも随一の歌姫を差し置いて優勝なんて有り得ないわ！」

「そ、それはわたし達も同じなのです!!」

リコ、ローラ、えみるの三人の間で火花が散り始める

「楽しい歌唱大会になりそうだね！」

「ヒートアップしなきゃ良いけどな…」

みらいの興奮はピークに達し、翼はもう既に疲れ果てていた  
そろそろ大会の時間となる。全員舞台裏に歩き出した時だった

「猛オシマイダー!!」

「ヨクボール!!」

会場から少し離れた場所でヨクバールと猛オシマイダーが同時に現れた

「え、何々!？」

「…」

みらいとはなはお互いに目配せをする。それだけで何をすべきか理解する

「ハリー、まなつちゃん達と一緒に逃げて！」

「任せとき！」

「え、皆んなは!？」

「他の人達の避難をさせに行ってくる！リコ、翼君！」

／／／／／／／／

「ヨクバール！」

「猛オシマイダー！」

「二体…ここは二手に分かれてそれぞれ相手にする。俺とはなちゃん達で猛オシマイダー。翼君とみらいちゃん達であるヨクバールを！」  
「いちいち言わなくても分かっている！みらい、リコ！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「ダイヤ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀劍——侵食率20%！」

「「「ミライクリスタル！ハートキラつと！」」」



「二輝く未来を抱きしめて！」

「みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「二二HUGっとプリキュア！」

「やああ!!」

定石通りエールが出方を伺う為仕掛けた

「オシマイ!!」

エールの拳が猛オシマイダーの腹に減り込むも、全くと言っていい程効いてなかった

「ながらも少し強く！」

拓人が腕を下げる

それが合図となりアンジュ、エトワールが加わり、マシエリとアムールが両足を蹴り付けてバランスを崩させた

「よし、このまま倒れば」

倒れば後はエール達で浄化が出来る。そう思っていたが

「オシマイ……ダー!!」

前に崩れる状態から踏ん張って持ち堪え、エール達を弾き飛ばした  
「マシエリ！」

「は、はい！」

体勢を立て直しながらも、マシエリはミライクリスタル・ルージュを拓人に投げ渡す

受け取った拓人は、メロディソードと似たアイテム「クロノスタクト」にミライクリスタル・ルージュをセットする

「止まれ!!」

クロノスタクトから放つアスパワワの波が猛オシマイダーに直撃した。

すると猛オシマイダーの動きが完全に止まった。時間を一時的に止めたのだ

そしてそれを見計らった様にエール、アンジュ、エトワールが前に出た

「心のとゲトゲ飛んで行け〜!」

「プリキュア・トリニティコンサート!」

完璧までに直撃した

浄化をして一安心。エール達は急いで翼達の援護へ向かうとしたのだが

「待つて皆んな!何か変だよ」

立ち上る煙を凝視する。その中で、直撃したにも関わらず猛オシマイダーが何事もなく立っていた

「猛オシマイダー!!」

猛オシマイダーの咆哮でエール達を吹き飛ばしてしまった

「きやあッ!」

「アムール!」

拓人の近くに、アムールが転がって来たのを体全体を使って受け止めた

「ありがとうございます拓人」

「それより、この猛オシマイダー何かおかしい…」

「はい、今までと比べて37%程戦闘力が増しています…拓人来ます!!」

「ミライクリスタル・ハーモニー!」

クロノスタクトにセットされていた拓人の緑色のミライクリスタル「ミライクリスタル・ハーモニー」

その力は一分後までの制限はあるものの、完全な未来を視る事を可

能とさせるもの

~~~~~

「——ッ！」

~~~~~

これを用いてエール達をフォローするつもりだったが、拓人は全く動こうとしなかった

「拓人攻撃が来ます！早く指示を！」

「……このままでいい。俺を信じて動かないでアムール」

「…はい。拓人の言葉を信じてます」

「猛オシマイダー!!」

猛オシマイダーの口から光線が吐かれても微動だにしなかった

拓人はゆっくりと口角を上げて笑った

「その未来は既に視ているよ」

その瞬間、拓人とアムールを守る様に青い盾が出現し光線を弾いた  
「え、何が起こったのですか？」

「どうやら強い味方が来てくれた様だよ」

ゆっくりと歩き、拓人達の前に立ったのは避難させた筈の帝だった

「この借りはプリキュアみんなのパンツで手を打って…痛!？」

「お前は…もう言うのも疲れた」

「大丈夫ですか？」

帝だけではない。みのりにあすかも続いて猛オシマイダーの前に立つ

『ゲゲ、このヨクボール強いな?!』

「ヨクボール!!」

「フツ!!」

翼に突進して来るヨクボールだが、ミラクルとマジカルが前に立ってその巨体を受け止めた

「食らえッ！」

ガツチリ捕まえてる隙に、翼が勢い良く飛び出し、飛び膝蹴りをかました

「ヨクボールルル!!」

「因果斬り!!」

後退りながらも大勢を整えつつ、口から光線を吐き出して反撃に出る。

それに対抗するのは翼の因果

20%の力とはいえ、その光線を容易に打ち消した

「今だ決めろ!!」

「リンクルステッキ！」

「ダイヤ！」

「永遠の輝きよ！私たちの手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ダイヤモンド・エターナル！」

「ヨクバー……ルツ!!」

技は完璧に決まりはしたが、ヨクボールが自力でダイヤモンド型のケージをこじ開けた

「そんな!?!」

「ダイヤモンド・エターナルがあっさりと破られるなんて…」

「ヨクボール!!」

「ツ!!」

「モフ!?!」

「は~!?!」

大きな咆哮に翼達は何とか耐え忍んだが、モフルンとはーちゃんが吹き飛ばされた

「モフルン！」

「はーちゃん！」

ミラクルとマジカルが手を伸ばす前に、先に二人をキャッチする者達が現れた

「おっと危ない！」

「気を付けなさいよ」

「危うくわたしまで飛んじやうところだったよ」

「まなつちゃん!？」

「ローラにさんご!？」

モフルン達をキャッチしたのはまなつとローラで、遅れてさんごも到着した

「ありがとうモフ！」

「どう致しまして！」

「貴女妖精なの？」

「可愛い〜！」

『ゲゲ、なんて言うか』

『フフ、まったりとしてるわね』

モフルン達をミラクルとマジカルに返して、懐からコンパクトを取り出した

「帝〜！そっちは一人で大丈夫よね〜？」

「大丈夫！」

「OK！じゃあ皆んな集まって！」

まなつの周りにみのりとあすかも集まり、それぞれコンパクトを持つ

「貴女達何を？」

「あ、わたし達もプリキュアなんです！」

「はああ!？」

「今、プリキュアって言いました!？」

「**「「「プリキュア！トロピカルチェンジ！「「「「**

「**「「「レッツメイク！キャッチ！「「「「**

「ときめく常夏！キュアサマー！」

「きらめく宝石！キュアコーラル！」

「ひらめく果实<sup>フルーツ</sup>！キュアパイア！」

「はためく翼！キュアフラミンゴ！」

「ゆらめく大海原<sup>オーシャン</sup>！キュアラメール！」

「トロピカっていくよ！」

「「「トロピカル〜ジュープリキュア！」「」」

## 第15話 黄色い眼の悪魔

「プリキュア！トロピカルチェンジ！」

「レッツメイク！キャッチ！」

「ときめく常夏！キュアサマー！」

「きらめく宝石！キュアコーラル！」

「ひらめく果実！キュアパイア！」

「はためく翼！キュアフラミンゴ！」

「ゆらめく大海原！キュアラメール！」

「トロピカっていくよ！」

「トロピカル〜ジュ！プリキュア！」

「まなつちゃん達がプリキュア!?!」

「そうだよ〜！」

サマーが挨拶して中で、パイアとラメールがヨクバールを蹴り飛ばして交戦していた

「サマー手伝って！」

「挨拶なんて後々！」

「は〜い！」

サマーも加わり一気にヨクバールを追い詰め始める

『ペけ！』

コーラルが防御した後、背後からフラミンゴが現れて渾身の右ストレートをかます

「サマー！」

「ハートルージュロッド！」

「プリキュア！おてんとサマーストライク！」

サマーが放った技は、そのままヨクバールを押し返した

「凄い……わたし達があんなに苦戦したのに」

「何か悔しいな」

「だったら今から頑張ろう！マジカル！翼君！」

ミラクルとマジカルは走り、翼は大きく翼を広げて飛び立つ

「ハッ！」

「フッ！」

「せくのっ！」

ミラクルとマジカルがヨクバールを掴み、大きく空へと投げ飛ばした。

そしてその先には翼が待ち構えていた

「ルラア!!」

頭上から翼の右拳が減り込み、ヨクバールは地面へと勢いよく向かって落ちて行く。

勿論落下地点にはミラクルとマジカルが待っている。腕を大きく回りして二人同時に振り抜く

「やああああ!!」

勢いのついた強烈な攻撃はヨクバールを大きく吹っ飛ばして倒れた

「ヨクバー……」

「マリンハートクルリング！」

「「「おめかしアップ！」」」

「「「エクセレン・トロピカルスタイル！」」」

「「「5つの力！海に轟け！」」」

「「「プリキュア！マリンビート・ダイナミック！」」」

「「「ビクトリー！」」」

サマー達のお陰でヨクバールは浄化が出来た  
残るは



「猛オシマイダー!!」

猛オシマイダーの攻撃の嵐を、帝は容易にかわし、受け流していた「冗談だろ?まさかこの程度に苦戦してたのか?」

帝は手に持つ、上部にルーレット盤がある特殊なステッキ「オーシャンステッキ」で地面に打ち付け、土煙りを上げては目眩しする

「オシマイ!」

「何も見えない!」

「目に砂が入っちゃった!めちよつく!」

「拓人お兄さん何処なのですか?」

「マシエリ!俺は此処だ!マシエリ!!」

「拓人、わたしに付いて来て下さい。マシエリ今行きます」

「ちよつと皆んな、漫才してる場合じゃないよ!」

猛オシマイダーだけでは留まらず、拓人やエール達も目眩しに合い、てんやわんやの状態と化してしまった

「援護は任せる先輩方」

『FANTOME!』

謎の音声が鳴り響いた。

そして同時に猛オシマイダーに四カ所のダメージが通った  
やつと土煙りが晴れるとそこには、帝は四人となっていた

「あくこれはパンツだけじゃ物足りないなあ。胸に加えて…あ、子作りも——」

何か言いかけた時、頭に強い衝撃を受けて話を打ち切られてしまい、更には攻撃を受けた帝が消滅した

「あつぶねえ、潰される所だった」

しかし別の場所でそう呟いていた

先程消滅した帝は、ステッキの能力で出した分身。

その内一体がやられただけだった

本物は本物で欠伸をしてのんびりとしていた

「骨のない奴だ」

「いやいや帝君、今さつき『危ない』って言わなかった?」

「強者の余裕ってやつですよ拓人先輩。それよりも今がチャンスですよ」

「猛オシマイダーを残った分身の二体が上手く引き止めていた  
「ほら」

「ありがとう！行くよ皆んな！」

「二」メモリアルキュアクロック！マザーハート！「二」

「二」ミライパッド・オープン！「二」

「二」HUGっとプリキュア！今ここに！「二」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィーアー！」

「プリーキュアー！」

「明日にエールを！」

「二」ゴーフアイ！みんなでトウモロー！「二」



「ミラクルちゃん！ご褒美のおっぱい揉み揉みダボバア！」

帝がミラクルに触れた途端、マジカルが怒りのの籠った拳を顔面へと振り抜いた

『ゲゲ、お前エール達の方へ行つたんじやなかったのか？』

「エトワールの胸触ったら関節技決められたから逃げて来た…ワンちゃん、ミラクルなら笑顔で受け入れてくれると思った」

「そんな訳ないでしょ！ねえ、翼からも言つてやつてよ！」

「…自分の場所へ帰れ変態野郎」

「俺、あまり指図されるの嫌いなんだよ…でもまあ今回は素直に聞くよ。そんな訳でサマー、パンツ食べさせて〜!!」

帝が遠退くの見届けると、入れ違いでエールと拓人が翼達に話を

する

「やったねミラクル！マジカル！」

「エール達もありがとう！」

「にしても何で猛オシマイダー達が現れたのか……それにあの強さ。マジカルや翼君は何か心当たりは無いかい？」

「無いわ。そもそもヨクバールが居たのなら、バツティや他の人がいる筈」

「……」

マジカルが答える中で、翼は黙って考え込んでいた。

少しするとやつと口を開いた

「悪魔の仕業、とは考えられないか？」

「え、君達は悪魔とも戦っているのかい？」

『ゲゲ、だとしたらマズい。あれ程のヨクバールや猛オシマイダーを呼び出せる悪魔となったら、大体の検討はつくが——』

「よくもまあ、ここまでプリキュアが集まったものねえ」

その声がした瞬間、その場に居る者全員の動きを封じられた

『ッ!?!』

「か、体が動かない!?!」

「俺もだ!」

エールと拓人は必死にもがくも、口だけしか動けず何も出来なかった。

それは他も同じく、アンジュ達やサマー達も突然の事で状況を把握出来ていなかった

「どうなっているの!?!」

『ゲゲ、こんな事を出来るのは』

「悪魔……!?!」

「名答」

全員の前に現れたのは一人の女性だが、中身は全く別物、悪魔だった

『ゲゲ、お前は誰だ!?!』

「私は『ダゴン』。それにこの眼を見れば一目瞭然のなんじゃない?」

女性の目の色が変わる。それは黒い目でも無い

”黄色い眼?”」

「あんな悪魔は初めてよ…」

「黄色い目だとどんな奴なんだ?」

『ゲゲ、ダゴンか…:黄色い目は、上級の悪魔だ。数こそ少ないが力は強大だ』

「そう、その下級の悪魔の言う通り。さつさと殺されるのね」

「——誰が誰を殺すだと?」

ダゴンが指を鳴らそうとした時、帝は何故か悠然と動いては歩いて  
いた

それだけではない。先程までおちやらけた態度とは違い、鋭い目つきで雰囲気はかなり変わっていた

「変ね。動けない筈だけど…:アンタ何者?」

「俺はこの世界で唯一無二の存在”始皇帝”だ」

「あの変態野郎とうとう頭イカれた?」

「二二帝(君)はいつもああだよ」

サマー達の発言で、皇 帝という人物がどう言う者か全員改める必要があると感じた

「でも、あんなった帝は誰よりも強いし、止められないよ」

サマーからのお墨付きを頂いた帝。そしてそれは言葉通りだった

「ならこれでどう?」

「俺にはその様な小細工は【効かない】」

「ツ!」

「フツ…」

ダゴンが指を鳴らしても帝に異常は出なかった

「アンタ本当に何をした?」

ダゴンに見せつけるのはオーシャンステッキとは別の赤いステッキ「プリキュアの玉杖<sup>レガリア</sup>」

『ABSOLUTE!』

「ッ！ッ！！」

ダゴンは幾度とも指を鳴らすも変化など訪れない

「言つたら。【効かない】と」

「言霊か！」

「全員【動け】」

その言葉通り、ダゴンによって動きを封じられていたが、体が軽くなり解放された

「おおく！ありがとう帝！」

「なるほど、これが彼の力」

「もうお膳立てはいいだろう？」

帝の左右から、ミラクルとマジカルがリンクルステッキを持って飛び出した

「ダイヤモンド！」

「永遠の輝きよ！私たちの手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ダイヤモンド・エターナル！」

今度は打ち破られる事なく決まった。これで全て終わったと思つたが

「この程度、足止めにしかならないわよ？」

そう簡単には倒されなかった

体を見てもそれらしいダメージは無く平然としていた。

ダゴンの言う様に、足止め程度しかなかった

「知ってるわよ。わたし達の魔法が通用しないって事くらい！」

「だから翼君に託したの！」

ダゴンの上、そこには煉魔之刀劍れんまのとうけんの侵食率を50%まで引き上げた翼が構えていた

「取った!!」

浄化出来ないなら選択肢は一つしかない

憑依されてる女性ごとダゴンを殺す

「それを見抜けないと思っただ？」

ダゴンは振り返り、振り翳す腕を掴んで翼を地面へ抑え込んだ

「翼（君）!!」

「アムール、ミライクリスタルを！時間を戻す！」

「それより俺の方が早い！」

拓人はアムールからミラクルクリスタル・バイオレットを受け取り、帝も言葉を綴ろうとしたが、それよりも早くダゴンが先手を打った

「「あゝあゝあゝあゝ!!」」

ミラクル、パパイア、アンジユが腹を押さえてその場に崩れ落ちた

「何!?!」

「いわゆる人質ってやつ？今彼女達のお腹の中をがっしりと掴んでるの。この意味分かるわよね？」

ダゴンは左手で翼を取り押さえて、右手でミラクル達を文字通り掴んでいた

「ああ!!お腹がっ!!」

「うっ…どうなって…」

「はあ…うっ！」

右手首を軽く捻ると痛みは膨れ上がり、ミラクル達三人を苦しめる

「形勢逆転」

「貴様！」

「おっと、それ以上口を開くのはNG。開こうもんなら…」

「ウゝアゝアゝアゝアゝ!!?!」

「ごはッ!!」

「くくッ!!?!」

手首を更に捻り痛みを与える

ミラクルは絶叫し、パパイアは吐血し、アンジユは声を抑えてるが痛みによって汗が止まらなかった

「おい変態それ以上は刺激するな！ミラクル達が死んでしまう!!」

「死ぬ…チッ！」

帝はステッキを下げ、戦う意思が無い事を証明する。不服だが、翼達にはこれしかなかった

此方が動く前にダゴンの方が早く、最悪な結末が待っているだけならばいいそのこと

「……飽きた」

ダゴンは翼を蹴り飛ばし、右手を開けてミラクル達を解放させた

「ミラクル大丈夫!？」

「大丈夫……ありがとうマジカル」

「テメエどういふつもりだ!!」

「飽きたって言ったでしょ?それに、アンタらとは只のお遊び。殺すのだからいつでも出来る。じゃあ」

「待ちやがれ!!」

去って行くこうとするダゴンに向けて、煉魔之刀剣を投げつけたが雲の様子にして姿を消して、刃が届く事はなかった

「クソ……勝ち逃げされた!」

「けれど追いつけは出来た。それで良いんじゃないのかい?」

「そんなに気を遣わなくてもいいと思うよ!」

拓人とエールにそう言われて翼は落ち着きを取り戻す。

確かに逃げられはしたが、悪魔と関わっていながらそこまでの被害は出ていない

／／／／／／／／／／

「リコ先輩のパンツゲットゥ!この芳しい匂い堪らん!!」

「この、返しなさい!怒るわよ!!」

「これで……はい、大丈夫です」

「悪いな」

帝はリコのパンツを頭に被って二人で鬼ごっこをしており、翼はさんごに手当てをされていた

「歌唱大会一応やるらしいけど……問題児」

ボロボロの翼、失礼極まりない行動をする帝の二人を見て拓人はそう溢していた

「「任せた」」

みのり、あすか、ほまれにそう頼まれた。

恐らく、この中でも一番年長で男の拓人にあの問題児二人を託されたのだ

「胃がキリキリしてきた…」

「そんな時はパンツを拝んで、おっぱい揉んで楽しむ」

「ばくか、その前に歌唱大会だ。ほら行くぞ、リコもパンツで騒ぐな恥ずかしい」

「わ、わたし今何も履いてないのよ!!」

「知るか。ノーパンで出る」

「はいはい！行こう皆んな！」

思わぬ出会いに喜ぶ翼達。

それと同時に悪魔にも強力な存在がいる事を知った————黄色い目の悪魔という存在に



## 第16話 幸せの四つ葉

「翼君も一緒に来れば良かったねリコ」

「わたしは、みらいやモフルンにはーちゃんが居れば何も問題は無いけど」

只今みらいとリコは自然に囲まれた河原に来て、クラスメイトのまゆみ、壮太、ゆうとを引き連れてBBQをしに来ていた

しかしその場には翼の姿は何処にもない。今日の彼は、家での予定が来れないと連絡を受けたのだ

みらいは残念がるが、それに対しリコは来なくて良かったと安心していった

「みらい？リコ？」

その声を聞くまでは

名前を呼ばれて振り返ると、翼と魔法界に居る筈のリズが並んでいた

「翼君!？」

「お姉ちゃん!何で二人が此処に？」

「俺は此処にBBQをしに来て：まあ世界は案外狭いって事だな」

「わたしは皆んなに届け物はあるの」

翼に関しては本当に偶然

リズはリコに届け物である校長からの手紙を渡した

「中身は？」

「なんでも、探し物のヒントだとか？」

三人は首を傾げるが、中身の確認は一度落ち着いてからでそれぞれ準備を急ぐのであった

リズもみらいの父親「大吉」に挨拶をして後、共に参加する事となった

「そうだ！翼君も一緒にどう？」

「俺は自分のテントがあるしいいよ。気持ちだけ受け取っておく」

自分のテントに帰ろうとした矢先、翼の母親が大きく呼び掛けた

「翼く！チャツカマン忘れちゃった！」

「え、忘れちゃったの!？」

「一番肝心な火を起こす物をどうやら忘れてきたらしい。」

「これには翼も項垂れるしかなかった」

「翼君、やっぱりわたし達と一緒に…」

「いや大丈夫だ！こんな時の為に密かに火打ち石を持って来たからな。取り敢えず今はお互いに準備しようか」

翼の言葉でお互いに、自分の所の準備をし始めるのであった

「あ、朝日奈さんに皆んな！」

「勝木さんも来てたんだ！宜しく〜！」

「どうやら翼だけじゃなく、同じクラスメイトの「勝木かな」とも隣同士だった」

「あ、また会ったね！」

「そうだな」

翼とみらい達、お米を研ぐ為に水道でまたも出会った

「じゃあついでだし、翼もさっき受け取った手紙読みましょう」

「先程受け取った手紙の中身を確認すると、リンクルストーンに関する手掛かりとなる文面だった」

その内容とは

「『緑と水に囲まれた清らかな地。そこに、幸せを宿せし輝きがある。そうお告げがある』」

「普通の手紙だね。魔法じゃないんだ」

「水晶さんなら早いのにね」

「壊れたとか？」

「んまあ、取り敢えずお米を研いじやおう！」

「手紙の事は一旦置いて、遅くなると心配するのでBBQの準備をする」

「はい、リコもやってみて」

みらいが手本を見せてリコにやってみるように促したが、  
「冷た!？」

注いだ水が思った以上に冷たい事に少々驚いていた

「このくらい、魔法を使えば簡単だし」

「分かってないな。こういうのは、自分の手で作るから楽しいんだ」  
「楽しい?何が?」

苦笑いしか出ない。仕方ないとはいえ、そう考えるのが普通なのだ  
ろう

「お花〜!はー!」

するとリンクルスMahonからはーちゃんがでて来て、クローバーの  
花畑の上を喜んで飛び回る。

みらいもはーちゃんに続いて花畑に飛び込んだ

「クローバーがどうかしたの?」

「四つ葉のクローバーは、ラッキークローバーと呼ばれてて幸せのア  
イテムなんだよ〜……あつた!!」

「リンクルストーン!？」

「四つ葉あつたのか?」

翼とリコで反応が違った。どっちが正解かということ

「見て見て四つ葉のクローバー!」

正解したのは翼。みらいは自分の髪に四つ葉を付けて喜んでいた

「みらいだったら……わたし達が探してるのはリンクルストーンよ」

「リコも探そうよ。良い事あるかも知れないよ?」

「良い事ねえ……」

少しは納得してくれそうだったが、すぐさま魔法の杖を取り出して  
探そうとする

「また杖かよ!？」

「自分で探すの?この中から?それよりリンクルストーンを——」

「くんくん。山から沢山の甘い匂いがするモフ〜!」

そこで、リコが欲しかったリンクルストーンの手掛かりをモフルン  
が見つけた。

山というのは、すぐ近くにある山の事を言っている

「よし…キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、飛びなさい！」

「あ、誰かに見つからないようにね！キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、飛んで！」

「あ、おい米は!？」

「ごめくん！翼君お願い!!」

翼の言う事など全く聞かず、モフルンが教えた山の方へ二人は飛んで行った

『ゲゲゲ、行っちゃまったな』

『フフ、どうするの？このお米?』

「俺は知らん！帰る！」

と言つて歩き出したが、速度を落として最終的には止まり、ゆっくりと水道の方へと目をやる

「……あくもう!!」

結局、翼はみらい達のお米の面倒まで見る羽目になった

(なんだかんだで、面倒見があるなツバサって)

「それで？リンクルストーンは見つかったのか？」

「見つからなかった！」

「おい…」

結局みらい達はリンクルストーンは見つからず。モフルンの鼻が捉えたのはハチミツとのこと

色々と災難があつたと思われたが、ようやく食事にありつける

「俺のテントあっちだから。また後でな」

翼も自分の所のテントへ帰り、母親と二人だけのゆっくりとした空間が溢れる

「お袋、肉ばっか焼いてないで野菜も食べないと」

「お母さんからしたら、お肉は野菜よ野菜！お母さんは今、野菜を焼いているのよー！」

「無茶苦茶言うな！玉ねぎやカボチャだって切っているんだから！」

「鬼め」

「お袋の子供だ」

文句を言いつつも口の中に運んでいく。

静かに食事をしていると、みらいとリコは申し訳なさそうにやって来た

「翼君、さつきはごめんね。全部任せちゃって」

「いいさ別に。それより美味しく出来たか？」

「うんバツチリだよ！リコも美味しいって言ってた！」

「そうね、何で便利な道具を使わずにするかの意味も分かったわ」

BBQも終わり、偶然にも三人で洗い物をしてる時の事だった

「お肉もお野菜もジューシーで、ご飯もふっくらで美味しかったね！」

「その上自分達で準備して外で食べたんだ。美味しさが引き立つよ」

「……」

「リコ、これあげる。ラッキーアイテムだよ。リンクルストーンもきつとすぐ見つかるよ」

みらいは、自分で見つけた四つ葉のクローバーをリコに差し出した。

中々上手くいってないリコを励ます為の行為だった

「ありがとう。でも、コレはみらいのものよ。わたしも自分で探してみろー！」

「嗚呼、あんなに魔法に頼ってばかりのリコがこんなにも成長したなんて」

「翼、ちよつと馬鹿にしてるわよね？」

「俺がお前を馬鹿にしない日なんてないだろ？」

「フフ、じゃあ皆んなで探そっか！」

クローバーが咲く花畑に足を向けると、山の頂上から声が聞こえた

「プリキュア!!」

見上げるとそこには大きくマントを広げるバツティが浮かんでい

た

「エメラルドは先にこの私が見つけますよ！」

「魔法入りました！出でよ、ヨクボール！」

「ヨクボール!!」

蜂の巣と飯盒を使ってヨクボールを生み出した。

それを見て、みらいとリコは手を繋いで急いで変身をする

「キュアアップ・ラパパ！」

「サファイア！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア ！」

「煉魔<sup>れんまのとうけん</sup>之刀剣——侵食率35%！」

「話に聞いた空飛ぶプリキュア。ですが、大空は私の舞台。絶対負け  
ませんよ！」

『フフ、空なら天使の方が専売特許よ』

『ゲゲ、悪いが今日のお前の出番は無い。悪魔の俺に任せるんだな』  
「馬鹿な事言っていないで…来るぞ」

ヨクボールは体から無数の弾を繰り出して来た。

だが、何の変哲も無い攻撃に臆することはなく冷静に対処する  
「因果斬<sup>カルマギリ</sup>り！」

黒い縦の斬撃が弾を全て撃ち落とし爆風が込み上げる。

その中からミラクルとマジカルが飛び出して、一気にヨクボールへ  
と接近する

「ッ!?」

しかし、それを見てヨクボールは避けると同時に、更に高く飛び二人の真上を陣取った

「ヨクボール!」

両腕の鉄の飯盒が二人の頭から叩き、地上へと押し返した。

更に、尻から連続でミサイルバリを放って追い討ちを掛ける

二人はすぐさま飛び立ち回避し、ミサイルバリは無残にも地面へ被弾した。

けれど、幾つかは未だにミラクルとマジカルを追尾していた

「あっ!!」

「ミラクル!マジカル!」

翼は、悪魔の翼を広げて全速力で二人の元へ駆け付けては、少々強引だが蹴り飛ばしてまで二人の身代わりとなりその身に攻撃を受ける

「翼(君)!」

防御などしていなかった翼は、そのまま地面へと落下して行くが、ミラクルとマジカルが支え地上へと降ろした

「悪い…ゲゲ!フフ!」

『ッ!』

安心も束の間、上を見上げればヨクボールが飯盒の腕を振り下ろしながら攻めて来る。

誰よりもいち早く気付いた翼は、ゲゲとフフに指示を出してミラクルとマジカルを左右に突き飛ばした

またしてもミラクル達は無事に避けれたが、翼は攻撃するヨクボールの飯盒を煉魔之刀剣一本で受け切る羽目となる

「翼君!」

「無茶しないの!」

文句を言いつつ、早く助けるべく左右から挟み込んで攻撃をするも、巨体に似合わずの反らしで攻撃は空を切る

「鬱陶しいんだよ!」

煉魔之刀剣に悪魔の力を溜め込み、刀身が黒いオーラに包み込まれ

る

「煉魔之刀剣——侵食率、刀身50%!」

器用な事に、体を侵していた悪魔の力を全て刀身へと移し換えて攻撃のみと扱ってみせる

「食らえよ!!」

なんと翼は、ミラクルとマジカルごとヨクバールへ斬撃を放ち攻撃した

「ヨクバツ!」

しかしダメージを負ったのはヨクバールのみ。

確実に体を斬られたミラクルとマジカルだったが、ダメージどころか傷ひとつついて無かった

これも因果の魔法の特性を活かした戦法

ミラクルとマジカルには”斬る”という原因を無くし、”斬った後”という結果だけにした為無傷。

しかしヨクバールにはそんな因果など発生させず攻撃した

これには事前の打ち合わせなど無く、ましてやそんな芸当が出来るなど伝える筈も無い為、斬られたかと思った二人は心拍数が一気に跳ね上がる

「なんてことするのよ!!」

当然、怒り狂ったマジカルは翼の襟へ掴みかかる

「言ったとしても怒るだろ!」

「だとしても言わないよりはマシよ!!」

「翼君、わたしも出来れば一言欲しかったなあ…」

『ゲゲ、それよりどうする? サファイアにもう対応している』

「そうね…あつ」

マジカルは指を鳴らして何か作戦を思いついた

「翼、ちよつと耳を貸しなさい」

マジカルの作戦を聞いた翼の表情は、少し嫌そうに変わった

「えく、それ下手したら俺だけ怪我するじゃん」

「何か言ったかしら?」

ニコニコと笑顔を作りながら、翼の頬を突いて来る。しかもその笑



顔は、笑っている様で笑っていなかった

「行くわよミラクル」

「お願いね翼君！」

強制的に作戦を実行する事となった

飛び去って行くミラクル達をヨクボールは追い掛けて行く。

翼も溜め息を吐きながら、マジカルの言われた通り動き始めるのだった

「翼君、何とか動いてくれてるね」

「動かないとタダじゃ済まさないわ」

愚痴りながらも作戦通り動く

二人は山下にある川の上を飛ぶ。ちゃんとヨクボールも付いて来ているのも確認した

「ヨクボール！」

またも追尾するミサイルバリが飛んで来る

「やるわよミラクル！」

「うん！」

二人は手を繋ぎ、低空飛行から一気に飛翔して天高くまで飛び上がる

ミサイルバリが追尾に、ヨクボールもその後を追い掛ける。

サファイアのスピードについて来てはいるが、それでも差が開いてるくらいの速さはある

その差を維持しながら二人は方向転換して、上昇からの急降下する当然ヨクボール達は追い掛ける。この行為に何の意味があるかはマジカルだけが知る

このまま降下し続けると川へと潜る羽目になる

「ミラクル！」

合図で二人は手を繋いだまま体を大きく回転させ、それがブレーキと制動距離を縮める役割りを果たす

そして、川ギリギリに止まった二人の目の前には翼が待機していた

二人はその場から離脱する。

ミラクル達を追い掛けていたヨクボールは翼の存在に気付いてブレーキを掛けるも、後に続くミサイルバリが背中に直撃して自滅する

だいてんよくのつるぎ  
「大天翼之劍——侵食率40%！」

翼は大天翼之劍に切り替えて、切先を川の水に浸して刀身に水を巻き付ける

「ウラァ!!」

充分に巻き付け力強く切り上げる。そうする事で、巨大な水の竜巻きを起こしてヨクボールを呑み込ませる

水の竜巻きからヨクボールが放り出される。羽を動かしたいが、水浸しとなっている為思う様に動かせない

ここまでの行動は全てマジカルが思い付いた作戦。それを見事に成功させた

無様に空中にいるヨクボールへ向けて、ミラクルとマジカルはリンクルステツキを向ける

「リンクルステツキ！」

「サファイア！」

「青き知性よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！サファイア・スマーティッシュュ！」

／／／／／／／／

浄化を終えて、翼達は四つ葉のクローバーを探していた。

そんな中でリコは、今日経験した事を振り返る

「今日の事で気付いたわ。校長先生が水晶さんを使わずに、お姉ちゃんに手紙を渡したのは魔法を使わずに、リンクルストーンを探してみ

なさいっていうヒントなのかも。それにみらい達と一緒に頑張って探したら、見つかった時にとつても幸せになれると思うの」

「そっか、うん頑張ろう！」

手探りで探していると、一つのクローバーから光を放っていた

「甘い匂いがするモフ！」

「お花お花〜！」

その光るクローバーは四つ葉だった

「あったわー！」

リコが摘むと、そのクローバーの輝きは増して形を変えた

『ペリドット』！草のリンクルストーンモフ！

「わあ〜！幸せクローバーがリンクルストーンだったんだね！」

「良かった……んっ」

喜びリコの頭の上に何かが置かれた。触れてみると、それは花で作られた冠だった

「頑張ったご褒美だ」

仕業は翼だった。花の冠に触れ、リコは微笑むのだった

「リコ、帰りが遅いから心配したのよ！」

川沿いを辿って帰る途中、心配で探し回っていたリズと出会った

「ごめんなさい。でも、もう大丈夫」

「…どうやら、探し物は見つかった様ね」

「はい！」

「お姉ちゃんが手紙をお届けしたお陰で、魔法を使わなくても見つけれたの」

「校長先生の手紙の意味が分かった様ね……だから、リコに引き寄せられたんだわ」

リズは昔のある記憶を思い出した

リコが産まれたその日、庭の杖の木に流れ星が降ってその木から杖を授かった

「リコの力が星の杖を呼び寄せたのよ」

「わたしの…力？」

「お父様もお母様も、リコは素晴らしい力を持っていると信じているわ。勿論、私も信じてる」

「星の祝福を受けた魔法の杖。良いんじゃないのか？」

「そんな事があつたんだ。やっぱり凄いなだねリコ！」

「そ、そんなわたし…」

突然そんな事を言われては、嬉しさと恥ずかしさで顔を背けたくなる

「今のリコなら、みらいさんや翼さんと一緒にもっともっと成長して、立派な魔法つかいになれる筈よ」

「ありがとうお姉ちゃん。わたし、きっと立派な魔法つかいになってみせる！」

ナシマホウ界での体験の日々は、リコの心身共に成長させ、いつかきっと立派な魔法つかいになると信じている

## 第17話 花まる

十六夜翼、朝日奈みらい、十六夜リコは闇の魔法つかいや悪魔達に對抗すべく日夜絆を深めている

特にみらいはその中でも中心的な存在でいる。

そんな彼女でも時として壁にぶつかり悩む事もある  
そう例えば

「うう〜……」

「みらい、数学26点は酷いぞ」

「だってえ〜……」

学生の自分でもある勉強。特に数学は大の苦手だった。

とはいえ苦手なのは数学のみ。それ以外の教科は天と地の差で良  
く出来ている

「リコは100点で花まるモフー！」

「は〜な〜ま〜る〜！」

逆に、魔法界から此方の世界に来て間もないリコが100点ときた  
「再テスト嫌だよ〜!!」

「頑張れみらい。応援してるぞ」

「翼、貴方も人の事言えないわよ」

リコは翼の答案用紙を開いてそれを見せつける

「30点。赤点ギリギリじゃない!!」

翼も他人事ではない。赤点ラインは30点で翼はそのギリギリの  
ラインの上に立っていた

「赤点ギリギリだなんて殆ど赤点同然じゃない！」

「テストのルールに従い俺は赤点を回避してる。ギリギリだろうが何  
だろうが再テストなんてものは無い！」

「だとしてもギリギリはギリギリよ！よって翼を『馬鹿』と認定します  
〜！」

「じゃあ赤点を取ってるわたしは、ギリギリで取ってる馬鹿な翼君よ  
りも」もつと馬鹿 なんだね……あはは……はあ……」

「あいや、みらいは違うのよ！つ、翼に言ってるのよ！」

「モフルン先生、リコがみらいの事を馬鹿とか言つてイジメてまゝす！」

「その口、今すぐ魔法で喋れなくさせてもいいのよ〜?」

リコは改めて翼の答案用紙を見つめる。何やら不服の様な表情をしている

「翼、もう少し頑張りなさい。貴方なら充分に点数は取れる筈よ」

「お前は俺のお袋か」

その日の夜、再テストに向けてのテスト勉強が始まっていた

リコは復習、はーちゃんは花まる練習をしていた。二人共真面目に取り組んでいる

対してみらいはというと、ちゃんと勉強はしているものの既に睡魔と戦っていた

「みらいー!」

「うえ……はっ!ね、寝てないよ!」

「まだ勉強を始めてから五分も経ってないのよ」

「だって、数式を覚えてもわくわくしないんだもん」

わくわくするしないの問題で勉強をしないのは良くない。

リコもそんなみらいを冷えた目で見つめる

「あ、そういえば!観たいドラマがあったんだ〜!」

なんとかして逃げ場を見つけたみらいは、勉強する机から離れてソファーに座つてTVをつけ始めた

「リコも一緒に観ようよ〜。少女漫画原作の『蝶々さんこんにちは!』だよ!アニメ観てからハマったんだよね〜!」

リコも誘惑して一緒にTVを観れば勉強なんてしなくなる。

そんな作戦だったが、真面目なリコがそんな罠に引っかかるなんて事はなかった

「もう・キュアップ・ラパパー!TVよ、消えなさい!」

すると今回は魔法がととても上手くいって、文字通りTVが一瞬にして消え去った

「ああ!!」

「TVが無くなっちゃった…」

「こ、これは狙い通りだし!勉強が終わったら元に戻してあげる……多分、なんとか出来るよ」

「ええ…」

逆に上手いき過ぎて、リコも本当に戻って来るのかどうか怪しくなっていた

「ならこうしましょう!環境を変えるの!」

「環境を変える?」

「そう。明日翼の家に行つてそこで勉強するの。そうすれば、下手に他人の物を触る事はないし、翼も一緒に勉強出来て一石二鳥よ!」

「でも、翼君も勉強しないとと思うけどなあ」

「そんなの聞いてみないと分からないじゃない。ちよつと電話を借りるわよ」

リコはおぼつかない手で、固定電話を操作して翼の自宅へと掛ける『はいもしもし』

「あ、翼。わたしリコよ。ちよつと明日みらいの再テスト勉強を手伝ってくれる?」

『それ俺の家に来るって事か?』

「ええそうよ。貴方も一緒に勉強出来て一石二鳥よ。どう?」

受話器の向こう側では少し唸り声が聴こえる。どうやら迷っている様だ

『……しゃくまないな。良いぞ来い。住所は分かるな?』

「ありがとう!知ってるから大丈夫よ」

『そうか。あ、それと電話を切る前に一つ……突然、リビングに謎のTV一台が現れたんだが何か魔法でも使ったのか?』

「え!?あゝ……今すぐ持つて来れるかしら?」

受話器から深い溜め息を聴こえた後電話は切られた。しかしそれから数分後には、ちゃんと丁寧に持ち運んでる翼の姿があった

／＼／＼／＼／＼／＼／  
「翼の家ってどんな所モフ？」

「どんな所なんだろうね？」

「ちよつと待って。まさかみらい、翼の家がどんなのか見た事ないの？」

「うん…この前星空見に行った時が初めてだったし、それにあの時は暗くてよく見えなかったしで…」

行った事はあるものの、実質初めて翼の家を目にする。

それもあり、内心みらいはわくわくしていた

そして住所通り辿り着いたのだが、目の前に広がる塀と和風門に呆気を取られていた

「これ、何坪くらいあるのかな？」

「取り敢えず入ってみるモフ！」

門を潜ると、そこにはそれなりの平家が建っていた。

しかし土地が広過ぎる為、そこまで少々歩かなければならない

その広さ約500坪程

「広い!？」

「ちよちよちよりコ広過ぎるよ!!」

「学校と同じくらいあるんじゃないの…?」

やつとの思いで玄関前に辿り着き、取り敢えずインターホンを鳴らしてみる。

すると、ドタバタと大きな足音をたてながら玄関の扉が開かれた

出て来たのは翼なのだが、その姿はエプロン姿に少々白い粉まみれになっていた

「!どうしたの!？」

「あゝそれは——」

「くんくん、翼から甘い匂いがするモフ！」

「そう正解。今クッキー焼いているんだ。勉強前にか休憩の間に食べるかなと思ってな。取り敢えず入れ」

玄関で立ち話も失礼。スリッパを出して家にながらせる

廊下で歩くみらいとリコは、まじまじと置かれてる家具を見ていた



「わあ〜！これ黒電話だ！」

「大きな古時計モフ！」

「みらいの家と違って木製なのね」

廊下だけを見ただけで分かる古き良きレトロな家具。

それは廊下だけでは留まらなかった

リビングへ行くと畳は勿論だが、障子に地べたに置かれる座布団、おまけ程度に置かれてある熊の置物

「クツキーは後15分で出来ると思う。先に勉強の方をしようか」

「流石にTVは、アンテナが付いてるのじゃないんだね」

「それだとTV観れないだろ。台所も機能優先で最新のを使ってる。和風が好きだが程々にしないとな」

それから一時間は経ったくらい。

意外にも、リコの指導の元で勉強会は順調に進んでいた

そして翼に勉強を教えていたリコはある事に気付いた

「翼貴方、わたしが教えなくても勉強出来るじゃない」

リコが適当に出題した数学の問題を、八割正解していた。

とても赤点ギリギリを取るとは思えない

「最低限取ればいいだろう？本気出すなら三年からだ」

「ならみらいを教えるの手伝ってよ。貴方なら楽勝でしょ？」

「…ああ」

スリーマンセルで教えようとみらいへ視線を移すが、その本人が寝息をたてて熟睡していた

「みらいは可愛いな」

「そうね……って違う!!」

／／／／／／／／／／

次の日でもリコは抜群の頭脳で、問題を解いていた。

その事について、みらいは酷く落ち込んでいた

「リコはやっぱり凄いなあ。わたしが解らない問題もビシバシ答えるし、どうやったらあんなに簡単に出来るのかな…」

「え、そうなのか？俺にはそうは思えないけど。この前だって、漢字の読み書きを手伝って言って来たし」

「そうなの!?!」

「知らなかったのか？てっきり知ってるのかと。まあリコの性格を考えれば頼る事すら嫌だろうし、みらいに相談するのも渋るだろうな」「だよね…」

その日の放課後。みらいは共に帰るべく、翼とリコを探して図書室に来ていた

「確かみんなが言うには図書室に居るって……あ」

みらいが見た光景は、翼がリコに勉強を教えている姿だった。

リコは頭を悩ませながら、翼の言う事を聞きつつペンを走らせていた

「随分と慣れたもんだな。もう俺に頼らなくても大丈夫だろう」

「毎日付き合ってくれてありがとう。でもまだまだだよ」

みらいはゆっくりと近付き、リコのノートを盗み見る。

リコが勉強しているのは字の練習だった

漢字や平仮名、カタカナと色んな字を練習していた

「あ、みらい」

「え…わっ!?!」

ようやくみらいの存在に気付き、リコは慌ててノートを隠した

「リコ、字の練習をしてたんだね」

「うん…ナシマホウ界の字は難しくて上手に書けなくて、翼に教えてもらってたの。恥ずかしいわ」

「全然恥ずかしくないよ！凄いよ、こんなに一生懸命努力してて！」

「色々な経験が魔法を成長させてくれると思うの。漢字や化学式、魔

法界には無い科目もいっぱいあるけど全部頑張りたい。無駄な努力なんてない。どんな事でも一生懸命頑張ればきつと自分の力になる」  
みらいの目つきが変わり、翼の隣の席に座って鞆から筆箱とノートを取り出した

「わたしも頑張る。だからそれまで二人共お願い！」

／／／／／／／／

再テスト当日

生徒があまり居ない時間帯にテストが始まる。

そこでリコは提案した。最後にみらいの背中を押すにはどうしたら良いのかと

そして思い付き、翼とリコは体育倉庫前で集まっていた

「ラインパウダーをほうきに仕込んで、空に字を描くのか……出来るのか？」

「やるのよ」

「言い切るか。なら見つかるなよ」

ほうきにラインパウダーを仕込み終え、リコは大きく空へと飛び立って行った

そしてリコは、「みらい がんばって」と描き、みらいに最後のエールを贈った

「上手く出来てたかしら？」

「完璧だ」

二人は、ほうきに仕込んだラインパウダーを叩いている時再テストを終えたみらいが走って来た

「どうだったモフ？」

「まだ点数は分かんないけど、前より頑張れた気がする！」

しかしそんな余韻に浸かるのも無く、グラウンドで大きな音が鳴り響いた

グラウンドでは、ガメッツがリンクルストーンを探すのに地面を叩き割っていた

「辞めなさい！」

「学校を壊さないで！」

「止めたいのならその力で、技で、我に語るのだな！」

「魔法入りました！出でよ、ヨクボール！」

サッカーボールと黒板消しが合わさりヨクボールを生み出した

「さあ、どう出る？」

「こう出るさ！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「ダイヤ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア ！」

「大天翼之劍——侵食率20%！」

「なるほど、今日はその姿で来たと言う訳か。行けヨクボール！」

そんな意味深な事を残して、ヨクボールが襲い掛かって来る

「ヨクボール！」

ヨクボールは片腕の黒板消しは投げ飛ばして来た。

しかしなんの変哲も無い真っ直ぐな攻撃。容易く避けてみせたけれど狙いはそこではなかった

「マジカル危ない！」

黒板消しはブーメランの様にして返って来て、背後からマジカルを攻撃しようとするもミラクルの声でその存在に気付く

だが防御には間に合うかは些か難しい。素早く翼がマジカルの背中に着き、地面から土の拳を作りあげて跳ね返した

「そう来ると思ったぞ」

一人身動き出来ないのを見て、ヨクバールは次の攻撃に移る。

体からサッカーボールを打ち出して来たのだ

「フッ！」

「ハッ！」

ミラクルはマジカルの隣へ立ち、二人でそのボールを蹴り返して防御するのであった。

無数に飛んで来るボールに、防御するだけで攻撃出来ず手一杯

「防ぐのがやっとではないか。貴様らの動きはもう見切った！」

「そうかしら？」

「ならこれはどう！」

「リンクルステッキ！」

二人はリンクルステッキを構えて飛び出し、それぞれが持つリンクルストーンを使用する

「リンクル・タンザナイト！」

リンクルステッキから紫の閃光が放ち、ヨクバールの視界を眩まさせた

「今よマジカル！」

「ええ！——リンクル・ペリドット！」

ペリドットのリンクルストーンで、ステッキから葉っぱの吹雪を出して直撃する

「俺達も行くぞフフ！」

『フフフ！』

「天使魔法——エレメンタルブレイカー！」

四限素と浄化の力を纏った剣がヨクバールを切り裂き、見事浄化させたのだった

／／／／／／／／

「じゃーん！」

再テストの答案用紙が返って来て、その点数にご機嫌だったみたい。

その点数は85点と高得点だった

「今度は丸がいっぱいモフ！」

「朝日奈みらい、再テスト合格しました！100点じゃなかったから花まるは貰えなかったけど」

「でも凄いわ、良く頑張ったわね！」

「85点も取れば充分だ」

「これもリコと翼君のお陰だよ。どんな事でも頑張る姿をリコが見せてくれたから！そしてそれに気付かせてくれたのは翼君！二人共ありがとう！」

そして今回頑張ったのはみらいともう一人

「みらい、リコ、翼。花まる！」

はーちゃんも練習していた花まるを、綺麗に描けていた

「嬉しいー！」

「綺麗な花まるね！」

「はーちゃんも頑張って偉かったな」

その花まるの上に、空から光りが降って落ちて来た。

その光りはやがて小さくなり、みらいの手の平の上に移動した

それは紛れもない新しいリンクルストーン

『『ムーンストーン』。月のリンクルストーンモフ！』

「お月様も花まるくれたわね」

「今日は良いこと尽くしだな」

どんな事にも意味はある。そんな事を知ったみらいだった

## 第18話 ウサギの足

「翼君お邪魔します!」

「あいよ」

「お邪魔するわ」

「我が家に土足で入るなどと、どういう了見だ?」

「ちゃんと脱いでるわよ!!」

校長から連絡があると言って翼の家に来て来たみらい達。

リンクルストーン関連なら、電話程度で済む話なのだが今回は別件で翼にも直接聞いて欲しいとの事だった

リビングに集まりお茶菓子を出しながら、水晶に向かって呼び出された理由を聞く

「校長先生、翼とゲゲにフフもいます。話は何でしょう?」

『うむ。実はじゃな、匿名でじゃがナシマ HOW 界で悪魔が出現するという情報を得たのじゃ』

「悪魔? そんなのゲゲは何も言っていないが?」

『ゲゲ、おいおいまさか気配で探知出来ると思ったのか?』

「違うモフ?」

『ゲゲ、悪魔が出現する時は何らかの現象が起きる。ゲゲ、例えば大量の家畜が死んでるとか、異常気象があるのかな。後は来た証拠として硫黄が残ってるとかよ』

そんな悪魔に関しての豆知識を習ったところで、校長が言っていた「匿名」という人物に気掛かりなりこ

「校長先生、匿名って誰か分からないのですか?」

「馬鹿かお前? 分かる訳ないだろ匿名なんだからよお!」

「馬鹿は貴方よ! 手掛かりを残してるかどうか聞いているのよ!」

『これ二人共』

喧嘩がヒートアップする前に校長が鎮めさせ、二人はピシヤリと言い合いを止めた

『残念じゃが、受け取った情報しか分からない。場所はそちらに伝えるとして、調べるのを頼めるか?』



『フフフ、言われなくてもそれがこっちの役目』

『では、宜しく』

校長との連絡が終わると、悪魔が出現すると思われる位置情報が水晶に送られて来た

「えつと…何処？」

しかしそれだけではよく分からなかった。翼はパソコンを開いて、その場所を検索してみる

すると一軒の牧場が存在する事が判明した

「牧場…なら」

更に詳しく調べる事に。その土地で最近不可思議な事が起こった現象を調べていると、つい一昨日にその牧場で飼育していた牛が、夜の内に半数以上が死んでいたという記事を見つけた

「決まりだな。準備したら出掛けるぞ」

「じゃあ一度家に帰ってほうきとか持って来るね！」

『ゲゲ、リコ坊はオレと残れ。少し気になる事があるから』

「え、でも悪魔が出るならプリキュアの力が必要よ？」

『ゲゲ、二日も前の事件だ。その可能性は低いだろう』

少し不本意ながらもリコはゲゲと一緒に残る事を了承した



その牧場は、ほうきで片道一時間という少し長距離な場所

服も魔法学校の制服に着替えていた。魔法で姿を見えなくする為の処置

「さてと、何処から探索しようか？」

『フフ、王道にいつて中から調べる？』

「じゃあそうしよう！」

牛舎の入ると、飼育されている牛が居るのだがその多くは空きスペースが大半だった

「この空いてる所に牛が居たのかな…」

「だろうな…」

「モフ…モフ？」

モフルンは何か見つけた様子で、みらいの手の中から出て走り出した

「これ何モフ？」

「本当だ。黄色い土？」

地面に落ちていた謎の黄色い土。普通の土にしてもまず色が変わり、そして餌の食べぐさしでもない

『フフ、これ硫黄ね。間違いなく悪魔が絡んでるわ』

「なら、何故此処に現れたのか調べる必要もあるな」

それから暫く牛舎の中を搜索し続ける。こんな辺ぴな場所とはいえ、現れた理由が必ずある

「ん？ねえ翼君、フフ！こんなのが落ちてたけど」

みらいは何か落とし物を見つけて拾った

『フフ、どんな物…!?!』

「うわっ、何だよそれ…」ウサギの足”じゃねえか…」

「え、ウサギ!?!」

みらいが見つけたのは、ウサギの足のキーホルダー。翼とみらいは嫌な目をして引いていたが、フフはそれとは違った反応をした

『フフ…何でこれが？でもこれが本物だしたら、悪魔の狙いは——』

フフがぶつぶつと呟いて考えてると、牛舎の窓を突き破って三人の男性が現れた

「モフ!?!」

「そいつを寄越せ」

男達の目が黒くなった。最悪な事に悪魔が三人も現れた

「みらい、モフルン下がってる!」

「だいてんよくのつるぎ大天翼之剣——侵食率20%!」

突然の襲来だったが、翼は冷静な判断で対処をすべく動く。

無謀にも突進して来る悪魔を横ステップで避け、ガラ空きとなつてる脇腹に大天翼之剣を容赦無く刺し殺した

(まず一人)

二人目は天使魔法を使つて、足場の土で襲い掛かり練り固めた

「ッ!!」

動けなくなつたところに力強く剣を突き刺す。悪魔は絶叫を上げながら死んでいく

「……」

死んでいく悪魔を見て少し違和感に気付いた。

人を刺し殺すのに抵抗が無くなつてきた

乗っ取られているとはいえ、酷使されてない限り中の人間は生きてる。

それなのに無慈悲に剣を突き立てる

「翼君助けて!!」

が、今はそんな悠長に考えてる暇はない。リコがいないみらいは、プリキュア に変身出来ず只の女の子

「みらい!」

悪魔の背後から斬りかかるがあっさり避けられる。

しかし避けてくれたお陰で、みらいを背にして戦える

「うわっ!」

けれど、悪魔の念力で弾き飛ばされて壁に激突する。

更にはその拍子で大天翼之剣も手離してしまい、みらいの足元に転がる

「翼君!!」

翼が心配で側に駆け寄ろうとするも、すぐ目の前には悪魔がいる。

みらいは落ちてる大天翼之剣を手に取り、悪魔に向けて切先を突き付ける

しかし恐怖で震える手が、剣を揺らして狙いが定まっていない

「寄越せ!」

「ッ!!」

悪魔が近づこうとした時だった。悪魔は牛糞で足を滑らせて、自ら

大天翼之剣に突き刺さりに行く様な形で転けた

「おグウ!？」

大天翼之剣が心臓を貫き、自滅という形で悪魔は倒された

「みらい大丈夫モフ？」

「う、うん…」

血が滴る大天翼之剣を見て青ざめていた。悪魔とはいえど、人をこの手で殺めてしまったのだ

「みらい、剣から手を離せ」

みらいから強引に奪い取り、なんとかして心を落ち着かせようとする

「仕方ない。みらいは何も悪くないんだ。気にするな」

「あ…うん」

「取り敢えず此処から離れるぞ。人に見つかったら言い訳も出来ない」

急いで牛舎を後にして、ほうきで牧場を後にした。

その際、家に居るリコ達にも連絡をするのだった

／／／／／／／／／／

『ゲゲ、目ぼしい情報はないな』

「悪魔なのによくやるわ」

残ったリコとゲゲは、パソコンを使って悪魔がその牧場に来た理由を探していた

『ゲゲ、逆に聞くが、リコ坊はパソコン使えないのか？』

「へえ!?!で、出来るし!」

『ゲゲ、まあそれは置いといてだな…周辺地域にも変な事は起きてないしな』

すると十六夜家の電話が鳴り響く

『ゲゲ、多分ツバサだな。リコ坊代わりに出てくれ』

「ええ」

廊下に出て、受話器を取って受け答えをする

「はいもしもし」

『フフ、リコ子ね。ゲゲは?』

「ゲゲならパソコンを弄ってるわよ?」

『フフ、なら急いで一緒に来てちょうだい。緊急事態よ。フフ、ゲゲにウサギの足と伝言をしておいて』

そう言つて、フフは一方的に喋っては切った

「ゲゲく、フフから電話で一緒に来てだつて!」

『ゲゲ?』

「ウサギの足がつて言つてたけど何か知ってる?」

『ゲゲ!?それ本気で言つてんのか!?』

ウサギ足という単語を聞いただけでゲゲは血相をかく

『ゲゲ、急いで行くぞ!!』

それから30分以上の空の散歩を二人でしに、ようやく翼とみらいと合流した

「なあいい加減教えろよ。ゲゲとフフだけで話を進めるな」

「あ、喉渴いたから何か飲み物買って来るね!」

急にみらいがそう言い出して、近くの自販機へと歩いて行く

それを見届けて、ゲゲとフフは口を開く

『ゲゲ、ウサギの足つてのは、呪いの品だ。しかもかなり強力な』

『フフ、手に持った者に絶大なる幸運をもたらす品』

「幸運?」

『ゲゲ、アレを持つてるだけで悪魔はおろか、エメラルドだつて容易く見つかるくらいの効果だ』

「そんな事ある訳ないわ。たかがウサギの足のキーホルダーを持ったくらいで——」

「皆んな凄いモフ!」

「見て見て!買う度に自販機でアタリが出たの!ほら!」

みらいの両腕にいっぱい缶ジュースがあった。

恐らく調子に乗つて買つては、言った通りアタリを引いたのだろう

「き、きつとみらいが何らかの魔法を使ったに違いないわ！ダメよみらい、魔法を悪用したらー！」

「ダメエが言うな」

「あとそれとね！いちごメロンパンの移動販売もしててね、立ち寄ったら色々とおまけしてくれたのー！」

缶ジュースの他にも紙袋が握られており、中には全員分のいちごメロンパンが入っていた

「…どうやら本物らしいな」

「じゃあ、出来なかった魔法もこれを持って使えば！」

『ゲゲゲ、まあ出来るんじゃないのか？』

「嘘お…」

呪いの品とはいえ、そんなキーホルダー持っただけで魔法が使えるなどと、リコからしたら理不尽極まりない

「それだと幸運の品だぞ？どこに呪い要素があるんだ？」

『ゲゲ、問題はそのウサギの足を失くした時だ』

『フフ、失くせば幸運だったのが逆に不幸になり、最終的には死ぬのよ』

「え、何もそんな大袈裟な…」

「そうよ。それに、失くさない様にちゃんと持てば大丈夫よ」

翼とリコはそれが一番妥当だと思うが、ゲゲとフフは全くもってそんな楽観的な考えではなかった

『ゲゲ、悪いが絶対に失くすんだよ。どんなに大事にしようと必ずな』

「ねえ、皆んな何話してるの？」

殆ど蚊帳の外状態だったみらいが、痺れを切らして話の輪に入ろうとする

「ねえみらい、あのウサギの足は何処にあるの？」

「あくそれならポケットの中に……あれ？」

ポケットの中に手を入れると、底に穴が空いていてウサギの足が無かった

「みらい!？」

「あ、あそこだ!!」

翼は落としたウサギの足を見つけた。しかし落ちてる場所がグレーチングの上

「わたしが取りに行く！」

そう言っではーちゃんが取りに行くも、それをゲゲが取り押さえる  
『ゲゲゲ!?ダメダメ!!』

「わたしが取りに行くよ……プギヤ!?!」

代わりにみらいが取りに行こうとしたのだが、段差に躓いて目の前で転けてしまった

しかもウサギの足は、転けた振動で落ちてしまった

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!」

「みらい大丈夫!?!」

「痛たた……」

翼は絶叫し、みらいは転けた拍子で両膝を擦りむいていた

「ちよつと翼、みらいを心配しなさいよ！」

「なら落ちたウサギの足を心配しろよ！」

翼はグレーチングを持ち上げて確認する。不運な事に、水路は水が流れておりそのまま下水道へと流れて行くのが見えた

すぐさま近くのマンホールを持ち上げて飛び込もうとするが、下水道の中は汚いということを思い出して一瞬動きを止める

「みらいのため、みらいのため……取りに行く！フフ来い！」

みらいの為に自己暗示してから、翼とフフは下水道の中へ突入し、暗闇の中へと消えて行った

『ゲゲ、リコ坊、モフ坊、はー坊集まれ』

ゲゲを中心に皆んな集まって、みらいの今後の対応について話をする

『ゲゲゲ、いいかお前達、みら坊は今ウサギの足を失くして不幸に陥ってる。これから幾度となく死に直面するだろう。ゲゲ、だから絶対にみら坊から目を離すなよ』

「分かったわ」

『ゲゲ、よし』

全員がみらいへと向き直るが、首を傾げなくなる光景になっていた

みらいは涙目になってスカートの裾を掴んで立っていた  
「…靴無くしちゃったよお」

みらいの足を見ると、両方の靴が無くなっていた。  
話し合う前までは確かにあったのだ

全員が目を離れた隙に何が起きたのか分からないが、原因はウサギ  
の足による呪いだろうと察する

始めは両膝の怪我、次に靴を無くす。

不幸の質はまだまだ程度が低いが、この調子で不幸が続くと数時間  
後には本当に死んでしまう

「分かったモフ！みらいを家から一步も出さないで、翼が帰って来る  
のを待つモフ！」

「それ良いわね！みらい帰るわよ」

「うん——」

返事をした途端みらいが消えた

「へ？」

『ゲゲ、あそこだ！』

何処よ何処よ探していると、黒塗りの車がみらいを連れ去って行った

これは紛れもない誘拐事件

／／／／／／／／

「うう…」

目が覚めるとそこは倉庫の中。目の前には男性二人  
椅子に縛られて身動きが出来ない状態に陥っていた  
「なあ嬢ちゃん。家の電話番号を教えてくれないか？」  
「どうする気なの？」

「分かってるだろ？俺達が欲しいのは金。身代金だよ」  
「だからよお」

「嫌だ！」

みらいの性格なら当然の返事

その強気な言葉は男達を駆り立たせる



「ヤつちやう?」

「だな」

男達がみらいに迫り来る時、倉庫の扉が大きな音を立てて破壊された

「み、見つけた!!」

へドロだらけで悪臭を撒き散らしながらも、翼がみらいを救いに駆け付けた

「翼君!」

「坊主。正義の味方気取りも程々にした方がいいぜ?」

「テメエら如き、このペットボトル一本で倒す!」

「やれるものならやってみろ!」

一人突っ込んで来るのを見て翼は、ペットボトルを軽く転がした  
「フツ!こんなもんでえええ!」

男はペットボトルを踏んでしまい盛大に頭から転けて気絶した

「お前!」

殴つて来るも翼は最小限の動きだけで避け、転がしたペットボトルを回収する

激怒する男はナイフを取り出した

「舐めた真似をおお!!」

ナイフを振り翳して来るが、翼はペットボトルで対抗して

「何!」

ナイフの刃を折ってみせた

「ほらよっ!」

ペットボトル投げ、男の眉間に見事当てて後ろへと後ずさる。

そして倒れてる男に躓いてそのまま、背中から転倒

「え?え?本当にペットボトルだけで倒しちゃった」

「秘密はコレだ」

懐から失くしたウサギの足が出て来た。ペットボトル一本で何とかしたのは、ウサギの足の幸運による力だった

「ラッキーボーイってな」

／／／／／／／／

「本当にこんな所でやるの?」

ゲゲとフフに言われてやって来たのは墓地。そこで火を焚、骨灰と粉末とうがらしを墓場で燃やし、その中でウサギの足を焼き始めた

『ゲゲ、これで呪いは消えた。お疲れ様ってな』

「それにしても大変だったわ。あと翼臭うわよ…」

「しようがないだろ! リコにウサギの足の処分を任せたら、手離れた俺まで不幸になっちまう!」

「翼君!」

「何だ!?!」

リコの言葉にイライラしてる翼に向けて、みらいは笑顔でこう言った

「助けてくれてありがとう! にひっ!」

「みらいの為なら何だってやるよ」

「……」

翼とみらいのやり取りを見て、リコは少しムツとした。

それは自惚れる翼を見てイラツとしたのか、はたまたみらいが翼に優しくしているのか

この気持ちは何なのか、リコはまだ知らない

「あ、でもリコの言う通りちよつと臭いね」

「さっきの言葉返せ」

「さっさと帰るの! 臭いんだから!」

翼の尻を蹴飛ばしながらも、リコ達はそれぞれの家へと帰るので

あつた

## 第19話 七変化

「翼、あくそくぼく！」

「その声ははー…ちゃん？」

学校へ登校中、突然上からはーちゃんの声が見上げて返事をしたのだが、その姿に驚き言葉を失くしてしまった

それはいつもの姿ではなく、赤いドラゴンの様な姿をしてるはーちゃんだった

((まるで意味が分からん))

「あれ、そういえばみらいやリコはどうした？」

はーちゃんのインパクトのある姿で気付くのが遅れたが、お世話をしてる筈のみらい達の姿が見えなかった

「知くらない！」

『ゲゲゲ、何かやらかしたみたいだな』

みらい達の名前を出すと、頬を膨らませてプイツと顔を背けて不機嫌になる

普通なら、はーちゃんを保護した後みらい達に届ければそれで済む話なのだが、恐らくそれで済むならこんな面倒な事にはなっていない理由は判らないが、ここははーちゃんの気持ちを尊重して自分でもかしようと決めた

と、いうのは半分。翼の狙いは

「分かった。遊ぶけど学校で探険しながらはどうだ？いつもスマホンの中に居るから、学校がどんな所かあまり知らないだろ？」

狙いは、学校で遊ばせればみらい達が駆け付けてくれる筈と読んだこと。

恐らく、今もはーちゃんが居なくなった事で心配はしてると思うだからそれまでは、はーちゃんの自由にさせ、見守るという事にした

「うん…じゃあ早く行くこう…ひつくー！」

はーちゃんがしゃっくりをすると、突然姿を変えてドラゴンから雷様の姿となった

『フフフ、これで本当に良いのかねえ?』

／／／／／／／／／／

「はーちゃん大丈夫かなあ…?」

我が子の様に心配するみらい。学校へ着いても、その姿を発見出来ず焦る気持ちが溢れ出る

「何処に行ったのかしら…?」

「モフ…」

リコとモフルンも教室の窓から見渡すも、はーちゃんらしき影は見当たらない

そんな時授業開始のチャイムが鳴った。流石に授業を抜けるのはマズい為、みらい達は気が気でない気持ちを抑えながら着席する

ふと、リコは隣の翼の席へ目を向ける

(翼も何処に居るのよ…)

未だに出席していない翼も気になる。こんなにも心配するのは、ナギとの件での出来事がきっかけ

いつも近過ぎず、離れ過ぎずの距離を保っていたのだが、何の連絡もして来ない様子から嫌な事を想像してしまう

「はーちゃん、翼…」

一方で、そんなみらい達の心配を知らずの翼達は学校の敷地内を渡り歩いていた

「さて、何して遊ぶか」

「鬼ごっこ!翼が鬼だよ〜!」

「え、あ、はーちゃん!?!」

唐突に始まった鬼ごっこに戸惑ってる隙に、はーちゃんは何処かへ飛び去って行ってしまった

『フフ、追うわよ!』

だが、空中を飛び回るはーちゃんを捕まえるとなると至難の業。

ただでさえ捕まり難い空の上に、小さな体で縦横無尽に飛び回るのだ

少し目を離れた隙に見失ってしまった

「うわマズい！ゲゲ、フフ、分かれて行動だ。頼んだぞ」

学校中を駆け巡りはーちゃんを探すのだが、それと同時に小さな妖精の噂も耳にする。

「どうやら、全校生徒にはーちゃんの姿を見られているらしい

色んな場所で宇宙人、鳥、狼、人魚、花といった目撃情報が飛び交う。恐らくそれは、はーちゃんが行く先々で姿を変えた結果なのだろう

「はあ…流石にはーちゃんを探すのは苦勞する。ゲゲ達は見つけたのか…：…あれ？」

膝をつけて休憩していると、目の前でゲゲとフフが一緒になって飛んでいるのが目に入った

「ゲゲ、フフ！」

『ゲゲ、丁度良かった。あそこだ』

ゲゲが指差す方向の空には、ユニコーンの姿で街の方へ飛んで行くはーちゃんが居た

『フフ、流石にこれ以上の騒ぎはマズいよ』

「やんちゃな娘を捕まるぞ」

「確かこっちの方向に…：…げっ!？」

「あ!!」

翼が走る先でみらいとリコに出会した。

はーちゃんと遊んで見失つと二人に知れば、怒られるのは間違いない

「お父さんが来たモフ」

「お、お父さん？何の話だ？」

「モフルン達のはーちゃんのお母さんなら、翼はお父さんモフ！」

「それは良かったな。ところで皆んなは何でこんな所に？」

「はーちゃんを探してるモフ」

その言葉で翼達三人はビクついた。翼達の不行き届けがバレたのかと

「翼君も手伝って!」

しかしそれは思い違いだった。どうやら、みらい達は翼達がはーちゃんを探してる事を知らなかった様だ

「お、おう。そういう事なら手伝う」

(誤魔化したな)

知らない事をいい事に、まるで今知った素振りで見らい達と共に捜索を開始する

「それより翼、今日何で学校へ来なかったの?朝からはーちゃんも居なくなつて、翼も居なかつたから心配したのよ。わたしはてつきり、翼の所にはーちゃんが居るのかと思つたの」

「……さつさとはーちゃんを探すぞ。あっちの方へ行くのが見えた」

「ちよつと……ん?何ではーちゃんが居る場所を知つてるのよ?」



「この路地裏だ」

街中のとある路地裏。遠目だったが、そこではーちゃんの姿を最後に目にした

「ねえ翼、何ではーちゃん場所が分かるのよ……もしかして翼が学校に居なかつたなつて——」

「うっせえぞ!誰にでも失敗はあるんだよ!」

「やっぱり一緒に居たんじゃない!そんな大事な事を隠すなんて最低よ!」

「まあまあ二人共落ち着い……あ、はーちゃん!」

仲裁に入ろうとしたみらいだが、ふと上を見上げると建物の上にはーちゃんを発見した

けれど不運な事に、スパルダに捕まって囚われの身となっていた  
「はーちゃんを離しなさい!」

「離しなさい！」

「モフ！」

「おやプリキュア。この妖精はアンタ達の……なら離してやるよ！」

スパルダははーちゃんを投げ捨て、建物の屋上に蜘蛛の糸と共に張り付けてた

「こつちだつて、手ぶらで帰る訳にもいかないから……覚悟しな!!」

「魔法入りました！出ですよ、ヨクボール！」

「ヨクボール!!」

バナナの皮と電柱を使ってヨクボールを生み出した。

微量ながら、頭部のバナナの皮から電気を帯びている

「行くぞ！」

「「うん！（モフ）」」

「「キュアアップ・ラパパ！」」

「「トポーズ！」」

「「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア ！」」

「煉魔之刀剣——侵食率35%！」

「行けヨクボール！」

「ギョイ！」

向かって来るヨクボールを三人は高く飛んで避け、ミラクルとマジカルは光の球をトランポリンの様に柔らかくして足場を作り、そこから勢い良く飛び出して蹴りを放つ



ヨクボールはバナナの皮で二人の攻撃を受け止めた。更にその皮には秘密があった

「滑って…きやつー!」

防御するだけではなく、バナナの皮の表面の滑りやすさを利用して受け流した

「ミラクル!」

翼とマジカルが、ミラクルの両手を取り落下する前に助け出した

「ありがとう二人共!」

『ゲゲ、お礼なんて言ってる暇ないぞ!』

追撃を仕掛けて来るヨクボール。バナナの皮を高速回転させ、触れれば電撃の餌食にもなる

「因果斬り!」

即座に斬撃を放ち対抗した。ヨクボールに直撃し、大きく仰け反るが大したダメージが与えられなかった

「ヨクボール?」

けれど代わりに、皮の滑りと電撃は掻き消した。これで攻撃は通る様になった

「フツ!」

光の球の形状を変化させ足場にし、空中で勢いのついた同時攻撃でヨクボールを地上に落とした

『ゲゲ、ツバサ捕まえるんだ!』

翼は煉魔之刀剣を鞘に収め、地上に降りてヨクボールの体を掴んだ。

ヨクボールも引き剥がそうと暴れるも、踏ん張りを効かせる翼に手こずる

「ヨクボール何をやってる! ささつと引き剥がし…! しまった!」

翼がヨクボールを押さえ付けてる間に、ミラクルとマジカルは赤ちゃんを助け出して、スマホンの中に避難させていた

「ミラクル、マジカル…! 後は任せたツ!!」

ヨクボールを持ち上げ、そのまま回転してミラクルとマジカルの方  
向へ投げ捨てた

「リンクルステッキ！」

「トポーズ！」

「金色の希望よ！私たちの手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア・トポーズ・エスペランサ！」

／／／／／／／／

公園では、みらい達とはーちゃんが対面して気まずい雰囲気を出していた

「皆んな、ごめんなさい…」

「ごめんなさい（モフ）…」

そして何故か、迷惑を掛けたはーちゃんだけではなくみらい達も謝罪の言葉を言った

「え、何で？」

「わたし達反省したの。はーちゃんのお話ちゃんと聞いてあげれてなかったって」

「はーちゃん許してくれる…？」

「許してモフ…」

「…はーちゃん、ご飯食べてお散歩したかったの。でも、皆んな構ってくれなかったから一人でお出かけたの…ごめんなさい！」

四人は自分達の事を改めて見直して、それを踏まえて反省した。軽い喧嘩みたいな事は有りはしたが、それが自分達の繋がりをより良いものとする事となった

「翼もごめんなさい。学校にも行けなくて…」

「別に構わないさ。俺だってはーちゃんを見失った責任はあるしさ」

「へえ、やっぱりはーちゃんと一緒に居たんだ」

肩をがっしりと掴まれ、笑顔で迫るリコに目の下をヒクつかせる

「わ、悪かったって！ほら、ごめんなさい！ごめんな…」

適当に謝って切り抜け様とするが、途中翼はリコを見つめながら考え始める

「『ごめんなさい』、か……」

「何よう？」

「…何でもない。それより学校の方は大丈夫か？」

「…あ」

学校では大きな騒ぎは起こってはいなかったが、代わりに「幸せを運ぶ妖精」という噂が暫く飛び交うのであった

## 第20話 一通の手紙

「違う、こうでもない……うん……」

『ゲゲ、何やってんだアイツ?』

『フフ、ずっとあの調子よ』

ゲゲとフフは、机で項垂れてる翼を見て首を傾げていた

翼は今何か手紙らしき物を書いてはいるが、その内容が気に入らないのか書いては捨てての行為を繰り返していた。

お陰でゴミ箱の中身は紙で溢れていた

／／／／／／／／／

「皆んなおはよう!」

「おはようございます」

いつも通りの朝で、みらいとリコは教室に入って元気な挨拶をクラスメイト全員に向ける

二人が教室に入るのを見て、壮太はすぐさま声を掛けた

「なあ、翼と何かあったのか?」

「え?何も無いと思うけど」

「何かあったの?」

「実は……」

壮太は席に座ってる翼に目を向ける。

そこでは、手紙を黙々と書いては捨ててを繰り返す姿があった

「おはよう翼君……翼君?」

挨拶を試みるも全く反応が無い。というより気付いていない

「翼?」

「あ?……うわっ!」

リコが目の前に顔を出して呼び掛けてようやく存在に気付いたのだが、翼からしたら突然目の前に現れたと思いきや椅子から転げ落ちてしまった

「ビックリしただろ……」

「大袈裟ね。ね、ところで何を書いていたの？翼にしては真剣に書いてたけど…」

リコが机に置かれてある紙を手に取りろうとした時、それを取られない様に引ったくった

「見るな…」

「手紙ならわたしも考え——」

「これは大事な手紙なんだ！余計な事はするな!!」

息を荒げてそう言われた。リコも大事な手紙と言われたら、これ以上何も言えなくなり黙ってしまった

「…後で説明するから」

翼はもう一度座り直したが、今度は周りに見られない様に腕を使って書き始めた

「邪魔しちゃ悪いし席に着こ？」

「う、うん…」

それからというものの、隣の席であるリコは翼の手紙の内容が余計に気になり目が離せなくなる

覗き見しようともものなら、余計体を縮こませたりする。

休み時間も場所を変えたりと、極力一人になっていた

はーちゃんのお世話も兼ねて体育館裏に来た時、その事についてゲゲとフフにも尋ねてみる

「ゲゲ、フフ。翼の様子がおかしいのだけど何か知らない？」

「リコ、あまり聞かない方がいいと思うけど。翼君にだって手紙の一つや二つくらい書きたい時だってあるし」

『ゲゲ、そう言われてもなあ……昨日から一睡もせず書いてるのは知ってるけど』

「一睡も!?!」

よくよく思い返せば、確かに朝から顔色が悪い様に見えた。

目の下にはクマが出来ており、げっそりとした表情をしていた。声にも覇気が無かったりと

『フフ、内容までは知らないけど相当悩んでるわよ。ワタシが予想するに……フフ、ラブレターだったり?』

「ラブ!？」

「レター!？」

『フフ、あれはきつと恋に違いない!』

『ゲゲ、ツバサが色恋沙汰に興味あると思うか?』

『フフ、人生何が起こるか分からないから面白いじゃないの。ワタシ達がそうであるように』

そんな大人の話をするみらい達に、はーちゃんは首を傾げて意味を聞き始めた

「ねえ皆んな、『恋』ってな〜に?」

「恋って言うのは、人を好きになることモフ!」

「じゃあ、はーちゃんも皆んなに恋してるんだね〜!」

『フフ、少し違う気もするけど……フ、ツバサ?』

フラフラとおぼつかない足取りで、翼がみらい達の元へとやって来た

「や、やっと見つけた……リコちよつといいか?」

「え、え? わたし?」

言われるがままついて来たリコ。この場は学校の屋上なのだが、居るのは翼とリコの二人つきり

みらいやゲゲ達は来ないようにさせた。それは翼が望んだこと

「それで一体?」

「実はお前に渡す物があるんだ……コレ」

差し出したのは封をしてある一枚の手紙。

リコは先程の会話のやり取りを思い出す

『——フフ、ラブレターだった?』

「ツ／＼／」

その瞬間、一気に顔の熱が高まるのが分かった。それと同時に緊張も走り出し、色んな考えが脳内を駆け巡る

(落ち着け、落ち着くのよりこ。よく考えてみなさい。これまでの事から察して、これは多分予行練習よ…そう予行練習！本命は他の子、何も緊張する事はないわ！さあいつでも来なさい！魔法界で優等生のこのわたしに掛ければ、告白の練習なんてちよちよいのちよいの楽勝もんよ！え、ちよつと待つて…練習でもわたしに告白するのよね？あ、何かそう思うと緊張して来た。い、いや、何翼相手に緊張してるのよ！翼とは”友達”の関係よ！そんな深い関係なんて有り得ないわよ。だつてそうじゃない。翼本人だつて言つてたじゃない『俺はお前の事が嫌いだ』つて。あ、でもその後で褒めてくれてた様な…：て、何こんなにも悩んでいるのよわたし！わたしはあくまで練習相手、そこが一番重要よ。普通に相槌で返せばいいのよ。フラれた時のパターンと成功パターンの…：それつて告白を受け入れるつて事よね！『好き』つて言葉にわたしが『はい』つて返すの！？無理無理無理！そもそも何でわたしを練習相手にするのよ？相手ならわたしに限らず周りに沢山居るじゃない。まゆみや勝木さん、壮太だつているのに…：みらいだつているじゃない！相手を選ばないのであればモフルンやはーちゃんだつて！わたしを選んだ理由が分からないわ…：そうよ分からないなら聞けばいいじゃない！何でこんな簡単な事に気付かなかつたのかしら？全くわたしつたらダメね、いつもそう。知らない事は聞くのが一番よ。それが立派な魔法つかいになる為の近道！さあ聞くわよ！聞いてやるわ！覚悟しなさい…：の前に一度深呼吸しないで。言葉を詰まらせたなら気不味くなるもの。本番でもこうやつて不意打ちで聞かれるかも知れない。こんな考えに至るなんてわたししかいないわ！フフン、わたしが練習相手だつた事を感謝して欲しいわ！もしみらいだつたら、気付かなくてそのまま一言返事で返してそれ終わりになつちやうもの！ありとあらゆるパターンを考え、本番に備えさせて心に余裕を持たせるのも練習相手の役割よ。わたしが軽く助言すればイチコロよ！恋に落ちる事間違いないよ！よし！そろそろ練習を始めるわよ！カウント三秒前…五秒前がいいのかな？それとも十秒？かなり余裕を持つて一分？それとも『せくの』の掛け声の方がいいかしら？でもでも、人によっては、タイミングが合わ

せづらいかも知らないし……あくもう！いつまでも悩んでもしよ  
うがないわ！一気に行くわよ一気に！行くわよりコ！頑張れリコ！  
負けるなりコ！気合いよりコ！深く息を吸って……いっせえくのツ  
ー

長い長い長考から帰って来たリコは、深呼吸してから纏まった考え  
を翼に言った

「この手紙は何かしら？」

「……恥ずかしいが開けて読んでも構わない。お前に宛てた手紙だから  
な……内容はアレだが一応込めて書いたやつだ」

「そ、そうなんだ……あはは」

予想外の返しにリコの脳内は再度駆け巡る

（あくれえく？おかしいな？今翼、わたしに”宛てた手紙”って言い  
ましたよね？え、何？この告白ってまさか……まさかまさか!!?）

頭から煙が立ち上がり背中を向けて顔を隠そうとする

（告白の練習と思っていたけどそれは勘違いで、わたしに宛てた手  
紙っていうのがラブレター!?ううくどうしよう……そんなの聞いてな  
いし、心の準備なんて尚更出来てないわよ！急過ぎるわ！そもそもわ  
たし、翼の事なんて嫌いよ……でも、付き合ったらそんな気持ちも少  
しは変わって好きになっていくのかな……なんて思ったり?）

ともかく、もう一度翼の方へ振り返る。少し緩む頬を何とか戻すせ  
いで、絶妙な表情となっている

側から見れば嫌々相手をしてる様にも見えてしまう

「あ、開けるわよ」

ドキドキする気持ちを全身で感じながら、封を切って中身を確認し  
ようとし時だった

「この様な場所では会おうとは奇遇ですねプリキュア」

声のする空へ見上げると、バツティと脇には縄とホッピングを合わ  
せたヨクバールが居た

「プリキュアに変身……っていない!?!」

プリキュアに変身しようとするも、みらいとモフルンがいない。

更に言えばゲゲとフフもない



戦える手段をどちらも持ち合わせていない

二人に残された選択肢は一つ

「逃げるぞ」

「あっ！」

リコの手を引いて扉へと駆け出すが、それよりも先にヨクボールが回り込んだ。

逃げ場はその扉一つしかない

他にあるとすれば

「……」

視界に映るのは屋上の手すり

そこへ猛ダツシユする

「何処へ逃げてでも無駄ですよ」

「無駄だろうな。俺だけは」

「——え」

「リコは魔法つかいなんだ。ほうきでひとつ飛びすれば、こんな状況くらい切り抜けられるだろう。そしてみらいと合流してプリキュアに変身すれば」

「中々理にかなったこと。ですが、そうやすやすと逃しませんよ！ヨクボール！」

「ギョイ！」

体の一部である縄を大きく振り回して叩いて来る

上か右か左か何処へ逃げてでも無様に食らってしまうのがオチ。

ならばいつそのこと

「受け止めてやる!!」

体全体で縄を受け止め、全体重を乗せて踏ん張ってみせた。

相手の力に対して、よく吹き飛ばされなかったと思う

「リコ逃げるんだ！」

「で、でも！」

「いいから……うわっ!?!」

掴んだ縄は酷い事に翼を軽々と持ち上げて振り回す。

当たり前と言えば当たり前だ。どんなに力を入れたとしても、人間

の全体重程度の力などヨクパール相手には通じないのだから

こんなピンチな状況でも、翼はリコの事が心配でならなかった

「早くみらいの元へ行くんだ！」

「それだと翼が——」

「い——」

中々飛び立とうとしないリコに最後の言葉を投げようとした時、手に力が抜けて屋上の外へ投げ出された

完全に宙へ放り出された翼。このまま地面へと落下すれば命を落とす

なのに翼が思う事はただ、あまりにも楽観的だった

(人生って案外呆気ないもんだな)

ゆっくりと落ちて行くのが分かる。しかし、そこからどうする事も出来ない

奇跡など起こる訳がない。魔法こそ使える筈もない。パートナーが居ないと空すらまともに飛べやしない

だけど、それでも

「——翼!!」

友達も居た

リコは屋上から身を投げ出して、落下する翼の手を掴んでみせた  
魔法の杖やほうきなんて物は使ってない。自分の身など顧みずその手を掴んだ

しかしそれは勇気とは言えない。無防備と言うものだ

「キュアアップ・ラパパー！」

けれどそんな無防備から這い上がる力さえ持ち合わせていれば、それは無防備な行動ではなく勇気ある行動へと変化する

「ほうきよ、飛びなさい!!」

魔法の言葉を唱え、ふわりと浮かび上がるほうきだが落下速度の方が速い

「——ッ!!」

気合いでほうきを起こし上昇させようと操作し、地面スレスレの所でほうきは飛び上がった

「ふう…危機一髪ね。もう無茶をする!」

「その言葉、そのままそっくり返す。ここからどうする?」

翼もほうきに跨って体勢を整えたのはいいが、ここからどう巻き返すか考えていなかった

「リコー!翼くん!」

運はまだ見放していなかった。

騒ぎを聞き付けたみらいが、ほうきに乗って屋上まで飛んで来たのだ

「良かった!二人共大丈夫そうで!」

「行くぞ皆んな。反撃開始だ!」

「キュアアップ・ラパパ!」

「ルビー!」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!」

「だいてんよくのつるぎ大天翼之剣——侵食率30%!」

「クツ:ヨクボール!」

「ヨクボール!!」

ヨクボールはホッピングの特徴を活かしたジャンプ力で、翼やほうきに乗るミラクル達の所までひとつ飛びする

同時に正面四つの縄も襲い掛かって来る

「ここは任せて——リンクルステッキ！」

ほうきから飛び降りながらマジカルが飛び出した

「リンクル・ムーンストーン！」

満月型のシールドが幾つも展開し、ヨクバールの攻撃を全て防ぎ切った

「ミラクル行け！」

「やああ!!」

翼がミラクルを投げ飛ばし、勢いのついた拳がヨクバールの顔へと減り込んだ

「ヨクバ!」

「まだまだ!」

マジカルが先行し、その後に翼とミラクルと続いて接近戦へと持ち込む。

しかしヨクバールも負けてばかりではない。すぐに立ち上がっては、ジャンプして拳や蹴り、剣の攻撃をかわしていく

ジャンプで間に合わない時は、数少ない屋上の建物を縄で掴んで利用して回避する

「ヨクヨク!」

先程まで殴られたとは思えぬ余裕の笑い。調子に乗っているのが目に見えて分かる

『フフ、それが命取りとなるのよ』

「ヨク：ヨクバール？」

ジャンプしていたヨクバールの動きが突然止まって棒立ちになった。

足元を見れば、ツタが張っておりヨクバールに巻き付いていた

「動きながら種を撒いていたんでな。気付かなかったのか？」

大天翼之剣の剣先から、屋上全体へ種を出していた。

地面ならともかく、コンクリートと上となると気付きやすいと思われたが、ヨクバールはそれ程まで油断していたのだ

絡み付くツタを振り解こうとするも、今更もう遅い

「行くわよミラクル！」

「うん！」

「ルビーー！」

「紅の情熱よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ルビー・パッションナーレ！」

／／／／／／／／／

「リコ、手紙を開けてくれ」

「え、ええ!?今!?!」

「今」

「此処で？」

「此処で。別に家に帰ってからでもいいが、別段此処で開いても変わらないと思うが?」

先程までと違って、みらい達が隣でまじまじと見ている

「ほ、本当に此処で開けて良いの?」

「その方が俺の気持ち伝わると思うが…」

「大胆！大胆だよ翼君！」

『フフ、はいはいみらい子。リコ子が恥ずかしがるから煽らないの。少し離れましょう』

フフに連れられて、みらいは離れた場所へと移された。

リコはそれを見て少しホツとする

何せ今持っているのは自分に宛てたラブレター。

いくらみらいでも、デリカシーというものを知って欲しい

リコは潤んだ瞳で封を開けて中身を取り出す。

ドキドキは最高潮に達しており、頬を赤く染める

(ど、どんな内容かしら?翼の事だしストレートな内容なのかも。でも案外遠回しな文章かも知れないわ。でもどんな内容でも嬉しいわ。

だつてきつと、わたしはそれを受け入れるに違いない。で、でも少しは返事に時間は欲しいわね！そうねそうしましょう！敢えて、そうあ・え・て返事を遅らせるの。別に、わたしがこの場で言うのが恥ずかしいとかそんなんじゃないんだからね！)

そんな脳内乙女爆発なりコは中の手紙を開いた

その内容は

『ごめんなさい』

「???

脳内が乙女のお花畑から一転して、リコは疑問だらけになる

(え、え?いや本当に『ごめんなさい』って何?わたし告白される前から『貴女の事は好きではありません。ごめんなさい』って意味のごめんなさいなの?フラれたの?告白してすらないのに!?ままま待ちなさいよ!そんなフラれ方あるの!?聞いた事ないし!あ、そうよこれはきつとブラフってヤツよ!きつとまだ封の中に手紙が……無いわ!え、え?逆さまにして振つても出て来ないわ!二枚目の手紙が無い!まさかまさか、心を込めた大事な手紙が嫌いの意味を込めたこの手紙なの?じゃあわたしがさっきまで有頂天になって、アレやこれやと想像して楽しんでいた時間は何だったのよ?ハッ、まさかわたしがこうやって悩み苦しむ姿を見て楽しんでるって訳ね……良い度胸じゃない翼。わたしの魔法を使えば、落ちてなくても落ちるようになってやるわ……何言ってるのだろうわたし……そんな事はどうでもいいのよ!もしかしてわたし弄ばれてるの?今も翼の手の平の上で転がさ

れてるの？焦らされてる？わたし焦らされてる？予想の斜め上を行く遠回しな告白なの？だとしたら侮れないわ。取り敢えず先ずは、この『ごめんなさい』の意味を説明するのが先決。問いたです!!)

今のリコに瞳に光などない。しかし笑みは決して崩さず問い掛ける

「翼、この『ごめんなさい』ってどういう意味？」

「そのままの意味だ」

「そのまま……前からある状態の事、ありのままという意味……あは、あはは……」

リコは膝から崩れ落ちて、補習と言ひ渡された時以上に落ち込んでしまった

「なありコ、何か勘違いしてないか？」

「勘違い……？」

「俺は、これまでのお前に対する謝罪の意を込めてのごめんなさいなんだが？」

「——へ？」

「ほら、前にはーちゃんとお互いに謝ったじゃないか。モフルンにもお父さん代わりみたいな話もしてたし、そんな手本となる俺達がしようもない事で口喧嘩するのはどうかと思つてな。そこで考えを改めてリコ、俺は心を込めて謝罪する……ごめんなさい」

頭を下げての謝罪をリコは初めて目にする

「あ、う、うん大丈夫よ。気にしてないから……」

今まで考えていた時間は何だったのかと思う

それと同時に、そんなにまで思う程に翼の事で夢中だった

「そんな訳で——改めて宜しくなりコ」

「ッ／＼／」

そう、リコは知らず知らずの内に彼の事を――



## 第21話 大切な友達

出会いや別れというものは突然やって来る。

しかしその二つ以外にももう一つだけ、突然な事が起きる事もあるそれが再開というやつだ

「フランソワさんは用事としてだが、お前らはただの観光か？」

「寧ろそれ以外何があるっていうんだ？」

突然の再開にこれ如何に。翼達はいちごメロンパンをみらい達と仲良く食べてるのだが、その席にはそれ以外の人達も居る

ジュン、ケイ、エミリー、フランソワ。誰も彼も魔法界の住人。

フランソワはナシマホウ界でお使いという名目、ジュン達は遊びに来たって感じだった

「それにしても、こっちにも妖精が居るんだね」

ケイがはーちゃんの事を見て、ナシマホウ界の妖精だと勘違いしていた

「こんにちは、はーちゃんだよ！」

「はーちゃんは、魔法界から一緒に来たんだよ」

「そういえばみんなは魔法界でどんな魔法を覚えたんだ？数ヶ月会ってないが、それなりの魔法は勉強してるんだろ？」

翼の言葉にジュンは待つてましたと言わんばかりの態度で、魔法の言葉を唱え始めた

「キュアアップ・ラパパ！」

「あ、ちよつと！」

言葉で説明すればいいものを、無闇に魔法を使うジュンに注意をしようとりコが前のめりになる

しかしそれよりも早くジュンが魔法を使ってしまう

「記念撮影しな」

手元にある羽ペンに魔法を掛けて、スケッチブックにスラスラと描いていく。

しかもそれは、リコが知る以上の速さだった

「この前授業で習ってね」

「やっぱり二年生は大変だよ。色んな魔法を覚えなきゃいけないよ」  
「先週なんて上級者向けのほうきにも乗ったの。怖かったあ…」  
「だってよりこ。凄いな…りこ?」

先程まで注意しようとした勢いは無く、何故か意気消沈していた

フランソワの用事ついでに、津成木町を見ながら歩き始めた一向だが、ジユン達はナシマホウ界に興味津々の目で見渡していた

「何あれ!？」

「自動車って乗り物よ。中々快適よ」

「二乗ったの!？」

「まあね、道を教えてくれる便利な道具もあるんだから!」

まるで覚えたての言葉を自慢げに話すその姿に、りこは鼻を高くするが意外な人物にやってへし折られる

「カーナビゲーシヨンシステムか?」

「ジユン詳しいね」

「ナシマホウ界はアタイの憧れ。『ナシマホウ界最強ガイド天の巻・地の巻』何回読んだ事か!」

「知ってたのね…」

そんなりこに、翼は肩に手をやって同情の目で見つめる

「そんな時もあるさ」

「そんな憐れむ様な目で見ないでよ!」

今度は真上を飛ぶへりこプターに目が行く。それを見てジユンはスケッチブックを取り出すのだが

「だから魔法がバレるでしょ!」

ナシマホウ界での魔法は禁止もあるが、他の人にバレる事を恐れてりこはとにかく抑え込む

そんなやり取りをしていると、遠くでみらいの声を呼ぶ少女達が居た

「みらい!」

「まゆみ、勝木さん!」

「三人に会えるなんて最高過ぎ！今、勝木さんと遊びに行くところだったの」

偶然通り掛かった二人がわざわざ声を掛けてくれた。それは嬉しかったのだが、そんなのお構いなしに問題は発生する

「キュアアップ・ラパパ！」

「待て…ぐっ!!？」

ジュンがまた魔法を使って撮影しようとしたのを、翼が羽ペンを掴んで力技で抑え込む。その手はプルプルと震えていた

「どうしたの急に？」

「な、何でもない…はあ」

魔法の効力が切れたのか、羽ペンはようやく動きを止めたてくれた  
「あ、みらい達のお友達？」

「ええ、貴女達は？」

「わたしの故郷の友達。ケイとジュンとエミリーよ」

「私はフランソワ。貴女達も一緒にどう？」

／／／／／／／／

フランソワの誘いを受けて、まゆみと勝木もショッピングモールへ着いて行く事となった

魔法界出身のリコ達からすると、ショッピングモールは未知の領域らしく驚きの表情をしていた。

ジュンはガイドブックである程度の事前情報を得られている為、そこまで驚きはしてはいなかった

「魔法商店街みたいだね」

「え、魔法商店街？」

「はいはいあつちに面白いのがあるよ！」

「本当だ行こう！さきさき！」

「え、みらい、翼!？」

ここから、翼とみらいの壮絶なフォローの掛け合いが始まるのであった

「つ、疲れたく……」

休憩としてモール内のレストランで立ち寄った皆んな。

そこでは、翼とみらいがやつれた表情でテーブルに突っ伏していた理由としては、行く先々で魔法界の事がバレそうだったりでフォローするのに大変だったのだ

そんな苦労は梅雨知らずのジュン達は、まゆみ達とドリンクバーの方で集まっていた

今この場に居るのは翼達に加えフランソワの四人

「懐かしいわ。私もこっちに来た時はあんな感じにはしゃいでいたわ」

「こっちに住んでたんですか？」

「貴女達時にくらいにね。別に珍しい事じゃなくてよ。ナシマホウ界には、魔法界の人間も沢山住んでいるの」

そう言つて近くの席に座る男性、お店のスタッフ店員が翼達に手を振つて挨拶していた

「世界は狭いな。リコと会う前に、もう既に会つてたりとか？」

「フフ、その可能性は大いに有り得るわ」

ショッピングモールでの用事を済ませ、外に出て自転車屋の前でジュン達は少し立ち寄っていた

そんなジュン達を見てリコは何か思う事があった。

けれどフランソワには、リコの考えはお見通しだったようだ

「心配ないわよりコちゃん。私もこっちに居た時はちよっぴり不安だったわ。魔法界の皆んなより遅れをとつてるんじゃないかって。でもね、こっちでは魔法学校では教わらない色々な事が勉強出来るのよ」

「そうだよーリコも言つてたじゃない！」

『——無駄な努力なんてない。どんな事でも一生懸命頑張ればきつと自分の力になる』

「リコだってちゃんと進んでる。それは近くで見てる俺達がそれをよく知ってる。気にすんな」

翼とみらいからも言葉を貰って、リコはつい笑みを溢すのであった「そろそろ時間ね。あの子達を呼びに行つて来るわ」

フランソワはジュン達の元へ行くと、それを見計らつてか、ゲゲが翼の髪を引っ張つて呼び出した

『ゲゲ、招かれざる客が来たぞ…』

「はあ…？」

振り返ると、物陰に潜んで居るスパルダが此方を見ていた

「貴女…またエメラルドを?!」

「いいや、今日はエメラルドと違つてね」

「みらい、翼来て!!」

リコが二人の手を引いて、ほうきに跨らせて空高く飛んでその場を退散した

「待て!!」

当然ながらスパルダも追い掛けては来る。

しかし、ほうきに対して足で追い付こうなどと少々無謀というものの。

見失わない程度の距離を保つのが関の山

「おいリコ、いくら何でも三人乗りはキツイぞ!」

「ちよつと黙つてて!今集中してるんだから!」

『フフ、来たわよ!』

スパルダは建物を利用して、地上から空に飛ぶほうき近くまで接近して来る。

逃れる為に翼は狭いほうきの上で立ち上がった

「翼君何するの!?!」

「足を持って!」

「え、あうん!」

言われるがままにみらいは、翼の足を持って固定して安定感を維持させる

そして煉魔之刀剣を手にして構える。翼がしようとしているのは牽制程度の抵抗

「因果——」

「もう、無理……!」

剣を振り上げる翼だったが視界が急転して浮遊感が襲う。

短時間ならともかく、長時間での三人乗りはやはり厳しく、リコは限界を迎えてそのまま真つ逆さまへ落ちて行った

「「うわっ!?!」」

適当な建物の屋上に不時着したのは良いが、受け身を取れず三人仲良く屋上で転がる

「あ、リンクルスマホンが!」

落ちた衝撃でリンクルスマホンも落とすも、リコはすぐに拾ってホッとす

「もう逃さないよ」

追いついて来たスパルダだったが、リンクルスマホンからはーちゃんが出て来て三人を庇う

「三人をいじめちゃダメ!」

「こいつらなどどうでも良い。私が欲しいのはリンクルスマホンだ。寄越しな!!」

「う……」

スパルダの声にはーちゃんは怯えてしまうが、それを危惧して翼達が前が出る

「貴女なんかに渡さないわ!」

「こんな屋上じゃ、ヨクボールを呼び出すのも苦労するんじゃないのか?」

翼の言う様に生憎此処は建物の屋上。いつもみたく何かを媒体としてヨクボールを出す、周りにはそれらしい物は無い

けれどスパルダはそんな事は百も承知で、予め保険を掛けていた「それはどうかな?」

スパルダが指差す方向には、クモの糸で絡められていたヘリコプターがあつた

「こつちの物は使えるからねえ。ドクロクシー様が強くお望みなんで。何がなんでも手に入れる!!」

「魔法入りました!」

ヘリコプター上空に闇の魔法陣が現れて、自分のその中へと飛び込んだ。

そして空は黒い雲に覆われ闇と化してしまった  
「変身するモフ!」

「キュアアップ・ラパパ!」

「サファイア!」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!」

「煉魔<sup>れんまのとうけん</sup>之刀剣——侵食率40%!」

三人は闇に染まる雲の中へと突入してヨクボールを探すのだが  
「!?!」

『ゲゲゲ、まさかそんな事が出来るとはな』

翼達が目にしたヨクボールは、スパルダ自身とヘリコプターを媒体としたヨクボールの姿だった

「ヨコセ…りんクル、すまホンをオ…ドクロクシーさま、の為ニ…!!」

スパルダは両手からクモの糸の塊を乱射する。

当たればひとたまりもないが、翼達はそれを素早く避けて凌ぐ

しかし、思った以上に攻撃の波が激しく避けるのにも限界が訪れる  
「きゃあー！」

「ミラクル!!」

とうとうミラクルに被弾し撃ち落とされてしまった。

マジカルが助けようと手を伸ばすが、その背後からスパルダが迫り  
来る

「マジカル！」

即座に翼がマジカルの背後に立ち、バツティングの構えで煉魔之刀  
剣を振り翳す

「グウ：ダアツ!!」

全力で振り抜いてスパルダを突き離れたが、反動で翼も後ろへ後退  
してマジカルと背中同士でぶつかった

「悪いマジカル大丈夫か？」

「大丈夫よ。こつちこそ助かったわ」

「二人共良かった！」

ミラクルも大勢を立て直して翼とマジカルと並び立つ

「闇ノ中で勝てるはずがない。ヤミハ、あらゆるモノを覆い尽くす。  
ドクロクシー様の、闇ハ、こんなモンじゃない!!」

「因果——」

『ゲゲ、間に合わない!!』

「ッ！」

得意の因果の斬撃で切り落とそうとしたが、スパルダの方が速く攻  
撃を中断せずにはいられなかった

翼は咄嗟の判断で煉魔之刀剣をゲゲに投げ渡して、両手でスパルダ  
の体を受け止めた

「お、重てえ…!!」

ヘリコプターも媒体してる為、体の大きさに比例して力も強くなっ  
ている。

ジワジワと押されるも片翼しか無い悪魔の翼を大きく広げて踏ん



張り、ゲゲとの侵食率も上げていく

「侵食率50%!!」

最大まで解放するも、その場で踏ん張るまでが限界だった

「魔法界も、この世界モ…全てヲ覆い、闇のセカイとなる!!」

『ゲゲ、ツバサ魔法を使うんだ!』

「んな事言つたつてよ、ミラクル達に近付けさせない様にするので手一杯なんだ…あ?」

背中から二つの手が翼を支えてくれた

「翼(君)!!」

「ミラクル!マジカル!」

守られてるばかりじゃダメと思い、ミラクルとマジカルも翼を支えて手を伸ばしてくれた

「友達が居るの。どっちの世界にも大切な友達が居るの!」

「大切なの!わたしに色んな事を教えてくれるの、魔法界とこの世界のみんなが!」

「何より楽しかったの…皆んなと一緒に遊ぶんだから!」

「だから、闇の世界にするなんて!」

「絶対に許さない!!」

ミラクルとマジカルは翼の背中から肩へと手を移動させ、力を入れて頭上を飛び越えてスパルダにダブルキックで蹴り飛ばした

『ゲゲ、チャンスだ!』

ゲゲから煉魔之刀剣を受け取り、そのまま魔法の斬撃を放つ

「因果斬り!!」

放った黒い斬撃はスパルダのプロペラに直撃し、因果の魔法によって動きが止まりそのまま墜落して行く

「ナニっ!?!」

「決める!」

「リンクルステッキ!」

「サファイア!」

「青き知性よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！サファイア・スマーティッシュー！」



浄化を終えると空はすっかり晴れたのだが、夕焼け空となっていた三人は急いで皆んなと合流するのであった

しかしジュン達は時間となつて、フランソワに背中を押されて強引に魔法界へと帰つて行つた

かなとまゆみもその姿を手を振つて見送つた

翼達も帰宅する為に二人とは別れて、その道中でゲゲが気になる言葉を溢す

『ゲゲ、全てを覆い尽くす闇の世界か…』

「ちよつとゲゲ、いくら悪魔だからつてあつち側に寝返る気？」

リコが聞いていたのか、指を立てて目を細めて睨んでいた

『ゲゲ、そういう意味じゃねえよ。只気になつてよ…』

「気になるつてどんな事？」

二人の会話にみらいも参加し、翼も聞き耳を立てる

『ゲゲ、オレ達悪魔は知っている。闇なんてまだ明るい存在だと』

「闇が明るいつて意味分かんねえぞ？」

『ゲゲ、それは闇より深く、もつと深い、漆黒の”闇”。その名は――』

「馬鹿言うなよ。不吉だ」

ゲゲがその名を語ろうとしたのだが、翼がそれを遮つて話を打ち切つた

「そんな訳分からん存在を語られても意味無い。目の前の事を集中しようぜ？」

「そうね、翼の言う通り変な心配の種を増やされても困るだけよ」

「うん！今は皆んなで楽しも！」

これから先の事は深く考えず、只楽しい今を満喫して過ごして行く  
のだった

## 第22話 思い出の記憶

「暇だな」

『ゲゲゲ、暇だな』

『フッフ、暇ね』

翼達三人は、縁側でお茶を啜りながら日向ぼっこをしていた。

特にやる事なく時間を持って余していたら、突然声を掛けられた

「暇ならちよつと手伝って欲しいのだけどー！」

ビックリと肩を震わせて声のした空へと視線を移すと、ほうきに乗ったみらいとリコの姿があった

「やつほく翼君！」

「突然だな。手伝いはするけど…」

「何よ？」

「玄関から入って来い」

みらいのお願いで翼は人探しの協力を承った。

その人探しというのが、みらいの叔母である「かの子」の思い出の人らしい。理由として、どんな人なのか興味があるだけとのこと

「それでわざわざ水晶まで引張って来たのか？それに…」

翼は自分の姿に少し呆れていた。何故かというと、水晶を使って占いで探すから雰囲気が出る様に魔法学校の制服に強制で着替えさせられたのだ

「てか、みらいなら分かるが内心一番わくわくしてるのリコじゃないか？」

「えっ、何でそうなるのよ？」

「顔に出てる」

「ッ！」

からかうのもこれくらいにして、翼は本題の人探しに話題を変える

「それで人探しは？」

『感じます。尋ね人は案外近くに居るようです』

「近くってこの街の人？具体的に教えて！」

『それは…あ』

水晶が喋ろうとしたのだが、人が近付いて来た為一度黙り込んだ  
「あの、すまないが道を教えてくれんか？迷ってしまつて」

「もしかして貴方が思い出の人？」

「何のことか？ワシが行きたいのはこの煎餅屋なんじゃが…」

「少し見せて下さい」

道案内に協力しようと思ひは地図を受け取る。目的の店は「つなぎせんべい」という昔からあるお店

「此処があそこで、あれが此処だから…」

「回すな回すな。場所なら俺が知ってるから」

地図をクルクルと回すみらいに呆れながらも、翼自ら道案内に買つて出た

「翼君知ってたんだ！」

「俺はみらいが知らない事に驚いた。外で出歩く事が多そうなお前なら知ってると思つた。リコと違って」

「何でそこでわたしが出て来るのよ？」

「リコはどちらかというと、外で遊ぶより図書館とかで本を読むタイプだろ？」

「そ、そんな訳ないし！ちゃんと外でも遊ぶし！」

「何で見栄を張るんだ？」

案内した煎餅屋に辿り着くと、偶然にもかの子がそのお店に居た

「おばあちゃん!？」

「あら、皆んな揃つてどうしたの？」

「あ、いや…」

道案内した人はどうやら探し人ではなかった。気を取り直して次の手掛かりを求めて占つてみる

その結果水晶に映つたのは、とあるお爺さんとその花壇だった

「そのお爺さんなら知ってる」

そしてまたも翼が心当たりの事を言った

「貴方何でも知ってるわね…」

「頭でっかちのリコと違って外に出るからな」

「さつきから聞いていれば…だったらわたしを何処か連れて行きなさいよー!」

『フッフ、それはリコ子からのデートのお誘いかしら?』

「デ!?!ち、違うから!」

赤面する顔を制服で隠して誤魔化すりコだが、その様子を見てフフは面白おかしく笑って見ていた

くだらないやり取りをしながら歩いてると、翼が案内する場所に着いた

そしてまたも偶然にもそこで、かの子と出会った

「あら、また会ったわね」

「俺達が行く先々にかの子お婆ちゃんが居る!さてやエスパ!」

「なわけないわよ…」

「絵だよね?またどうして?」

「最近絵画教室に通い始めたのよ」

「最近つってお婆ちゃんすごい…あれ?」

みらいはかの子の絵を見た後、それを写してある風景を見て見覚えのある様な素振りを見せた

絵画教室も終わり、ベンチに座って色々と事情を説明した

「よく分かったわね。写真に写っていた公園が此処だって。それに三人が私の思い出の人を探していたなんて」

「えへへ〜!」

「でも、何の手掛かりも無く探すなんて。もしかして魔法でも使ったのかしら?」

「ええ!?!」

「落ち着けみらい」

みらいは思わず反応してしまつて挙動不審になるが、翼が落ち着かせて座らせてから、リコがそつと話題を逸らした

「お婆様は魔法を信じてますか？」

「ええ。だつてその方が楽しいじゃない？」

「でも見つけれなかつたなあ。お婆ちゃんの思い出の人」

「何十年の前の事だから、この町に居ない可能性も考えないとな」

「それなら、三人には話そうかしら」

そんな様子を見てかの子は、興味を持つ三人に思い出の蓋を開ける事にした

「実はね、一度だけ見たことあるのよ。魔法つかいを」

「「ええ!」」

「「やく…」」

思い出の人について何か教えて貰えると思つた矢先、猫の鳴き声が聴こえた。

その猫は木の上に居るらしく、降りられずに困っている様子だつた

「リコ行こー!」

「ええ!」

「翼君はお婆ちゃんと一緒に居て!わたし達助けを呼んで来る!」

取り敢えず助けを呼びに行つたみらい達を待つ事にして、翼はモフルンを抱えてベンチに座る

それからすぐに風が吹き上がり、何者かが木の上に居る猫に近付いていた

ただ姿はハッキリとは見えなかつたが、翼はその人物をよく知っている

それは、みらいとリコが魔法を使つて姿を隠してかの子に悟られず猫を助けようとしていたのだ

猫は無事地面に下ろす事が出来たのだが、更に風が吹き込んで思わぬ事態が発生した

姿を隠して羽織つていたマントが風で飛ばされて、飛んで行く後ろ

姿をかの子が見てしまったのだ

かの子は魔法つかいがいることに驚くも、それと同時に若き日の思い出が鮮明に蘇る

「なんか見られちゃったけど大丈夫だよな？」

「多分大丈夫モフ」

／／／／／／／／

時間は夕方となりかの子とは一旦見送りをした

「二人共マント飛ばすよな」

翼は飛んでしまったマントを回収しており、それを乱暴に二人の頭に押し付ける

「わふっ！ありがとう翼君！」

「髪が乱れるじゃない！」

「みらい、リコ、翼。さつきからずっと甘い匂いがするモフ」

『リコ』

はーちゃんも何かを感じ取り、リンクルスマホンから飛び出して空を飛ぶ蝶々へ一目散に追い掛ける

するとその蝶々はリンクルストーンへと姿を変えた

「みくつけた！」

『ガーネット』！大地のリンクルストーンモフ！

『きつと、この公園に刻まれた沢山の思い出がリンクルストーンになって現れたのですわ！』

これでエメラルド以外のリンクルストーンが手に入ったと喜ぶのも、それは一瞬の束の間だった

「次は敗北の思い出をこの地に刻むがいい」

現れたのはガメッツだった。またリンクルストーン狙いかと思われたが、ガメッツも狙ってるのはそうではなかった

「リンクルスマホンを我に寄越せ！」

「ダメ！あげないもん！」

「お前もリンクルスマホンか！」



「我はただ、主君のドクロクシー様の命に従うまでだ」

「魔法入りました！出でよ、ヨクバール！」

「ヨクバール!!」

薔薇と煎餅を組み合わせたヨクバールが誕生した

「みらい、リコー！」

「うん！」

二人がプリキュアに変身しようと手を繋いだ時だった。

新たに二つの影が地面に勢いよく着地して、大きな衝撃と土煙りを上げる

「何だ!?!」

「私も混ぜてよ」

「ほお〜面白い事になってるじゃないか」

影の一つはナギ。そしてもう一つの影は初めて見る顔

白いタキシードを着た60代の男性だった

「ナギ！」

「久し振りねみんな。翼が生きてる事に驚きだけど…」

ナギは自分と共に現れた男性に視線を向ける

「貴方、悪魔ね」

「左様。私は『アスモデウス』。他の黄色い目の奴らが来ると聞いてな。私も見たくなつたのだよ」

アスモデウスの目の色が黄色へと変わった

「人間が何処までやれるか見ものだな」

「…どうやらやるしかないようね」

「行くよ！リコ！翼君！モフルン！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「トポーズ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリー！」

「だいてんよくのつるぎ大天翼之劍——侵食率50%！」

## 第23話 プリキュアVS闇VS悪魔VS魔術

「キュアアップ・ラパパ！」

「トパーズ！」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア ！」

「だいてんよくのつるぎ大天翼之剣——侵食率50%！」

「俺が悪魔の相手を——」

「わたしが相手をする!!」

「あ、マジカル！」

翼がアスモデウスを相手にしようとするのだが、それよりも早くマジカルが単身で飛び出した

「プリキュア対闇の魔法つかい対悪魔対私。大乱戦ね」

「ナギちゃん……」

「ミラクルは私と踊りましょう!!」

ナギはグリモワールを開き、白い閃光が襲い掛かる  
「ッ!!」

光の球を円形のバリアにして閃光を遮断する

「ナギちゃんはわたしに任せて！」

「あくもう！任せたぞ!!」

消去法で翼がヨクバールを相手にする事となってしまう。

翼が思い描いていた組み合わせではなかったが、緊急事態の為そう悠長な事を言っている場合ではない

「やあっ!!」

光りの球を二つ使って大きなハンマーを作り出したマジカルは、渾身の力で振り下ろして殴り倒そうとするも片手で受け止められてしまった

「ッ!?!」

「あまりにも情けないと思わないのか?」

アスモデウスは手に力を込めてハンマーを砕き、手刀でマジカルの左肩に振り下ろした

「がッ——」

地面に叩き潰され気絶まで持っていかれた

「マジカル!」

はーちゃんとモフルンが側へと駆け付けようとするが、アスモデウスがそうはさせなかった

「虫けら風情が」

「はーちゃん危ないモフー!」

狙われてると気付くや否や、モフルンのはーちゃんに覆い被さり庇う

そんな二人にも容赦の無くアスモデウスは攻撃する。

指を弾くと二人が立っていた場所が弾け飛んで、はーちゃんとモフルンは大きく宙を舞った

「ふむ、殺意とも言える敵意を感じたと思って期待したが所詮は人間。私の相手ではなかったか」

「ナギちゃんどうしてこんな事するの!?!」

「言ったでしょ! 私にもやらなければならぬ事があるって!」

ミラクルとナギとの戦闘は、空中で激しい激突を繰り返されていった。

ミラクルは光りの球を足場にしてトリツキーな動きで攪乱、そして的を絞られない様に立ち回っている

ナギは魔力の塊を撃ち出しては攻撃しているが当たらない

「その動き随分戦い慣れた様ね。けどー！」

グリモワールのページが一気に開く

「白魔法——ロジック・ビギニング!!」

ナギの周りに魔法陣が幾つも展開し、その中から魔法文字の鎖が大量に飛び出した

「ッ!!」

想像以上の多さに一瞬たじろいだが、光りの球を足場に変えて縦横無尽に飛び回る。

しかしサファイアと比べるとやはりというべきか機動力では劣り、足首に巻き付かれて捕らえられた

「これくらいー！」

足場の一部をブーメランに変えて足首の鎖を断ち切り、そのまま落下して行く。

それでもナギは攻撃の手を緩めない

「黒魔法——ヘル・エンドー！」

「負けない!!」

落下しながらも光りの球をハンマーに変えて、黒炎相手に対抗して振りかぶる

「ヨクバ…!!」

『フフ、ヨクバール相手なら楽勝ね』

翼は今、大天翼之剣を地面に突き立てて木の幹でヨクバールを拘束していた

『ゲ、だが油断するなよ。相手はヨクバールだけじゃねえんだからよお』

「分かっつてらあ!!」

大天翼之剣から電撃が帯び、それが幹に伝わってヨクバールの体に電撃が走る

「ヨクバババババ!!?」

黒ゴケになって痺れたヨクバールはもう動けない。

浄化するなら今しかチャンスがない

「天使魔法！エレメンタル……！」

「きやあッ！」

「ミラクル……どわっ!？」

大天翼之剣に四元素の力を溜め込めてる最中、突然ミラクルが此方へ吹き飛ばされて激突して魔法が中断されてしまった

「ミラクル大丈夫か!？」

「な、なんとか……」

翼がミラクルに肩を貸して立たせようとしていると、二人の足下から黒い魔法陣が現れて檻を作り出して閉じ込めた

「よそ見をしている場合かしら?」

「ナギちゃん……」

「ミラクル下がってろ！」

狭い空間内で大天翼之剣を振り回して檻を破壊しようとするが、異常な頑丈さに刃が弾かれ破壊出来ずに苦戦する

「そんなに出たいなら出してあげる。黒魔法——デストロイ・エンド」  
ナギがグリモワールを閉じると同時に、檻の内側が大爆発して檻が崩れ落ちる

爆発の煙の中から、ミラクルを抱きしめて地面に落下する翼の姿があった。

二人が落ちた場所にはマジカルの近くだった

「がはっ……がはっ……！」

「ほう……まだ息があるとは頑丈な奴だな褒めてやろう。しかしこれ……」

息の根がある三人にアスモデウスはトドメの一撃を放とうとしていた

「お、おい二人共来いっ……！」

翼はミラクルとマジカルを引っ張ってこの場から逃走を図ろうとしたが、ダメージの蓄積で上手く力が入らずモタついていた

「終わり——」

不敵に笑うアスモデウスだったが、突如魔法陣の檻に閉じ込められ

る

「大乱戦って言った筈よ。目の前の敵がプリキュアだけとは限らないわ」

「そのようだな」

「黒魔法——デストロイ・エンド!!」

魔術による大爆発で檻ごとアスモデウスは吹き飛んだ。

しかもその威力は、先程翼達が食らったそれ以上のものだった

煙が晴れると、傷だらけのアスモデウスが体に付いている煤を振り払っていた

「これでも死なないのね…」

「これでも悪魔なんでね。多少面白い人間と思えたがそれでもこの程度。御覧の通り、見た目以上にピンピンしている」

「まだ私のヨクバールは終わっておらぬぞプリキュア!!」

「ヨクバール!!」

ナギとアスモデウスの会話に割り込む様にして、ガメツツとヨクバールが戦線復帰した

「人間以下の下衆な生き物がしゃしゃり出るな!」

「翼は殺してもいいけど、ミラクルとマジカルは倒させないよ」

ナギ達三人が火花を散らしていると、ヨクバールも含めそれぞれの地面下から火柱が立った

「ヨクバ!?!」

ナギ達は咄嗟に避けたが、ヨクバールだけは炎に呑み込まれてしまい苦しみ悶える

「大乱戦に助かるとはな…」

声のする方向には、大天翼之剣を杖の様にして体を支えてる翼と、その肩を借りて立っているミラクルとマジカルの姿

火柱はどうやら翼の仕業らしかった

「ヨクバールだけでも浄化するんだ!」

「分かってるわ!」

「行くよマジカル!」

「リンクルステッキ！」

「トパーズ！」

「金色の希望よ！私たちの手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア・トパーズ・エスペランサ！」

「ツ！！」

魔法が届く範囲内に居たナギとアスモデウスは悠々と避けたが、苦しむヨクバールは動けずそのまま浄化されて消滅した

「やれば出来るじゃないか」

「…いつまでも余裕振りやがって！」

「ああ余裕さ。私がちよいと指を鳴らせばお前達など一捻りだからな」

アスモデウスは指を鳴らそうと親指と中指を擦り合わせたが、その指を止めて手を引つ込めた

「だがそれでは面白くない。という訳で私はこのまま引くでしょう。では諸君さらばだ」

「なら私も一度帰ろうかしら。じゃあね三人とも」

自分達の勝手な都合でその場を去って行くナギ達だったが、翼達からすれば命拾い

「何とか退けたのかな？」

『ゲゲ、油断するなマジカル。まだ一人残ってる』

ナギとアスモデウスは去って行ったがまだ一人、ガメッツだけが残っていた

『フ？そういうえばはー子、ガーネットは何処へやったの？』

「あ…」

はーちゃんは周りを見渡すがガーネットが見当たらない

「お前達を探してるのはコレか？」

ガメッツが見せびらかすのは、リンクルストーン・ガーネットだった。



戦いの混乱に乗じて、はーちゃんが落としてしまったガーネットを  
抜かりなく拾っていたのだ

「このリンクルストーンで次の戦いを申し込むぞ。返して欲しくばそ  
の事を…オボエテーロ」

ガーネットを横取りされてガメッツも去って行った

「うわあああん！ごめんね、ごめんね！はーちゃんがガーネット落と  
しちゃったから…ひっぐ…ひっぐ…ひっぐ…」

ヨクバールは浄化は出来たものの、新しく現れた悪魔・アスモデウ  
ス、ナギに叩きのめされた挙げ句、ガーネットを奪われた  
これ以上のない敗北となってしまった

## 第24話 勇気、それは逃げない

「ガーネット…」

未だにガーネットが自分のせいで奪われてしまった事を悔やんでいるはーちゃん

事実を言えば、はーちゃんが手放しさえしなければこの様な事態にはならなかった。

しかしあの大乱戦での状況は尚更仕方なかった

『ゲゲゲ、しゃーないってのはー坊』

『フッフ、はー子が無事ならそれで良いのよ』

「それにガーネットは、三人が見つけてくれるモフ！」

「そうだよ安心して！」

気にする様な事ではないと促してはいるものの、やはり責任を感じており表情は未だに暗かった

そんな時だった。窓から黒い折り紙で作られた鳥が部屋に入って、一通の手紙へと変わってリコの手の中に収まった

「手紙だな…中身は？」

封を開き、中身を確認すると魔法文字でこう書かれていた

『最果て島で待つ。ガメッツ』

「最果て島？」

「魔法界の島の名前よ」

ガメッツからの手紙。最果て島という場所で待つという果たし状だった

最果て島は海を越え、空を越えた遠い魔法界の最果てにある島

「魔法界……リコ、翼君！」



三人はすぐさまトランクに簡単な手荷物を詰め込んで支度を整え、懐かしの魔法界へと飛び出した

魔法学校の制服に身を包み、低空飛行で海の上を飛んで最果て島へ

と猛スピードで向かっていった

「それにしても最果てって一体何処なんだ？」

「それは……わたしにもよく分からないわ」

「知らないで飛んでいるのか…わっぷ!!？」

突然リコの急ブレーキで、並行して飛んでいたみらいも一緒になって止まり、その後ろに乗っていた翼はみらいの背中に鼻をぶつける

「あ、ごめんね翼君」

「それよりも、だ……」

「仕方ないでしょ！知っていたらわたしだって苦労はしないわ」

「ええいリコは頼りにならん！校長に場所を聞くんだ！」

「翼君待つて…あははっ！待つて待つてくすぐったいよおっ!!」

みらいの懐に手を入れて水晶を探している時だった。

海の中から突然一人の人魚が飛び出した

「みらいさん、リコさん、翼さん久し振り」

「ロレッタ先生！」

ロレッタだけではなくドロシー、ナンシー、シシーも海から出て来た

「みらいちゃん！」

「リコちゃん！」

「翼くん元気〜？」

「そりゃ元気だけど、里から出て来てこんな所で何してるんだ？」

「私達空を飛ぶ練習をしているの」

教え子二人を連れて一緒に空を飛べるように特訓をしていたようだ。

多分、人魚の里での一件で彼女達を変えたのだろう

「皆んなこそ何してるの？」

「わたし達最果て島に向かっているんです」

「最果て島？ほうきで向かっていたら、あと三日は掛かるわ」

「「三日も？」」

最果てというのだから多少の時間は掛かると覚悟していたが、予想以上の日数に驚愕する

「三日ってお前…俺達が先に餓死してしまうだろうが!!」

「だからわたし言ったわよね!?知らないって!」

「知らない過ぎるにも程があるだろ!てかそもそも、知らない所に行くのなら事前に確認してから出掛けるもんだろ!」

「だったら翼が先にその事を言えば良かったのよ!!」

「あの…」

「あはは、ごめんなさい…こんなんでも、リコと翼君って意外と仲良くして息ピッタリなんで」

「誰がコイツと!!」

否定しようにも、それを訂正するにも声がハモってしまう仲の良さ。ロレッタはなんやかんや微笑んでいた

「分かったわ。ちよつとついて来て」

「海の中を走る船!わくわくもんだ〜!」

ロレッタに潜水艇を使わせて貰い、最果て島近くまで送って貰える事となった。

しかも、ほうきで三日は掛かる距離をこの潜水艇なら僅かな時間で辿り着ける高性能

「ありがとうございます!」

『ゲゲゲ、それにしても空飛ぶ練習だなんてご苦労なこった』

「空飛ぶ人魚は本当に居た。プリキュアが…みらいさんとリコさんが私達に勇気をくれたの」

「プリキュア…勇気…」

それから暫くすると本当に僅かな時間で最果て島付近まで到着した

「最果て島はもうすぐよ」

「何処にあるの?」

「上よ。最果て島は空に浮かぶ島。このまま高くほうきで飛んで行けば」

『フフ、上つてまさかあの空を越えろと言うの?』

見上げる空には、雷雲が立ち込む嵐雲が漂っていた。到底ほうきでは不可能

「ゲゲとフフに掴まって飛んで行けば行けるモフ?」

『無理無理』

天使と悪魔。二人して仲良くその提案を断った。

となると本当に嵐を越える手段が何も無い

そんな時だった

別方向の空から、二匹のペガサスが此方へ向かって飛んで来た。しかもそのペガサスには見覚えのある二匹

「あのペガサスってあの時の!」

それもその筈、魔法の森での補習授業で出会ったペガサス親子だった

「でも、ペガサスどうしてこんな所に?」

ペガサスはジツと見つめて何かを伝えようとしていた

しかしペガサスに言葉は喋れない。無言の見つめ合いが続く中でドロシーが提案する

「ねえ、魔法で喋れる様にしたら?」

「そうすれば理由が分かるかも」

「ううん、魔法は必要ないわ」

「目を見れば伝わるよ」

そうしてみらいとリコは、真剣にペガサスの瞳を見て心情を読み解く

「二乗せて行つてくれるの?」

ペガサスはそう頷いてくれた。どうやら心がちゃんと通っていた

「ペガサスは人に懐かないのに。二人の事はとても好きみたいね」

「わたし達とおんなじだね!」

「二人の強さが私達を変えたのよ」

「そんな事ないよ!」

「わたし達は、皆んなの強い想いに支えられてこれまで頑張っただけ」  
二人が謙遜する隣で、子供のペガサスがはーちゃんに鼻を近付ける

「はーちゃんにもありがとうって言ってるモフ」

「あの時、お花のパンケーキごちそうさまっえ事かな！」

「本当？」

その答えに子供のペガサスはちゃんと応えてくれた

「はーちゃんもみんなの力になってるモフ！」

「それにしても良いなく！ペガサスと目を見ただけでお話ができるなんて」

シシーの呟きに翼が反応した

「実はな、そういう魔法をリコは何度か失敗してるんだ。だから敢えて使わなかったんだ」

「今すぐその頭を弾け飛ばしてあげようか？」

真顔で杖をクルクルと回して準備万端のリコに、翼は顔を引き攣る  
(（(将来尻に敷かれそう…)）)

人魚四人は、翼とリコのやり取りを見てそう心の中で思った

／／／／／／／／／／

「ありがとう行って来ます！」

ペガサス親子に空の上まで運んで貰い、とうとう目的地である最果て島を目の前にした

ペガサス親子とは此処でお別れして、みらい達はほうきでガメツツが待つ島まで大急ぎで向かうのであった

「来たよ!!」

「さっさとガーネットを返しなさい！」

「やっと来たなプリキュア。待ちぼうけでこちらを苛立たせ、油断させようというお前らの作戦は分かっている」

「ちよつとアイツ何言ってるんだ？」

「さ、さあ？」

何かの勘違いをされており、あらぬ誤解を生んでしまっているが、それがガメツツの闘士に油を注ぐこととなっていた

「今回はしっかりとお前らの戦い方を学んで来た。今まで抑えていた

我が力、お前らの為に全て解放しよう」

ガメツツは背負っている甲羅を自ら破壊した

「ここから先は、我にもどうなるか分からない——ツ!!」

甲羅が割れる時、ガメツツからドス黒いオーラが放出されて、その体格にまで影響を及ぼして全体的に凶体が大きくなる

そんな見た目だけのコケ脅しならよいのだが、見ての通りあらゆる身体能力が上がっているのが感じる

「赤いプリキュアと天使で来い。本気で力比べをしようではないか」

挑発でもないそんな会話だったが、意外にもフフがそれに食い付いた

『フフ、半分の力しか出せないとはいえ、ワタシも随分と舐められたものね』

「そっちがその気ならこっちも本気を出すしかない。後で文句は言うなよ」

三人は目で合図して要求通りに、ルビーと天使の力を使って変身する

「キュアアップ・ラパパ!」

「ルビー!」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!」

「だいてんよくのつるぎ大天翼之剣——侵食率50%!」

「お前達の本気の力見せてみよ!!」

見た目の大きさからは想像以上の速さで近付き、翼を通り過ぎてはミラクルとマジカルに狙いを定めて二撃、三撃と拳で攻撃する

上手く二人で防御しつつ、攻撃された勢いを利用して後ろへと下がり距離を置く

けれどガメッツの猛攻はそれで止まる事は無い。

いつの間にか高くジャンプして、上空から拳を振り上げてくるつもりだ

「ツ！」

ミラクルとマジカルはバックステップで避けて、ガメッツの拳が地面に衝突するその瞬間

『フフ、いきなり無視とはいいい度胸ね!!』

ガメッツが着地するその僅かな隙を突いて、翼が斬りかかる

「そこだ！」

「フーン！」

ガメッツは咄嗟に拳を開き、手の平を地面に突いて自分の体を押し上げて片手でジャンプした。

結果それが翼の攻撃に対する回避行動となり、虚しくも大天翼之剣は空を斬る

「コイツ変わったのは見た目や身体能力だけじゃねえ！」

『ゲゲ、状況判断も凄まじく良くなってやがる!』

完全な無防備な状態に晒されてる背中にガメッツの膝蹴りが炸裂し、そのまま地面に押し潰されて島の一部が崩壊する

「モフルン！」

「はーちゃん大丈夫!？」

その場近くに居たミラクル達も巻き込まれて、足場の行き場が無くそのまま落下。モフルンとはーちゃんは落ちはしなかったが、破片が飛び交う中で身を屈める

「よそ見とは随分と余裕だな！」

崩壊する瓦礫の中でもガメッツは止まらず突き進み、ミラクル達に襲い掛かって来る

「うらあ!!」

だが横からタツクルで翼がガメッツに飛び込んだ。腰にしがみ付いて、意地でもミラクル達に近付けさせないように抵抗する



「小物みたいな戦い方。それで勝てるっても？」

『フフ、勝つしかないのよ!!』

翼はそのまま浮遊島に突っ込んで押し付け、更に押し付けた所から幾つものツタが生えてガメッツを拘束する

「天使魔法、エレメンタル——」

「遅い！」

四元素で大剣を形成途中、ガメッツに蹴り飛ばされ魔法が不発で終わってしまった。

更にガメッツは追撃で翼に襲い掛かり、島へとはたき落とした

「翼（君）!!」

倒れた翼に駆け寄って肩を貸して起こす。

ここまでの圧倒的な差はナギ以来のこと。翼もそれを重々承知しており歯軋りをする

「クソッ！イライラする!!」

「マジカルは翼君をお願い！」

三人が集まっているのを見て、敢えてガメッツはその中へと突っ込んで来る。

あちらも実力の差に気付いている

「ハアアアアッ!!」

マジカルに翼を任せ、ミラクルは単身のみで迎え撃つ。

拳と拳が激しくぶつかり合い、その余波で風が巻き起こる程のものだった

「たあ…っ!!」

間髪入れず手足を最大限に使い、攻めの一手を続けるもそれすらも全て防がれる。

ミラクルが繰り出す拳に同じく拳で力任せに弾き、膝蹴りや回し蹴りなどの足技に対してもはたき倒して受け流していた

「強さとは力！強大なパワーを持った者が世界を手に入れる！闇の魔法の強大な力こそ今の軟弱な魔法界、ナシマハウ界を支配するに相応しいのだ!!」

ガメッツはミラクルの左拳を上へと弾き、右腕を掴んで捕らえた

「しまっ……かはっ!!」

逃げられないミラクルに強烈な裏拳がヒットし、壁に打ち込まれてしまった

倒れたミラクルの次に狙うはマジカル

「マジカル退け!」

「そんな体では無茶よ!」

マジカルに介抱されていた翼が足を引きずりながら、盾になる様にして前へ出る

「その勇敢さは褒めてやる。しかし——」

翼との距離を一瞬で詰めて、大天翼之剣を蹴り飛ばして別の浮遊島に突き刺さる

「それだけで我を倒す事は不可能!!」

『フフ、ツバサ早く大天翼之剣を呼び戻して!!』

「戻って来い!大天——」

「遅い!!」

呼び戻す前に張りて手で呆気なく吹き飛ばされる

「翼……きやつ!!」

吹き飛んだ翼を受け止めようとしたが、踏ん張れず自分も巻き添えとなり地面を転がる

転がる先には壁など無く、止まる事なくそのまま島から放り出された

「やばい……だっ!!」

空中でマジカルの手を右手で掴み、フフによって侵食された左手で島の壁に手を突っ込んで引っ掛けた

「ふう……マジカル大丈夫か?」

「ええ、助かったわ。けど……」

一瞬ヒヤツとしたものの、翼の機転で間一髪のところ助かりはした。

けれどマジカルが心配するように、このままでは地上へ真逆さま今のマジカルはルビースタイル。サファイアスタイルではない為空に飛べない。翼がマジカルを引き上げないといけない状況だが

「運良く助かった様だが、そんな所に居るのでは何も出来まい」  
上を見上げればガメッツが佇んでいた

「それは俺達が二人だったらな」

その言葉に眉を顰めると、その背後からミラクルが飛び掛かった  
「やあっ!!」

ミラクルの蹴りがガメッツの頬に直撃して、横へ蹴り飛ばした

「マジカル！翼君！」

「助かったミラクル！マジカル上がるんだ」

何とかミラクルが二人を引き上げて地に足を着くことは出来た。

しかし、既に疲労困憊で三人共肩で息をしている

長期戦は圧倒的に不利となる。力で負けてしまっているが、強引に  
でもガメッツを倒さないといけない

ガメッツがいる方へ目を向けるが既にそこには居ない

「こっちだ」

いつの間にか三人の背後へと回り込んでいた

「大天翼之剣!!」

即座に翼は大天翼之剣を呼び戻して手の中に収める。

そして次からの行動が早かった

ミラクルはしゃがみ込んで足を払いに、マジカルはジャンプして踵  
での攻撃、翼は真つ向から斬り伏せようと一斉に動き出す

「小賢しい真似など通用しない!!」

ミラクルとマジカルの攻撃には敢えて防御せず、翼に対しては腕で  
防御をして全ての攻撃をその身で受け切った

「二人共離れるんだ！」

翼の指示でミラクルとマジカルは一旦距離を置いた。

翼も離れるのだが、それと同時に次の攻撃にも手は抜かない

大天翼之剣が淡く光ると、ガメッツを取り囲む様にして地面から土  
で出来た壁が飛び出る

「これで……どうだ!!」

左手を地面に叩き付けると、ガメッツの足下から火の柱が噴き出し  
て爆発する

「やったね翼君！」

「いやまだよ!!」

ミラクルが警戒を解きそうな時、マジカルが声を上げて再度気を引き締めさせる。翼も油断していた事もあって、ミラクルと共に爆発が起きた場所を凝視しする

すると黒煙の中からガメッツが突進して襲い掛かって来る

「我は全て力で滅ぼす!!」

「そんな事させない!!」

大天翼之剣を地面に突き立て、土で構築した壁や槍で近付けさせまいとするも、ガメッツは意も返さず接近する

「止まらないか！」

「わたし達が止める！」

ミラクルとマジカルは、足を踏み締めて勢いを付けてガメッツに正面から向かって行くも、黒いオーラを纏わせた腕によって弾かれる始末

「きゃあああ!!」

「何?!——ぐわッ!」

そして今度は弾かれた二人に、翼と衝突して共に吹き飛ばされる事となった

「ミラクル!マジカル!翼!」

遠くから心配するモフルンの声が聞こえるも、それ以上のダメージを負ってしまい立ち上がるどころか、返答する力もままならない

「フッフ、敗れたり」

最後のトドメをさそうと歩み寄るガメッツに、はーちゃんが目の前に現れる

「？」

「ダメ…ダメ!ダメ!」

「何だ、お前が我を止めると言うのか？」

力無きはーちゃんも、三人を守ろうと必死になって抵抗はするが、

目に見えて虚しいくらいに効いてない

「それでも戦ってるつもりか？痛くも痒くもないぞ」

「はーちゃん危ないモフー！こっち来るモフー！」

モフルンがはーちゃんを遠ざけようとするが、本人がそれを拒否する

「逃げない！」

はーちゃんはこれまでの戦いの最中を思い返す。

人魚の里、魔法の森の時もそうだ。怖くて、強い敵が目の前に現れたとしても、誰一人として逃げずに立ち向かっていた

だから自分もと、そう強い意志を見せる

「その勇気は立派だが、誰かを思う気持ちだけでは我には勝てぬ。もうプリキュアは起き上がれぬ」

軽く息を吹き掛けて、止めようとするはーちゃんを容易く飛ばす

しかし、今まで守られていたはーちゃんだからこそ、今この瞬間だけは絶対に譲れない。引き下がれない想いがある

「そんなことない！ミラクルとマジカル、翼だって諦めない。プリキュアは、三人は強い——強いのー！！！」

はーちゃんの強い言葉と意志に呼応して、マジカルが持っていたリソクルスマホンが、ピンクの光りが放ち、最果て島を覆っていた曇り空を明るく照らし出した

「小賢しい真似を！」

謎の光による力にガメッツは苛立ち、か弱いはーちゃんに向けて拳が振り下ろされる

一緒に居るモフルンと共に強く目を閉じた時、三つの影が前に飛び出してガメッツの拳を受け止めた

「ミラクル！マジカル！翼！」

「何を今更？」

三人の力を合わせて踏ん張っても尚、ガメッツの力はそれを上回り少しずつ後退させる

けれど今の三人は、先程までとは違った力を発揮させる。

押されていた筈がそれに耐え、一步、また一步と足を前に踏み締め

て、気合いの声を上げると同時に押し返した

「何!？」

「戦う力が全てじゃない!」

「誰かを思う気持ちだって強さなのよ!」

「その強さが大きな力になる!」

三人のその力と気迫に圧倒され身を引かせるも、ガメッツの真髄は折れはしない。それどころか、火に油を注ぐ様に認めぬ思いを強く表す

「我は認めぬ——そんなもの強さではない!!」

「認めないならそれでもいい。只な、そんな強さもあるってのを知って欲しい。それだけだ!!」

左の翼が大きく広げさせ、風に乗った勢いをも利用して、今持てる全ての魔力を込めて接近する

大天翼之剣に莫大なる浄化の力、そして集まる四元素の力をフルに活用して纏わせ、全力の一撃を振り放つ

「天使魔法——エレメンタルブレイカー!」

「そのような攻撃が通用するとも!」

真剣白刃取りで大天翼之剣を受け止めた

だが、ダメージは僅かに通っている。四元素の内一つ、火の魔法がガメッツの受け止める手を焼いている。更に追い討ちで、風の魔法が手を切り刻み込む

それでも押し切れないのは、やはり根本的な問題である力関係だ。

あともう一押しなのだが、翼一人の力では負けてしまう

「通用しないさ——俺一人だけならな!!」

「……まさか!？」

ガメッツに影が差して、上を見上げれば太陽を背にしている、ミラクルとマジカルがリンクルステッキを構えていた

「行くよマジカル!」

「ええ! タイミングを合わせるわよ!」

「リンクルステッキ!」

「ルビー！」

「紅の情熱よ！わたし達の手に！」

「フルフルリンクル！」

「プリキュア！ルビー・パッションナーレ！」

翼のエレメンタルブレイカーに、ルビー・パッションナーレを加えて威力を爆発的に上げる

しかし、このやり方には二つ問題がある

一つはタイミング。合わせるタイミングが少しでもズレれば、失敗して自分達が衝突して終わる

二つ目は力の制御。お互いの力を一つにした後、更にそれを維持しなければならぬ。これも息が合わなければ、放出する魔力が行き場を無くしてその場で大爆発を起こす

どちらも、三人の呼吸を一つにするのが必須条件。そんな鬼畜じみた難易度を、即興でやるのは無謀以外の何者でもない

しかし、それをやってのけるのがこの三人

「重なった！」

大天翼之剣とリンクルステッキを慎重に束ねた時、敵を貫く為の威力、そして浄化の力が凄まじく跳ね上がる

「このまま一気に！」

「決める!!」

三つの手も重なり、心も体も全てを一つして最後の力を振り絞る

「ハアアアアア!!」

「オオオオオオオ!!」

そしてガメツツの足が、少しずつ後ろへと下がって行く

「何?!我が！」

最後の最後まで何が起こるかは分からない。ガメツツの意思も強かったが、それ以上に翼達の意味が勝っていた

そしてとうとう、白刃取りをしていた手を抜け出し、懐へと潜り込で三人の重ねた攻撃が決まる

決まって通り越すその後ろでは、聞こえはしなかったが、ガメッツは何やら満足気な言葉を残して浄化されて戦いは終わりを迎えた

／／／／／／／／／／

「ガーネットが戻ってきたわ！」

「ありがとうはーちゃん！」

「それにしても…」

はーちゃんの勇氣ある気持ちが届いた結果、窮地の三人を救った。笑顔でありがとうとお礼と同時に、リンクルストーン・ガーネットを取り返した事にも歓喜する

翼も微笑み掛けて感謝の意を伝えるが、その時起こったリンクルスMahonの事象に気に掛ける

「何だったんだらうな？」

あり得ない程の力を感じ、それと同じくらい優しい何かに包まれるのを知った

疑問を持ちながらリンクルスMahonに目を向けていると、はーちゃんが三人の目の前まで飛んで来る

「みらい、リコ、翼。だ〜いすき！」

突然の事だったが、はーちゃんからそんな事言われては喜ばずにはいられなかった

「わたしもわたしも！はーちゃん大好きだよ！」

「急に言われると小恥ずかしいな…」

「なくに？翼照れてるの？」

「モフ、モフルンは？」

『ゲゲゲ、愉快だな』

『フフフ、はー子は本当に素直な子ね』



いつも守られている存在だったはーちゃん。そんな彼女の勇氣に力を貰うのは、これだけで止まる事は無い——  
この先、幾度となく——

## 第25話 開かずの扉

ガメツツとの激闘から翌日。翼達は、はーちゃんが起こした不思議な力について校長に相談する為、朝早くからほうきに乗って魔法学校へと向かっている最中

しかしながら、はーちゃんがお腹を空かしてしまったので、ガーネットを使ってお腹を満たす事にした

「はいはい、ちよつと待っててね〜!」

リンクルスマホンのペンで描いたのは、ミートボールだった。それを一口食すと、姿もミートボールの様になった

くるくると回りに回って遊び、それが終わるとあくびをして、スマホンの中に戻りお昼寝をする

「それにしても、相変わらずみらいのほうきの乗り心地ときたら最高だな」

「何よその言い方。まるでわたしのほうきは、乗り心地悪いみたいじゃない」

「お前の場合は『乗り心地悪い』じゃなくて、それ以前の問題だ。何でわざわざ、墜落すると分かっているほうきに乗らなければならない?」

「最近落ちてないし!」

「最近『は』だろ?」

後ろで歪み合いが続き、巻き込まれてはないとはいえみらいもホトホト困っていた。

何でこうも、ほうきに乗る、乗らないで口喧嘩が起きるのか

「翼君、リコのほうきにもちゃんと乗ってあげないと。リコだって、乗って欲しくて言ってるんだから」

「あのみらい、別にそこまでは…」

みらいはリコのほうきの隣に付いて、乗り移れるくらい幅寄せする。

空の上だろうが関係無く、今すぐリコのほうきに乗りなさいと言っているに違いない。しかも飛行しながらときた

いつもの翼ならみらいだろうと、リコのほうきに乗るのは御免こうむりたいと言うのだが、今回は何故か無言で大人しかった

リコもその様子を見て、少し前に移動して、翼が乗れる空間を開けた

「はあ…」

仕方なく翼は、慎重にリコのほうきに跨って腰に手を回す

「んっ…」

その時、少しこそばゆかったのか、艶のある声が漏れてしまった。声は小さく普通は聴き取りにくいものだったが、すぐ側に居る翼の耳にはしっかりと届いていた

「おい何だよ。変な声だすな」

「き、聞こえてっ…：じゃなくて、変な声なんて出してないわ！」

「いいからちゃんと飛べ。落ちたら溜まったもんじゃない」

ぶつぶつと文句を言う翼だが、リコ自身が乗せたみたいなものだから、あまり言い返せない

ふと、腰を強く絞める翼の手に視線を落とす。本当に落ちるのが怖いというのが、その手から読み取れる。今更だが、乗せる度に落ちるなんてこと、翼本人からしたら災難過ぎて可哀想

だから、その恐怖を少しでも和らげる為、リコは考えた

「…」

右手をそつと、翼の手に添えること

この方法は、小さい頃リズがよくやってくれたやり方。

まだリズが魔法学校へ通う前のこと。夜の独りが寂しいリコは、リズのベッドに潜り込んで添い寝をする事が多かった。その時決まっ  
て、リズは安心させる為に手を優しく握ってくれる

その要領で、翼も手を握れば少しでも――

「やめろ」

が、翼はそんな気持ちも知らずもあり、雑にリコの手を跳ね除けた。

これには流石のリコも凹んだ

「あっ……」

思わず漏れ出たリコの声を聞いて、翼も少しやり過ぎたと感じた。

もしかしたら、『落ちた時の事を考えて手を握ろうとしたに違いない』。そんな考えがよぎり、翼は反省をする

リコと思っている事とは多少違いはあるものの、それでも手を払い退けてしまった事には違いない

だからほんの少しだけ、ほんの少しだけリコに体を預ける。背中に軽く寄り掛かり、翼自身から払い退けた手を握った

「少し恥ずかしかった。ただそれだけだ」

ぶつきらぼうな言い方だが、それでも手を取ってくれた事にリコは嬉しかった。そんな気持ち少し先走ってしまったのか、リコは握り方を変える。指と指を絡めさせる握り方、いわゆる恋人繋ぎで握り返した

二人の様子を見てみらいは、まるで保護者の様に安心して微笑んだ  
また一步、翼とリコとの距離が縮まった

／／／／／／／／／

魔法学校へ着いて校長室へ向かったが、校長の姿は何処にも無かった。後から入室した教頭やアイザックも、校長を探しているらしく捜索は困難を極めていた

もつと情報が欲しく、次に向かったのは中庭で屯していたジュン達三人。

ダメ元で聞いてみた結果、ケイから校長に関わるとある七不思議の話聞いた。

だが内容は、欲しいものとはかけ離れていた

あれよあれよと困り果ている時、リコの姉であるリズが話に参加した。しかも有力な情報を持ってだ

七不思議の一つではあるが、魔法樹に開かずの扉というものが存在するらしい。

この学校を支え、そして見下ろすその頂上、そこにある開かずの扉を開けるのは校長ただ一人

それを聞いて、みらいはモフルンと共にほうきに乗って飛び立つ

た。勿論後から、リコと翼もほうきに跨って追い掛けた

そして今は、魔法樹の幹の上で話し合っていた

『これより先、登るべからず』。看板に書いてある通り、校則で禁止されているのよ」

「何か理由でもあるのか？」

「樹に宿る力が、登ろうとする者の邪魔をしてくるんだって」

その話が本当なら、確かに禁止されてもおかしくはない。怪我でもしたら大変。

けれどみらいもみらいで、校長を見つてたくて堪らない

「ほ、他の方法を考えましょ？」

「リコどうしたモフ？」

先程からリコは落ち着かない様子。しかも魔法樹に来た時から。

危険と言う意味でなら先程の説明で理解したが、それは登った時の話。なのになんか、登りもしてない内からソワソワするのはあまりにも不自然

「怖いのか？」

「こ、怖くなんか…あ、でも校則で禁止されてるし」

「校則を無視して、ナシマホウ界にやって来た人の台詞じゃないんだが」

「怖がらせるつもりはないけど、聞いた話では毛虫が沢山出て来るとか…」

たかが毛虫、なんて翼達は思った。毛虫なんて生き物は、肌に触れなければ何かしらの症状は出ない。

見た目という事もあるが、そこまで怖がる意味が分からない。その為、翼達とリコの間には微妙な温度差を感じる

「そうだ！キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、頂上目指して飛びなさい！」

「ちよ、ちよっと！」

「登つちやダメなら、飛んで行けばいいんだよ！毛虫さんも空には来ないしー！」

「みらい凄いモフ！」

「それもそうだな。ほらリコ、ほうき出してくれ」

一休さんのトンチに近い理由で、ほうきで飛び始めたみらいとモフルン。屁理屈にも思えるが、みらいの案にも一理あると翼も賛成する  
「嫌よ！それより、危ないから戻って来なさい！」

「大丈夫大丈夫！」

「…危ない!!」

平気でな顔をして飛ぶみらいに、注意を呼び掛ける。何事かと思  
い、みらいは正面を見ると、樹の枝が大きくうねり、デコピンの様に  
してみらいとモフルンを吹っ飛ばした

「わあああ!!」

「モフ〜!!」

クルクルと回転しながら吹き飛んだ二人は、一瞬で見失い探す羽目  
となった

「だから言ったのに〜!むう〜、翼も何で止めてくれなかったのよ?!」

「邪魔をするのが毛虫だけだと思ったからで…」

「毛虫だけなんて言っていないわよ!とにかく探しに行くわよ!!」

頬を膨らませながら、先頭を歩いて行くリコに翼は、何も言えない  
ままついて行くしかなかった

「みらいとモフルンは枝に飛ばされたから……」

吹っ飛んだ先を予想しながら歩き、みらい達を呼び掛けながら進  
む。しかしその途中で、翼はリコの首の襟を掴んで引き寄せた

「グツ…!?急に何するのよ!?!」

「それ以上は落ちるぞ?」

「へっ?」

リコが進もうとした先には、普通の木の幹と同じ大きさの枝があり、  
充分通れるのだが、外側に行くにつれていかんせん足場がとて悪く  
なる。少しでも踏み外せば、地上へ落下してしまう。大怪我どころの  
話ではなくなる

「夢中になって気付かなかった。ありがとう翼」

「もう少し内側に寄ることだ」

リコの安全を確認して、みらい達の搜索を再開する。

その時、リコは斜め後ろからついてくるのだが、翼が心配する様な目で振り返る

「ストップだ」

「何？」

「俺の隣に來い。さつきみたいになると困る」

「大丈夫よ」

「いいからー！」

強引に手を握っては引つ張り、並行して歩かせた。こうして目の届く範囲に居れば、何かあつてもすぐに対応出来る為の処置

(考えてみればいつも翼って…)

よく周りを見ているが、それだけではない。みらい達に対してはいつも通りだが、ここ最近になってリコへの対応も変化している。それは悪い意味ではなく、良い意味でのこと

この変化が目に見えて分かって来たのは、学校の屋上での手紙からだ。

手紙での謝罪に、以来翼は丸くなり始めてる。まだ少し、言い合いなどはあるものの始めの方と比べると、本当に関係は良くなっている。一度モフルンが言っていた。みらいやはーちゃんに優しい時もあるけど、リコにも優しい場面はあつた。リコがそれに気付いていないだけで、以前からそういう態度を示している

そんな考えが、さつきから頭の中をグルグルと駆け回っている  
だから一度聞いてみることにした

「ねえ翼。わ、わたしの事どう思ってる？」

突然の質問に目を丸くするが、すぐさま答える

「どうって言われてもなあ……家族だろ？」

「あいや、そういう意味じゃなくて」

「友達って言われたいのか？」

何か違う、リコはそう思った。厳密にはそうなのだが、その返し方に少し違和感がある。質問したリコも、なんて答えれば分からなくなってきた

「まあ家族にしろ、友達にしろ、大切だつて事には変わりない」

”大切”…」

「何だ不満か？これ以上の言葉は思いつかん」

「…：ううん、ありがとうね」

口では嫌いと言うが、ちゃんとリコの事も気に掛けてくれていた。しかしそれが、逆に嫌で嫌で仕方なかった

少しずつだが、翼は翼なりにリコとの距離を縮めている。

だが自分はどうか？そんな彼に言えない隠し事を持っている。リコも、ちよつとずつ距離を縮めてはいるものの、それが決して埋まる事は無い

悪魔との取り引きを、いつまでも隠し通せる訳では無い。いつかは知ってしまうし、知られてしまう

「この嘘は、隠し事はいつまで続ければいい？」そんな考えがよぎる。時間が経てば経つ程、自分自身の心を蝕んでいくだけ

「ね、ねえ翼。伝えなきゃいけない事があるのだけど…」

「何だ急に？」

今なら二人きり。話を遮る者は誰一人としていない。少し怖い気もするが、いつかの時に言うなら、今言うべきだと思う

「あの、わたし——」

直後、枝を掻き分けてみらいとモフルンが顔を出した

「やつと見つけたモフ！」

「あ、みらい！モフルン！」

みらい達が見つかって良かったが、良くはなかった。最高から最悪のタイミングへと変わった

「もう二人共、迷子になったらダメだよ」

「どどっちが！」

いつの間にか、翼とリコが迷子扱いになっていた。

一応、みらいとモフルンの体を見る限りでは、吹っ飛ばされた怪我は無い。それだけ確認してそれ以上言う事はなかった

「あ、リコ。それで話は何だったんだ？まだ途中だろ？」

「えっ!?あゝ…：気にしないで。大した話じゃないから。それに、これで分かったでしょ？一度魔法学校に戻って…ひっ！」



話を逸らされたが、本人が気にしないのなら翼もそれ以上追求する事はなかった

その後リコのすぐ後ろの茂みから、何かが這う音が聴こえた

「そんなにビビるなよ。毛虫程度ちよちよいと、追い返してやるよ」  
「それに今のはゲゲかフフじゃないの?」

「ゲゲとフフなら、モフルンの隣に居るモフ」

「「えっ?」」

モフルン両隣には、確かにゲゲとフフが浮かんで居た。

となると、他の誰かと言いたいところだが、生憎此処に居る者達で全員。自分達とは他に魔法樹に登って来たと考えるも、そもそも校則で禁止されている為、登るどころか近付く人すらいない

段々とリコの顔が青ざめる

とにかく正体を知る為、翼が先立って枝を掻き分けたと同時だった。

ニュツと大きな顔を出して、こちらを見てくる、体長1メートルは優に超える毛虫が現れた

「いやああああ!!」

みらいとリコの大きな叫びと共に、翼は猛ダツシュでその場から逃げ出した。当然みらい達も後から追い掛けるのだが、先に逃げ出した翼に文句を言いながら走る

「先に行くなんて酷いよ翼君!」

「何が『毛虫程度ちよちよいと、追い返してやるよ』よ! 一目散に逃げてるじゃない!」

「あんな生き物目の間にして、逃げるのは当然だ!!」

「「はあ…はあ…はあ…」」

巨大な毛虫から逃げ切れた三人は、息を切らしてその場で止まる

「あんなに大きいなんてビックリだよ!」

「怖かったモフ」

「魔法界の毛虫はアレで普通なのよ! だからやめようと言ったのに」

もう少し説明をしてくれたら、多分やめていたかも知れない。でも結局は校長を探さないといけない

三人が息を整えていると、リンクルスマホンから声がした。

スマホンを開けると、お休みしていたはーちゃんが目を覚まして出て来た

『ゲゲ、おはようさん』

「みらい、リコ、翼。此処何処？」

三人が居る場所は、かなり広々とした所。走るのに夢中で気付かなかったが、それなりの距離を走っていたのだ。

そしてその広々とした場所の真ん中、そこには探していたと思われる開かずの扉らしきモノがあった

「アレが開かずの扉？」

「じゃあ、わたし達は頂上に来たのね！」

「行って開けてみるか」

ようやく目的の扉の前に立つ事が出来た。後は開いて校長を探すだけ。簡単な事だ

『フフ、リコ子、取り敢えず開けましょうか』

「そう、だけど。開かずの扉なんて言うぐらいだから、そう簡単に開けられるかどうか——」

それでも一応扉の取手に触れようとしたのが、指先が少し触れた途端、ハリボテの如く重みの無い扉は虚しくも後ろに倒れた

「開かずの扉って……」

「こういう意味だったのね……」

「開く開かない以前の問題じゃねえか……」

完全な無駄足となってしまった。これからどうするか、また別の方法で校長を探そうと思っていた矢先だった

「見つけましたよ」

突然聴こえた謎の声。振り返ると、バッテリーが木の枝にぶら下がって居た

「リンクルスマホンは、この私が頂きます！」

バツティは地面に着地するや否や、頭がドクロの杖を三本取り出して掲げる。嫌なオーラを醸し出し、魔法を唱える

「魔法入りました！出でよ、三つの杖に宿し力！」

その杖には見覚えがある。ヨクバールを生み出す時に使っていた杖。しかもそれが三本とある。

考えられるのは、うち二本はスパルダとガメッツが所持していた物と推測する

杖に込められる魔法が強くなり、空が曇る程に周りの環境にも影響力を及ぼしている

「スパルダ、ガメッツ。この私の力となるのです!!」

バツティは、スパルダと同じく自分自身に魔法を使って変化をもたらず

体はヨクバールと同じ大きさにまで変貌し、背中には強固な亀の甲羅、コウモリの翼を生やし、腕が二本と蜘蛛の様な鋭い腕も生えて、合計六本と化す

その姿はバツティ、スパルダ、ガメッツの長所を全て兼ね備えたヨクバール以上の怪物。原型など、殆ど無い程に変身を遂げた

「リコー！翼君！」

「いつでも行けるわ！」

「ゲゲ、準備しろ！」

「「キュアアップ・ラパパ！」」

「「サファイア！」」

「「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀劍——侵食率50%！」

空中で相手となると、こちらもそれ相応のスタイルで相手をしなければならぬ。

サファイアスタイルとなったミラクルとマジカルは、翼と共に肩を並べて宙を飛ぶ

「空飛ぶプリキュアですか？今日の私は、一味も二味も違いますよ！」  
バツティは甲羅を背にして突進して来る。一見攻撃とも言えるこの方法、防御も兼ねての攻防一体

しかし、所詮は直線的なもの。翼、ミラクルとマジカルで二手に分かれてヒラリと避ける。

更に翼は、避けると同時に飛翔して空を背にする

「単純だな。ゲゲー！」

呼び掛けに応え、煉魔之刀劍の鞘を取り出しては納める。そして居合いの構えを取り、急降下する

柄を力強く握り、鐔を親指で軽く押し上げて刃先をチラつかせる。それによって、鞘の中に溜め込んでいた悪魔法が漏れ出ている

居合い斬りと悪魔法の組み合わせは、人魚の里で一度見せた事のあるもの。

どんな硬さも、この必殺の居合いなら突破可能。煉魔之刀劍と鞘の摩擦係数を無くし、最高のパフォーマンスを發揮させる

「斬る!!」

更に落下＋加速により、極限にまで高めた居合い斬りがバツティに襲う

「フンツ!!」

バツティは甲羅を翼へと向けて、真っ向から防御する。

避けるのではなく、自分から受け切る事を選んだのは好都合。このまま甲羅事切り裂いて仕舞えば勝ち——と、思っていた

現実はその甘くはなかった

「——ッ!？」

煉魔之刀剣と甲羅がぶつかり合った時、甲高い音が鳴り響くと同時に翼の方が弾かれていた

想像以上の硬さにも驚いたが、それよりも気にするのは自分の右手だ。

弾かれた衝撃に、右手が痺れを起こして使い物にならなくなってしまった

「今です！」

「ダメ!!」

好機と見てバツティは手を伸ばすが、ミラクルとマジカルのダブルキックでそれを阻止する

翼は一度距離を取った後、心配したミラクルとマジカルは集まって痺れた手の具合を確認する

「凄い音したけど大丈夫!？」

「大丈夫…じゃない。痺れて力が入らない」

「無理はダメよ」

「お前達は俺の保護者か何かか？」

取り敢えずは、煉魔之刀剣を左手に持ち替えて戦える体勢を整える「一塊になるなんて油断しましたね！」

バツティの手の平から雲の糸が飛び出して、三人纏めて絡められる。これでは誰も身動き取れない

「オオオオ!!」

そのまま木に、地面に打ち付けては振り回す。成す術も無く、ダメージだけが蓄積されていく

三人の限界が近づいたのを見て、バツティは糸を切り離して勢いのまま投げ捨てた

揉みくちやになりながら地面を転がり、木に激突してようやく止まりはしたが、山のように積み重なってダウンする

邪魔者が居なくなり、次に狙うはリンクルスマホン。必然とはーちやんとモフルンへと近付いて来る

「スマホンとエメラルド…この二つの力こそが、ドクロクシー様が求

めるモノ。さあ、大人しくスマホンを渡すのです」

「はーちゃんとスマホンは、モフルンが守るモフー！」

「無駄です」

リンクルスマホンを奪おうとする手が伸びて来るが、はーちゃんが臆する事なく前へ出る。

ガメツツと同じ様に、勇気を持って逃げずに果敢に立ち向かい、モフルンとリンクルスマホンを守ろうとする

「はー！ー！！」

はーちゃんの声が大きく響き、それが届いたのか、リンクルスマホンがあの時と同じく光り輝く

「皆んなをイジメないで！！」

眩しく輝く光りが、闇に覆われていた空を照らし出して青い空を映し出した。この現象は、ガメツツの時と全く同じシチュエーションしかし、前回と今回と違う点も見られる。木々が騒めいては、はーちゃんとモフルンを守る様に囲い込んだ。それだけでは終わらず、一部の木はバッテリーに鞭打って攻撃していた。敵と認識しているのだ  
「これは…くっ…！！」

その隙に、翼はミラクルとマジカルを起き上がらせて背中を押す

「二人共、今がチャンスだ！」

「うん（ええ）！！」

「リンクルステッキ！」

「サファイア！」

「青き知性よ！わたし達の手に！」

「フル・フル・リンクル！」

「プリキュア！サファイア・スマーティッシュュ！」

二人の浄化技が抜群に決まり、バッテリーは元の姿に戻って魔法樹から地上へ落ちて行った

それを確認した後、三人は互いに背中を預けながらへたり込んだ

「強かったわね…」

「はう〜翼君疲れた〜!」

「コラ、膝に寝転がるな」

／／／／／／／／／

「それにしても凄かったなさっきの」

翼は、先程はーちゃん達を守った木を気に掛ける。あの力は何だったのか。謎が深まるばかり

考えていると、倒れている開かずの扉から光りが発せられ、ひとりで起き上がったのだ。

それによく見ると、扉の上部にはリンクルストーンが嵌め込まれていた

『アメジスト』。扉のリンクルストーンモフ!」

アメジストがリコの手の中に収まると、同時にはーちゃんの腹の虫が鳴る

「お腹空いた〜」

「じゃあコレを!」

早速リコは、アメジストを使ってはーちゃんにおやつを与えた。

リンクルスマホンが描いたのは、美味しそうなブドウだ。はーちゃんが一粒食べると、頭にブドウの飾りが付けられる

「美味しい〜!」

その直後、はーちゃんの体が虹色に光ってリンクルスマホンの中に戻って行った。

中を覗くと、スヤスヤと気持ち良さそうに熟睡していた

「どうしたのかしら? いつもと様子が…」

「リコ、翼君早く校長先生を見つけよ!」

「けれど肝心な扉が開かないが」

すると、リンクルスマホンのペンが勝って動き、宙に鍵を描き始めた。

その鍵は開かずの扉に差し込まれ、ガチャリと音を立てて施錠して

いたのを外した

「ひよつとして通れる様に？」

「此処を潜って進めって事かな？」

「きつとそうモフ！アメジストが導いてるモフ！」

「取り敢えず行くしかないだろ」

三人は扉の取っ手に手を掛けて、その扉を潜るのであった



## 第26話 リンクルストーン・エメラルド

開かずの扉まで辿り着くのに、様々な障害はありはしたものの、リンクルストーン・アメジストのお陰で開けるようになって、校長にももうすぐ会えるまでできた

みらいとリコは扉に手を掛けて、いざその先へ行こうとした時だった。気の抜けるような腹の空かした音が、モフルンから鳴った

「モフ…お腹空いたモフ。モフルンもグレープ食べたかったモフ」  
「全部終わって帰ったら、グレープでも食べさせてやるから我慢してくれ」

翼はモフルンの頭を撫でながら抱え、みらいとリコはその様子を微笑ましく見ながら扉を開けるのであった

少し緊張もしながら扉を抜けた先にはなんと――

「あれ?」

「此処って…」

「魔法商店街?」

「グレープモフ!」

どういう事か不明だが、折角魔法商店街に来て、目の前にグレープがあるのだ。モフルンが食べたかったので、みらいも便乗して一粒ずつ購入した。

その後はまた、扉を潜って魔法樹まで戻って来た

「すっぱい (モフ) !」

「酸っぱいブドウ・スイープだもの…って、食べてる場合じゃないでしょー!」

「校長を早く見つけて話を終わらそう。ガーネットの時から疲れて体が怠い」

「今度は甘いものが食べたいモフ」

気を取り直して、今度こそ校長に会う為扉を開けて通り抜ける。

その先には、きつと校長が笑顔で待っていてくれる筈

しかし待ち受けていたのは、校長の姿ではなく

「いちごメロンパンモフ〜！」

ナシマホウ界の公園が目の前に広がっていた。移動販売もしているモフモフベーカリーもあり、この時もモフルンの要望に応えるべくいちごメロンパンを購入したのだった

みらいも一緒になっていちごメロンパンを食べており、甘いと感想を言って満足していた。

只、何故ナシマホウ界に通じていたのかの疑問に関しては、全く触れずじまい。

触れたとしたらやはり校長だ

「そういえば校長先生居なかったね」

「あの扉の仕組みどうなってるんだ？頭に思い浮かべた所に行けるんじゃないまいし」

「えっ？わたしは丁度食べたいなああって少し思ってたり」

「さっきも、グレープを食べたいと思ったら、食べられたモフ！」

「あ、もしかして！」

翼の言葉がヒントとなり、みらいとモフルンの相槌を聞いて扉の仕組みをようやく理解した

原理は簡単である。先程……というより既に翼が答えを出しているようなものだった。どんな場所だろうと、頭の中で思い浮かべさえすれば、ありとあらゆる場所に扉は開かれる

『ゲゲゲ、なら後は簡単だな』

今度は校長を思い浮かべながら、扉に手を掛ける。念には念を込めて、ゲゲとフフも祈る様にして思い浮かべる

「校長先生！」

「じゃあ、しっかり思い浮かべたところで！」

三人は扉を開けて、大きく元気な声で校長を呼び掛けた

「校長先生〜！」

「！？」

上手くいって校長が居る場所に扉は開かれたのだが、目の前に広がる光景を目にした途端、翼達全員の動きが静止する

場所はどこか薄暗い洞窟とおもしき場所。勿論、探していた校長はやつと見つかったのだが他に人も人が居たのだ。

校長と対峙するバツティ、トカゲの様な見た目をしている男性が一人の合計二人。

目の前の情報から察するに、トカゲの人物も含め敵のアジトのど真ん中に飛び込んでしまったらしい

全員表情など一切変えず足だけを動かして、ゆっくりと通って来た道を後ろ歩きで帰って行く

魔法樹に戻り、扉が閉じた事を確認してから冷静になって考える……が、一瞬でそんなものはどこかに飛んで行って慌てふためく

「な、何あれ!？」

「アレ、一体どういう状況だよ!？」

「ビビビビツクリした!!」

『フフ、三人共、校長が居たのちゃんと見たのかしら?』

「二「あつ!」」

目に映った光景が衝撃的だったが、それでもちゃんと校長を視認はしていた。急いで再度扉を開けると、見たまんまというべきなのか、校長とバツティは丁度交戦状態となっていた

「やっぱり居た!」

「みらい君!リコ君!翼君!」

「なんかお取込み中の所だったみたいだな……」

「し、失礼しまゝす」

訪ねたタイミングがあまりにも悪かった為、気が引ける挨拶をしながらなんとか誤魔化した。更に、通って来た扉も消えて無くなり、後戻りが出来なくなった

そんな突然の来訪者に、目を光らせる者がもう一人居た。その者は、距離の離れた場所で石で作り上げているへんぴな玉座に座っている。姿は、ダボついた服装をしており、しっかりとまでは見えないが、その顔はドクロ。きつと服の下もドクロ姿と予想する

来訪者に対して何か動こうとする時、トカゲの人物「ヤモー」が声を出す

「ドククロクシー」様！」

ドククロクシー、闇の魔法つかい達を刺客として送り込んでいた張本人。倒すべき親玉の名前

ドククロクシーは、置いてあった壺から出る蒸気を使って、ヤモーに言葉代わりに思う内容を伝えた

「なるほど、リンクルスマホン。わざわざお持ち頂けるとはご苦労様です」

リコがリンクルスマホンを持っている事を見抜かれた。

それを警戒して、翼達はスマホンを守る様に身構える

ドククロクシーは力づくで奪うつもりか、右手を翼達に向けては闇のエネルギーを充填し始める。

リンクルスマホンを傷付けぬように威力は最小限に留めるつもり  
の様だが、変身や侵食されてない生身の状態を受けてしまうと、確実に致命傷は避けられない

そして放出されたエネルギーは手の形となり、リコが持つリンクルスマホンへ

だがそこに、一つの閃光が闇のエネルギーを遮った。

その衝撃で、翼達は大きく尻餅を着いて転んでしまう

光りは長い棒となり、校長の手の中に収まった。光りが弾けると、魔法の杖の姿をしていた。それが校長の魔法の杖なのだろう。大きさは見て分かる通りのもの。校長の身長以上

「大事な生徒達に手出しはさせぬ。それに…」

今のたった一度の魔法攻撃で、校長はドククロクシーの正体を看破した

そもそも闇の魔法は、遙か昔にあまりにも危険過ぎる故に禁じられ、葬られた過去の遺物。その様な代物を蘇らせて、行使出来るのは校長がよく知る人物

「其方、我が友『クシイ』じゃな？」

何故この様な真似事をするまで、墮ちる事となってしまうのかは

校長は知っていた

校長は水晶を片手に、その時の映像を観せる

いずれ来る大きな災いを知り、それに対抗・回避する為にはリンクルストーン・エメラルドが必要不可欠と断定した。

しかし、あらゆる手を尽くしてもその手掛かりを掴む事は無く、クシイは別の方法で力を得ようとした

それが闇の魔法。禁じられた魔法の書物を集めては研究したが、その果てに待ち受けていたのは残酷な現実だった

「クシイ、其方は命を落としたはず！」

「ッ!?!」

「命を、落とした…」

亡くなった者が目の前に居ることに翼とみらいが驚愕するが、リコだけは驚くどころか俯いていた。それは自分自身が一番理解していた

「ドクロクシー様には、最早人としての魂は有らず。有るのはこの世に留まる強い欲望。強気力を手にするという、欲の念が闇の魔法により仮初の体に残された」

それがエメラルドに執着する理由に、ドクロクシーとなったクシイが存在する意義

『我は闇の魔法の使い手なり。ウオオオオ!!』

これ以上の話は時間の無駄と悟った校長は、最終手段である強硬手段に切り替える

「ならば——キュアアップ・ラパパ！」

魔法の言葉を唱える校長の体は白く輝き、姿を変える

質素な服装から大きなマントを翻し、帽子、白き服装へと変貌する。

その姿は校長というより、まるで賢者の様な姿

「光を照らせ、闇を退けよ!!」

杖から放たれた鋭い閃光が一直線にドクロクシーに向かって行くも、それを妨害する闇の魔法もまた同時に放たれた

ドクロクシーに忠実な僕として動いていたバッテリーによる仕業。こちらと同じく、ドクロの杖から出る闇の魔法で対抗する

「これ以上ドクロクシー様にお力を使わせる訳には…ッ!!」

しかし、校長の魔法があまりにも強過ぎるせいか、相殺は出来たもののバツティの持つ杖が砕け散ってしまう

それに比べ校長にはまだ余力がある。明らかに力の差があると断定出来る

「来るべき日に備え、長きに渡り封印し、力を蓄えていた我が魔法。まさかクシイ、其方に使おうとなろうとは!!」

「みらい、リコ、モフルン。もう少し離れないと巻き込まれるぞ!」

翼はみらいとリコの手を引き、ゲゲとフフはモフルンを抱えて少しでもその場から離れる

『消え去れ、光よ!!』

互いに高める魔力を大きな光弾として溜め、そしてそれを一気に打ち出した

衝突の瞬間、激しい魔力のぶつかり合いに吹き飛ばされぬ様に、その場に居る者全員が踏ん張る

バツティすらものともしなかつた校長なら、ドクロクシー相手にも勝てると思っていたのだが、それは検討外れとなる

「何ッ!？」

ドクロクシーの闇のエネルギーが、校長の光を呑み込みそのまま一直線に直撃して大爆笑が起きる

激しい魔法のぶつかり合いは、ドクロクシーが制した。とはいえ、ドクロクシーもかなり力を消耗した

「離れてて正解だったな…」

翼の咄嗟の行動で離れてた為、爆発には巻き込まれず、土煙りを被った程度で済んだ

「それよりも校長先生は!？」

みらいが辺りを探していると、倒れている校長を見つけ出した。

倒れたせいで、帽子で顔は隠れて安否までは確認は出来ない

「校長先生!？」

「校長先生手を」

リコが手を差し伸べて起き上がらせようとした時だった。校長の

帽子が起き上がる拍子にズレ落ちて、隠された顔を露わにする

「「ええええええ!?」」

それを見た翼達三人は思わず大声を出して驚いた

それもその筈、先程まで凜々しく勇ましかった校長はなんとヨボヨボのお爺さんになっていた

「お爺さんになったモフ!」

長く伸びた髭に、しわかちやの肌。見ての通り、何処にでも居るただのお爺さん。

だが変わったのは校長だけではなかった

「力を使い果たしてしまったようじゃ…」

水晶までも、映る絵がヨボヨボのお婆さんになっていた

「だが今がチャンス。校長のお陰でドクロクシーは弱っている筈だ。そこで俺た、ち…が…あ?」

絶好の好機と見た翼は、みらい達に変身して戦う様に促そうと目を向けると、みらいとリコはドクロクシーの魔法によって宙に浮かされていた

『我が手に』

ドクロクシーは、リコが持っていたリンクルスマホンだけを抜き取り、自分の手の中にへと収めて奪い取ったのだ

『ゲッ!』

ゲゲが悪魔魔法・因果を使って、その魔法に触れる事で打ち消した。しかし奪われた後では遅かった

おまけにリンクルスマホンの中では、今もぐっすりと眠っているはーちゃんが居る

「急いではーちゃんとスマホンを取り返すぞ」

『ゲゲ、みら坊!リコ坊!』

『フフ、今すぐ変身するのよ!』

「「分かってる!!」」

「「キュアアップ・ラパパ!」」

「「ルビー!」」

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「煉魔之刀剣——侵食率50%！」

「はーちゃん!!」

ミラクルとマジカルが同時に飛び出し、拳を使つての攻撃を繰り出した

ドクロクシーは防御する為、魔法陣を展開して二人の攻撃を受け止めた直後、突風を起こして大きく吹き飛ばした

「キヤアア!!」

「ミラクル！マジカル！」

『フフ、心配してる暇はないわ!』

『ゲゲゲ、魔法で作り上げた防御なんぞ打ち消してやる!』

ゲゲは煉魔之刀剣に魔法を纏わせる。翼も即座に大きく振り翳して黒い斬撃を放つ

「因果斬り！」

黒い斬撃は突風をもとめせず突き進み、ドクロクシーが展開した魔法陣を斬り、打ち消した

それを合図に、体勢を立て直したミラクルとマジカルは走る勢いをつけて高くジャンプし、片足に炎を纏わせ同時に蹴りを叩き込む

「ハアアア!!」

ドクロクシーも直前で防御が間に合ったが、ルビーの攻撃力はとても強く、その衝撃によって背にしている壁に大きなクレーターが出来たものだった

『——ッ!!』

だが、ドクロクシーもそう簡単には負ける訳にはいかない。防御を



する魔法陣に魔力を込め、そこから攻撃へと切り替えた。

放たれる魔法攻撃は、二人を呑み込んで地面へと引き摺り回して叩き潰した

「クッー」

ミラクルとマジカルが倒れてしまった。だが構っている暇はない。

翼は、煉魔之刀剣に全ての力を込める。顔まで広がっていた黒いアザは、煉魔之刀剣の刀身に移動して黒く染まる。

50%の力全てを纏い、大きく振り上げる

「これを食らえば魔法は使えない!!」

地面に叩き付けるように、煉魔之刀剣を振り翳して巨大な斬撃を放った

触れれば全てのもものは、原因と結果を斬られて無かったことにされる。それを知っても尚、ドクロクシーは魔法で対抗する

何を考えてるか知らないが、このタイミングで魔法を使ったところで力の無駄打ち

闇のエネルギーが撃ち放たれるも、因果魔法の餌食となる——筈だった

どういう訳か、打ち消せれず互いの攻撃がぶつかり合っている

「んな馬鹿な!」

因果の魔法でも打ち消せれない理由は簡単。どんなものにも限界があるということ。打ち消せれる許容量を完全にオーバーしているのだ

その衝突の結末は、因果の魔法が完全に振じ伏せられ、闇が翼を呑み込みミラクル達の元まで吹っ飛ばされた

倒れる翼は動けず、侵食も全て消え失せていた。許容量を超えた攻撃は、体に纏まっていた因果の魔法も貫通してその身に受けたのだ。そのダメージは計り知れない

「帰るんだ…ッ」

それがどうしたというのだ。通用しないから、痛いから、動けないからと言いついて、このままおめおめと引き下がる訳にはいかない

最初から道は一つ

翼は強引に足を動かして立ち上がり、ミラクルとマジカルの手を取り、起こし上げる

「魔法界で、補習を受けて沢山学びました。なによりも行動、負けない心をー!」

「魔法界だけじゃない。あつちの世界でも勉強になりました。世の中には色んな人が居て、色んな考え方があるんだって!」

「だから帰るんだ。皆んなと一緒に…」

「はーちゃんも一緒に!!」

その時だった。どこからか不思議な力を感じ取り、モフルンもその力の匂いを嗅ぎとった

「とっても甘い匂いがするモフ…!」

「…ハッ! いやそれより二人共!」

「ツ!!」

「リンクルステツキ!」

「ルビー!」

「紅の情熱よ! わたし達の手に!」

「フル・フル・リンクル!」

「プリキュア ! ルビー・パツシヨナーレ!」

この一撃が決まれば、ドクロクシーといえどひとたまりもない。運が良ければ浄化出来るかも知れない。

その望みに懸けて、渾身の魔法を使用したのだが

『——ッ!』

その直前で、ドクロクシーは地面に魔法陣を展開させ、その場に居る者全員を転移させたのだった

／／／／／／／／

転移させられ、移動した場所は魔法樹がそびえ立つ目の前だった。

そこでは目を疑う光景。魔法樹が緑の光を発して辺りを輝かして

いた

そしてその光は、一箇所に集まって形を成そうとしていた

「モフ!？」

その光に連れられて、モフルンにセットしていたリンクルストーン・ルビーが飛んで行ってしまい、ミラクルとマジカルの変身が解けてしまった

光に連れられたのはルビーだけではない。全てのリンクルストーンが、その光を囲い込む様にして一箇所に集まった

そしてとうとう光が弾けると、最後のリンクルストーンが姿を現した

『『エメラルド』！命のリンクルストーンモフ！』

誰もが探し求めていたリンクルストーン・エメラルドが、今此処に降臨した。しかしあまりにも輝きが強過ぎる故、その形までは視認出来ない

「あれこそがドクロクシー様が求めていた力……！リンクルストーン・エメラルドオオオ!!」

翼達よりも先に、ドクロクシーに献上する為バッテリーが颯爽と手を伸ばして飛び出した

がしかし、エメラルドから発せられる光りによって、バッテリーは叫びを上げながら浄化されてしまった

『ゲ……あそこまでの強大な輝きだと、悪魔のオレも浄化される……』

エメラルドの力は想像以上なもの。闇の力を持つ者が不用意に近づけば、その輝きによってバッテリーの様に浄化されてしまう。勿論、悪魔であるゲゲも例外ではない

急にリンクルスマホンがカタカタと震えだした。エメラルドに反応し、その光がスマホンへと注がれていく

それを見たドクロクシーは動き出した

『魔法よ、入れ!』

ドクロクシーは己と、エメラルドの力を得たリンクルスマホンで魔

法を使って吸収した

「はーちゃん！」

リンクルスMahonが取り込まれたとなると、当然はーちゃんもそれに巻き込まれてしまっている

力を得たドクロクシーから、膨大な闇のエネルギーを放出しながらその姿を変貌させる

ヨクバール以上の巨大なドクロク姿となり、翼達の目の前に立ち塞がった

遂に始まるプリキュア対ドクロク<sup>闇</sup>シー

その果てで、エメラルドを手にするのは――

## 第27話 光と闇

闇の魔法が強大となり、周りの環境に悪影響が出始める

空は雷雲が立ち込み、植物は枯れ果て、海は荒れ果てる。それは魔法界だけではなく、ナシマホウ界にも影響を及ぼすほど

リンクルストーン・エメラルドの輝きを持つリンクルスマホン、ドクロクシー。光と闇が一体となった今、止める手段は残されていない  
世界に災いが今にも降り掛かろうとする以上に、みらいは彼女の事を第一に考える

「闇の魔法とかそんなの知らない。それよりもはーちゃんを……はーちゃんを返して!!」

『ウオオオオ!!』

ドクロクシーの雄叫びに風が吹き荒れ、全員が吹き飛ばされそうになる。いつまでも吹き続ける風に、リコが耐え切れず飛ばされそうになった時

「リコ!!」

間一髪のところのみらいが手を掴んで支えた。握りしめるその手は、離れないように強く繋いでくれていた

みらいはいつもそうだ。リコより前に出ては、その手を握って見たこともない世界に連れ出してくれる。

その他にも、どんな状況でもその手を離さない様に握ってくれていた

「リコ、大丈夫だよ」

「…そうね、うん。わたし達がしっかりしなきゃね!」

繋いだ手を更に強く握り締めると、それにリンクルストーンが応えてくれた

「甘い匂いモフ!」

「まだ、希望はある!」

リンクルストーンは、その希望であるみらいとリコの元へと吸い寄せられる様に現れて、リンクルストーン・ダイヤが一際輝きを放っていた

「行くよりコ、翼君！」

『キュアアップ・ラパパ！』

『ダイヤ！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア！』

「煉魔之刀剣—— 侵食率50%！」

「わたし達は、ただ返して欲しいだけ」

「俺達は俺達の為に戦う。だから！」

「はーちゃんを返して!!」

その様な事がどうだと言う返事の代わりに、ドクロクシーは体から無数の黒い触手で仕掛けて来た

『ゲゲ、来るぞ！』

「分かってる！持つとけ！」

悪魔の翼を大きく広げ、煉魔之刀剣を一度ゲゲに預けた後にミラクルとマジカルの手を掴んで、ドクロクシーへ向かって飛んで行く

四方八方から襲い掛かって来るが、空を飛べる翼はそれを全て避けて行く

「ぶちかませ！」

触手全てを攻撃に回してる為、ドクロクシー自身の防御は手薄。翼は二人を胸の方へ投げ飛ばして、その勢いに任せて二人は蹴りをかました

「いやあっ!!」

『グウツ……!』

直撃はしたものの二人の攻撃を受け切った。蹴りを入れた二人は

その場で動きを止めている。それを見たドクロクシーは、両手で捻り潰そうとして来たのだ

「間に合わないならー!」

ミラクルとマジカルがその場から離脱するのは無理と判断した翼は、わざと因果の斬撃を二人に向けて放った

二人は足に力を入れて蹴り出すも、やはり回避は不可能。だがそれを可能とさせるのが、翼が放った斬撃

斬撃は二人をすり抜けて、ドクロクシーに直撃してよろめいた。そのお陰で、ミラクルとマジカルは潰されずに、翼の両腕に収まった

このやり方は、以前にもした覚えのやる戦法。ミラクルとマジカルには、斬ったという原因を無くして、そのまますり抜けていったのだ  
「よろめいた!」

すかさずミラクルは、リンクルステッキを構えてリンクルストーンをセツトする

「リンクル・アメジスト!」

目の前に現れた魔法陣の中に、ミラクルとマジカルを持ったまま翼は飛び込んだ

更に魔法陣は、ドクロクシーの頭の上に二つ、顎下に一つ現れて、それぞれの中から翼達が飛び出して攻撃の準備をしていた

ミラクルとマジカルはドクロクシーの上から、翼は顎下に向かって蹴りと拳を同時に叩き込んだ

「ツーン!」

ミラクルとマジカルは蹴りは両腕で防がれたが、翼の拳は顎をかち上げた

「よし…ガッ!!」

だが、かち上げられた頭を起き上がらせるついでに、翼に頭突きの反撃を繰り出した

地面に落とされて怯んでる隙に、ドクロクシーは両目から光線を放とうとしていた

「リンクルステッキ——リンクル・ムーンストーン!」

ドクロクシーの顔の前に、マジカルが満月型のシールドを展開し

て、翼への攻撃を防御した

「ハッ！」

今度はドクロクシーが防御された事に後退り、その隙に翼が二撃の斬撃を放って反撃した

斬撃は見事に命中し、その追撃にミラクルとマジカルがもう一度蹴りをお見舞いして、ドクロクシーに尻餅をつかせた

今までにないチャンスに、翼は悪魔法を右腕に込めて凶悪な爪で切り裂いてやろうとするも、やけになって繰り出した足裏に蹴り飛ばされた

ようやくドクロクシーは立ち上がるも、まだプリキュア達の妨害は続いてく

「リンクル・ガーネット！」

ミラクルがガーネットの力で、足場となっている魔法陣を揺らして立ち上がらせない様に行使用する

「ハアアッ！」

背後に回っていたマジカルが、うなじに向けて向かって行くも、それに気付いたドクロクシーは足場に手をつけて体制を固定し、振り返っては両目から赤い光線を放ち、命中させた

倒れるマジカルを掴んで、数メートル先にある岩に投げ飛ばした

「マジカル——きやつ！」

マジカルの心配をして油断が出来た隙に、ドクロクシーの重たい拳がミラクルの体に突き刺さり、こちらも数メートル先にある岩場まで吹き飛ばされた

『我に力を…！』

ドクロクシーは、周りのある植物などの力を自らの体に取り込み、力を増大させる

「私もドクロクシー様のお力に…」

ヤモーもドクロクシーに魅了されて、自らの体もかえりみずに差し出そうする。けれどヤモーの尻尾を、モフルンと校長が掴んで止めに行く

「ならぬ、闇に呑み込まれては」



「ダメモフー！」

「ふぐぐ〜っ！」

敵とはいええ、懸命に止めようとする二人だが、トカゲの様に尻尾を自ら切って抜け出した

「ドクロクシー様〜！」

二人の静止は無念にも届かず、ヤモーはその忠誠心を身を持って表して、差し出したのであった

ヤモーを取り込んだ事により、ドクロクシーの体の質量が多くなつて、少し見た目が大きくなった。

勿論見た目だけではなく、そのパワーも桁外れに上がっている

近くで倒れてる翼を狙いをつけるかと思えば、ミラクルの方へとドクロクシーは足を向ける

『フフ、此方は無視するの？』

「無視だと…舐めるな！マジカル早く来い！」

「これでも急いでるのよ!!」

マジカルは岩の破片を足場として飛び移り、翼も悪魔の翼を広げてドクロクシーへ向かう

ドクロクシー後頭部に煉魔之刀剣の刃、マジカルの拳を打ち付ける。揺らす程度の斬撃と打撃を与えたが大して効かず、片腕でマジカルを海の中へとはたき落とし、そのまま翼を捕らえた

『力を一つに…!!』

「やばっ!!」

ドクロクシーは口を開けて、翼ごと力を吸収しようとしていた。早く脱出をしたいが、ジタバタするだけで何も出来ずじまい

「翼君!!」

「離しなさい!!」

ミラクルが飛び膝蹴り、海中から出て来たマジカルが肘でドクロクシーの手を弾かせた

「皆んなの力を無理矢理呑み込むなんて！」

「そんなの、力を一つにするなんて言わない！」

「力を合わせるって意味が分からないなら」

「教えてあげるわ!」

戦いも最終局面に差し掛かった時、ドクロクシーの体内から、突如として緑の光が溢れ出していった

「とっても甘い匂いモフ!きつと、はーちゃんが呼んでるモフ!」

「呼んでいるなら、それに応えなければな」

『ダイヤ!』

『永遠の輝きよ! 私たちの手に!』

『フル・フル・リンクル!』

二人がダイヤをステツキで描く隙を見計らって、ドクロクシーは口から禍々しい光線を放って妨害にでた

ドクロクシーの思惑通り、浄化技の体制に入ってしまったいそれを中断する事は出来ない。

けれど一人だけ、動ける者が後ろに控えていた

「ゲゲ、全部出し切るぞ!」

『ゲゲゲ、残る魔力ありったけ持つてくんだな!』

戦っているのはミラクルとマジカルだけではない。戦っていれば、いつかこんな場面があるのは分かっていた

だからこそ、そんなピンチの時に二人を支える翼となるのが彼——  
十六夜 翼だ

全魔力を纏った煉魔之刀剣の刀身は、大剣と呼べる程の大きさまで変化させた

高く掲げ、準備は整った

「悪魔法——全力の因果斬り!!」

踏み出す一步は大地に減り込み、揺らす。同時に振り下ろした斬撃は、触れた光線を容易く真つ二つに切って消滅させた

『ナニ……グッ、グオオ!!』

ドクロクシーの攻撃を打ち消した直後、緑の光りは更に膨らみ、そのままドクロクシーの口から外へと出て行った

光も全て、はーちゃんによるものだった

「はーちゃん！」

はーちゃんがドクロクシーの体内から抜けた事によって、思う存分に魔法を放てる事が可能となった

『プリキュアー・ダイヤモンド・エターナル！』

エメラルドの力を失ったドクロクシーは、抵抗もままならず、呆気なく浄化されたのだった

三人は変身を解いて、ゆっくりと落ちて来るリンクルスマホンをキャッチしようとするのだが、人の姿をした巨大な闇が現れた

その闇こそ、ドクロクシーの怨念そのもの。不意を突かれて、変身する暇などない

怨念が迫り来る時、リンクルスマホンが輝いてはーちゃんが出て来た

「はーちゃん！」

はーちゃんの輝きが最高潮に達した時、姿形を大きく変えて、翼達と大差変わらない妖精の少女へと成長した

優しく両手を広げて、その余りある力を持って怨念を容易く消し去った

すると、形崩れる怨念の中からドクロクシーの本当の姿であるクシイが姿を現した

クシイは、はーちゃんに連れて行かれるように天へと昇って行った  
それを見届けると、はーちゃんは一気に力を解放した。光が辺り一面を覆い尽くし、収束すると、力を奪われて枯れた植物達が息を吹き返してたちまち緑を取り戻した

だが、残ったのはリンクルスマホンのみで、中にはーちゃんが居ることはなかった

それでも、全てが消えた訳ではなかった

「…甘い匂いがするモフ。遠くで甘い匂いがするモフ」

「それって、また会えるって事でいいんだよね？」

「モフ」

「はーちゃん…」

残された者達は、消えた者の帰りを待つ事しか出来なかった

### 第三章 エメラルド編

#### 第28話 #キュアアフェリーチエ

闇の魔法つかい達との戦いに終わり、はーちゃんが行方をくらましてから、時間はあつという間に経って季節は夏

太陽の光りが津成木町を照らして、温度を上げて猛暑となっていた学校帰りの翼達は、木陰のベンチで休みを入れつつ今日学校での事を話していた

「リコ、一番で凄いモフ!」

「まあ、予習復習をちゃんとしていれば当然の結果よ…」

期末テストでの結果は、リコがクラスで一位という劇的なものだった。まだナシマホウ界に来て、半年程しか経ってないにも関わらずだ。

リコの性格なら当然だが、それに対して翼はいつもの様に茶化すのであった

「それ、まるで俺とみらいが勉強してないみたい言い方だな。流石リコだな…魔法はイマイチなのに」

「魔法も頑張るわ…」

翼に対してのキレがイマイチ。いつもならここで、雷が落ちて言い合いが始まるまでが一連の流れ。

この様な事は何も今回に限った事ではない。はーちゃんが居なくなっただけから、毎日がこの調子。それはリコだけではなく、みらいも同じく元気がない

「それにしても暑いな。汗かいたりするから、夏はとことん嫌になる。やっぱ春が過ごしやすいよな」

「それなら魔法界に引越してもする?魔法学校なら年中春だから、翼からしたら優良物件だと思うけど」

「ずっと春なのか!?!」

「ええ、魔法界は場所によって季節が違うの。補習で行った氷の島・ひやつこい島ならずと冬だし」

「氷の島…」

季節の話からひやつこい島に変わったただけなのに、みらいとリコに加えてモフルンまでも元気を一気に無くす

その時のひやつこい島での事は、翼はまだ魔法界に来ておらずの為、そこでどのような事があったかは不明。しかし、そのひやつこい島でもはーちゃんとの思い出はあるみたいだ

「帰る」

「えっ、もう？もつと一緒にいようよ」

「そんな調子で居てもつまらん。俺はお前らと一緒に居るのは楽しいが、こんな暗い雰囲気をつつまででも続けてたら変になる」

「ごめんね…」

「だから…もういい」

みらいに謝らせた事もあるが、いつまでも引つ張っている事に呆れて、早いところ帰宅するのであった

／／／／／／／／／／

次の日の朝。津成木町の上空をフラフラと翼が飛んでいた。一向に安定せず、そのまま高度が下がってはとうとう、ある公園の茂みに墜落して行つた

『ゲゲゲ、見事な着地だなあ』

「うるせえ…」

『フフフ、昨日家に帰ってから休まず飛んでいるからよ。飛行可能な25%、低いとはいえ体にはちゃんと負担が掛かっている。フフ、これだけ飛べたのが不思議なくらいよ』

フフに説教されてるが、そんなものは無視して、また侵食率25%まで引き上げようとしていた

『フフ、やめなさい。過剰な侵食は生命に関わる』

「だけだよお…」

フフの言葉なら素直に聞く翼だが、今回は何故か渋つては言うことを聞いてはくれない。その理由は、ゲゲもフフも知っていた

『フッフ、これも全部あの子達の為?』

「違う、自分の為だ。アイツらには笑顔で居てもらいたい。だから探すんだ。俺やお前ら、みらいにリコ、モフルンにはーちゃん。誰一人として欠けちゃいけないんだよ」

それを聞いて、ゲゲとフフはニヤリと笑っていた。別に変な事は言っていないのだが、そんな二人が気になった

「な、何で笑うんだよ?」

『ゲゲゲ、自分で言ってる気付いてないのかよ』

『フッフ、そんなにあの子達が大切なのね』

「……はあっ!?!」

顔に熱が込もってあたまがと誤魔化し始める。今までの翼らしからぬ行動

「ち、違うし!」

『フッフ……誰?!』

「おい、二人は何で隠れない?」

『ゲゲ、妙な気配がする。悪いものじゃないが…』

和気藹々としている最中で、別方向の茂みから誰かが近付いて来る足音が聞こえた。嫌な気配ではないが、不思議な気配の為にゲゲもフフも、翼の中に隠れはせずに警戒をしている

そして三人の目の間に現れたのは、翼達と と対して歳が変わらない少女だった

ロングのピンクヘアに、白色と緑色を基調としたオフショルダー型のトップスと蝶の模様が入ったフレアスカート。なんとも可愛らしい姿

少女もこちらに気が付いて、明るい表情をしながら近付いて来た

「やっと会えた〜!落ちて行くの見たから、リコかなあ〜って思ったら翼だったよ」

「待って待って……お前誰?俺の名前もだけど、何でリコまで知っているんだ?」

「酷いなあ〜。わたしだよ、わ・た・し! “はーちゃん”だよ!」

翼はじつくりと観察しながら、本当にはーちゃんかどうか見極め

る。髪色や顔から見ても、その面影が確かにあるにはある。それに声に聞しても何処となく似ている

『ゲゲゲ、色々と姿は変わってはいるが確かに…』

『フフフ、嘘はついてなさそうね』

「嘘なんてつかないよ！」

「はいはい。ではーちゃん、おかえり」

おかえりの言葉を聞いて、はーちゃんは勢いよく抱き着いてくれた。よほど会えた事が嬉しかったのだろう

翼も心の中で嬉しく思っていたが、それに水を差したのがはーちゃんだった

「翼なんか臭い」

／／／／／／／／

徹夜ではーちゃんの事を探し回っていた事もあり、一度休憩も兼ねてはーちゃんと共に家に戻った

「お風呂出て、汗も落としたから臭い匂いは全部取れたぞく…おい」  
帰って早々にお風呂に入っていた翼だが、リビングに行き着くと、ゲゲとフフがはーちゃんに対してあれやこれやお世話をしていた

『ゲゲゲ、んだよ』

「それはこっちの台詞だ。何勝手に人の家の冷蔵庫漁って食べてんだよ」

『フフフ、じゃあはー子に何も食べさせない気？』

「はーちゃんはいいんだよ！」

『『やっぱり甘い』』

満腹になって、口元についてる食べカスを拭って、翼もようやく落ち着きはした。ふと、時計を見るとお昼を過ぎていた

「時間も良いし、みらい達の所に行くか。ちよつと電話して来る」

一度翼は退出して、ゲゲとフフははーちゃんとの会話を楽しんでいた

『ゲゲゲ、それにしても、はー坊は大きくなったなあ』



「わたしからしたら、ゲゲとフフがちっちゃくて見えるよ」

『フフフ、立派に育って。将来は美人さんね』

「はー！フフにそう言われるとなんか照れる！」

手早く電話を済ませた翼が戻って来たが、少し苦笑いをしていた

「みらい達は今、ショッピングモールに出掛けているらしい。だから俺達も出掛ける羽目になるが…」

『ゲゲゲ、どちらにしろみら坊達に会いに行くなら、オレ達も出掛けて行った方が手間は掛からん』

『フフフ、はー子は——』

「会いに行こうよ！」

食い気味且つ即答の返事に、三人は思わず笑みを溢す。やはり、みらい達に会いたい気持ちはかなりのもの。それに応えるのも、また翼の優しさ

「行くか！」

「はー！」

「それで、何でショッピングモールに行かないの？」

迷子にならない様に、翼が手を繋いでみらい達を探しに出掛けているのだが、行き先はショッピングモールとは別の方向だった

「簡単な話、入れ違いを避ける為だ。移動中にみらい達は動いてる筈だから」

「そっかー！」

そんな二人の様子を見るゲゲとフフは、同じ事を考えていた。大きくなったとはいえ、中身はまだ幼いまま。そのせいもあり、本当の親子にも見える

「それじゃあ、何処に行ってるの？」

「ほら、今朝の広場にさ。そこでいなければ、心当たりがある場所へ行けばいい。それにちよつとした散歩にもなるだろ」

『フフフ、考え方が父親ね』

「そりやどうも…？」

すると突然、空の天気は怪しげな雲に包まれて暗くなってしまった。風に吹かれたというのではなく、明らかに何か起きてそうなたとしか言いようがない

「少し急ごう」

広場に到着したのだが、そこで思ってもみない光景を目にした。

空は暗く、何故かプリキュアに変身したみらいとリコ。それに相対してるのは、パワーアップしたヨクバールと、ドクロクシーに吸収された筈のヤモーだった

キュアミラクルとキュアマジカル、二人は果敢に奮闘しているが、かなり悪戦苦闘を強いられている

今すぐに助けに行かなくてはと、はーちゃんが歩き出すも翼に肩を掴まれて止められた

「はーちゃんは隠れているんだ」

「わたしだつて戦える！」

「どうやって？」

妖精とはいえ戦う力など存在しない。だと言うのに、その自身ありげな言葉は何かと問う。

はーちゃんは自信満々に懐から、一つのリンクルストーンを取り出した。みらいとリコが持つリンクルストーンと、形状は同じだが大まかな色などは違う。特に驚かされたのは、そのリンクルストーンの種類

「リンクルストーン・エメラルド」

「わたし、二人を助きたい」

翼は視線をミラクルとマジカルの方へ向ける

「もう、嫌なの……大切な皆さんとお別れなんて…嫌なの！」

「はーちゃんは、貴方達を止める為に居なくなったのよ。わたしは絶対に、はーちゃんを見つけてみせるって決めたのに、今度はそれを邪魔するの？」

ボロボロになつて尚、はーちゃんの為になんとかしようとする意思を感じた。まるで子を思う母親の様に

「スマホンがあれば、わたしは出来る」

「何を？」

「行かせてくれたら分かるよ」

その瞳の奥に、強い意志の感情を見た翼は、はーちゃんの言葉を信じる事にした。不安は拭えないが、リンクルストーン・エメラルドを手にしてる今なら、何が起きても不思議ではない

「無理はするなよ」

はーちゃんは、エメラルドを力強く握つてミラクルとマジカルの元へと歩き出した。そして、エメラルドの力によるものか、はーちゃんの体は緑の輝きを放っていた

それと同時に、ミラクル達が持っているリンクルスマホンからも輝きの反応があり、はーちゃんの手元に引き寄せられた

「リンクルスマホン」

はーちゃんがスマホンを触れると、辺り一面に光りが溢れ、闇に満ちていた空が晴れ晴れと照らし出してくれた

この現象に全員が気付かない訳がない。突然現れた少女・はーちゃんに視線が注目される

「キュアアップ・ラパパー！」

「エメラルド！」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

魔法の言葉を唱え、リンクルスマホンにリンクルストーン・エメラルドをはめ込む。そして、スマホンの魔法のタッチペンで筆記体の「F」書き、更に言葉を唱えて衣装を身に纏う

ピンク色の髪が左右に伸びて編み込んだ三つ編み形が目立ち、緑を主体に白も配色されたドレス風のコスチュームへと変える。

胸元に緑の宝玉がついた赤いバラのような花が目立ち、背中にはほんのり緑色がついた半透明の4枚羽が付けられていた

誕生した三人目のプリキュア。その名は――

「あまねく生命いのちに祝福を！キュアフェリーチェ！」

「プリキュアモフ！」

「ええ!?!」

「エメラルドのプリキュアだと言うのですか?!」

ヤモーはエメラルドのプリキュアと判ると、目の色を変えて新しいヨクボール「スーパーヨクボール」で、フェリーチェから奪い取ろうと指示を出した

こちらへ向かって来るスーパーヨクボールに対し、フェリーチェは緩やかに歩いてミラクルとマジカルの前に出て、片手でその突進を受け止めた

「…?」

フェリーチェ自身、自分の力に驚いていた。プリキュアに変身して、想像以上の力を手に入れた事を実感している途中。

それを確かめる様に、スーパーヨクボールを天高く投げ捨てた

そしてジャンプして、投げたスーパーヨクボールより跳び上がった地面にへと蹴り飛ばした

「信じられない…!」

地面で倒れてるスーパーヨクボールを見て、ミラクルとマジカルもフェリーチェの強さを間近で驚愕する

先程まで苦戦を強いられていた相手を、簡単にいなしては、一撃で地面に伏している

そこへ、遅れてやって来た翼。フェリーチェの一連の流れを見ていた彼は、特に焦る事なく呼び掛ける

「フェリーチェ、準備運動はその辺でいいだろ。ドカーンと派手に決めろ！」

翼が手を振って、フェリーチェもそれに笑顔で応えた

「翼君!?!」

「あのプリキュアと知り合いつて?」

ミラクルとマジカルに迫られ、問い詰めされるのをフェリーチェは

眺めつつ、未だに立つ事の出来ないスーパーヨクバールに容赦無く止めを差しに行く

「フラワーエコーワンド！」

リンクルスマホンの魔法のタッチペンが、フェリーチエ専用の杖と変化した。

そして、リンクルストーン・エメラルドをセットしてする

「キュアー・アップ！」

そう唱える事で数回エコーが響き、辺り一面に花が咲き誇り、ワンドにエネルギーを最大限まで花から貰う。

∞を描き、収束されたエネルギーを光線と∞を描いたリングを一気に解き放つ

「プリキュア！エメラルド・リンカネーション！」

凝縮されたエネルギーが直撃し、花とリングに包まれて、フェリーチエの手によって呆気なく浄化されたのであった

「新たなプリキュアとは…ですが、私にはドクロクシー様のお力があります。オボエテロー！」

／／／／／／／／

「上手くいったな」

「うん！」

翼とはーちゃんは笑顔でハイタッチを交わして、満足そうにしていた。しかし、何も事情を知らないみらい達は困惑していた

突然現れた少女が、リンクルスマホンを使ってプリキュアに変身。それだけではなく、行方知らずのリンクルストーン・エメラルドも所持しているのだ

特にリコからの追求は止まらなかった

「プリキュアってどういうこと？…どうしてスマホンを？何でエメラルドを持つてるの？」

「そんなに一度に聞いたって、答えられる訳ないだろ。まずは一つずつ――」

「翼も翼よー！これはどういう事よ?!」

質問攻めの火の粉は、翼にも降り掛かった。露骨に嫌な顔をして、リコを更に困惑させる

「知ってるなら言いなさい!!」

「落ち着けよ。実はな、昨日みんなと別れた後にはーちゃんを探したんだよ。そしたら今朝」

翼は両手をはーちゃんに向ける。リコはまだ眉をひそめていたが、みらいはそれを察して正体を知った

「もしかしてはーちゃん?」

ようやく聞きたかった言葉を耳にしたはーちゃんは、最大限の笑顔で二人に向けて抱きしめた

「そうだよ、わたし！はーちゃん!!」

プリキュアとして、キュアフェリーチェとして帰って来たはーちゃん。心にポツカリと空いていた穴はすっかり元に戻り、またいつもの様に過ごす日々が始まるのであった

## 第29話 花海 ことは

「改めて思うけど、しかしまあ成長したもんだ。こんくらいが、こんなに大きくなるからな。よく寝て、よく食べるをそのまま体现したような」

「だよね。こんなになっちゃうかっただのに、こくんなに大きくなるなんて!」

質問攻めから一度落ち着く為、モフモフベーカリーでいちごメロンパンを食べながらゆったりとしていた。

急に帰って来た事も驚くが、特に目立つのはその見た目の変化。少し前まで手の平サイズなのが、翼達と大して変わらない身長までになったこと。前までの変化とは違い、見た目は完全に人間そのもの。「はーちゃん凄いモフ! あんなに小さかったのに、たくくさん大きくなったモフ!」

三人は豆粒程度の大きさから、両手を大きく広げるくらいの差を、言葉も交えて比較していた

「いやいや、いくらなんでも小さ過ぎるわよ。それよりも、はーちゃんは今まで何処に居たの?」

いちごメロンパンを齧りつつ、はーちゃんは覚えてる限りの中で説明をするが、内容は少々理解するのに難しかった

「なんか、暖かいものがフワフワって来て、ピカッて光ってパア〜って、クルクル〜ってなって、気が付いたらこの姿になってプリキュアにもなれた!」

「……そっか!」

「全然分らないわよ! 後、みらいと翼は思考放棄しないで!」

「実はわたしもよく分からない。でも、誰かに呼ばれたような気がして…」

「他に覚えてる事は?」

今のところ、説明にすらなっていない説明を聞かされた上、本人もどのようにして今の状態になったのか見当がつかないでいる

他に何か覚えてる事を、必死になって思い出そうとしている始末。

この調子だと、もう無いだろうと期待はしてはなかったが、まだ一つだけ覚えてるものがあつた

「辺り一面のお花、まるで海みたいに広がってて…」

「えっと、とにかくはーちゃんが無事に帰って来て良かった」

「うん嬉しい！これから皆んなと一緒に、寝て起きてご飯食べて、学校にも行けるんでしょ！」

「うわあ〜！わくわくもんだあ〜！」

「わくわくもんだし！」

「わくわくモフ〜！」

まだ見ぬ明日に思いを馳せる三人だが、その前にやらなければならぬ事が山積みだった

「その前に住む所どうするつもりだ？」

「あつそうか。お母さんに相談しないと」

「校長先生にも報告しないといけないわ」

「エメラルドも見つかったモフ」

そこである重要な事にリコは気が付いた。はーちゃんも見つけ、そしてなによりエメラルドが手に入ったのだ。当然別の問題が浮上する

「わたし、魔法界に帰らなきゃ行けないかも。ひよつとしたらはいちちゃんも」

「どうして?!」

「エメラルド見つかったちゃったし、もうこっちに居られる理由が…」

そもそもリコがナシマホウ界に来たのは、エメラルド探しの為。校長もそれを踏まえて、翼達と行動を共にする事を許可してくれている。

今となつては目的も達成し、此方に留まる理由は探しても見つからない

けれど、みらいの考えは違っていた

「校長先生にお願いしよー！はーちゃんは赤ちゃんの時からずっと一緒に、わたしとリコとモフルンがお母さんで、翼君がお父さん。やつとまた会えたのに、バラバラになっちゃうなんて嫌だよ！わたし、皆ん



などずっと一緒に居たいもん！」

「モフルンも一緒がいいモフ！別々は嫌モフ」

みらいの考えに感化されて、リコも本心が出て口にする

「そうね。今まで皆んなで乗り越えて来たんだから、今バラバラになるわけにはいかないわ。翼もそう思うでしょ？」

「ああ。それに、切っても切れない縁で繋がってるし。もう今更感がある」

「先ずはお家に戻りましょう」

はーちゃんを連れて朝日奈家へと帰る一同だったが、当の本人のはーちゃんは大きく成長した興奮が冷めず、一人大はしやぎして無邪気に走り回っていた

「はー！やっぱり皆んな小さく見える〜！」

そんなはーちゃんの姿を見て微笑ましく三人は見守ると同時に、自由奔放な性格に心配の色も浮かべる

「はーちゃん楽しそう」

「走るのはいいが、転んでもしたら危ない」

「そうよ。怪我でもしたら明るい雰囲気も台無しになるわ」

「二人共かたっ苦しいよ〜」

元気いっぱいの姿に嬉しくなるみらいに対して、翼とリコは意外にも同じ意見。そして二人の予想は的中する。

それに気付いたのはモフルンだ

「あつ！はーちゃん危ないモフ！」

はーちゃんは段差につまづいて派手に転んでしまった。翼達は急いではーちゃんの側に駆け寄り、心配の声を掛ける

「はーちゃん!?!」

「大丈夫!?!」

「あいてて、大丈夫…あれ？スマホンが無い！」

更に問題は畳み掛けるばかり。転んだ拍子にリンクルスマホンが、何処かに落として失くしてしまったのだ

「よく探すのよ！」

はーちゃんが転んだ周辺をくまなく探す為、皆んな膝を落とすのだが、その時翼ははーちゃんの右の手の平に注目した

「はーちゃんそれ、手を怪我してるんじゃないのか？」

「えっ？あ、ホントだ！翼よく気付いたね」

「運良く、絆創膏を持ち歩いてたから貼ってやるよ」

「でも、今はスマホンを探さない」と

「ダメだ。探してる時に、傷にバイ菌が入ったりしたらどうする。探すのはみらい達に任せるんだ」

持ち前がよかった翼は、懐から絆創膏を一枚取り出しては、半ば強引にはーちゃんの手を取って応急処置をする

「元気なのは良いけど、もう少し周りを見ないと今みたいに怪我をするぞ。しかも、怪我した事に気付かないなんて余計心配だ。次からは気を付けるんだ」

「翼がお父さんで嬉しいなあ〜！」

「はいはい、俺ははーちゃんのお父さんですよ」

もう自分が「お父さん」という事に慣れたのか、はたまた諦めたのか。適当な返事をして返すだけだった

「あつ、あつたわ！」

絆創膏を貼り終えるタイミングで、リコが落としたリンクルスマホンを見つけた。

リンクルスマホンは排水路に確かに落ちていたが、グレーチングで蓋をしており腕どころか手すら入らない

「リコ、届かないよ」

「こういう時は…キュアアップ・ラパパ！スマホン、こっちへ来なさい！」

周りに誰も見てない事を確認してリコが魔法の言葉を唱え、スマホンはグレーチングの隙間から頭を出してはーちゃんの手の中に収まった

「ありがとう！よくし、わたしも！」

はーちゃんはリンクルスマホンの、魔法のタッチペンを取り出し

た。恐らくそれが、はーちゃんの魔法の杖なのだろう

「キュアアップ・ラパパ！」

魔法の言葉に反応して、杖の先端がピンク色に輝いた。これからどんな魔法を使おうとするのか、翼達は期待しながら待っていた

「大好きな皆さんと、ずーつと一緒に居られますように！」

その様な曖昧な魔法が表に出るかは分からないが、キラキラとした光りが降り注いだ為、一応魔法としては成立してはいる模様

「わたしもわたしも！キュアアップ・ラパパ！皆さんとずーつと仲良しで居たい！」

はーちゃんに便乗して、同じくみらいも同様の魔法を唱えた

「なんとも可愛らしい魔法だ。ちゃんとそうなるといいな」

「リコはやらないモフ？」

魔法の杖を持つのは三人だけ。リコだけはやらないかとモフルンが言うが、それを誤魔化す様に話題をすり替える

「わ、わたしは……それよりも早く帰らなくちゃ！」

リコがやらない事に、若干不満げな表情をするみらいとはーちゃん。けれどリコの言う通り、いつまでも油を売っているのも問題だ

「それじゃあコレで」

早く帰るならほうきに乗った方が手っ取り早いと思うも、リコは猛反対する

「ダメよ。まだ明るいし、迂闊に空は……」

リコの口が止まった。リコが言い切る前に、既にはーちゃんはみらいのほうきに跨って準備万端の状態だった

しようがないと思いつつも、リコもほうきを出して飛んで帰る事を選んだ

「仕方ないわね。翼乗りなさい」

ほうきに跨っては、人の目には届き難い高さまで上昇して、そこから朝日奈家まで飛ぶ事となった

空の上だろうとお構いなく、はーちゃんはそこでも高まる気持ちを抑えられずにいる

「気持ちいい〜！ずっとほうきで空を飛びたかったんだ。でも、わたしも二人みたいに飛びたい」

「グスタフさんのお店にほうきを買いに行くモフ！」

「ううん」

「モフ？」

お店に行かずして、どうやってほうきを手に入れるのか。モフルンは首を傾げていた

するとはーちゃんは、またも魔法を使い始めていた

「キュアアップ・ラパパ！わたしのほうきよ、出ろ！」

「無理よそんな魔法。校長先生にだって出来ないわ。何も無いところから思ったものを作り出す魔法なんて、使った事ある人なんて今まで見た事も、聞いた事も——」

「お、おいリコあれ…」

翼はリコの肩を叩いて、はーちゃんへと指を差すと、はーちゃんの手にはちちゃんとほうきが握られていた

「やった！」

「出来たよ〜！」

「ええええええ!?!」

前代未聞を目の前でやって退けたはーちゃんに、リコは開いた口が塞がらなかった

「あ、あり得ないわ」

自分だけのほうきを手にしたはーちゃんは、早速跨って浮かんでみせた

「よ〜し、行つくよ〜！」

ほうきを走らせた直後、はーちゃんのほうきはフラフラと安定しないまま、猛スピードで何処かへと飛んで行ってしまった

「はーちゃん!?!」

「うわあ〜！飛び方が分かんないよ〜！」

みらいとリコは全速力でほうきを飛ばすも、それでも追い付けないでいた。それどころから、ちよつとずつ離されている

「全然追い付けないよ！翼君、ゲゲとフフで追い掛けれる？」

「いくらなんでも速過ぎる！それよりリコ、もつとスピード落とせ！冷や汗が止まらない!!」

「だらしないわね！もう、色々は無茶苦茶だわ！」

みらい達とはーちゃんによる、ほうきの鬼ごっこは上手く魔法を扱えてないはーちゃんに何故か分がある。そしてとうとう、はーちゃんのほうきはクルクルと回っては急降下して行った

「やっと止まった。急いで追い掛けよ二人、とも?」

みらいがふと、リコのほうきに目を移すと翼がリコのお腹をガツチリホールドしていた

「ちよ、翼苦しい…と、止まったから！」

「酷い拷問を受けた…」

「拷問って何よ!!」

「まあまあ、二人共落ち着いて。はーちゃんを早く迎えに…ねえ二人共あれ見て！」

二人のやり取りで気付かなかったが、空はいつの間にか暗雲に包まれており、はーちゃんが落ちた場所では、ヤモーと水鉄砲とうちわを組み合わせたスーパークロウボールが現れていた

スーパークロウボールが目の前に居るというのに、はーちゃんは何故か変身する事なく逃げ惑っていた

「はーちゃん！」

みらいが飛び出し、その後についてリコもほうきを走らせる

翼はほうきに両脚をしつかり絡めさせ、そのまま逆さになって両手を大きく広げた

「はーちゃんこつちだ！」

はーちゃんが逃げて行く方向へほうきを飛ばし、そのすれ違いざまにはーちゃんの両手を掴んで空へと逃げ出す

「ナイスキャッチ」

「でもお、重い…」

はーちゃんをほうきに載せて、自分も体制を整えるが、いかんせんリコのほうきには三人も乗せている。重量オーバーで、少しずつスピードを落として高度が下がっていく

「なら、このまま変身するぞ」  
「よく言うわよ！」

『キュアアップ・ラパパ！』

『トポーズ！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア ！』

「だいてんよくのつるぎ大天翼之劍——侵食率50%！」

三人は変身すると同時にほうきから飛び出して、空中に居るスーパーヨクバールの元まで一気に距離を詰める

先に仕掛けたのはミラクルの踵落とし。見事にスーパーヨクバールの顔面に直撃はしたものの、ビクとしなかった

「クッ！」

「ミラクル！」

肉体を使つての攻撃が通らないのであれば、更に強く、大きい武器で勝負する

ミラクルは自分の持つ、光りの球二つをマジカルに投げ渡し受け取った。同時に四つの球を一つにして、大きなハンマーを作り出して振り翳す

「タアッ!!」

だがこれでも効くことはなかった。しかしまだ伏兵が残されている

更に上空で、マジカルの持つハンマーより大きな、大天翼之劍を使つて土で作り上げたハンマーを携えていた

「これで、どうだ!!」

振り翳した巨大なハンマーは、スーパーヨクバールに当たると同時に、その衝撃で砕け散った。一方で攻撃を貰ったスーパーヨクバールの様子は、言うまでもなく効いてなどいなかった

「クツソ！硬い!!」

「翼でもダメなんて…」

「そんな…」

スーパーヨクバールは、翼とマジカルを振り払って、うちわで扇いで地面へと吹き飛ばした

「マジカル！翼君！きやあつ!!」

二人を心配していたミラクルにも、水鉄砲で攻撃されて地面へと体を叩きつかれた

結局三人の攻撃は全く効かず、何も出来ぬまま深いダメージを負って終わった

そして三人の前にヤモーまで現れて、勝利の確信を得ていた

「いい気味ですね。闇の魔法は不滅です。私はドクロクシー様に代わり、世界を闇の魔法で覆うのです」

『フフ、しつこい男は嫌われるわよ』

「なんとでも言えばいいです。これ以上は何も出来やしないのですから。ヨクバール、トドメを」

「ギョイ！」

倒れる三人に接近するスーパーヨクバールに、はーちゃんが庇う様にして前に出た

「そこに居たら危ない！」

「はーちゃん！」

「逃げて！」

「逃げない！」

促す三人の言葉を振り払う程に、今のはーちゃんは本気の目をしていた

「ちよつとだけ思い出した。あの時、スマホンがわたしに語り掛けてくれたの。エメラルドの力を、わたしの思う形につて。わたしは力になりたい。みらい、リコ、モフルン、翼、ゲゲ、フフ…わたしを大切に

にしてくれた、守ってくれた皆んなの力になりたい！だから!!」

はーちゃんはエメラルドを手に持ち、その決死の覚悟を言葉にして言う

「決めたの。わたしも、プリキュアになる！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「エメラルド！」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

「あまねく生命いのちに祝福を！キュアフェリーチェ！」

決死の覚悟の思いが言葉となり、形となり、力となってキュアフェリーチェへと変身した

「エメラルドが、はーちゃんの想いに応えたモフ！」

「ヨクバール!!」

大量の水風船を携えては一齐に、それもフェリーチェへと飛ばして攻撃して来た。フェリーチェといえど、この数の攻撃を避けるのは不可能。しかし、フェリーチェはもう一つの選択肢を取った

「フツ」

突如としてフェリーチェの周辺に巻き起こった風が、水風船を全て受け止め、一纏めにされる

そのまま腕を高く上げて、水風船全てスーパーヨクバールへと跳ね返した

「ヨクバツ!?!」

己の放った攻撃が跳ね返り、その動揺で動けず命中して大きく後ろへ後退する

「わたし達も負けてられないよー！」

「ええー！」

「合わせて行くぞー！」

『フル・フル・リンクル!』



『プリキュア！トパーズ・エスペランサ！』

「天使魔法——エレメンタルブレイカー！」

二つの魔法が重なり合い、金色の斬撃がスーパーヨクバールの体を切り裂いた。力なく、ようやく地上へと撃ち落とす事に成功し、フェリーチエがトドメの浄化を加える

「ミラクルとマジカル、翼を傷付けるのはわたしが許しません！」

「フラワーエコーワンド！」

「キュアー・アップ！」

「プリキュア！エメラルド・リンカネーション！」

「またしても…オボエテロー！」

／／／／／／／／

ヤモーとスーパーヨクバールを退けた後は、朝日奈家へと戻って校長にはーちゃんの事を報告していた

「そういえばはーちゃん、言ってた花の海についてはちゃんと思い出せたか？」

「全然。でも、みらい達と会うずっと前の事かも…」

「出会う前も何も、はーちゃんその時赤ん坊だった筈だろ？」

思い出せば思い出す程謎が深まるばかり。キリがないと思い、一度その話を区切る事にした

『エメラルドと共に調べれば分かる事じゃな』

そうして校長は一息ついて、ようやくといった感じに落ち着いた表情をする。それが何を意味するかは全員が察して、言われる前に此方から先に言い出す事にした

「あ、あの校長先生！わたし達これからも一緒に居たいです！」

「わたし達は、長い道のりを探してようやく会えたんです！はーちゃ

んと！」

「別々は嫌モフ〜！」

「ここまで来て別れるなんて、はーちゃんが可哀想だ！」

これには流石に参った感じで、困り果てているとはーちゃんも一緒に居たいと言う気持ちで校長にぶつける

「魔法をかけたの。皆んなのずっと一緒に居られますように。皆んなは——わたしの”家族”だから！」

『……素直な言の葉は、時に魔法となって人の心を動かす』

「言の葉？」

『言葉のことじゃ。君達の気持ちは良く分かった。無理に帰って来いとは言わん。エメラルドを頼むぞ』

はーちゃんの想いが伝わり、校長もそれを理解してくれて、リコとはーちゃんのナシマホウ界の滞在を許可してくれた

それで連絡は終わりとなった

「みらい……あら、お友達？」

そこへみらいの母親「今日子」は部屋へ入って来た。みらいはダメもとで、はーちゃんの事も家で面倒をみれるか早速お願いする

「リコの故郷の子なの！あのねお母さん、実は暫くこの子を家に泊めてあげたいのだけど！」

「お願いしますー！」

「ご家族には言っているの？」

「はいー！」

(ご家族も何も、俺達が親代わりだからなあ…)

そんな無粋な考えが過ぎるが、それを口に出して仕舞えばややこしい話になるので、出しはしなかった。一応言ってるという意味でなら間違っではない

「それならいいわよ」

「やった〜！わくわくもんだあ〜！」

「それでお名前は？」

「ごことは！ごことはって言いますー！」

「苗字は？」

名前に関してははーちゃんが即座に言えたが、苗字となると全く考えてはいない。翼もみらいも考えてはいるものの、思い浮かばずで焦っているが

「花海ー花の海と書いて花海ー！」

「花海　ことはちゃん。これから宜しくね。何かあつたら遠慮無く言つてね！」

「はいー！」

なんとかりこの機転によつてはーちゃんの苗字も決まつて、この場は凌れた

「皆さんと一緒に居られるー！」

「でも、どうしてことはなの？」

「さつき、校長先生が言つてたよね？言葉は言の葉つて。わたし、皆さんの言葉が凄く嬉しかったんだ！今日だけじゃない。わたしが小さい時から、皆さんはいつも暖かい言葉を掛けてくれたよね。言葉は魔法：皆さんの言葉が、わたしの此処にいくつぱい詰まつてるの！だから、ことはー！」

自分で決めた名前にそんな深い意味があつたなんて思いも寄らず、翼達はそんなはーちゃんの優しさも含めて嬉しく思う

「皆さん、『花海<sup>はなみ</sup>　ことはー！改めて宜しくお願ひします！」

これからは、はーちゃん改めことはも朝日奈家に住むこととなつて、これからも一緒に共にする事が叶つたのだつた

### 第30話 はーちゃんのお部屋

「朝日奈さんこんにちは〜！」

朝日奈家の玄関前で、その声を出しているのは翼だった。ことはの様子が気になって、訪れているのが目的。そのついでに、みらい達と遊べるなら遊ぼうという考えも、一応持ち合わせてはいる

インターホンを鳴らして誰か出て来るのを待っていると、玄関からではなく庭の方から大吉さんが顔を出してくれた

「こんにちは」

「こんにちは。翼君だね、上がって上がって。みらいなら今家の中に居るから」

「ではお邪魔しますね」

朝日奈家に上がり込んだ時、ついぞと言わんばかりに大吉と一緒に居たりコとことはが、後ろから声を掛けてくれた

「珍しいわね、翼から会いに来るなんて」

「悪いかよ。はーちゃんの様子を見に来たんだよ。ついでに遊びにもな。家に居ても、誘いに来るだろう？」

「それもそうね。わたし達は、おじ様のお手伝いが終わってからみらいの所に行く所だったの」

「そういえばみらいは？」

「みらいならわたしのお部屋にいるよ！」

ことははウキウキで、屋根裏に続く階段を教えてくれて、その案内にしたがって上がって行く。

そこで待っていたのは、背中を向けてモフルンと一緒にビーズメーカーを使って色んな物を作っていた

「みらい、モフルン何作ってるんだ？」

「翼君！じゃ〜ん見て見て！はーちゃんのお部屋に飾るんだ〜！」

「へえ〜。もうすぐ終わりそうなのか？」

「まだまだって感じかなあ〜」

「俺も手伝うから使い方を教えてくれ」

「ありがとう！えつとじゃあこれを——」

それから暫くしていると、大吉の手伝いを終わらせたりコとはーちゃんが戻り、翼達の様子を見に来た

「三人共何してるの?」

「フッフッフ、コレをこうやってこうするの!」

ビーズメーカーで作り上げた幾つかの物を、壁へと飾って部屋の色味を更に引き出させる。家具は十分にあっただが、模様が無いためどうしても質素な感じが否めなかった。その為のビーズメーカーでの作業だったのだ

「モフルンが考えたの?」

「モフ」

「ありがとう!モフルンが一生懸命作ってくれたのが嬉しい!」

「はーちゃんの喜ぶ顔が見たかったモフ!」

「どうせなら、もっと他のも付け加えた方が見栄えは良くなると思うけど。どうする?」

「それなら買い出しに行きましょう!」



簡単に買い出しとなるとすれば、向かう先は商店街。まだまだ自分の部屋を可愛く出来る事を嬉しく思うことは、鼻歌混じりでどんな部屋にするか考えていた

商店街を歩く途中、ゲゲはリコを呼んで二人つきりにさせた。翼達は前を歩かせて、話が聞こえないくらいの小声で二人で背中に抱える問題について話す

『ゲゲ、もう夏が来ちゃったがいつ話すんだ?オレ的にもう話した方が良いと思うが』

「だ、ダメよ!はーちゃんも帰って来て、今折角楽しくしてるのに、そこで水を差す様な事を言ったら……時間は後どれくらいなの?」

『ゲゲ、今月の下旬ってところだな。だから本当に時間が無い。ゲ、オ

レが言ってもいいんだが、どうせリコ坊が止めるだろうし、それなら本人に任せた方がいいって思ってる。だろ?』

「なら急かさないで。絶対に言うから」

「リコ、ゲゲ」

突然翼から名前を呼ばれて驚く二人だが、その様子に翼も驚いてしまう。不意に声を掛けたのではなかったが、それほどに話に集中していたのが分かる

「ビックリした〜。店に着いたぞ。早いところ見繕ってリフォームの続きに取り掛かろう」

翼はそう言ってみらい達の所に戻って行くが、後ろを振り返るとリコとゲゲはホツとした様な溜め息を吐いていた

「……」

その様子を見てしまった翼は、何か隠し事をしてると疑いの眼差しを向けていた。けれど、すぐリコの顔を見てはそんな考えは何処かへと捨てた

「ねえ皆んな早く〜!」

既に、あれやこれやと選んでいたみらいとはーちゃんとモフルン。壁に飾るものだけでなく、敷物にも目の色を変えて物色していた。けど、色は様々組み合わせれば更に選択の幅も広がる

和気藹々と選んでいると、不意に冷たい風が吹き込んだ。空の色も突然暗くなり、嫌な空気が充満する

『フフ、嫌な予感が…』

「見つけましたよエメラルド」

声がる方へと顔を向けると、道の真ん中にヤモーが此方を睨んで立っていた

「しつこいわね!」

「魔法、入りました! 大いなる闇をまとい、い出よ! ヨクボール!」

ヤモーは赤ちようちんと敷物、ドクロクシーの遺骨を使ってスパーヨクボールを生み出した。

体は柔軟な敷物に、手は赤ちようちんとなって当たれば怪我では済まない

「来たからには追い返すしかないだろ」

『キュアアップ・ラパパ！』

『ルビー！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア！』

「だいてんよくのつるぎ大天翼之劍——侵食率50%！」

「 yokuball!! 」

「 ツ!! 」

yokuballは敷物で出来た腕を伸ばして、距離がある翼達へと拳を届けさせた。けれど直線的な攻撃など、三人で受け止めて防ぎはしたとはいえ、かなり力が込められた一撃。そう何度も防御出来る攻撃ではない

「 yoku! yoku! yoku! 」

離れている位置からでも連続で繰り出される攻撃を、懸命にミラクルとマジカルが受け流すも防御に手一杯で、攻撃に移れずにいる

「たあっ!!」

今の流れを断ち切る為、ミラクルとマジカルはただ受け流すだけのではなく、今度はスーパー yokuballの攻撃を思いつき弾き返した腕は左右に分かれて中央に道が開いた。すかさず翼は真つ直ぐ突き進み、無防備なスーパー yokuballへ刃を届かせる

「天使魔法！エレメンタルブレイ——」

けれどその動きはお見通しだったらしく、体の一部である敷物が翼

の足に絡み付き、魔法を中断させられる

「このー離せー!」

天使の翼を広げたり、もがいて抜け出そうと試みるも振り回されるばかりで状況は変わらない

「翼君! きやつ!」

「ミラクル! ウツ!」

ミラクルとマジカルが助けようと駆け出すも、スーパーヨクバールの伸縮自在の両腕に阻まれてしまい返り討ち合う

翼は捕まったまま、ミラクル達も手出しが出来ずにどうする事も出来ない

「そうです。そのまま人質にしてエメラルドと交換。クフフ!」

「そこまでしてエメラルドが欲しいの?」

「欲しいですね。エメラルドを使えばきつと闇のオーラが作れる。強力な魔法の力があればなんだって出来るんです!」

「違う!!」

別の建物から戦いの様子を見ていたことは、ヤモーの言葉を否定する。そしてリンクルストーン・エメラルドが輝き、手に取って変身する

「貴方は間違ってる!」

「キュアアップ・ラパパ!」

「エメラルド!」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ!」

「あまねく生命いのちに祝福を! キュアフェリーチェ!」

「現れましたね。ヨクバール!!」

スーパーヨクバールが動こうとしたその時、目にも止まらぬ速さでフェリーチェが先に動き、翼を捕らえていた布を切り裂いて救出してみせた

「うえっ?」



翼自身も突然起きた事に戸惑っていたが、自分がフェリーチエにお姫様抱っこされている事実は認識した

「魔法は万能ではありません。どれだけ強い力を手に入れたとしても、大切なのはそれを使う者の清き心、そして熱き想い！それが分からない貴方に、エメラルドは渡しません！」

フェリーチエの言葉が癪に障ったのか、ヤモーは拳を握って怒りを露わにしていた。

スーパーヨクボールも、己の体が切り裂かれた事に許せず、その感情赴くままに突進して来る

「フェリーチエ降ろせ！来るぞー！」

腕の中で騒ぎ立てる翼だが、フェリーチエは意も返さず落ち着いている。もう、スーパーヨクボールは目の前まで迫って来ているが、フェリーチエを守るようにミラクルとマジカルが飛び出した

『フル・フル・リンクル！』

『プリキュアー！ルビー・パッションナーレ！』

ミラクルとマジカルの魔法が、スーパーヨクボールを包み込むが浄化までには至らず。しかし、動きは完璧に封じる事は出来た。その一瞬の隙さえあれば、フェリーチエにしては充分過ぎるほど

「フェリーチエー！」

「今よー！」

「その前に俺を降ろせフェリーチエ！フェリーチエさん!!」

フェリーチエは翼を高く空へと投げ、浄化する為に魔法を放つ準備に入る

「フラワーエコーワンド！」

「キュアー・アップ！」

「プリキュア！エメラルド・リンカネーション！」

「クツ…オボエテロー！」

スーパーヨクボールの浄化が終わり、ヤモーも退散して無事に戦いは終わった

そして投げられて落下していく翼は、フェリーチェに受け止められて、またもお姫様抱っこ状態となる羽目に

「意外と軽いですね」

「おう、フェリーチェ力持ち！」

「翼似合ってるわよ…フフ」

「このマジカ…それよりも早く降ろしてくれよフェリーチェ!!」

／／／／／／／／／／

「はー！」

「出来たモフ〜！」

朝日奈家に帰宅して、多少の時間を有したもののやっとの思いで完成したことはの部屋。家具は勿論だが、色とりどりとされているビーズが出来栄えに、更に磨きを掛けている

「皆んなのお陰だよ！モフルンのビーズ、皆んなでお部屋を作ること。なんでも魔法に頼ってちゃ分からない、わくわくがあるんだね！」

「何か心境の変化でもあったらしいな」

翼が知らない所で、魔法ではなく自分の力で努力する事を覚えたよ  
うだ

「わたし、まだまだ分からない事がいっぱいだけど、これからも沢山の色々な事を教えて下さい！」

「大きくなっても、はーちゃんはやっぱりはーちゃんモフ！」

「はー！これからも、毎日毎日楽しみだなあ〜！」

ことはが中心となって始まった新しい生活。ことはの自由奔放の  
性格に振り回されるのは、これから

### 第31話 夏のひととき

「夏も本格的になって来たな」

『ゲゲゲ、アイス！アイス！』

『フフフ、バニラ！バニラ！』

翼は自室でエアコンをつけて、ゲゲとフフと一緒にアイスを食べる優雅な夏を満喫しようとしていた。

夏休みは皆、虫取りや友達の家に行ったりして休みを過ごすのが翼は違う。

その日の宿題を終わらせて、残りの午後はゆっくりと食べては寝ての生活を計画している

ひと匙アイスをすくい上げて口の中に運び込むタイミングで、家のインターホンが鳴り響く

「お客さんか。は〜い」

今家に居るのは翼だけ。早歩きで急ぐも、インターホンは鳴り止むどころか、ピンポンと鳴る音が間髪入れず鳴らされる。玄関に辿り着く頃には、お客とはいえ苛立ちの様子を見せていた

「はいはい！今出るってー！」

ガラリと戸を開けると同時に、一人の少女が翼の腹へと勢いよく突っ込んで、家の中へと入って来た

「つつばさ〜!!」

「はーちゃ…ぐほお?!」

飛び込んで来たことは受け止めたのは良いが、そのまま押し倒されて後頭部を強打する羽目となった。お腹と後頭部の痛みに悶絶する姿に、ことはは首を傾げて不思議そうにしていた

「どうしたの翼?」

「別に何も…よく来たなはーちゃん。ところで要件は?」

「海行こー!海!」

「海?」

翼が説明を求めると、外からみらい達の姿も見えて代わりに話してくれた

「こんにちはは翼君。実は明日皆んなで海水浴するんだけど、翼君もどうかなあつて」

「部屋で涼みたいのだけど…」

「翼来ないの…?」

来ること前提に考えていたことは表情は、一瞬で哀しい表情に一変して凹んでいた。

未だ押し倒されている状態なので、胸の中から上目遣いで見つめてくることは顔を見て、胸に突き刺さり苦しい

「行きます…」

「ホント? やったく!!」

「あ、でも水着が」

「今からわたし達も買いに行くから一緒に行きー!」

今のは失言だった。水着は後でゆつくり選ぶつもりだったが、水着が無いことを漏らしてしまえばことはが反応するのは目に見えて分かっていた

「…ゲゲとフフも連れて行くから、先ず家に上がれ。あ、アイスあるけどついでに食べるか?」

「食べる食べるく!!」

「はーちゃんに敵わないわね。翼」

肩に手を置いては、振り回されている翼に少しばかりの同情をするリコだった

その後は水着を買いに行く為ショッピングモールへ出向き、唐突に決まったお出掛けの準備をする翼達だった

／／／／／／／／

「海だ〜!!」

満を持しての海に興奮を隠さずに曝け出すことには、翼達はニコニコしていた

今回の海水浴で参加するのは、朝日奈家全員にリコ、ことは、モフルン。そこに加えて、まゆみとかなの大所帯

車の定員数を考えて翼は、母親と共に現地集合となって更に人数が増えていた

「けれど…」

浜辺にあるかき氷屋を目の前に、みらいとことは肩を落として落ち込んでいた

「あれどうしたんだ？そんなにかき氷が食べたかったのか？」

「二人共、このお店で食べれるいちごメロン味のかき氷を楽しみにしてて」

「それはまあ…残念としか言いようがないな」

生憎、かき氷屋は休みとなっていたのだ。しかも普通の休みではなく、今日に限って氷を作る為の機械である、製氷機が故障してらしく休まざる得ない事態

「折角海に来たんだから海に思いを馳せろよ」

「翼君は気にならない？いちごメロン味のかき氷」

「フツ、食べてみたいに決まっている！」

「翼も相変わらずね。ところでおじ様、どれくらい掛かるのですか？」

先程、製氷機を修理すると勝手出た大吉が機械の様子を見ていたのだ。機械に強い大吉なら修理するのは造作もないが、製氷機とはいえ業務用の機械。直せるにしても時間は掛かるし、気になるところ

「これならお昼くらいには直るかな？」

「流石お父さん！」

「普通の機械ならともかく、業務用の機械まで大丈夫って凄いな」

「あ、皆んな！こつちこつち！」

大吉に関心していると、まゆみの呼ぶ声が聞こえた。どうやら場所取りが出来たらしい

「は〜い！」

かなの返事もあつて翼達も歩き出そうとした時、みらいが急に大きな声を上げて翼達を驚かせる

「あ〜!!」

「急に声を出すなよ」

「帽子忘れてきちゃった…」

かなが持っていた麦わら帽子を見て、みらいも自分の帽子を忘れた事に今更気づいたらしい

「それならわたしに任せて！」

「はーちゃん!!」

みらいとリコはことを連れて、建物の影に隠れてからことはに魔法を使うように注意する

「此処なら誰も見てないわ」

「行くよー！キュアアップ・ラパパ！帽子よ、出る！」

魔法のタッチペンで空中に帽子の絵を描くと、それが現実となって現れてみらい、リコ、モフルンにそれぞれ麦わら帽子を被せる。ご丁寧な事に、それぞれイメージカラーに合ったリボンまで付けられている

「翼の分の帽子も出してあげるから待ってて……はい！」

翼にもお揃いの麦わら帽子を魔法で出して、頭に被せてあげるのがすぐさま手に取った

「俺のはいい。それよりはーちゃんだ。ほら」

ことはの頭には何も被ってはおらず、それを心配してことはの頭に被せてあげた。ことはの気持ちも嬉しいが、翼の為と思っ出て出した気が持ちだけで充分

「似合ってるよ」

「ありがとう翼！あつ、それとモフルンにはこっちも」

モフルンには青と白のシマシマ模様の水着も着けてくれた。海まで来ているのに、翼達だけ楽しむ訳にはいかない。モフルンにもちゃんと楽しんで貰うために、ことはが気遣ってくれたのだ

「ありがとうモフーモフルンも一緒に泳げるモフー！」

「コホン、いいはーちゃん。前にも言ったけど、魔法を使うところを他の人に見られちゃ絶対ダメだからね？」

翼が見ていない所でどうやらことはは、魔法を使って色々やらかしているみたいだった。今回もそうならない為にリコが念を入れて注意するのだが、そんなリコに翼は物申す

「そんなしつこく言ってるのはーちゃん擦れるぞ。一度言ったならそ

れを信じてあげなければ」

「うう、確かにそうかも知れないけど……何かみらい以上にはーちゃんに甘くない？」

「さあ行くぞ皆んな！冷たい海水が俺達を待っている！」

「レッツゴー！」

「えっ!?話はまだ……もう待ちなさい！」

翼とみらいは器用な事に、走りながら服を脱いで水着姿になり、リコもその後を追い掛ける

「待つてモフ……モフ？はーちゃんどうしたモフ？」

取り残されたモフルンも走り出すも、ことは動かず魔法のタッチペンをジツと見つめて何か考えていた

「そっか！よし、誰にも見られずに魔法で海を楽しくしちゃおう！」

「モフ？」

ことはは、ちゃんとリコの言いつけ通りに、魔法を使っているところを見られずに使う事を思いついたのだ

「おーい！リコもおいでよう！」

「はー！冷たくて気持ちいいよ！」

「わたしはのんびりしてるだけで充分よ」

広々とした海でみらい、ことはにモフルンが満喫しているが、リコだけは足すら海水に浸からず浜辺で貝を弄っていた。そんなリコの様子を、翼は後ろから声を掛けた

「そんな事言つて、本当は泳げないとかか？」

「なっ!?そ、そんな事ないわよ！ちゃんと泳げるし！」

「折角水着も買ったのだから入らなきゃ損だぞ？」

それに意地悪で言ったわけでもないが、そうムキになって言われると余計に海へと連れ出したくなるもの

「だったら泳ごうぜ！」



「きゃっ！」

リコの為に用意した浮き輪を強制的に着けさせて、そのまま手を引っ張ってみらい達の所まで飛び込むのであった

「もう、翼君危ないよ〜！」

「みらい達だつて飛び込んだ癖に」

「ちよつと翼！」

「はいはい。はーちゃん、リコを連れて泳ぎに行くぞ」

「はー！」

翼とことはは、強引にリコの腕を引っ張つては泳ぎ連れ回した

沢山泳いだ後は、海水浴へ来たなら誰もがやる定番のもの。スイカ割り  
りの時間

まゆみがスイカを叩き割る役目を任せられ、他のみんなは誘導役となる

「まゆみ〜右だよ右〜！」

「もう少し左〜！」

「そのまま真つ直ぐ！」

「長瀬さん頑張つて！」

翼達の誘導でまゆみは順調にスイカへと進んで行くが、少し離れた場所に居ることは後ろに手を組んでいた。

その手には上手く見られない様に、魔法のタッチペンが握られていた

「キュアアップ・ラパパ！スイカよ、割れやすくな〜れ！」

ことはが静かに魔法の言葉を唱えると、魔法が掛かったスイカはみるみるうちにその大きさを変化させていった

「え、えええええ!?!」

「「ッ?」「」」

大人以上へと大きさを変化し続けるスイカを、かなも含めて周辺の人達まで目撃してしまった。

重さに耐え切れず、まゆみへと転がって行く様を翼達は啞然としたまま見送ってしまった

「そこね!!」

目隠しをして気付いていないまゆみは、転がるスイカの気配を感じ取って木の棒を思いつき振り下ろす。流石に大きさも相まって綺麗に直撃して、真つ二つに割れたがこのまま放置する訳にもいかない  
「ハッ!」

「キュアアップ・ラパパ!スイカよ、小さくなりなさい!」

我に返り、リコはすぐさま魔法を掛けて元の大きさへと戻した。これで一安心と胸を撫で下ろすも、一連の流れを見ていたかなからさ不審がられていた

「今の何!?!」

「き、気のせいだよ!目の錯覚!」

「そ、そうよ!海は蜃気楼とか見えるらしいし!」

「ほらよく見てろ!何も変わってない。な?」

翼達はなんとかその場を誤魔化せはして終わりかと思っていたのだが、ことは魔法に振り回されるのはここからだった

次の定番と言えばビーチバレー。チーム分けとしては翼・みらいチーム、リコ・かなチームと少しアンバランスな形となりはしたが、それでも夢中になって遊ぶ

「十六夜さんお願い!」

「任せて!」

かなのトスに、リコが大きくジャンプしてアタックを決めようとした時だった

「キュアアップ・ラパパ!ボールよ、元気いっぱいになくれ!」

リコがボールに触れた瞬間を狙って、ことは魔法を使った。するとどうなるかは分かりきっていた

「とお!」

可愛い気合いの掛け声と共に打ち出したボールは、翼の頬を掠って勢いよく地面に叩き込まれた。叩き込まれた衝撃は砂を大きく打ち上げて、ボールは地面に減り込んでおり、音も浜辺で出るようなものではない鈍い音が轟いた

「へ？」

「う、ウルトラアタック…」

「ね、狙い通りよ…！」

「キュアアップ・ラパパ！砂よ、おつきなお城になくれ！」

「キュアアップ・ラパパ！普通の大きさになって！」

「キュアアップ・ラパパ！お魚さん、お空を飛べるようになくれ！」

「キュアアップ・ラパパ！皆さん、海へとお帰り下さい！」

「キュアアップ・ラパパ！」

「キュアアップ・ラパパ！」

壮絶なキュアアップ・ラパパの攻防が続いていく中、翼とモフルンは只々それを見守る事しか出来なかった。

ようやく落ち着く頃には、浜辺で力尽きるみらいとリコの姿があった

「大丈夫モフ？」

「遊ぶ以上に疲れ果ててないか？」

「大丈夫…」

「流石に魔法の使い過ぎね…」

「みらい、リコどうしたの？」

陰で奮闘していた二人の事をつゆ知らずのことは。倒れている理由を無邪気に聞きに来るのがまた恐ろしくもあり、可愛いものでもある

「ううん、なんでも」

「ちよつとひと休みしてるだけ」

「あ、それならかき氷！氷作る機械直ってるかも！皆んなで一緒に食べよーわたし、持って来るからゆっくり休んで！翼、二人をお願いね！」

「モフルンも行くモフ！」

みらいとリコと同じくらいの魔法を使ったのにも関わらず、未だに元気にはしゃぐことは。それはとても嬉しいが、その元気に苦笑いしか浮かばない

「二人共本当に大丈夫か？」

「あう、翼君連れてって」

「しようがないな」

取り敢えず自分達のパラソルの下に連れて行かないといけないので、みらいは腕、リコは足首を掴んで引きずろうとする

「待ちなさいよ!!」

上半身をむくりと起き上がらせて、足首を掴む翼にリコは物申した「ん、何だよ？」

「わたし達半年は付き合っているのに、まだこの扱いな?!いくらなんでも見過ごせないわ!」

「許せリコ」

「それわざとしてるでしょ絶対!」

「二人共元気だねえ」

仲の良い口喧嘩を久し振りに目の当たりにして、みらいは少しばかりの癒しを感じていた。とはいえ疲れているのは変わらないし、リコからすれば余計な体力を消費しているだけである

『ゲゲゲ、にしてもはー坊遅いな』

『フッフ、様子を見に行きましょう』

「そだね」

翼とリコを置いて、みらいはゲゲとフフを連れてことはの様子を伺いに行く。

しかし、いくら見渡しても何処にもいない。製氷機の様子を見に行くだけなら、遠くへ行く事も無ければ、時間も掛からないのだが

「ねえお母さん、はーちゃん見なかった？」

「ことはちゃん？」

「はーちゃんなら、あっちの方へ行っただわよ」

今日子はことはの事は見かけておらずだったが、幸いにもかの子がことは消えた場所を知っていた

教えられた場所は、浜辺から少し離れた場所にある大きな洞窟だった

「確かあそこの洞窟って何も無いって聞いたけど」

「ちよつと心配ね」

「わたし達探して来るね!」

ことはの事が心配になった三人は居ても立っても居られず、その洞窟へ行つて見ることにした

／＼／＼／＼／＼／

「おーい!はーちゃん!」

「何処に居るのよ〜!」

「はーちゃん!……見つからない」

声を上げて探しているが、その姿形さえも見当たらない。洞窟近くは岩が沢山あつて足場が相当悪い上、浜辺から離れている為他の人も気付き難い場所

何か怪我でもしていたら一大事なのだ

「はーちゃん……」

「大丈夫だみらい。モフルンも見当たらないとなると、一緒に居る可能性は高い。何かあつてもモフルンが助けを呼ぶさ」

モフルンもことはとくつ付いて居なくなつたのだ。ことは一人だけではないのが、唯一の救い。翼達以外に周りを見ているモフルンが居れば、何事も無いと思つている

「洞窟の中も見てみましょう。好奇心旺盛なはーちゃんなら、きっと洞窟の中に入つてゐるわ」

「翼君、リコ……ありがとう」

少しの可能性を信じて洞窟内に入ろうとした時だった。小さい地響きと共に、洞窟内から無数のコウモリが羽ばたいていた

三人は顔を見合わせて急いで中へと入っていく

「モフルン！」

「みらい〜！はーちゃんか！」

洞窟の先にはモフルンが居たのだが近くにことはの姿はない。そして目の前には、瓦礫で塞がって通ることの出来ない通路。

察することにはこの先に居る

耳をすませば奥で激しい衝突音が聴こえる

「モフルン何がどうなってる？」

「ヨクボールが出て来て、はーちゃんと分かれちゃったモフ…」

「分断されたのか。よし、そうだな……取り敢えず変身する。考えるのはその後でもいい」

「無計画にも程があるわ。でもそれしかないわね。みらい！」

「うん！」

『キュアアップ・ラパパ！』

『サファイア！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア ！』

「煉魔之刀剣——侵食率50%！」

「行くぞ——因果斬り！」

煉魔之刀剣から放たれた斬撃が瓦礫に触れると、崩れていたのがたちまち壁に引っ付き始めて修復されていく。崩れたという結果を断ち斬った為、崩れ落ちる前の状態へと戻っていつているのだ

全ての瓦礫が修復されて一気に視界が広がる。その目の前の光景は、両手を塞がれて今にもスーパーヨクボールの攻撃を受ける直前のフェリーチェの姿

ミラクルとマジカルは、サファイア持ち前のスピードと飛行能力でフェリーチェの元へと飛び出した

二人でフェリーチェの手を取り、洞窟を突っ切って外へと飛び出した。フェリーチェは、二人が来る事を想定していなかった為か、助けにくれた事に少しばかり呆気にとられていた

「ミラクル、マジカル」

「大丈夫？ 怪我はない？」

「もう、一人で無茶したら駄目だよ」

フェリーチェに怪我が無くてホッと胸を撫で下ろす二人。そこへモフルンを抱き抱え、遅れて翼もその場にやって来た

「怪我は無いみたいだな……っと、来るぞ」

ミラクル達が突き破って来た洞窟の穴から、スーパーヨクボールが強引に追い掛けて来る。ミラクルとマジカルは目の色を変えて、スーパーヨクボールへと立ち向かって行く

「翼、フェリーチェの側に居てあげて！」

「二人共気を付けろよ！」

空中で激しくぶつかり合うミラクルとマジカル。スーパーヨクボールに一步も引けを取らずに果敢に攻め立てている。とはいえ、いつもは翼とフェリーチェも含めた四人で相手をしている。

僅かながら二人が押され始めている

そんな姿を見てフェリーチェの思う気持ちは更に高まる

「わたしも……わたしも、二人の力に！」

フェリーチェの想いに応える様に、装飾としてあった小さな妖精の羽が大きくなって広げた

「凄いモフー！」

「綺麗……！」

フェリーチェはすぐさま飛び立ち、ミラクルとマジカルの援護に回る

「ハアッ！」

華麗な手捌きでスーパーヨクボールを天高く打ち上げ、邪魔者が居なくなった今フェリーチェは二人に感謝する

「二人共、来てくれてありがとう」

「何言ってるの？」

「当たり前でしょ？」

「翼もありがとう」

離れた場所でモフルンと居る翼にも、感謝の言葉を交えつつ笑顔で振る。それに対して翼も、両手を大きく広げて返してくれた

微笑むミラクル達だが、体勢を立て直したスーパーヨクボールが無数の攻撃を放つ

「マジカル！」

「ええ！」

『サファイア！』

『青き知性よ！わたし達の手に！』

『フル・フル・リンクル！』

『プリキュア！サファイア・スマーティッシュ！』

「ヨクバツ!？」

無数に放った攻撃を全て撃ち落とされ動揺する隙に、フェリーチエは一気に畳み掛ける

「フラワーエコーワンド！」

「キュアー・アツプ！」

「プリキュア！エメラルド・リンカネーション！」

フェリーチエの魔法がスーパーヨクボールを浄化し、全て事なきを得た

「クツ：オボエテロー！」

スーパーヨクボールを生み出したヤモーも、部が悪いと判断してその場を立ち去って行った



／／／／／／／／

「みらい、リコ…ごめんなさいー！」

ビーチに戻って来て早々、ことはは頭を下げて二人に謝ったのだ。当の本人達は何に対して謝っているのか首を傾げていた

「わたし、皆んなを楽しませようと思ってたのに。でも、それが二人に迷惑を掛けていたんだね…」

ことはが言うのは、楽しくさせようとして魔法を使ったが結果、それが裏目に出してしまったこと。それが今ようやく自分で分かって反省なのだ

けれどもみらいとリコはそんな事微塵も気にしていなかった

「大丈夫、はーちゃんの気持ちちゃんと分かっているよ」

「それに、この程度の事わたし達なんて事ないし！」

「見栄を張るなってリコ」

「張ってないし！ゴホン、これからは、こつそりでも今日みたいに沢山魔法を使うのは無しで！」

「そりゃああれだけ魔法を使えば疲れるよな」

いつまでも減らず口な翼にリコは、指先を頬に押し付けて強引に黙らせようとする。グリグリとしてくるリコの手を振り払おうとする時、丁度大吉の呼ぶ声がした

「おい皆んな！製氷機が直ったぞー！」

修理していた製氷機が直ったらしく、かき氷が食べれると思ってわくわくした気もちで駆け寄るのだが

「かき氷！」

「いや、氷が出来るのには流石にまだ時間が掛かるかな？」

折角食べれると思っていたが、それを聞いて落胆するみらい。一応大吉が製氷機の扉を開けて中を確認すると、不思議な光景を目にする「あ、あれ？氷がもう出来てる!？」

それにハツとして三人はこととはへと目を向けると、申し訳なさそうに魔法のタッチペンをチラつかせいた

「あはは…」

「もう、はーちゃんったら」

翼達が見ていない間に魔法を使っており、それに加えてことはらし  
いといえばそうなのだ。三人は特に注意するなどこれ以上はせず、  
只々可愛い娘を見る目で優しく見つめるのであった

### 第32話 思いやりのぬくもり

まだ朝日が昇る前の早朝の時間。

両手に大きなゴミ袋を両手に抱えながら、翼の姿が和風門から出て来た

いくら夏真っ盛りの季節で夏服姿の翼でも、早朝は少し肌寒くて体を震わせていた。十六夜家の敷地が無駄に広い事もあり、ごみステーションまでが遠い。話相手でもいれば暇は簡単に潰せる。そんな面倒に付き合ってくれるのは相棒二人だった

「ふわあ…悪いな二人共、いつも付き合ってくれて」

『ゲゲゲ、それはお互い様だ。オレ達も基本暇してる』

『フフフ、それに朝の散歩はとても体に良くて気持ちの良いもの。寧ろありがたいよね…フフ？』

ごみステーションでごみを置いて帰ろうとした時、フフの目に気になる人物が映った。それはことはだった。

何故こんな朝早くに出歩いているのか。それにリュックも背負って一人で歩いている。お出掛けをするにはあまりにも早過ぎる

『フ、はー子？』

『ゲゲ、みら坊とリコ坊の姿も見当たらねえ』

「あ、二人共、はーちゃんから少し離れた後ろを見てみる」

ことはから少し離れた距離で、見つからない様に隠れながら後を追いつける小さな影が見えた。誰がどう見ても見間違える筈の無い、ぬいぐるみのモフルンだ。

モフルンも何故一人で出歩いているのか。そして、何故ことはの後をこっそりと追いつけているのか気になった。

モフルンの周辺にもみらいとリコの姿は無い。

少し奇妙だと思い、翼達は取り敢えず先にモフルンに声を掛ける事にして歩き出した

ことはから隠れながらの為か、歩いてもすぐ追いついた

「モフルン何してるんだ？」

「も、モフ!?!翼!」

急に声を掛けられて、ビックリして思わず少し大きな声を出してしまった。すぐさま両手で口を覆って閉じた。早朝とはいえ人はチラホラと見かけるが、幸い気付かれる事は無かった

「それでモフルン。どうして、はーちゃんの後ろをこっそり付いて行ってるんだ？」

「はーちゃんが、何も言わないで朝早くから出て行っちゃったのを見たからモフ」

「それなら直接本人に訊けば——」

『フッフ、女の子が一人で家を出る理由をわざわざ訊くの？フッフ、いくら何でもそれはデリカシーがなさ過ぎるわ』

「しっ—モフ—声が大きいモフ—後、頭下げて隠れるモフ—」

モフルンに言われて、翼達は口を閉じて静かに物陰に隠れる。ことははまだ、モフルンの尾行には気付いてはいない

「このまま後を追うモフ」

そのままことはの後を追い続けた翼達だが、様子を見る限りでは目的地も決まって無いのか、キョロキョロと見渡してはゆっくりと歩いている。

そんな刑事並みの尾行が数時間続き、完全に朝を迎えて商店街までやって来た

商店街まで来たことはは、徐に魔法でシャボン玉を作り出して何かに浸っていた。顔を振って思いつかない様になっている。翼から見ると、少し無理しているに見える。本当にこのまま見守ってるだけで良いのだろうか、思っていることはが此方の方へ振り返った

「ツ！」

見つからない様に更に小さくなって影に隠れる。頭があまり出ないくらいで覗き込み、ことはが歩き出すのを見届ける。ちよつとした、だるまさんがころんだみたいな状態。しかし、周りからの目も痛い。ある意味人生を賭けた遊び

「見つかるどころだったモフ…」

「朝からこんな事してるなんて…これじゃあ完全に変態じゃねえか…あっ！」

突然徐に走り出したことは。翼はモフルンを抱えて、見失わない様に走って追い掛ける。ことは止まる事なく商店街を通り抜け、住宅街の細道を通って人気の無い裏道へと入って行った

「速いけど…：いたいた発見！」

女の子だからといってしまふ甘く見ていた事もあり、偶に視界から見失う事もあったが何とか食らいついた。

ことはは、此方に背を向けてほうきに跨って空へ飛ぼうとしていた。しかし、全く魔法を使えずほうきは応えてくれない

モフルンと顔を見合わせながら、そんなことはに近付いて声を掛ける

「はーちゃん」

「うわあ！離して!!」

肩に手を伸ばして声を掛けたのだが、後を付けられていたのが翼が思う以上に怖かったらしく、振り返りざまにことはの拳が翼の頬を殴り飛ばした

「翼、大丈夫モフ!？」

「えっ、翼?」

モフルンの声でようやく翼だと認識し、その場で呆気に取られていた

／／／／／／／／

場所を公園に移して、木陰が当たるベンチに座ってゆっくりことはに話し掛ける。

リュックを持ち、家の人に誰も言わず朝から家を出る。好奇心という言葉で片付けるにしても無視は出来ない

ことはの心の内に踏み込む事になるが、その事情を聞き出す

「このままエメラルドが狙われ続けたら、皆んな大変な目に遭っちゃう。わたしは皆んなの所に居ちゃダメなんだよ」

皆んなを思う理由での家出。あまり感心はしないが、エメラルドの事で今まで戦って来たのは事実。

だから肯定は勿論、否定もしない

しかし心配はする

「行く当てはあるのか？」

「……あの場所が何処かも分かんないし、わたし、何処へ行ったら……？」

家を出た挙げ句、無計画で行動を起こした為に行く当ても無い。

これからどうすべきか考えてると、ことはの腹の虫が翼達の耳に届く

「朝ご飯食べてなかったモフ？」

「行く当ては無くても、魔法が使えるから一応食料問題には困らないな」

「そうだね。キュアアップ・ラパパ、サンドイッチ出てきて」

魔法のタッチペンを軽く振り、魔法の言葉を唱えるも魔法が応えてくれる事は無かった

「さっきもほうきで飛べなかったし、どうしちゃったのかな……」

「きつと、はーちゃんがしょんぼりしてるからモフ。元気が無いと、魔法も上手く使えなくなるリコが言ってたモフ」

「べ、別にしょんぼりなんてしてないもん！」

かなりデリケートな問題で今は魔法が使えない。本人は否定してはいるが、結局の所使えない事は変わらない

「取り敢えず俺の家に来い。二人には内緒にしておくから……はーちゃん？」

行く当ても無ければ、頼みの綱である魔法も今の精神状態だと使えない。妥協案として十六夜家に誘ってはみる。しかしながら、ことは左から右へと話を流していた

ボーっとすることは視線が気になってその先を見ると、何組かの親子が居た。目元をよく見ると少し潤んでいる

「あ、そうだ。作ったクッキー持って来てたんだ。翼も食べてみて」

何か考えていたらしいが、それを振り払ってクッキーが入ってある包み紙を取り出した。包み紙を広げて翼にも分けてあげた

「昨日わたし一人で作って、みらいとリコとモフルンにもあげたの」

「はーちゃんの手作りか。いただきます……ん？」

手に貰ったクッキーをひと齧りして、翼はその味に違和感を感じて食べる口を止める

「翼？」

「はーちゃんってしょっぱいクッキーが好きなのか？」

「えっ!？」

その感想を聞いてことはも急いでひと齧りしてみる。その味は、翼が言う様にしょっぱいもの。甘いとはまた程遠い

「本当だしよっぱい。皆んな美味しいって食べてたのに……」

どうやら、作ったことはもクッキーの味までは確かめておらずこの事実を知った。恐らくだが、作る時に砂糖と塩を間違えたのが可能性として高い

「塩を使ったクッキーはお店でも売ってある。でもまあ、間違えたてしまったから凹むよな。それでも、みらいやリコが美味しいって言ったのは多分——」

「——こんな所で楽しくおやつの間ですか？」

クッキーの事で悩み始めた所に、更に雰囲気が悪くさせる人物・ヤモーが現れた

「今日こそはエメラルドを渡して貰いますよ。絶対に!!」

その執念は使命を超えて、もはや狂気に近いものを感じる。今回で全て懸けるつもりなのか、その気迫を感じる

体から瘴気を溢れ出して足元には魔法陣が現れる。落ちてある虫かごを取り込み、空も闇に染まっていく

魔法の力が働き、虫かごと己自身を使ってヤモーは巨体な怪物へと変貌する

「はーちゃん変身……ぐわっ!」

「翼……きゃっ!」

怪物となったヤモーの口から、エネルギーの塊で出来た縄状のものが翼を弾き飛ばし、ことはを捕らえた挙げ句、そのままヤモーのお腹の檻に閉じ込める

「スマホンが……これじゃあ変身出来ない!」

スマホンにも影響があり、変身が出来ない状態まで追い込まれてしまった

「はーちゃん!!」

翼は両手に、煉魔之刀剣れんまのとうけんを持って、救出しようとした時、空から二つの影が舞い降りる

「翼君！モフルン！」

「わたし達のはーちゃんに何してるのよ！」

ほうきに乗ってみらいとリコがタイミング良く、翼の前に現れた

「二人共、早く変身するぞ！」

「みらい、リコ！」

「うん！」

『キュアアップ・ラパパ！』

『ダイヤ！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア！』

「煉魔之刀剣——侵食率50%！」

ヤモーは大きな足で踏み付けようとして来るが、三人は後ろに下がって避けてみせた。

翼は悪魔の翼を大きく広げ、飛び掛かり一振りする。けれども闇の魔法によって阻まれて刃が通る事は無く、逆に弾かれた

『ゲ、厄介だな』

「だったら魔法を斬るまでだ——因果斬り！」カルマざり

放った悪魔魔法はヤモーの腕に直撃し、その身に纏う闇の魔法を一時的に消し去った。邪魔するものは無くなり、これでミラクルとマジ



カルの攻撃も通りやすくなる

「今がチャンスだよ！」

「行くわよミラクル！」

ミラクルとマジカルは息を合わせて高くジャンプし、ヤモーの顔にダブルキックを仕掛ける

が、ヤモーの咆哮によって阻まれるだけではなく、その圧で簡単に吹き飛ばされる。その先は木が生えており、背中を強打してその場に蹲る

そして、因果斬りによって消し去った闇の魔法が復活してしまっ

た。  
近付けばヤモーと闇の魔法の力によって押し返され、かといって距離を取って戦うにも攻撃手段が限られている。

望みの悪魔魔法・因果も時間が経てば、それも復活して返り討ちに遭う

三人も居て、尚且つ一人欠けている状態でこの有様。ことは救出するのは、想像以上に困難を極めていた

そんな三人の姿を見て、ことはもう耐えられなかった

「わたしの事はもういいの！だって、エメラルドとわたしがいるから皆んなまで狙われちゃう。わたしが居たら、いつまでも皆んなを困らせちゃう！」

「だから、『さようなら』って置き手紙を……」

「わたし達の為に？」

ことはは、置き手紙をしてまで家を出ていた。そこまでしてでも、ことはは皆んなを守りたく思い強い決断をしていたのだ

「でも、そんな大事な事を一人で決めるなんて！」

「どうしてわたし達に話してくれなかったの？」

「……二人だって、二人だってわたしに言ってくれなかった！クツキーがしよっぱいって、本当は美味しくないって言ってくれなかった！」

そんなことは更に更に追い打ちを掛けたのは、何気ないひと言を言ったミラクルとマジカルだった。気を遣わせたと思ったのもあったが、それ以上にちゃんとクツキーの味について何も言わなかったから

『ゲゲ、来るぞ!!』

ことはとの対話すら満足にさせてはくれない。水を差す様にしやモーが、巨大な尻尾で叩き潰そうと振り回して来る

悪魔の翼を大きく広げて、その尻尾を受け止めてミラクルとマジカルを庇う。しかしながら尻尾の大きさも相まって、凄まじい威力に翼は片膝を着く

何とか強引に跳ね除ける事に成功して、ミラクルとマジカルは無傷で済んだ。翼は、防ぎ切ったとはいえ、かなり体に負担が掛かってしまいゲゲとの侵食が解除されてしまった

「嬉しかったの」

「はーちゃんがわたし達の為に、一生懸命作ってくれた」

「はーちゃんの気持ちがいっぱい詰まったクッキーなんだよ！凄く嬉しくて、本当に美味しかった！」

膝を着く翼に手を貸しながら、ミラクルとマジカルは、あのクッキーの美味しいと言った意味を言葉にして伝える。

料理は何も味だけではない。作ってくれた人の愛情があればある程、その美味しさは更に増していく

ことはが作ってくれたクッキーには、最大限の「ありがとう」の気持ちが入められているのだ。それだけで充分なのだ

「わたし達は…」

「はーちゃんの事が…」

「大好きだから！」

少し勘違いもありはしたが、ことはを思うミラクルとマジカルの気持ちは嘘偽りない。それだけはこの先、どんな事があっても変わることの無い事実

「わたし、わたし…」

「一緒だよ。ずっと、ずっと一緒だよ！」

「もう二度とはーちゃんを、一人にさせるもんですか」

「う、うん！」

ことはが返事をする、ミラクルとマジカルが持っていたリンクルストーン・ピントルマリンが光り輝く

「皆んなの優しい気持ちに、ピンクトルマリリンが応えたモフ！」

光りは更に大きくなり、ことはが手に持つリンクルスマホンと共鳴して共に光り輝く。その光りはヤモーのお腹の檻を破壊し、大きく空中に飛び出した

「キュアアップ・ラパパ！」

「エメラルド！」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

「あまねく生命に祝福を！キュアフェリーチェ！」

「やろうフェリーチェ！」

「ええ！」

折角手に入ったエメラルドが手から離れた事に怒り、容赦の無いドス黒い闇の光線を口から放つ。

リンクルストーン・ムーンストーンを使っても、防げるかどうか怪しい。かといって、避けるという選択をしたら、周りに被害が出てしまう可能性もある。

それなら、無理矢理にでも体を張って止める事を選ぶが、翼達が動くそれより先に、フェリーチェがピンクトルマリリンを手にとって放たれた光線に向かって走り出した

「フラワーエコーワンド！」

魔法のタッチペンをフラワーエコーワンドに変え、先程大きな光り輝いていたピンクトルマリリンをセットする

「リンクル・ピンクトルマリナー！」

フラワーエコーワンドの先端部からピンク色をした、花の形をしたバリアを展開する

正面からヤモーの光線を受けるそのバリアは、ビクともせず完全防御している

「ピンクトルマリリンの癒しの力が、悪い力を打ち消しているんだわ！」  
拮抗するフェリーチェとヤモーだが、フェリーチェが一步足を前に

踏み出して見事跳ね除けた

「だいてんよくのつるぎ大天翼之劍——侵食率50%！チャンスは今しかない！決めるぞ！」

ゲゲと煉魔之刀剣からフフと大天翼之劍に入れ替えて、一気に侵食率を最大限まで引き上げる。

それに続いて、ミラクルとマジカルもリンクルステッキにリンクルストーンをセットして動き出す

「リンクル・アクアマリン！」

「リンクル・ガーネット！」

先にマジカルがヤモーに吹雪を放ち、ミラクルがその後にはガーネットの魔法を使用する。マジカルが地面ごと凍らせた事で、巨大な氷の手がヤモーの脚をガツチリ掴んで拘束する

そこに大天翼之劍の魔法で、氷の縄がヤモーの体中に巻き付いて更に動きを封じ込める

「エメラルド！」

「キュアー・アップ！」

「プリキュア！エメラルド・リンカネーション！」

「ど、ドクロクシー様アア!!」

今度こそ完全に浄化されたヤモーは、元のトカゲの姿へと戻って何処かへと消えて行った

暴れ回ってめちやくちやにされた公園は元に戻り、変身も解いてひと段落つく

「さあ、帰ろうはーちゃん！」

「一緒に、ね？」

「——うん！」

みらいとリコはことこの手を握り、三人仲良く手を繋いで朝日奈家へと帰宅するのであった

そんな仲の良い姿に翼も、微笑んで何も言わずにゲゲとフフを連れて自分の家と帰宅するのであった

／／／／／／／／

その日の夜。誰もが寝静まった朝日奈家の窓から、一つの影が空へと飛び出して行った。

またことはかと思っただが、ことはの部屋の窓は開いておらず、みらいの部屋からでもない

夜更けに外に出たのは意外にもリコだった。服装も魔法学校の制服を着て、夜といえど誰にも見つからない様に帽子も深く被っている。そんな彼女がほうきに乗って降り立った場所は十六夜家の庭。細かく言えば、翼の部屋の窓近く。

そこでリコは、微妙に閉まり切っていないカーテンから顔を覗かして、中の様子を見る

流石に翼も寝ており少し安心する

いや、安心したら駄目なのだ。

そもそも此処に来たのは、悪魔の件の事を伝えに来たのだ。ようやく覚悟を決めた

今が全てを話すとき

ノックしようとするが、その直前で手を止める。その手は少しばかり震えていた

それは何故

(何を躊躇う必要があるのよ。翼に話して、皆んなで協力して何とかする。もう時間は無い。それは自分が一番分かっているじゃない)

分かっている筈、なのだ

でも、それでも

——リコがその窓から訪ねる事は無かった

(ごめんなさい…やっぱり、貴方に話す事は出来ないわ。本当にごめんなさい)

あと一步の勇気が出ず、リコは静かにその場を立ち去るのであった

### 第33話 異次元からの迷い人

「うわっ!？」

津成木町から少し離れた林の中で、何処からともなく転がり現れた一人の少年。

少年は起き上がり、服についた土を落としながら辺りを見渡し首を傾げる

「此処は何処だ!？」

少年は頭を抱えながら、その場をぐるぐると歩き回り、どうしてこうなったかの原因を探る

「普通に家に居て、普通に過ごして、普通にインターホンが鳴ったから出迎えようとしたら、突然体が光始めて此処にポンつ、と…何だこれ?」

あまりにも情報が少な過ぎる。下手に動いて迷子になってしまうのも良くはない。だからといって動かない訳にもいかず、少年は周りを警戒しながらも歩き出した

林の中に居たが、運良く深い場所ではなかった。何故ならば歩いて数分で街が見えたから

「急いで帰らねえと」

少年は急いでその街——津成木町へ走り出した

／／／／／／／／

ある日のことだった。木漏れ日が透き通る並木道で、翼とみらいが仲良く並んで手荷物を持って歩いていた

「ごめんね翼君。付き合わせちゃって」

みらいが買い物帰り途中、散歩をしていた翼と偶然出会って、半分荷物を家まで持ち帰ることとなった

「気にするな。てか、リコは何してるんだよ?」

「リコなら今頃、モフルンと一緒ににはーちゃんと遊んでる筈だよ。はーちゃん、パワフルに育ったからね」

はーちゃんに振り回されるリコの姿が目に見え、気の毒だと思いき、苦笑いが出る。

色々騒動はあったが、ようやく落ち着いた日常を送れるまできた。闇の魔法つかい、悪魔。そんな面倒な問題は全て忘れて、今はこの時間を大切に過ごそうとしているのだ

「あ、いちごメロンパン買ってたんだが……食べるか?」

「いいの? 食べる!」

頑張って買い物してるみらいなのだ。多少の寄り道するくらいの時間は良いだろうと思いい、いつもの公園のベンチに座って、散歩途中買ったいちごメロンパンをみらいに手渡した

「はう〜! はまくて、ほいふい〜!」

「ほうばるのも良いが、口ついてるぞ」

「ありがと〜!」

紙ナプキンで口周りを拭っていると、何処からともなく大声が聞こえた

「みらい!!!」

「翼君呼んだ?」

「呼んでない。それに俺も聞こえた……おい、アイツ誰だ?」

猛ダッシュで此方へ近付いて来る少年に、二人は目を凝らして見つめる。みらいの名を呼んだ少年に、全く見覚えの無い人物にますます首を傾げる

ようやく目の前まで走って来た人物は、肩で息をしながら口を開ける

「み、見つけたぜ……みらい!」

「ごめん、みらいの知り合いか?」

「えつと〜、う〜んとお〜……誰ですか?」



面識もない相手にその反応は正しいのだが、その相手である少年は衝撃を受けていた。その様子からして、少年はみらいの事を知っている。というより知り合いの様な感じも

「オレだよオレ！『一馬』だよ！オレ達アレだろ、そう恋人同士！」  
「あ〜う〜ん?？」

何の脈絡もなく、いきなりみらいの彼氏と名乗る彼に翼は、どこか痛い目で見えていた。みらい自身も、その様な男相手は居ない。クラスメイトの壮太やゆうとは普通の友達。よく一緒に居る翼でさえも、そんな関係になど一度足りともなつた事はない

「それとお前誰だ？みらいはオレの彼女だ」

「は、はあ…俺は十六夜 翼だが？」

「い、十六夜だ?!?お前、リコとどういう関係なんだよ?!？」

物凄い形相で迫られた挙げ句、肩を掴まれた。しかもみらいだけではなく、魔法界出身のリコの名前を言った。明らかに此方の事情を知っている

「ちよつと待て、何でリコの事を？それにさつきから言っている事が滅茶苦茶だ。お前は一体誰なんだ？」

翼と一馬の睨み合いが起こり、みらいはその真ん中で困り果てていた。目の前に居る一馬という少年を知らなければ、今にも翼が掴みかかろうとする事に

「見い〜つけた」

「ッ!？」

「誰だ？」

とも急に現れた男性。今度は一馬とは違い、年上で20代程の青年だった。黒い髪、日本人だが中身は別のもの

『ゲゲゲ、その喋り方、悪魔だな』

「おいまた悪魔かよ！何だよ、悪魔は皆んな仲良く回覧板でも回しているのか？」  
「苦勞なこつた！」

「悪魔？それにその黒い奴は何なんだ？」

次々と起こる事態に、一馬はまだ理解が出来ていなかった

「当つたり〜！俺『ベルフェゴール』って言うんだ。宜しくな！」

「誰もお前とは宜しくしたくねえよ！」

ベルフェゴールは目の色を黒くさせ、此方へ歩んで来る。幸いな事に黒い目という点が助かった。もし黄色い目の悪魔だったら、翼一人で相手をしなければならぬ

「みらい、ソイツと一緒に避難を——」

「みらい一度離れるぞ！」

「え、あ！翼君?!」

翼が言い終わる前に、一馬がみらいを連れ出してその場から逃走した

「何イイイイ?!」

その突然の状況に翼は驚きつつ、その場から早く逃げてくれた事に感謝もする。

みらい達の背中が見えなくなったのを確認し、フフの影から大天翼之剣だいてんよくのつるぎを取り出す

「わざと騒ぎを起こす。その隙に一旦逃げるぞ」

『フフフ、周りに一般市民がいるから気を付けなさい』

大天翼之剣の切っ先を地面に当て、公園全体に暴風を起こさせる。風に煽られ砂埃が舞い上がり、想定通り軽い騒ぎとなり、一般市民は公園から出て行ったり、目に砂が入ってその場に蹲り咳き込んでいた「おいおい目眩しのつもりか？そんな事もしないで俺と遊べよ〜」

ベルフェゴールは腕を振り翳して、翼が起こした暴風をかき消した。視界は良好となり、戦いが始まると思っていたが翼達の姿が何処にも見当たらなかった

騒ぎに乗じて身を引いたのだ。それに落胆してその場に座り込む

「んだよノリ悪いなあ。それでも悪魔を倒した男かよ！プリキュアかよ！」



「大丈夫だみらい。オレが付いているからな。誰が来てもぶっ飛ばしてやる」

「わたしよりも翼君だよ！翼君を助けに行かないと……あつ！」

みらいが上空を見ると、丁度ベルフェゴールから逃げおおせ、買い物袋をぶら下げた翼が舞い降りた。みらいは駆け寄り胸の中へと飛び込んだ

「良かった無事で！」

「急だったからな。取り敢えずは逃げて来た。それよりも、だ」

物凄い表情で此方を睨んでいる一馬に、少しばかり引いていた。一体自分が何をしたというのか。事情を知らないとはいえ悪魔から身を救ってやったというのに、なんかモヤモヤする気持ちでいっぱいだった

『ゲゲゲ、助けてやったのにそんな目で睨むなよ。坊主』

「誰が坊主だ！オレは——」

『待て一馬！』

一馬の懐からあるものが出て来た。それはみらい達がよく知るもので、翼もそれが何なのか一目で理解した

「リンクルストーン!?!」

『お前、もしや悪魔か？それにさっきの白いのは天使』

『フッフ、どうやらお互いに話し合う必要がある様ね』

「と、取り敢えずわたしの家に行こうか！リコ達も待ってるだろうし！」

お互いにちゃんとした説明が欲しい為、一度朝日奈家へと足を運ぶ。その道中、みらいが翼にピツタリとくつついていたのが気に食わなかったのか、一馬からの視線は一層強くなる

翼達が朝日奈家に着いて、玄関のドアに手を掛け時だった。一馬は隣の家の方に目をやって首を傾げる

「なあみらい。お前の家の隣って『坂田』って言う家が無かったか？それが俺の家なんだが……何で無いんだ？」

「えっ、わたしのお隣さんに坂田さん？聞いた事ないかなあ。お母さんとかに聞けば、何か分かると思うんだけど」

「立ち話なんてするもんじゃないぞ」

「そうだよ。上がって上がって！」

翼達は別段いつもと変わらないと思っっているが、一馬は「明らかに妙な事が立て続けに起きている」といった気持ちでいっぱいだった。それも含めて、朝日奈家で話し合えば何か分かるだろうと思ひ、今は胸の内に留めて置く事にした

「ただいま〜」

「おかえりみらい。あら翼も？」

「お邪魔します。とにかく上がらせてもらおうぞ」

素早く靴を脱いでは綺麗に玄関に並べて、みらいの部屋と向かうのであった。勿論その後は一馬も付いてくる

「……え、ちよ翼誰よその子？」

あまりにも自然に上がり込む一馬に、一瞬見逃しそうになったが急いで通させない様にする

「リコまでオレの事を…一体何がどうなっているんだ…」

「気にするな…というのは無理があるな。それを説明する為に此処へ来た。リコも来い」

「ほらほら〜」

買い物袋を置いたみらいも、リコの背中を押して二階へと誘導して行く。リコと同じ様に翼も早くこの一馬とリンクルストーンについて聞きたい

みらいの部屋に行くと、今度はこはが出迎えてくれた

「翼も遊びに来たんだ！えっ、その人は誰？」

「オレは——」

「このやり取りもう三回目だ！いい加減頭がおかしくなりそうだ！説明するから、はーちゃんも席に座ってくれるか？」

「はい〜」

もう同じ事の繰り返しにいい加減我慢の限界を迎えた翼は、全員を座らせて今起きてる現状だけ先に伝えた

また現れた悪魔・ベルフェゴールに、一馬という少年とリンクルス  
トーン

「さて話してもらおうか一馬。お前は一体何者なのか？」

「オレは『坂田 一馬』。それでコイツはオレの相棒の『リンクルス  
トーン・クリスタル』だ」

「改めて、俺は十六夜 翼だ。それで黒い奴が悪魔・ゲゲで、白い奴が  
天使・フフ」

「わ、わたしは——」

「みらい、リコ、ことは、モフルンだろ？知ってるぜ。てか全員オレの  
彼女だ」

そんな衝撃的な発言を聞いた翼の頭は爆発して倒れてしまった。  
青ざめた表情をして、信じられないと顔に出ていた

「翼君?!」

「貴方、何急に変な事言ってるのよ?!」

「そんな事言われてもなあ。事実だし」

「色々と言いたい事はある！あるが話が進まない気がする！」

「フフフ、そうね。それに貴方達少し違和感があるわ」

『その筈だろう。何せ我らは此処とは別の世界線から現れたのだから』

クリスタルの言葉を聞いて全員の目が点となる。別の世界線、つまりそれは世の中で言うところの平行ワールドや異次元の世界、マルチバースと色んな言い方があるが、そこからやって来たらしい

『我は感じる。この世界は我らが知っている世界とは時間が異なり、  
知らない事がある。根本的な作りは変わってはなそうだが』

「不思議モフ」

「∴魔法界に居た時本で読んだ事あるわ。わたし達が居る世界、宇宙  
は神が創造したものの内の一つ。わたし達が知らないだけで、それは  
無数に存在するっていう」

『フフフ、なら答えは簡単。此方の世界による何らかの影響で、異次元  
の扉が開いて巻き込まれた。フフフ、それが多分正解に近いと思う』  
『ゲゲゲ、となると帰りの扉を開くにはそれなりのエネルギーが必要

となる。ゲゲゲ、面白くなってきたな」

ゲゲ、フフ、クリスタル達が勝手に話し始めたが粗方の事情は理解した。一馬達は迷い込んだ旅人の様なもの。恐らく一馬の世界では、本当にみらい達と深い関係なのかも知れない。

ただ、今それを証明するのは時間の無駄というもの。今欲しいのは必要な情報だけ

「じゃあオレが知ってるみらい達じゃないんだな」

『うむ、しかし帰り方は我にも分からぬ』

「そんなの簡単な事だろ」

『膨大なエネルギーが必要だ』

「俺、プリキュアに変身したみらい達。それに不幸中の幸いな事に悪魔がいる。な？」

ヨクバールを浄化出来る程の力を持つプリキュア、天使と悪魔の力を使える翼が居ればその扉を開けるのは可能かも知れない。加えて悪魔もいる。利用するにはうってつけの相手だ

「その為には作戦がいる。いいかよく聞け、これから作戦を練る。まだ触りだけだがこれなら上手く行く」

「作戦？元の世界に帰るのにか？」

「お前相棒の話聞いたよな？膨大なエネルギーが必要んだ。しかも悪魔も利用しなきゃいけない。被害は最小限に抑えて、お前らを元の世界に送り返す。良いかね暴れん坊將軍。もう一度言おう、作戦は大事だ」

「何にせよ細かい事は任せろ」

「え、あつうん、任せろ！」

仕方ないとはいえ役割りを全部振られた事に戸惑ったが、案外素直な性格をしており翼も任せられる事にした

「とはいえ簡単なものだ。凝った作戦は逆に成功率を下げる恐れがあるからな。じゃあこれから言うから聞いてくれ。先ずは——」



「よし、此処で呼び出そう」

『ゲゲゲ、にしてもお前も一応戦える力はあるんだな』

「正確にはオレじゃなくてクリスタルだ。相棒の力を借りてみらい達と戦っていった。あ、勿論オレの世界での話だ」

『フフ、意外とワタシ達と似てる所があるわね』

「本当に来るの？」

そんな疑いのある事を言うのはリコ。仕方ないと言えば仕方ない。何故なら今翼達が居るのは廃工場の中。人目が無いという観点からこの場所を選んだのだが、誰がどう見ても罠だというのは見え見えだ  
「ベルフェゴールのあの性格。絶対来る」

「——やつほ〜！」

噂をすればなんとやら。何処から入って来たのか不明だが、悠然と此方へ歩いて来るベルフェゴールを全員目にした

「どうも！まさか、そっちから招待してくれるとは思わなかった」

「早いとこ帰って、オレのみらい達に会いたいんだ！邪魔するな！」

「別に邪魔はしてないモフ…」

『キュアアップ・ラパパ！』

『ダイヤ！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア！』

「大天翼之剣——侵食率50%！」

いつも通り変身を遂げた三人。そしてそれに続くのは一馬とクリスタルの二人

「行くぜクリスタル——装着！」

炎を身に纏い、弾けると一馬の姿は全身鎧と化していた。赤い竜の鱗の様なモノで覆われており、一部銀色の鉄部分が見えている。顔も完全に守られており、防御力は中々のものだと思われる。そして、背中には特徴的な小さな翼が裝飾されていた

武器も一緒に携えており、手には大きな刀を装備していた

「モンスターハンターに出てくる、リオレウスって言うモンスターの装備だ。名前はレウスXシリーズで、武器は飛竜刀ひりゆうとう【楓】かえてって言うんだ。カッコいいだろ！」

「わたしは、そういうの知らないから分からないな……あはは」

ミラクルに自慢げに話す一馬だが、女の子であるミラクルはそういう知識を持っておらず少し言葉に詰まってしまう

「ひー、ふー、みー、よー……あれ？エメラルドのプリキュアはどうした？」

今更ながらことは不在の事に気付いたベルフェゴールは、首を傾げていた。勿論ことは居ない事は翼達も知っている

「さあ？どうしたか？」

翼の丸わがりの挑発にベルフェゴールは鼻で笑った。

ベルフェゴールからすれば、一人減ったところで特に問題はない。ただあるとすれば、そのもう一人が翼達を始末した後、探さなければならぬという手間だけ

挑発して来た事に対しては然程気にしてない様子。

寧ろ逆に、手を仰いで挑発仕返した

「その挑発乗ってやるぜ!!」

「あ、おい！」

一馬が先行して翼のその後が続いて行く。とはいえ、翼と一馬が前に出るのは作戦通り。その二人を援護するのはミラクルとマジカル。単純且つ、一番理に適った組み合わせ

「リンクルステッキ!!」

二人はリンクルステッキを翼と一馬に向ける。ベルフェゴールの動きに合わせ、今一番最適なリンクルストーンを同時にセットする

「リンクル・ムーンストーン！」



「リンクル・アメジスト！」

向かって来る翼と一馬に念力で吹き飛ばそうとするが、その間にマジカルが展開したムーンストーンの数々のバリアが盾となり、身代わりとなって砕け散る

「へへ……？」

バリアの破片が落ちる中に翼と一馬が居るかと思っただが、いつの間にか姿を消していた。あるのは魔法陣が二つ

「——ッ!!」

ベルフェゴールの背後と真上に同じ様な魔法陣が一つずつ現れた。

背後からは翼が切っ先を向けて突き刺そうとする。真上には一馬が叩き切ろうと振り翳す

確実に決まったと誰もが思った。だがそんなちやちな策など容易く振り伏せる

背後からの突きは体をズラして横に避け、腕を掴み上げる。上からの攻撃は特別何もする事なく素手で受け止める

「正に子供の浅知恵だな。もつとこう…なあ？」

嘲笑いながら二人を投げ飛ばされた。翼はマジカルによって受け止めてもらい、一馬は上手く体勢を整え着地する

「なんて奴だ！」

『これが悪魔か。やはり一筋縄ではいかぬか』

「油断しないでね一馬君。悪魔の力はこんなものじゃ…って二人共!!」

一馬にミラクルが寄り添って心配する隣で、翼とマジカルがこんな時でも相変わらずだった。

マジカルに受け止められた事が嫌だったのか、かなりご機嫌斜めな様子。それに対しマジカルもムスツとした表情をしていた。

それでもミラクルに言われて、すぐさま意識をベルフェゴールに向ける

「なあみらい、あの二人っていつもああなのか？」

「お恥ずかしながら…」

『翼、長期戦はこちらが不利になる。作戦通りするなら短期戦。次で

決めないといかん』

当初の予定なら最初の一撃で決めるつもりだったが、そう簡単にはいかなかった。けれどもそれも一応想定内。プランAの次はプランB変更するまで

『フッフ、一気に決めるわよ！』

大天翼之剣を地面に突き刺す事で、ベルフェゴールの足元から巨大な木の幹が現れて一斉に襲い掛かる

ベルフェゴールは動かず、指を鳴らしただけで木の幹を一瞬で腐れさせた。一馬とクリスタルはこの芸当に一瞬怯むが、一步足を動かした「食いやがれ!!」

刀の連続斬りで休みなく仕掛けるが、全て腕で弾かれて受け流される。悪魔としての力だけでなく、やはりというべきか戦闘能力も高い「ククク、ほらほらどうした？あ、惜しい！」  
「舐めるな!!」

地面に向かって刀を振り下ろして、土煙りを上げさせる。これでお互いに視界不良となるが、ベルフェゴールだけは一馬の位置をちゃんと把握している。これも悪魔の力の一部

一馬に魔の手が伸ばされてる直前で、体の動きが止まる。腰に何か巻き付けられている

土煙りが晴れると、大天翼之剣によって作り出された縄状のツタで翼が締め上げていた。振り解こうとするが、いつの間にか一馬もツタを握り締めており、手を上手く絡ませて引っ張り上げる

『ダイヤー!』

『永遠の輝きよ! 私たちの手に!』

『フル・フル・リンクル!』

『プリキュア! ダイヤモンド・エターナル!』

繰り出したダイヤの魔法が一直線にベルフェゴールへ走る。ミラクルとマジカルは、ここ最近力を翼以上に力がついている。下手をす

れば一瞬で勝負はつく

それを本能で感じてベルフェゴールは動く。己の魔力を体の一点に集中する。そのエネルギーの密度によって、縛り上げていたツタが一瞬で腐食した

更にその余波で翼と一馬は吹き飛ばされた

縛る者はもういない。向かって来る魔法を正面から叩き潰すだけ

「真っ向勝負！そういうの好きだぜ俺は!!」

魔力の塊を砲撃として打ち出して、ダイヤモンド・エターナルとぶつけさせた。中央激しく魔法のぶつかり合うも、すぐに力の差が出始める

踏ん張ってはいるが、ダイヤモンド・エターナルが僅かに押されつつある。このままでは、いつかはミラクルとマジカルの魔法が負けてしまう

——彼女が現れるまでは

「それを待っていました!!」

廃工場の屋根をぶち抜いてフェリーチエが参戦した。

その台詞や登場の仕方に、この瞬間を最初から狙って待っていたかの様子。フェリーチエの手には、フラワーエコーワンドが握られており、既にリンクルストーン・エメラルドもセットされてある

この参戦の仕方は全て翼の作戦。ミラクルとマジカルとフェリーチエの三人の全力の魔法もだが、ベルフェゴールの全力の魔法を出させる必要がある

翼と一馬が動きを封じてそこにミラクルとマジカルの魔法を放てば、やられまいと全力で抵抗しに来る。それを狙った

「プリキュア！エメラルド・リンカネーション！」

フェリーチエの魔法が加わって、ミラクルとマジカルの魔法が更にパワーアップする。そして、ベルフェゴールの魔法を呑み込んで、そ

の体を貫いた

膝を突き、最期の言葉も残さずに静かにベルフェゴールの一生が閉じるのであった

ベルフェゴールが倒れるのと入れ違いで、魔法がぶつかり合った中央の空間。そこに、縦に亀裂が入った。この現象こそ本来の目的で、これが異次元の扉

不安定だが、それが今開かれた

『ふむ、どうやらアレが帰り道の様だな。一馬』

「わーってるって。ありがとな。色々世話になった」

「開くのに成功したが不安定だ。早く行かないと閉じるぞ」

「そうだな。達者でな！」

一馬達が扉を潜ると同時に扉は閉じた。これでこの件は綺麗に片付いて幕を閉じるのであった

「ところで翼君、何でフェリーチェを最初から連れて行かなかったの？」

「わたしも思ったわ。結局こうなるのなら、一緒に居た方が確実に決まる筈よ」

ミラクルとマジカルの言う様に、改めて考えるとフェリーチェを最初から外した理由が分からない。油断を突いたと言っても、悪魔相手にそう簡単に痛痒するとは思えない。実際、アメジストでの連携も通用しなかった

「それはだな」

「それは？」

「単純にフェリーチェが口を滑らせて、作戦を水の泡にするかと思っただから」

「ええ〜!?!」

「わたしがそんな風に見えますか?!」

「変身後ならともかく、変身前ならあり得たから」

プンスコと怒るフェリーチエを宥めるのに苦勞をする翼に、ミラク  
ルとマジカルは笑って助ける事なく、この騒動は終わるのであった

## 第四章 悪魔編

### 第34話 僅かな命

「……」

一人カレンダーを見つめるリコ。それを見て何を思うか  
(もう時間が無い…悪魔の契約をどうにかする手掛かりがまだ見つかってない)

夏休みが突入し七月に入って尚、リコの問題は何一つとして解決どころか進んですらいなかった

(残り時間は三週間も切ってる。早く何とかしないと…)

「リコッ!」

「わっ!?!」

真剣にカレンダーを見る背後から、ことはが抱きついて驚かした

「翼達が遊びに来たよ!早く行こー!」

「はいはい、今から行くわ」

リコの返事を聞いて、ことははドタバタと玄関の方へ走って行った

「何とかなるかな…」

「翼く!」

「ッ!!」

飛びついて来ることはだったが、ゲゲとフフを盾にして抱き付かれるのを防いだ

「危な…」

「はー!翼冷たい!」

「お邪魔した途端ダイブするのは迷惑だ。分かったか?」

「は…い…」

好奇心旺盛の塊であることはを軽く宥めた後、みらいの部屋へと上がる

「翼君おはよう!」

「今日は何するんだ？勉強に勉強か？それとも勉強か？」

「もう勉強ばっかり！夏休みなんだから、もつとエンジョイしなきゃ！」

「みらい、今日翼を呼んだのは遊ぶ為じゃないのよ？」

すると扉をノックしてリコも話に参加した。どうやら翼を呼んだのは、何か用事があったみたいだからだ

「校長先生からまた連絡があったの。悪魔の予兆が」

「えっ、この前はガバガバで分からないとか言ってたのに？」

「水晶さんのお告げよ。『黄色い眼の者が現れし時、災厄が起こる』と」「いや、悪魔が来た時点で災厄だけだな」

『ゲゲゲ、それなら心当たりがある。悪魔に関しては目を光らせてたからな』

そう言つてゲゲは、自分の影から地図を取り出してそれを開けた。所々に赤いマークが記されてある

『ゲゲ、今まで出現、もしくはそれらしい予兆が起きたのを改めて洗い出した。幾つかパターンが見えて来た』

「うくん…わたしには分かんない」

「わたしも……あ、もしかして」

ことはが首を傾げるのに同意し掛けた時、みらいがそのパターンを見つけた。少しずつだが、赤い丸は津成木町に近付いている

『フフ、その通りよ。そして最終的に』

「この建物だな。だが妙だな」

翼が指差したのは一軒の家。パターンから行くと、赤い丸の先にその家がぶつかる。しかし疑問を持つ。なにせその家は

「確かこの家、空き家の筈だ」

『ゲゲゲ、そうだな。だがオレはその空き家以外に妙なものも見つけた』

ゲゲは地図の海岸の方へ指をなぞり、円を書く。その円を描いた周辺には全く、赤い記しがひとつもなかった。

他の赤い丸の周辺には、幾つもの予兆らしき記しがあるものの、そこには不自然なくらい無いのだ

しかもそこは、少し前に海水浴しに行った場所

『ゲゲ、ここら一带に悪魔の予兆が全くない。怪しいとは思わないか？』

「じゃあもう一回海行くの？やたく!!」

『フフ、はー子は呑気ね。でも、はー子の言う通り一回は出向いて調べないと』

「決まりだな。明日にでも出掛けるか」

／／／／／／／／／／

「はー！また海にやって来たよ!!」

『ゲゲ、別に遊びに来た訳じゃないからなはー坊』

流石にまた車で来る訳にもいかず、距離もかなりある為ほうきを使って朝一で浜辺へやって来た

「二手に分かれてみるか。まあもしもの事を考えたら必然的に——」

翼とことはとフフ、みらいとリコとモフルンにゲゲという組み合わせとなった

「んじゃまあ気楽に手掛かり探しますか」

「はーい！」

手を振ることはを引き摺りなら翼達とは分かれた。

朝早くて少し涼しいせいもあり、みらいは笑顔満点で浜辺を歩き出した

「リコどうしたの？家に居る時からずっと大人しいけど」

「普段、まるで騒がしいみたいなの事言わないでよ」

『ゲゲ、どうせ残り時間気にしてんだろう？当たり前だろ？』

ゲゲに考えを当てられ、思わず足を止めてしまった

「…大丈夫よ問題ない！悪魔を追って行けば何か分かる筈よ！」

強がりでも何でも、今のリコにはそうでもしないと落ち着かない。少しでも弱気な所を見せれば恐怖が支配する

『ゲゲ、特に黄色い目の悪魔を追えばな。だがそれで本当に良いのか』  
「うん、まだ翼君に言っていないよねリコ」



「まだよ、まだ。変に心配させたくない。それに言えないわ」

みらいとゲゲはそれ以上は言う事は無かった。しかしそれと同時に、これ以上の嘘はリコ自身苦しむ羽目になるのが容易に想像出来てしまう

只々二人はそれが心配だった

探索を始めて数十分が経過していた。みらい達は岩場の方まで行って手掛かりを探しているが、これといったものは無かった

一度翼達と合流しようと回れ右する時、何やら話し声が聴こえた

「誰モフ？」

単なる波の音かと思っただが、別段急いでる訳でもないので様子を見る事にした

岩陰から覗く様にして見た光景の先には、70代の男性とまだ若い男性四人が話し込んでいた

「何でこんな所に人が？声掛けてみようか？」

『ゲゲ、ストップだ……奴らの目をよく見てみろ』

みらい達は目を凝らして観察すると、一瞬だが目の色が黒く変わった。

言わずと知れた者達。悪魔達だ

みらい達はそれに驚き、覗くのを辞めてしやがみ込んで自分の口を塞いだ

身を潜めて何処か立ち去るのを待つ。

今交戦でもすれば、数で一気に不利になる

それでも会話の内容は聴こうとするのだが、イマイチ耳に届かなかった

その様子を見て早数分が経ち、四人の悪魔達がその場から消えた。

話が終わって解散でもしたのだろうかと思う

しかし、老人の悪魔だけはその場にまだ残っていた

「立ち退かないわね」

「悪魔一人だけだしわたし達だけで倒しちゃおう？」

『ゲ、それなら翼達を呼んでくる』

「皆んな待ってモフ。消えたモフ」

三人は顔を見合わせた後、急いで覗くと確かに姿を消していた  
「帰っちゃったモフ?」

「——俺は此処に居るぞ?」

みらいとリコに挟む様に背後から顔を覗かせて、先程の悪魔が声を  
掛けて来た

「「ツ!?」」

後退りながら逃げようとするが此処は岩場。逃げ場など何処にも  
ない

「気付かないと思っていたのか? 最初から気付いていたさ」

「ゲゲ、どうすればいいの…?」

『ゲ、どうするも何も逃げられねえよ…』

怯えるみらい達を悪魔はただ見てるだけ。ふと二人から離れると  
気分良く鼻歌を歌い始めた

「フフン、フフ〜! お前達が噂に聞く伝説の魔法つかいプリキュア。  
会えて光栄だよ」

「だったら何よ…?」

「変身、しないのか?」

「「え?」」

妙だった。プリキュアに変身すれば浄化されるというのにこの余  
裕。

何を考えてるのは分からないが、悪魔自ら変身を要求しているの  
だ

「だ、だったらやってやるわよ! みらい、モフルン!」

「え、でも、何か様子が変…:はーちゃん翼君を待った方が——」

「待ってられないわ。それに相手が悪魔なら丁度良いわ。聞きたい事  
があるから」

「リコやっぱり…」

みらいは静かにリコの手を握る。そして覚悟する

「ふう…:ゲゲ、翼君達を呼んでお願い」

『ゲゲ、持ち堪えろよ』

「うん。とにかく頑張る」

ゲゲが飛んで行くのを見送ると、悪魔はみらいとリコとの距離を置いた

「行くわよ!!」

「うん!!」

『キュアアップ・ラパパ!』

『サファイア!』

『ミラクル・マジカル・ジュエリー!』

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

『魔法つかいプリキュア!』

「たあああ!!」

二人一斉に飛び出して拳を放つが、後ろから何かに引っ張られる様な感じをし、悪魔の目の前で止まった

「ツ!?!」

「リンクルストーンを使ってプリキュアに変身しているのか。よく出来た魔法だな。けど」

悪魔はミラクルとマジカルに、軽くデコピンを当てると大きく吹き飛ばされ岩盤に減り込んだ

「所詮は人間の力。ちゃんとした力を持つ者でなければ宝の持ち腐れだ」

「うぐう…!」

更に念力で押し込まれ殆ど身動きが出来ない。

しかしそんな状況でもマジカルは気合いで体を動かした

「リ、リンクル・ペリドット!」

葉っぱの吹雪が悪魔を囲い込むが、一瞬で葉っぱを腐らせて魔法を

無力化した

「もつと本気を出していいんだぞ?・ん?」

「クッ!」

挑発されて黙ってる訳もいらないが、念力で身動きが出来ない。

知ってての仕打ち

悪魔はゆっくりとマジカルへ近付き、首を掴んでそのまま持ち上げる

「知っているぞ。お前、取り引きしたってな?そろそろ時間が来る筈だ」

「何で、知ってる…!」

「悪魔と言ってもちゃんと報告・連絡・相談が出来てるからな。しないものなら即ボンだ」

「貴方一体何者なの!」

「俺は『アザゼル』」

瞳の色が黄色に変わった。それは上級の悪魔の証拠。言葉に重みがあったのも、自分が強大な力を持っている故の態度

「ミラクル!マジカル!モフルン!」

呼び声と共に、マジカルとアザゼルの間に割って入る者達が二人翼とフェリーチエだった

介入により、アザゼルはマジカルから手を離して一度距離を置いた。

念力も途絶えてミラクルの体も自由となった

「マジカル大丈夫ですか?」

「げほっ!げほっ…ありがとうフェリーチエ…」

「テメエは黄色い目の悪魔!」

「…なるほどな、お前が天使と悪魔を従えさせる人間か。そのプリキュアを犠牲にしての人生は心地良いか?」

「だ、ダメ!!」

「——は?」

それは翼にしたら初めて聞いた話題。もはや意味の分からないこと

けれどミラクル達からしたらそれは禁句の言葉。今までずっとそれを隠して来たと言うのに、明るみになるというのは意外と呆気ないものなのだ

「何だ？悪魔の取り引きの件で聞きたいんじゃないのか？」

「翼耳を貸さないで!!」

「耳を貸すも何も話の内容が見えないんだが…？」

「まさかお前知らないのか？自分がどうやって生き返ったのかを？」

「生き返っただと？それって俺が一度死んだって事なのか？俺がいつ死んだんだよ」

「そうか、どうやら本当に知らない様だな。なら全部話してやろう。しかし外野がうるさくなりそうだから、少し口を閉めてやらねばな」

アザゼルがミラクル達に手の平を向けると、何かに押し付けられる様に地面に這い蹲ってしまう

「デメエー！」

「なにもそんなに怒る事はないだろう？折角お前の知らない事、ソイツらが知れたかった情報を言うと言うのに」

「おねが、い…！やめて…え…！」

「聞いた話だとお前一度魔術を使う人間に大敗したんだってな。覚えてるだろ？」

「まさか…！いや、だってあの時確か、フフの治療で何とかなつたって…」

「それが嘘だったんだよ。あの時本当はお前は死んだんだよ」

ミラクル達の方へ振り返ると目を逸らされた。嘘か誠など、その様子を見ただけですぐに察した

「普通死んだ人間は生き返らない。だがな、悪魔との取り引きで生き返れるんだよ。なありコ…：すまない、今はキュアマジカルと言った方が良かったか？」

「あ…ああ…」

アザゼルはわざとマジカルだけ念力を解いて自由にさせた。しかし、自由になったとはいえ動かなかった

「…取り引きって何だよマジカル？」

「それは…その…」

「ゲゲ、フフ何か知ってるんだろ？」

『……』

翼の問いにマジカルは口籠もり、ゲゲとフフは沈黙を選んだ

「おくい黙っててもいいが俺は構わず言うぞく？」

「教える!!」

「キュアマジカルは三ヶ月の魂と引き換えにお前を生き返らせた。と言っても、もう三週間くらいだがな」

「何を馬鹿な事を…：：：なあマジカ——」

マジカルに違うと言うと視線を向けたが、その本人が俯いてばかりで目も合わせてくれなかった

「…：：：もう少しお前達のいざこざを、ポップコーン片手に観戦したいとこだが生憎俺も忙しい身でな。お前達が欲しがっていた情報特別にやろう」

アザゼルがそう言うが翼とマジカルには何も聴こえていなかった。

それでもアザゼルは親切に教えてくれた

「全ての契約を握っているのは『リリス』だ。リリスに会えば少しは変わるかもな」

「そのリリスと言うのは何処に居るのです？」

「悪いがそれは無理だ。アイツの事は少々苦手だがそれでも同志だ。ではな」

「待って!!」

ミラクルとフェリーチェが手を伸ばすも、念力で押さえられ届かなかった。

動ける翼とマジカルも追うとはせず、立ちほうけていた

／／／／／／／／

「リコ、こっち見ろ」

威圧的な態度加え、隠し事がバレてしまいリコは怯えていた。

こうなる事は、隠し事がいつかバレるといいうのは覚悟していた

何とかなると

だけど実際それを目の当たりにすると、どうにもならなかった

「リコ話を聞いて——」

『ゲゲ、オレが全部悪い！リコ坊に提案したのはオレだ！だから責めるのは——』

「——黙れ」

冷酷な瞳はゲゲの体全体を貫き何も言わせぬとした

「リコ言うんだ。何があった」

「…わ、わたしはただ翼の為と思って…」

「俺の為？自分の為じゃないのか？」

「……」

「まあそんな事はどうでもいいか。ちよつとリコ来い」

翼は大きく両手を広げて優しく抱きしめた

「俺達家族なんだから隠し事なんて水臭いぞ。家族だから支え合おうんだ」

「家族って、それははーちゃんがわたし達に言っただけ。そんな深い意味は無いし、そもそも血が繋がってないし…」

「何言ってるんだ、俺達は家族だろ。血の繋がりが全てじゃない」

「そうだよリコ！」

「リコも皆んなも家族だよ！」

みらいもことはも、両側からハグして優しく包み込んだ

そして思う

翼の言う通り、血の繋がりが全てじゃない事を

「俺達、家族皆んなでリコを助けるんだ」

### 第35話 ゲームオーバー

「クソッ！リリスの手掛かりが無い！何でだ!!」

あれから二週間と翼達はリリスに繋がる手掛かりを手探りで探してるが、これと言っていい程の有力なものは無かった

校長にも魔法界の方で探してるはいるのの全く持って無い

今日もまた十六夜家で、無駄な時間がただ過ぎて行くだけで何も無い事に、翼は苛立ちを覚え始める

「翼落ち着いて。ゆっくりでいいのよ」

「無理だ！早くしないと…そもそも何でそんなに落ち着いてる?」

「だって残り二日よ。もう諦めたって——」

「何とかする！何とかするから諦めんよ！頼む…!」

「…うん」

翼はまた一人で自室に籠りつきりとなってしまうた

「リコリコ」

廊下の影でみらいが手を振って呼んでいた。リコは首を傾げならも側に寄ると、いきなりみらいに軽くチョップされた

「みらい何するのよ?」

「翼君頑張ってるんだよ。リコがそんなんじや翼君可哀想だよ」

「そんな事は知ってるわよ。でも本当に…」

「わたし達は諦めてないよ」

ひよっこりとみらいの後ろからことはが顔を出す。その瞳は真剣そのものだった

「わたしにみらい、翼にゲゲ、フフ。皆んな皆んな家族だから。リコが諦めても、わたし達は絶対に諦めないよ」

「…じやあわたしももう少し頑張ってみる」

リコはリビングへ歩いて行ったが、みらいは未だに心配していた（殆ど諦めちゃってる。わたし達の言葉じゃ届かないの…?）

場所は変わって魔法界では、校長は魔法図書館でリリスに関する本



を探していた

「ふむ…天使や悪魔の伝記はあるが、特定の者を探すやり方というものはない様じゃな…」

校長の周りには何百という数の本が散乱していた。

それが意味するのは、何十時間も掛けては読み漁っているのが確か  
「此処に無ければ知識の森に行けばあるかも…」

「リリスの居所なら知ってるわよ？」

「お主はツ!？」

「お久し振りです校長先生」

振り返るとナギが本を読みながら笑っていた

「一体いつから…」

「ん？さつき。それよりも、リリスが居る場所なら教えてあげますからリコ達と話せますか？」

「…よかろう」

校長もリコから話を聞いている。ナシマホウ界に現れては、一度翼を手に掛けた事も全て

そんな相手に連絡をさせるのは不本意だが、何か情報を掴んだのならそれを優先するしかない

校長は水晶で連絡を取り合ってみたところ、応答したのはモフルン、ゲゲ、フフの三人だった

『校長先生モフ!』

『ゲゲゲ、そっちから連絡となると何か見つけたのか?』

『そうなるが、あまり怒らないでくれたまえ』

『は…い皆んな!』

ナギが姿を現すと、ゲゲとフフは殺気立った表情となった

『フフ、これは一体どういう事?』

「それよりみんなを集めてくれない? 有力な情報、リリスの居所が分かったの」

難しい表情をするが、リリスに関する情報を提供すると言っているのだ。疑いはするが仕方なく言う通り集める事にした

『で、俺を殺した奴の話は本当に信用出来るのか?』

「酷いね。まあ当然の反応よね?でも断ったらお終いよ?」

ぐうの音も出ない。リリスを倒す事がリコを救うに繋がる唯一の手段。

それを手放すなんて事は翼には出来ない

「私も助けたいのよ。えっと場所はナシマホウ界の……津成木町の隣の一戸建てよ」

『分かった準備するぞ』

「無闇に突っ込んででも返り討ちに遭うだけ。私なら悪魔を無力化出来るから待ちなさい。少し時間掛かるけど」

『そんな悠長に待つてられるか!!』

「な、待ちなさい!!」

時間に余裕が無く、喋りよる途中だろうが構わず連絡を絶ってしまった

「:…どうなっても知らないわよ」

そしてリリスが居着いている家では――

「ねえマ〜マ〜!ご飯はまだなの〜?」

「え、ええもう少して出来るわ:」

まだ小学生の娘に急かされ食卓に並べる母親。普通ならこの光景は微笑ましい団欒のだが、少し様子がおかしかった

料理を運ぶ母親の手は怯える様にして震えていた

家族皆んな、両親に祖父母も揃った食事が始まるが場は恐怖と混乱で支配していた

「じゃあ食べようか:~?」

「その前に待つてパパ:…隣の叔父さんに助けを求めたのは誰?」

娘の言葉に全員が凍り付いた

「お爺ちゃんだよな？一人じゃ出来ない。誰か手伝った？」

祖父は助けを求める様に両親の方へ顔を向けるが

「わ、私知らない！お爺ちゃんが勝手にやっただけ!!」

「そ、そんなお前!!」

「何でそんな事するの!!」

娘の激しい怒りの叫びと共に眼が白くなり、お爺さんの方へ手の平を向ける

「あ、あ、あ、あ、あ……!!」

すると目や鼻や口端から血が溢れ始めそして

「——ッ!!」

「キヤアアア!!!」

娘が拳を握ると、お爺さんの頭が弾け飛び肉片が辺りを汚した。

頭を失くして胴体が食卓にもたれ倒れる

流れる血が温かい料理を冷やしていく

「言う事聞かないならこうなるのよ……ねえママ、わたしパイが食べたいな!」

／／／／／／／／／／

次の日の夕方、翼を先頭にリリースが居着いてるといふ場所に来ていた

少し離れた場所で家の周りを観察しているのだ。

その観察の甲斐あってか、家の周りには数は少ないが見張りの悪魔が居ることを確認した

「予想通り見張りが居るな。だが隙を突いて殺せば……」

「翼やつぱり無茶よ。ナギを待った方がいいわ。何か作戦があると  
言っていたし」

「もう数時間しかないんだぞ！やるんだ」

「リコやろう」

「うん……」

『キュアアップ・ラパパ!』

『ダイヤ!』

「エメラルド!」

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!』

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「あまねく生命いのちに祝福を!キュアフェリーチェ!」

『魔法つかいプリキュア!』

「煉魔れんま之刀劍とうけん——侵食率50%!」

「おい」

「——ッ?!」

密かに裏口に回り込んで、見張りの居る悪魔の口を塞ぎ煉魔之刀劍を突き刺した。

声漏れる事なく静かに事を収める

動かなくなった悪魔は引き摺って、誰かに見つからない場所に捨て置いた

正面からの侵入は困難を極める。そこで一番手薄である裏口から侵入するというもの

「ゲゲ頼むぞ」

『ゲゲ、任せろ』

翼はドアの鍵穴に指を近付けさせ、指先から黒い針を穴に通したするとカチャリという施錠が解けた音がした。

ゆっくりとドアノブを回すと、ドアが開いて難なく中へと入る事に成功した

「よし、フェリーチェは俺と来い。ミラクルとマジカルは一階の様子を見て来てくれ」

翼はフェリーチェを連れて二階へ上がって行く。

ミラクルとマジカルは警戒はしながらも、リリースが潜んでる場所を探し始めた

「誰も居ない…」

「それに真っ暗モフ」

「…二人共来て」

マジカルが何か見つけ、ミラクルとモフルンはその台所へと向かう。

そしてそこでの惨状に思わず目を逸らしてしまう

「ひっ！」

「これは…」

食卓の上で倒れる頭の無い死体。この家で何かがあったのかは明白。

そしてもう一つ手掛かりを見つけた

食卓の上に僅かだが黄色い粉、硫黄がある事を

「急いで翼達に知らせないと！」

「フェリーチェあっちの部屋を見てくれ」

「気を付けて下さい。何か嫌な雰囲気があります」

翼は部屋を開けては居ない事を確認して静かに退出する

次の部屋の扉を開けると、そこは子供部屋だった

ベッドにゆっくりと近付くと、母親が怯えて此方を見ていた。

そして口パクで訴え掛けていた

この子を殺して欲しい——と

翼は煉魔之刀剣を構えて切っ先を子供へと向ける

本当に殺すが、最後の確認としてもう一度母親へと視線を移すと、

それを受け入れる様に首を縦に振っていた

そして思いつき煉魔之刀剣を上げて、突き刺そうとした時寝てい

た娘が飛び起きた

「キヤアアア!!」

『ゲゲ、待て！待つんだツバサ！ソイツはもう悪魔じゃない！人間だ！』

突き刺す直前でゲゲがその事に気付いて止めに入り、殺すのを一旦やめた

同時にフェリーチェが慌てて入って来る

「翼大変です！外が悪魔で溢れ返っています！」

「何!?!」

翼は母親と娘を連れて一階へ降りる

「フェリーチェはこの親子を何処か安全な所に避難させるんだ」

「ですが、外には大量の悪魔が…」

『フフ、この家に地下があるわ。フフ、その地下に避難させて、騒ぎが収まるまで隠れる様にしなさい』

「分かりました！」

フェリーチェはその親子を連れて地下へと向かった

「ミラクルとマジカルは家具を倒して扉を封鎖するんだ！」

いくら伝説の魔法つかいプリキュアといえど、大量の悪魔となると簡単に倒されてしまう。

気休め程度にしかならないが、少しでも悪魔の侵入を阻止してこの場を切り抜ける打開策を今すぐ考えなければならぬ

「地下へと誘導しました！次は——」

フェリーチェの言葉に時計音が遮った。その時計は12時を指していた

つまりは

「時間切れね…」

マジカルは手に持っていた家具を投げ捨てて、何もかも諦めた表情を浮かべる

「そんなのダメだよマジカル！」

「まだ何か策が！」

ミラクルとフェリーチェが元氣付けようとするが、マジカルの心に

は届かなかった

「何勝手に諦めてるんだよ…ふざけるな!!」

「聞いてよ翼…」

「俺達はお前が大切だから今日まで頑張ったんだ!それを今更投げ捨てる言うのか!?!」

「だってしようがないじゃない!!」

翼の叫びを遮る程の大きな声でマジカルが止めた

「…みらい、今までありがとう。貴女と出会えて良かった」

「リコ…」

「はーちゃん、ちゃんと皆んなの言う事聞くのよ」

「…はい」

「モフルン、皆んなの事頼んだわよ」

「モフ…」

「そして翼」

マジカルの瞳は潤んでいた。しようがないと言って諦めてるが、それを本心じゃない事も自分がよく一番知っている

「しっかり皆んなを助けるのよ」

「…ああ分かったよ」

「ゲゲとフフも、翼のフォローしっかりね」

ゲゲとフフも小さく頷いた

その時だった。一枚の窓ガラスが内側へと割られて何かが入り込んだ

『グルウウウ…!!』

しかしその姿を捉える事が出来ない。見えないのだ。何か獰猛な獣らしき声が聴こえるだけで

『ゲ、地獄の猟犬が入って来やがった…』

「それどう言う奴なんだ?」

『ゲゲ、悪魔にしか見えない凶暴な犬だよ』

どうやら悪魔であるゲゲにはハッキリと視認出来るようだ

爪を立てる音がして、爪痕が床に残る

『フフ、マズいわね逃げるわよ!!』

その合図で両者一斉に駆け出した

目に見えない相手に戦う術が無く、残る選択肢は逃げの一手だけ  
家中駆け巡り、一つの部屋へと滑り込みで入り扉を閉める

「何でもいい！扉を塞ぐんだ!!」

ミラクル達もそれを手伝い、バリケードを作り上げた。しかし猟犬  
の力は強く、扉越しとはいえバリケードが揺れ動く

「マジカル水晶を貸せ！」

翼は水晶でナギを呼び出した

「お前の勝ちだナギ！早く悪魔を無力化出来る方法を教えろ！今すぐ  
にだ！」

『無茶言わないでよ。その場に居ないと効果は無い上、時間掛かるの  
よ?』

「だったら早く助けに来い!!」

そう言ってナギとの連絡を切った

「翼…」

「こうなったら俺が囷になる！その隙にマジカルを運び出すんだ！」

「翼一旦落ち着きなさい！逃げ出すなら皆んなで！」

「わ、悪い」

切羽詰まった状況下で、翼の判断が鈍り始めるのをマジカルが何と  
か止めた

頭が冷えた所でゲゲに何か助力を声を掛けようとしたが、その様子  
に違和感を感じた

「ゲゲどうした?さつきからミラクルばかり見て」

『ゲゲ、どうにも…』

ゲゲはずっとミラクルを見つめていた。瞳の奥まで覗いていると  
「フフー」

ミラクルが不敵に笑い、それを見てゲゲは疑惑から確信へと変わっ  
た

『ゲゲ、コイツはミラクルじゃない！リリースだ!!』

ミラクルの瞳が白く染まり次の瞬間、翼とフェリーチェは左右の壁  
に、モフルンは天井に貼り付けられ、マジカルは後方とそれぞれ四方



向に吹き飛ばされた

「この野郎……!」

「クツ……!動けません!」

「モフウ……!」

「そんな……一体いつから?」

「最初から。お前達が間抜けにも家に侵入して来た時からだ」

リリースはミラクルの体の感触を確かめていた

「忌々しいプリキュアの体だが、憑依したのは正解だったようね。さて」

リリースは扉を塞いでいた障害物を退かした。これでいつでも猟犬が入れる

「やめろ……その扉を開けたら容赦無く殺す!!」

「この体もそう言ってるわ。さつきから頭の中で必死に抵抗して叫んでる。でももう終わり——切り刻んでやりなさい」

リリースが扉に手を掛けて開けた途端、目に見えない猟犬が飛び出してマジカルに襲い掛かった

「——ツツ!!」

脚に噛み付かれ振り回し、強靱な爪で腹を裂き、肉を抉り、内臓が散乱する。

叫ぼうものなら喉を噛みちぎり、声を出させない様にして押さえ付ける

「やめろ……やめてくれえ……!」

翼がそう力なくお願いするもそれが止まる事なく、フェリーチエとモフルンは目を背けていた

助けを求めようと必死にマジカルは翼に手を伸ばそうとするが、とうとう力尽きてその手が届く事はなかった

尚それでも猟犬はマジカルを食い散らかす。死のうが死ぬまいとお構いなしに

それは翼達の心をへし折るのに十分な材料なのだから

けどどそんな姿を見るのが嫌で精一杯の声を上げ続ける

「やめるんだ……やめろ——やめろオオオ!!」

「良いわよ」

瞬間、リリスは翼に手を向けて閃光を放った。

大きな爆発が起き、壁ごと破壊されて瓦礫の下敷きとなってしまった

「翼!!」

「憑いてるのが、悪魔だろうと天使だろうと所詮人間なのよ。私には敵わな…い…?」

翼も死んだと確信していたが、それは外れる事となった。

瓦礫の中から腕が這い出て、血まみれで翼が中から出て来たのだ

「ハア…ハア…」

「そんな死んでないだと…?あり得ない!」

「……」

翼はゆっくりとリリスへと近付き、煉魔之刀剣を振り上げる。

中身はリリスだが、憑依されてるのがミラクルだと分かっててやっている

ミラクルの為を思うなら絶対に致命傷となる傷は絶対に付けない

そう思いたいのだが、目の前に居る男を突き動かしているのは憎悪。

一体何をしでかすか予想が出来ない

それに例え致命傷ではなくとも、傷が付けばリリスにも痛みが走り、苦しむのは容易に想像がつく。

そして最後には絶対に殺される

此方の力が通用してはいるが、それでも何度でも立ち上がる。

それに恐怖し、いつの間にか一步、また一步と後ろへと下がっている

「クツ——ツツ!!」

そして選んだ選択は、今すぐにミラクルの体から出て行き逃げる事だった

ミラクルの口から黒い煙が溢れ出て、全て吐き出すと変身が解けて翼へと寄り掛かって気絶した

「ツ!」

リリースがその場から消えた事で、フェリーチエとモフルンを抑え込んでいた念力が無くなり自由となった

「みらい〜」

「大丈夫だ、今は気絶しているだけ。それよりも……」

みらいをモフルンに預けて翼は、無残な姿と変わり果てたりコへと腰を落とす

「リコ……ごめん……リコお……っ！」

涙を見せながら、亡骸となったりコを抱きしめて自分の弱さを痛感する

恐ろしく暗く、雷鳴の様な音が鳴り響くとても広い場所に、鎖が貫通して拘束されている少女一人が助けを求めて叫んでいた

「誰か！助けて!!」

その場所は、永遠に終わる事の無い拷問を受け続ける場所。

決して光りなど見られない底

「モフルン！はーちゃん！みらい!!」

悪魔との取り引きをした人間が、死んで行き着く先は決まっていた  
「つばさあ……——誰か助けてえええ!!」

そこは地獄だった

### 第36話 翼の復讐

「どうしてこうなってしまったんだ……」

「どうしたもこうしたも、翼が先走って起きた事実よ」

「——ッ!!」

翼はナギに掴み掛かり殺意の目を向ける。何も出来なかった自分に悔しさもあり、本来その目を向ける相手を八つ当たりの様にナギに移し替えていた

「お前が早く来さえすれば!!」

「翼がもう少し待っていれば良かったのよ」

「この——」

「止めて!!」

殴りと飛ばそうと構えたが、みらいが腕に飛び付いて寸前で止めた「貴方がこうして家に帰れるのは誰のお陰？」

翼とナギの睨み合いが続くが、なんとかみらいが引き剥がした。翼もそれは重々知ってはいる。それでもこの怒りが収まる事は無い。膨れ上がる一方

「チツ……」

「翼君!」

「待つて翼!」

翼が部屋から退出するのを見て、ことはがその後を追い掛けた。

ナギと共に残されたみらいとモフルンは、どうして良いか分からず立っている事しか出来なかった

「ねえ翼……」

呼び止められた翼は振り向いてくれたが、その顔は何かに取り憑いた様な怖い表情をしていた

「俺は諦めねえぞ。地獄だろうが何だろうが、リコを必ず連れ戻す!必ずだ!!」

／／／／／／／／

それから二日の時間が経った

翼は寝る間も惜しんで調べ尽くすのだが、これといった手段が何一つ無かった

最終手段として悪魔に取り引きを持ち掛けた事もした。

だが、それを受ける悪魔は一人としていなかった

次にどうすべきか悩んだ結果、一度校長の話も聞くべくみらいから水晶を借りる為朝日奈家へと足を運んだ

家上がり、みらいの部屋に入ろうとドアノブに手を掛けた時だった。

中からみらいとナギの話し声が聞こえて来たのだ

普通に入って何の話をしているか訊けば良かったのだが、この時は何故か聞き耳を立てる事にした

「みらい聞いて。リリースが次に現れる場所を特定したの」

「…それでどうするつもりなの？」

「私一人で行く。あ、危険なのは承知よ。でも翼に行って暴走するよりはかはマシだと思う。こっちには奥の手があるから」

「それで場所は？」

「意外と近かった。此処、津成木町よ。夜11時に現れる」

(津成木町にリリースが……夜の11時)

翼は思わぬ情報を掴んだ。今此処で部屋に入れば、盗み聞きしたと怪しまれる可能性が高い。

それを避ける為に、翼は静かにその場から立ち去ろうとしたのだが、背後に居る人物の存在に気付かなかった

「翼何してるの？」

「…はーちゃんか」

「？」

「大丈夫だ」

翼はことはの頭を撫でて帰って行った。通りすぎる翼に思わず振

り返った。そして、そのすれ違いざままで翼の表情が見えた。  
どこか物寂しそうで、苦しそうな顔

その夜、翼はリリースが現れると思われる家の前に張り込んでいた  
『ゲゲ、本当に誰にも言わずに良かったのか?』

「言ったら止めに来る。だからだ」

『フフ、ワタシ達が束になっても敵わないのよ? どうするつもり?』

「不意打ちだ」

ゲゲとフフが二人して溜め息をついた。やはり身勝手にさせたのが間違いだと

ふと翼の視線が二階の窓へ向けられた。その窓の部屋には、その家の住人ではないブロンドの女性の姿がハッキリと見えた

「見つけたリリースだ!!」

翼は物陰から飛び出しては家の玄関まで走り出す

「クソッ! 鍵が掛かってる!!」

『ゲゲ、それならオレの魔法で——』

ゲゲが手を貸そうとするが、それよりも翼が玄関の扉を蹴り破る行動の方が早かった

『ゲゲ、おいおい...』

「奴は何処だ!？」

リリースが居ると思われる二階へと上がり、廊下を歩いていると一つの部屋から誰かがバットを持って飛び出した

「うおりゃ!!」

「ッ!？」

翼は間一髪の所で避けた。殴り掛かって来たのは、その家の主人であつた

「お前誰だ!? 泥棒か?」

「違う! 取り敢えずこの家から出るんだ! リリースを殺す為に来たんだ!」

「何を訳の分からない事を!!」

「フフ！」

咄嗟に名前を呼ばれて、フフが魔法を使ってツタで主人を拘束した  
「大人しくしてくれ！」

主人を無力化して、とうとうリリスが居ると思われる部屋へと侵入  
した

「…懲りないわね」

「見つけた!!」

姿は完全に大人のブロンド女性だが、中身はリリスが取り憑いてい  
る

更にオマケに、近くには母親とその子供まで居た

「どうする?人質…のつもりではなかつけど攻撃すれば——」

まだリリスが喋っている途中だったが、煉魔之刀劍れんまのとうけんでの斬撃が先に  
出た。

不意を突かれてリリスに直撃はしたものの、その攻撃は通り抜けて  
効かなかった

「あらそう。じゃあ」

リリスが指を鳴らすと、部屋が一気に燃え広がった

「何っ!？」

「今回は逃してあげる。早く逃げないと親子共々焼け死ぬわよ?」

「ふざけた事を——」

食って掛かろうとした時、窓ガラスを突き破ってフェリーチェが乱  
入した

「翼ダメです!今すぐ親子と一緒に避難を!」

「おいフェリーチェ!!」

フェリーチェに強引に引かれて、翼は親子達と一緒に家の外へ連れ  
出された

外では、主人と共にみらいとモフルン、ナギも一緒に居た

「フェリーチェ離せ!リリスがまだ!!」

「行って何をするというのですか!？」

「殺す!リコの仇を取るんだ!!」

「それでどうになりました?何も準備しないまま結果どうになりましたか

？貴方のその身勝手な行動で、どれだけの人達に迷惑を掛けたと思っ  
ているのですか!!これ以上、わたし達を振り回さないで下さい!!」

「それでも……差し違えてでも俺は!」

「みんながわたしを育ててくれました。リコと同じ過ちを、もう繰り返したくはありません。親を心配する子の気持ちが分からないのですか?」

自分やフェリーチエの言う事を一切聞かない翼を引き寄せ、その頬に一発叩いた

それでやつと落ち着いたのか翼の動きが止まった

振り返りリリスが居る部屋に視線を向けて何も出来なかった叫びを上げる

「クソツツ!!」

／／／／／／／／

翼の家に帰って早々、家具を蹴り飛ばしては八つ当たりで荒れてい  
た

「次だ、今度こそ奴を殺す。はーちゃんの言う様に、万全の体制を整えた後で仕掛ける」

「もう……やめようよこんな事」

その言葉でこれまでの怒りが爆発した

「ふざけるな……ふざけるな!お前はリコの大切な友達じゃなかったのか?この中でリコの事を思っていたお前が、お前がそれを諦めるのか!?!今更全て投げ捨てろと言うのか!?!ここまでやって来た意味は何なんだよ!!」

「だって、だって辛いだけだもん……っ」

自分の泣き顔を見られまいと、翼の胸に顔を預けて自分の気持ちも吐き出した

「リコが何の為に悪魔と取り引きしたと思ってるの?翼君を思ってたよ……なのに翼君が居なくなったら、リコがした事が全部無駄になるよ……っ……」



「みらい…」

「わたしも…わたしもリコに会いたいよ…:…つ」

みらいの気持ちをようやく悟り、翼は完全に落ち着きを取り戻した。

そして現実を受け入れ始める

「:…分かった。もう何もしない。何もしないよ」

「翼君…ありがとう…」

翼とみらい、二人はゆっくりと身を寄せ合いその手を絡み合わせるのであった

とある森の中

「——ッ!!」

そこで、地面から一つの腕が這いずり出た

### 第37話 反撃の狼煙

あれから三日の時間が経った。

ヨクバールや悪魔の出現も無く、ありふれた平和がそこにはあった。翼も何事も無く気持ちは落ち着いて、今まで以上にみらい達と接する事が多くなった。

特に、リコが居なくなつて気持ち的に不安定だった翼とみらいに關しては、二人の間に深い關係を築き始めていた。

そして今日も

「ほらみらい買つて来たぞ。いちごメロンパン」

「ありがとう翼君！はい、はーちゃんも！」

「はー！ありがとう翼！」

翼から袋を貰い、みらいからことは、モフルンへといちごメロンパンが行き渡る

「いちごメロンパンは美味し…むぐっ!？」

「はーちゃん!？」

パンを喉に詰まらせ苦しむことはに、翼は水を与え、みらいは背中を優しく摩つて樂にさせる

「は…危なかった！」

「はーちゃん、いちごメロンパンは何処にも行かないからゆつくり食べるモフ」

「はーい！」

ことはは、ふと翼とみらいに視線を向けると二人は仲良く会話していた。

それを見てことはは少し違和感を感じながらも、黙つて見守つていた

「ねえ二人共、夜にお話があるんだけど良いかな？」

その夜、翼とみらいはことはに何故か外に呼び出された。

他愛の無い話なら部屋の中であれば良いのだが、今回はそういう内

容ではなかった

その証拠に、ことははプリキュアに変身してモフルンと一緒に待っていた

「フェリーチエ？」

「またヨクバールでも現れたのか？」

「…」

フェリーチエは何か言おうとするも口籠もっていた。

何かを言おうか言わまいかと、直前になって迷っていた

けれど意を決して翼に、今自分が思っている事を吐き出した

「もうやめましょう。そういうのは…」

「そういうのって？」

「…」

フェリーチエは黙って指を差す。その先には、翼とみらいが指を絡めて手を握っている

「リコが居なくなつて寂しい気持ちを埋めたくなるのは分かります。わたしやモフルンも同じ気持ちです。ですが、寂しさを紛らわすのにそれはあんまりです！リコが可哀想です…」

「……」

側からみれば、仲良くしてると思いきやその実態は違う。

あの日以来、みらいとの接触がかなり増えただけではなく意識も向き始めてる。リコの代わりを補って忘れようとしているのだ。特に翼にその傾向が見られている。

それはリコを侮辱しているのと同じ

「わたし達は友達で家族です」

『『家族』や『友達』って言葉を、何でも水に流せる万能薬にするな』

「それはどういう意味ですか…？」

「そもその原因は、その家族や友達っていう関係が俺達の邪魔をしている。だから嘘は付くし、こんな風に歪み合う」

「この関係を辞めたいって事ですか？」

「今すぐに辞めるべきだ。一緒には戦う。だがもう今までの様な関係には戻れない」

「それが、翼の答えと言うのであれば…」

フェリーチェは翼へとゆっくり近付き、お腹に手を添える。

翼が首を傾げてる間に、フェリーチェは手に力を込めて吹き飛ばした

「っ!？」

突然の事で翼は受け身を取る事なく、硬いコンクリートの上を転がる羽目となる

「リコは貴方の事が大切だから助けたのです。自分の身を危険に晒しても。それを忘れろと言うのですか？」

「…なら、お前は俺に何をさせたい？生き返らせる手段も無ければ、仇すら討てない俺に…俺に何を求める!？」

フェリーチェは優しく翼を抱きしめた。引き剥がそうとするが、耳元で啜り泣く声にその手を止める

「寂しいなら寂しいと言って下さい。口に出す事で楽になる事もあるんです」

「……最悪だ。本当に、最悪だ」

自分の心の中を悟されて、気分は言葉通り最悪の二文字に尽きる。女の子一人守れない事に、そんな女の子の事すら頭の隅に追いやってそんな事するのは本当に最低で、最悪なこと

「分かった。ちゃんとリコの事も胸に刻み込む。もう二度と忘れない」

「翼」

「——けれど吹っ飛ばした事は忘れないぞ。娘の反抗期か？反抗期なのか?？」

「プツ……!」

先程のピリピリとした空気から一変して、みらいが吹き出して笑ってしまいうくらいに平穏には戻った

「あ、ごめん！大事な話をしてるのに」

「…いや、少し頭が冷えた。フェリーチェの言っている事は間違っていない。でも一つだけ間違っている事がある」

翼はみらいに近付いて抱きしめて告白する

「俺はみらいが好きだ」

「え、ちよ翼君?!」

「——あのく、良い雰囲気の所悪いんだけど」

気が動転するみらいに、話の腰を折って助け舟を出して入って来たのはナギだった

「結構大事な話があるけど」

「今か?」

「今しかない。寧ろこの機を逃したらちよつと面倒。良い報告よ。悪魔が屯してる場所を特定した」

それは願ってもない情報。けれどナギの報告はこれだけではなかった

「それとお客さんよ」

お客と呼ばれた人物は、ゆつくりとナギの影から出て来た

そしてその人物を見て目を見張る。当たり前だ。何故ならその人物は、本来は死んでいて此処には居ない筈の存在

「リコ!!」

みらいが一番最初に飛び込んで泣き崩れる

「良かった…良かったリコおっ!!」

//////

みらいの部屋に戻り、リコが居なくなつた日から起きた出来事を全て話した。

フェリーチエとの歪み合いも嘘をつかず全て

「えっ、翼がみらいの事を…?」

「んだよ?」

「…みらいはどうなの?」

「わ、わたし!? えへへ、なんか照れるねえ〜」

『フフ、満更でもないって感じね』

和かなみらいに、リコは少し表情が曇り始める。何を思い、何を感じ取ったのかは本人にも分からない

ただ一つだけ言えるとしたら

(何でこんなにもモヤモヤするの…?)

その感情だけだった

「ところでどうやって生き返ったんだ？俺達は何もしてないが…」

「へっ？あ、ああそうね…実のところわたしにも分からないのよ。起きたら地面の中に埋められていて」

『フフ、取り引き無しで生き返らすとなると幾つか浮かぶけど、問題は誰が何の為にリコ子を生き返らしたか、よ?』

その心当たりについては全くもって検討が付かない。今この場に居る人物達でないとするなら、魔法界の誰かがしたのか、はたまた悪魔の気紛れか

『ゲ、それも気になるが一応置いといておこう。ナギ、奴らの居所を見つけたんだろ？ゲゲゲ、早く話しやがれ』

リコの事で頭いっぱいだったが、ナギはかなりの有力情報を言ってくれてる事を思い出す

「『そうだった!』」

「ええ…三人共忘れてたの?」

翼、みらい、はーちゃんの様子にリコは少し口元を引き攣っていた  
「結構近くよ…この下」

「わたしの家!」

「違う違う。さらにその下」

『ゲゲ、おいおいそれって地面の中とか言うんじゃないだろうな?』

「津成木町の地面奥深くに城を構えてる。あく地獄じゃないわ」

地面の中となると、恐らくなんらかの魔法か何かを使って潜っている。

それも誰にも気付かれず

「よし、リコも復活したんだし乗り込むぞ!」

「はー!」

「そこ二名落ち着きなさい」

ことはこのほうきに翼も跨がって窓から飛び出そうとした時、ナギにほうきを掴まれて一度ストップした

「復活したけどリコには休養が必要よ。せめて明日の夜にしなさい。その方が誰にも見つからずに済むから色々楽になるわ」

その後、翼は解散して家で休んで居ると窓の外からノックする音が聴こえた

部屋のカーテンを開けると、リコがほうきで乗って居た

「こんな夜更け何だよ……こっちは眠たいんだ……ふあゝ」

「ちよつと二人つきりで話したくて」

「そうかよ。中に入れ。冷えるから」

靴を脱いでほうきから部屋へと跨いで入った。

翼が机の椅子に座り、リコがベッドに座って対面する形となる

「ゲゲとフフは寝てるから二人つきりだ。どうぞ」

「……翼は本当にみらいの事が、その……好きなの？」

「おい勘弁してくれよ。その為にわざわざこんな時間にノック掛けたのか？」

「わたし真剣に聞いているんだけど」

「好きだ。これで満足か？」

「あ、うん……応援してるね」

リコはどことなく諦めた表情をして、そんな彼の事を考えて応援する決意をした

けど心は、本音はそう簡単に変わるものじゃない

「なあ、今日は帰って寝ろ。お前だって地獄から蘇ったんだ。ナギの言う通りゆつくりしたいだろ」

「わたしは翼と……分かったわ」

何か言い掛けたリコだったが、結局言いたい事を言えずじまいで帰って行った

／／／／／／／／／／

「は〜い！皆んないる〜？」

ことはの呼び声で全員一列に並んで、隣の人が居るかどうか確認する

「はーちゃん今夜中。少しは声を抑えろ」

只今の時間は深夜の12時過ぎ。良い子は寝る時間帯なのだが、翼達にはやらなければならない事がある

それが終わるまでは安眠は許されない

『ゲ、地下…というより下に行くにはどうするんだ?』

「扉があるモフ?」

「そこは私の魔術でこんな風に」

「「わあっ!?!」」

「ととっ!」

「こんな風に」

指を鳴らしたと思ったら、突然の何処かの城の扉の前に瞬間移動した

「ナギすごくいい!」

「此処にリリースが……」

『…』

拳握る翼から今まで以上の殺気を放ち、ゲゲとフフは少し引いていた

「行くよ皆んな」

みらいがドアノブに手を掛けてその扉を開けた



### 第38話 希望に潜む絶望

「あれ皆んなは?」

いつの間にか、ことはとナギの二人だけになっていた。その他翼達の姿がどこにもない。

確かにみらいが扉を開けて皆んなと一緒に先へ進んだが、気付けばこの通り

「みらい〜!リコ〜!」

石造りで出来たドーム状、ただ広いだけの空間に、虚しくも返事は返って来ず

「モフル〜ン!翼〜!」

「呼んでも無駄よはーちゃん。恐らく部屋に入った途端、何かしらの力が働いて私達を分断したに違いない」

「じゃあどうすればいいの?」

「それは…嗚呼丁度良いわ。そこに居る」悪魔に聞いてみましょ」

はーちゃんとナギの視線の先には、一人の赤毛の女性が紅のドレスを着て佇んでいた

「よく気付けたわね。褒めてあげる」

「悪魔なんか褒められても得なんて無いわ」

「皆んなを何処にやったの?」

「お前さん達と同じ様に別の空間で孤立している」

それを聞いたことははひとまず安心する。何か変な事はされて無い事は確認出来た

後は此処から出る方法を聞き出すだけ

「ついで感覚だけど帰り道も教えてくれない?」

「それは無理よ。私が居るから」

「それで充分よ。もうそれだけ聞ければ出る方法は見つけた」

「そうなの!?!」

「ようはあの悪魔を倒せば出れるって訳よ。でも…」

悪魔は不敵に笑っている。どうやら正解のようだった。

けれどそれと同時に面倒な事にも気付く

そんな単純明快な方法で出られるとなると、余程腕に自信があるとナギは直感する

「だとして倒せるって？そんな間抜けヅラの小さなプリキュアと？」

「はー!!怒った、わたし怒ったよ!!」

「キュアアップ・ラパパ！」

「エメラルド！」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

「あまねく生命いのちに祝福を！キュアフェリーチェ！」

「貴女を浄化します。覚悟して下さい」

「キュアフェリーチェ、噂のエメラルドのプリキュア。だが侮らないことね。私は黒い目の悪魔けれど……黄色い目の悪魔とそう大して変わらないわよ？」

悪魔は地面を蹴り飛ばしてフェリーチェとの距離を一気に詰めた  
(早い！)

悪魔の蹴りを腕でガードしてから、弾き返して手の平で押し返した  
「フェリーチェ大丈夫？」

「はい、なんとか」

「ゾクゾクするわ。その強さ」  
悪魔の瞳が黒く変わる

フェリーチェの腕が痺れる程の攻撃の強さだが、悪魔からすればこの程度はほんの小手調べ

「その強さに免じて教えてあげる。私は『アバドン』」

「アバドン……」

「そしてさようなら」

アバドンの手の平から紫の光弾が放たれると同時に、ナギは防御体勢に入る

「白魔法——キングダム・ビギニング！」

城壁の盾を即座に展開して光弾を防ぐ

更にフェリーチェは盾をアバドンに向けて蹴り飛ばす。

それは攻防一体の荒技。例え先程の様に攻撃して来ても盾がそれを弾き、何もしなければ盾が直撃して攻撃にもなる

「それなら避ければ何も問題は無い」

アバドンは体を回転させ盾をヒラリとかわし、そのまま捻らせた勢いで次の攻撃体勢へと移ろうとした時だった

「ッ!？」

避けた先には小さな魔法陣が幾つもセット展開されており、陣から魔法文字の鎖が飛び出してアバドンをがっちりと拘束する

「白魔法——ロジック・ビギニング」

「これでどうですか!!」

身動き出来ないアバドンに容赦無く右手で指圧攻撃を繰り返した。

その衝撃が下まで伝わり地面が割れ、勢いよく壁に激突して埋め込まれる

「ナイスフェリーチェ。良い攻撃」

「ありがとうございます……と、浮かれるのは少々早いかと」

壁から出て来たアバドンの表情、ダメージを負わせたというのに何処か余裕の笑みを浮かべていた

「今の人間がここまでやるなんて、少し本気でやろうかしら」

「…フェリーチェ嫌な予感がする。一気に決めるよ」

「はい」

フェリーチェが飛び出し、ナギはその場に動かずグリモワールを開けて援護する

「白魔法——ベスト・ビギニング!」

ケンタロウ型の守護騎士を二体召喚させ、フェリーチェが正面から対して左右から挟み込んで仕掛ける

「それでも所詮はこの程度」

アバドンは両の手を左右に開き、ケンタロウ二体を悪魔が持つ念力で捻り潰して消滅させた

一瞬でやられた事にフェリーチェが怯むが、それでも尚進む事を恐れず突き進む

得意の指圧で仕掛けたその直後、アバドンは見事に横に避けて、フェリーチェの手首を掴んだ

その力を利用して、自分を軸にして回転させてフェリーチェをナギに向けて投げ捨てる

「ちよ、フェリーチェ！」

「ッ！」

ナギと衝突寸前の所で、フェリーチェは小さな羽を広げて目一杯空中で踏ん張り、なんとか止まることが出来た

「あく危なかった！フェリーチェが飛んで来た時はヒヤツとした」

「…本当にそう思っているのですか？」

どこか信用出来ないといったトーンで、フェリーチェはそう答えた  
「何その態度？」

「今、この状況で言うのはとても変ですが、わたしは貴女に言いたい事が山ほどあります」

「確かにこの状況で言われるのは変。目の前に悪魔が居るのに、それ以上に言わなければならぬ事は何？」

突然始まったバチバチと火花を散らすフェリーチェとナギの様子を見て、アバドンは薄笑いを浮かべていた

「仲間割れ？いいよ続けて。待ってるから」

果たしてそれは本当なのかと思うが、実際アバドンは爪の手入れをし始めて敵意は無い。その言葉に嘘はない

フェリーチェも、その事を確認して再度口を開いた

「貴女は翼に酷いことし、友達であったみらいやリコにも酷いことをしました。それを許す事は出来ません」

「じゃあこの共闘辞める？」

「……」

今思っている本音を言えば、この戦いは一気に終わりを迎える。共闘を辞めれば、相手にする数も増えるだけではなく、別の場所に居る翼達にも危険が伴う

フェリーチェ一人での勝手な判断で決める事は出来ない。

だから何も言えず、もし黙ってしまうしかないのだ

この共闘自体、誰もが不本意と思っている。誰もがそれを理解した上で望んだ

「…悪魔との戦いが終わるまでです」

「なら、頑張つて倒すわよ」

ようやく話が着いてアバドンへ視線を向けると、長々と話している間が暇だったのか、どこからか用意していたワインを、片手に持って有意義にしていた

「話終わった？」

「はい。ですが、どちらにしろ勝つのはわたし達です」

「じゃ、続きと行こうか。威勢だけで終わらないでよね。エメラルドのプリキユア、魔術を使う人間」

アバドンの瞳が黒く染まり、黒い魔力の塊を手の平から撃ち出した。

フェリーチェも、フラワーエコーワンドにリンクルストーンをセットして対抗。ナギは、手に持つグリモワールを黒く光らせて、迎撃の準備をする

「リンクル・ピンクトルマリン！」

「黒魔法——ヘル・エンド！」



フェリーチェとナギが飛ばされた様に、翼達も同じ様な石造りのドーム状の場所に居た

『キュアアップ・ラパパ！』

『ルビー！』

『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！』

「ふたりの奇跡！キュアミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

『魔法つかいプリキュア!』

「煉魔之刀劍——侵食率50%!」

しかし、どうやら穏やかな状況ではない様子。

それもその筈、翼達も同じく相対して悪魔・アザゼルと火花を散らそうとしていた

前回は、ミラクルとマジカルの二人だけで戦ってその結果敗北。その時は運良く、翼とフェリーチェが介入して退いてくれた。尚且つ今回に至っては翼も始めから参戦している。

だからといって、気を引き締めて挑まないと一瞬で此方が負ける。それ程までに、黄色い目の悪魔との実力の差は開いている

油断は一瞬たりとも出来ない

お互いに長い睨み合いが続く。先手を打つのが有利とは限らない。特に得体の知れない相手には

これまで悪魔と幾度となく戦って来たが、それでも悪魔という存在の底を見たことがない。

それどころか、地に這いつくばる回数の方が大半

アザゼルの出方を伺って動きたい。だけど、翼達には時間が無い。こうしている間にも、ことはも頑張っているに違いないのだからもし、ことはの身に何かあった場合の事を考えるとゾツとする

翼は、ミラクルとマジカルに目配せで合図を送る。今まで肩を並べて来た二人なら、息をすると同じくらい簡単に理解出来る

「二人共——行くぞー!」

悪魔の翼を大きく広げ、堂々と正面から向かって迫る。

アザゼルは少し笑い、余裕の表情をして動かない。

動かないならそれで好都合。容赦無く切り捨てるのみ全力で、真っ向からの切り下ろしで仕留める

「ハアッ!!」

だが、その全力の一閃を容易く片手で受け止めた

「何ッ!?!」

「それで本気のつもりか？もつと力を込めたらどうだ？」

「あゝあゝ？俺達は全員で戦ってるんだ。何勝手に人数減らしてんだ！」

翼の背後から、ミラクルとマジカルが左右に散って飛び出した。

定石通りの動き。翼の攻撃を受け止めるなんて最初から想定済み。

翼は囿で、本命はこの二人なのだから

「リンクルステッキ！」

位置に着いた二人はリンクルステッキを構えて、それぞれリンクルストーンをセットする

「リンクル・ペリドット！」

「リンクル・アクアマリン！」

ミラクルはペリドット、マジカルはアクアマリンを使用してのダブル攻撃。

アザゼルの両側から、葉っぱと氷の吹雪が同時に襲い掛かって来る  
普通ならここで、逃げる動作に切り替えるがアザゼルは違った。寧ろその逆で、その場から一步も動かない

「仲間ごと攻撃しに来たか。お前も苦労するなあ」

『ゲゲゲ、食うのはお前だけだ』

翼の右腕から悪魔法・因果が全身に流れ、薄い膜で包み込む。

これにより、外からの攻撃は全てシャットアウト。悪魔法・因果の特性を活かした、無敵とも言える戦法

(最初からまともに戦おうなんて思っちゃいねえ)

(少しズルい気もするけど)

(それで倒せるなら！)

翼が魔法を身に纏ったのと同じ、ミラクルとマジカルの魔法がアザゼルに直撃した。二つの魔法が嵐の様に渦巻き、アザゼルを苦しめる。

ここまで派手な魔法になっても、因果の魔法で翼は守られている  
「やったモフー！」

離れた場所で避難していたモフルンも、この手応え  
しかし

「——やはり期待していた通りだな」

「ツ!?!」

嵐の様に渦巻いていた魔法は鎮まり始め、葉っぱは枯れ果て、氷は溶けて液体と化した。魔法が弾けるとアザゼルは無傷。更には、翼の首を片手で締め上げていた

「翼（君）!!」

「期待していた通り、これならお前達を徹底的に痛ぶれる」

アザゼルの言う『期待』の言葉の意味。それは、その弱さに、己の圧倒的な強さで三人を痛ぶれることだった

「このッ!!」

首を絞める手を離させようと、抵抗をするもビクともしない。寧ろ力が強まり、息苦しさが増していく

「そんなに離してほしいか? なら、離してやるか」

アザゼルは、翼を大きく振り回して投げ飛ばした。受け身が取れず、壁が崩れる程強く叩き付けられ、その衝撃を受けて瓦礫と共に石造りの床に倒れる

「翼君!!」

「……ミラクル危ない!!」

倒れた翼を心配するあまり、ミラクルは無防備な背中を見せてしまった。アザゼルは容赦無く光弾を放ち、マジカルはそれに気付いて走り出した

突き飛ばして、代わりにマジカルがその攻撃を受けて吹っ飛ばされる

「マジカ…がつ!?!」

マジカルに翼と心配して気を散らして、隙を見せたミラクルの喉元にアザゼルの腕が伸びる。更にはそのまま持ち上げて、力も強まる

老体の力とはとても思えないもの。悪魔の力は、想像を遥かに超えている

「あと少し力を込めれば首の骨を折る事が可能。もう、ここまでの様だな」

ジタバタともがくミラクルだが、肺に空気が思うように行き渡らず



力が入らない。寧ろ、もがけばもがく程力は抜けていく

「そろそろお終いにして、楽に死なせてやる！」

「…グッ、ミラクル…ッ!!」

翼は大天翼之劍だいてんよくのつるぎを手に持つ。それが何を意味するかは、ゲゲとフフにはすぐに分かった

『フフ、ツバサ正気？天使と悪魔の力を同時に扱うなんて自殺行為よ』  
「だとしてもだ！ここで負けたら全員終わりだ。前に進んで朽ちるか、何もせず朽ちるなら、俺は前に進む！」

『…ゲゲゲ、ならバランスが一番大事だ。フフ合わせろ』

ゲゲが乗り気な事に見張るが、フフはそれを仕方なく了承する。確かに何もせず終わるくらいなら、何か起こしてから終わる方がマシ

例えそれが——命を落とすことになってもだ

『フフフ、失敗しても恨まないでよね』

翼は大天翼之劍も握り、侵食率を上昇させる

「大天翼之劍、侵食率…に、23、パーセント!!」

ジワジワと侵食率を上げてはいるが、悠長にしていたらミラクルの身が危ない。慎重に、だが早くしなければならぬ

「ッ!?!」

全身に激痛が走る。無理矢理、相容れぬ力を同時に扱おうとしているのだ。負担は思う以上に体に表れている

27、30、42と上昇する速度は早くなる

「もう…少し…ッ!!」

侵食される左半身に天使の翼が生え、白銀に輝くガントレットが装備される。そして最後の仕上げとなる

「侵食率50%!!」

悪魔と天使の魔力。その二つが同時に体中を駆け巡り、今までにない程の力が溢れ出る

右半身は、悪魔が侵食されて凶悪な腕となり、敵を切り裂く為の爪。左半身は、天使に侵食されたもの。

頭に悪魔の角が一本生え、頭の上には天使の輪っかが左半分

左右非対称の姿となる

「中々良い根性をしている」

アザゼルはミラクルを投げ捨て、翼の方へ興味を示す

『ゲゲ、煉魔之刀剣——侵食率50%！』

『フフ、大天翼之剣——侵食率50%！』

「見せてやる、俺達の本気!!」

希望を指して最後の望みに懸ける。それがこの姿

「完了——天魔フォーム!!」

天使と悪魔の力が漲り、溢れ、今にも暴れたい興奮すら覚える

翼は両翼を大きく広げては飛翔し、天井を足場にしてキックする。

加速はついた。急降下する勢いも重なり、瞬間速度は数百キロを優に出す

「天使魔法——エレメンタルブレイカー!!」

大天翼之剣に湧き上がる無限の魔力を、纏えるだけ纏い振り翳す。

翼は、この攻撃が通れば勝てると確信する。

いくら黄色い目の悪魔とて、高密度で練り上げた四元素と浄化の力を食らえば

だがアザゼルは——それを嘲笑うかのように軽々と片手で受け止めては、あっさりと砕いたのだ

「ッ!!?」

大天翼之剣にはダメージは無いものの、爆発的に威力が増したエレメンタルブレイカーを簡単に砕いたのだ。

受け止めた手には外傷は無く、今までの事は全てお遊びに過ぎないと言わんばかり

翼はただ、目の前で起きた事に理解が追い付かず安心していった。

それは翼だけに限らず、ミラクル達もゲゲやフフもそうだった

これはもう、実力の差がどうこうの問題ではなくなった。どんなに足掻こうと、アザゼルには勝てないと決定的なまでの、確信たる絶望を突き付けられた

「…ハッ！翼逃げて!!」

放心していたマジカルだったが、今はまだ戦闘中の事を思い出して、翼に逃げる様促すも一足遅かった

言った側から、アザゼルの拳が顔面にクリーンヒットして壁際まで吹っ飛ばされた。

マジカルは翼の元へ駆けて抱き起こし、ミラクルもまたモフルンを抱えて側に寄る

「翼…ねえ翼!!」

「マジカル動かしちゃダメモフ！」

今の翼は鼻から血を流して気絶している。更に言うと鼻は粉碎骨折してる。

それだけでは済めば良いが、かなりの衝撃があつた筈だ。脳にも何か異常があるかも知れない

「終わりだな」

三人の目の前に、どうしようもない絶望の波が呑み込んだ